

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

—神奈川県—



右 田 武 雄

一 はじめに

安政六年横浜港が開港され、すさまじい文明開化の洗礼をうける神奈川県は、スポーツについても身近に多彩な近代スポーツに接する。そしてこれをひたむきにうけとめた。たくましい神奈川県民のエネルギーは、スポーツ界においても「スポーツ神奈川」と自負するにたるスポーツ県を築きあげる。

我が国に近代スポーツが導入されるプロセスは、主として外遊者の持ちかえりと、諸学校に招かれた外人教師による紹介があげられている。しかしながら、近代日本の玄関口となった本県では、居留地外人のスポーツの影響を見落すことはできない。当初は運動会という形でしか消化しえなかったが、これら居留地外人のスポーツの影響が、やがて花開くスポーツ神奈川の土壌となっている。

横浜居留地外人の生活環境は、当時、幕府や政府の無力さもあったて、外人自身が異常と認めるほど、豊かで恵まれたものであったといわれている。したがって、ハマを彩った居留外人のスポーツは、他の居留地では類を見ないほど活発であった。競馬、射撃、ボート、ヨット、クリケット、陸上競技、フットボール、テニス、野球、ホッケー等質量ともに多彩であり、また多くのスポーツクラブが結成されている。これらの居留地外人を媒介とした外来スポーツは、横浜が多くの種目の国際試合の発祥地となるほど、日本スポーツ界の発展に寄与したことも大である。

このように、神奈川県スポーツの草創期から今日までの歩みは、即

日本スポーツの歩みであるといえる多くの要素を持っている。今回「人物を中心とした、体育・スポーツ郷土史」を書くにあたり、本県体育・スポーツの全貌を網羅することは不可能であり、また日本スポーツ発達史の経過から、優秀選手の紹介にかたより、今日の問題である、市民スポーツについて十分言及できない嫌いがあるが、その概要を記述する。

二 本県体育・スポーツの普及振興

(一) スポーツの父、平沼亮三

松の火をかざして走る老人の

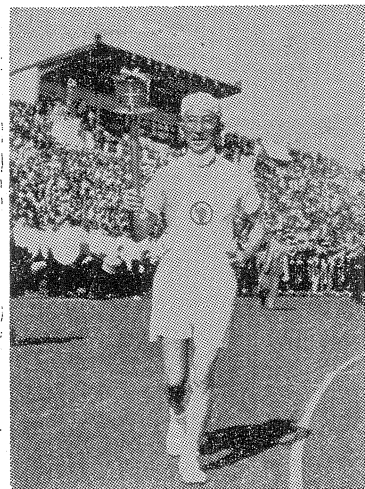
をしき姿見まもりにつけり

昭和三十年神奈川国体開会式当日、七十七歳のスポーツ市長平沼亮三（一八七九～一九五五・慶応）は、四万観衆見まもる中炬火台に火を点じた。この姿に深く感銘された天皇陛下は、その時の印象をこう詠まれた。これこそ本県が生んだ偉大なスポーツマン平沼亮三の、その生涯を象徴する一大フィナーレであつたろう。彼はスポーツのデパートといわれるほど、あらゆるスポーツの実践者であり、同時に奨励者・後援者であつた。彼がスポーツの父といわれるゆえんである。「私は、およそ運動競技と名のつくものは、ほとんどあらゆるものをやつてきた。あまりやたらに手を出したので、間口ばかり広がり奥行きは浅まい。これはスポーツマンとしてはあまりいいこととは言えないが、過渡的時代においては、私のようなものがいても、結果としては運動の奨励になつたのではないかと思つ

ている。」と語っている。我が国ならびに本県のスポーツ界に貢献した功績は枚挙にいとまがないが割愛する。昭和二十六年より二期横浜市長をつとめ、大日本体育協会、日本陸上競技連盟、大日本排球協会、全日本体操協会、日本送球協会のそれぞれ会長に就任、昭和三十年、スポーツ関係では初の文化勲章をうける。

(二) スポーツ普及振興の推進者

大正末期から昭和初期の、競技スポーツの黄金時代と、その統一化の動きを背景に我が国の体育行政はスタートするが、昭和五年本県初代体育運動主事に原藤蔵が就任、社会体育特に青年団の競技の振興に努力する。その後本県体育・スポーツの発展に決定的影響を与え、我が国におけるスポーツ神奈川の地位を確立する行政官に、佐藤秀三郎・保坂周助がいる。ともにスポーツのよき理解者県知事内山岩太郎の信任をえ、スポーツ関係者の協力のもと体育・スポー



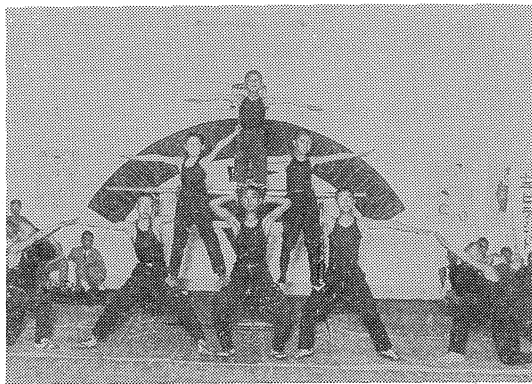
第10回国民体育大会で聖火のアンカーとして250メートルを見事に力走した78歳の青年スポーツ市長平沼亮三

ツ先進県の基礎を樹立する。佐藤は青年団スポーツ、体育・スポーツ組織の確立、指導者養成の充実等顕著な業績をあげ、また保坂は、戦後他県に先がけ、広く県民のスポーツ振興に着目、社会体育振興のための指定市町村の制定、健民指導員制度の確立（のちに文部省は現行の体育指導委員制度としてこれを取り上げる）施設整備計画基本構想の決定等いづれも今日我が国体育行政の主要な柱となるかすかすの施策を健民運動として展開している。これら一連の健民運動と、第十回神奈川国体の開催とを密接に結びつけたが、これは当時「新生国体」として注目されたものである。

(三) 草創期の学校スポーツクラブ活動と学校体育の先達

草創期の学校スポーツ活動の草分けとして、横浜商業学校（通称Y校・現市立横浜商業高校）があげられる。明治十五年、横浜貿易商組合の先覚者達により、洋式商人養成の目的で開校され、福沢諭吉の推せんにより、美澤進（一八四九～一九二三）が校長に就任した。当時の学術偏重、知識一辺倒の趨勢の中にあつて、氏は特に体育（当時衛生実践と称す）を重視し、剣道、ボート漕法、機械体操を正科としたが当時としては画期的なことであつたといえる。明治二十六年以降四十二年までに、剣道、ボート、野球、庭球、卓球、水泳の各部が創設され、野球、ボートは当初、中等学校に相手がなく、外人チームや東京の大学チームを相手に活躍している。当時異色と思えるこれらの活動は、本県学校体育発展の先駆的役割を果たしたと高く評価できる。

本県学校体育の先達として、師範学校では白戸紋之丞、佐藤秀三



横浜YMCA（大正末頃のもの）

神奈川スポーツ発達史の中で、横浜YMCAの果たした先駆的役割は大きい。バレーボール、バスケットボール、フエンシング、デンマーク体操、バドミントン、ホッケー等横浜YMCAを起点として紹介され、普及発達したものである。横浜YMCAの体育・スポーツの本格的普及活動は、大正五年、当時としては最高の機能を持つ室内体育場の開場に始まる。

広田兼敏を中心に大下繁喜、村山捨吉、山室忠一、水谷武雄、宮沢一男等の献身的努力により、各種普及活動、クラブ活動、各種大会や講習会の開催等広範囲で多彩な活動が展開されている。特に注目したいのは、これらの活動は本来選手養成を第一義としたものでなく、そのねらいがクラブスポーツであったことである。今日大衆スポーツ・市民スポーツが脚光を浴びているが、当時のYMCAの体育・スポーツ活動は、今日的意義を持っていたといえる。

三 各種スポーツの発展

(一) 庭 球

明治三年頃、横浜レディース・ローンテニス・アンド・クリケットクラブ（居留外人）が横浜山手公園でテニスを始めた。このクラブは明治十一年山手公園内にローンテニスコートを設置、石田龜吉・春吉の親子が管理にあたっている。日本庭球界の先駆者達の中に本県関係者として熊谷一彌（一八九〇～一九六八・慶応）柏尾誠一郎（一八九二～一九六二・東京高商）野村祐一（慶応）がいる。



熊 谷 一 彌

熊谷は日本の庭球が世界に飛躍する基礎をつくった人で、大正五年渡米。各地を転戦し「イチ・クマガヤ」の勇名を全米にとどろかせた。大正九年アントワープオリンピック、翌十年デ杯

戦（日本初参加）で大活躍をした。

柏尾はアントワープオリンピックで熊谷とともに活躍した。野村は大正十年日本庭球協会設立に参画、また鎌倉ローンテニスクラブの創立者である。昭和になり本県に日本のトッププレーヤーが続出する。安部民雄（早大・全日本選手権七回獲得）、桑原孝夫（神戸高商）、西村秀雄（慶応）、山岸二郎（慶応・全日本選手権九回獲得）、倉光安峯（関大）等の諸選手がデ杯戦に出場活躍する。戦後は国体高校男子で九回優勝した選手達の中から、菅清吉、柳恵誌郎、神和住純、手塚雄士、九鬼潤、平井健（以上法大）石黒修（慶応）渡辺功（早大）等のデ杯日本代表選手が出ている。法政大学のコーチとして多くのデ杯選手を育てた松本武雄の功績は高く評価される。

(二) バドミントン

大正十三年横浜YMCAにはじめてバドミントンが紹介されたが、当時はあまり関心をもたなかった。ナルトスポーツ商会（社長 岡藤吉）は、昭和四年頃から輸出用のバドミントン用具を製造していたが、昭和七年横浜に屋外コートをつくり一般に公開した。また翌八年横浜外人クラブ会長ヘゼタニのすすめにより、横浜YMCAが普及のにり出す。昭和十五年にはYMCAを中心に、当時のクラブチームの代表者により県協会が発足する。これは我が国における最初の協会である。戦後バドミントンは急速な発展をするが、先進県としての本県選手の活躍はめざましく、男子では岡淳一、藤井光雄（慶応）、岡道明（慶応）、広田敏秀（慶応）、小島一平（中大）が、女子では、川俣千枝子、中村たき、吉田とよ子、田村知枝子

が、混合では杉田博・良子（旧姓大川）組がそれぞれ全日本チャンピオンとなる。国体においては総合優勝二回、一般男子優勝七回、一般女子優勝四回の好成績をあげている。

(三) サッカー

横浜では明治の初期から居留地外人によってサッカーが行われ、明治三十五年には東高師対横浜外人の初の国際試合が舉行されている。しかしサッカーが本県に本格的に根をおろすのは大正の初めである。大正四年横浜二中（現翠嵐高）が開校、校長滝沢又市の英断によりサッカーを校技として取り上げた。これを契機に県内中学校にサッカーが普及し始める。大正十五年には、中学校ア式蹴球連盟が結成され、この連盟は昭和四年毎日新聞社横浜支局、中島道雄（東大）のきも入りで、社会人のクラブ等を吸収した県連盟に発展する。大正十年佐藤実（一八九九～一九七一・旧姓高橋・東京高師）が第五回極東大会で活躍、昭和二年第八回大会に伊藤聖（早大）彎田三郎（旧姓横山・早大）朝倉保（早大）の各選手が、昭和九年第十回大会に熊井俊一（早大）がそれぞれ活躍している。また昭和十一年ベルリンオリンピックには高島保男（旧姓鈴木・早大）が出場、優勝候補スエーデンを破る快挙をなしている。戦後は昭和二十六年第六回アジア大会に田村恵（早大）が参加している。

(四) 陸上競技

大正時代、本県においては諸学校の運動会や連合運動会が盛んで、上級学校が下級学校の児童・生徒を招待し徒競走を行うことが多く、これが陸上競技の前身といえる。一方地域では青年団の活動

が中心であった。大正十一年県青年団は陸上競技大会とよびにふさわしい第一回大会を開き、大正十三年より明治神宮大会県予選会を兼ねて開催されるようになる。これらの動向を背景に、鈴木春雄（早大）、菱沼正治、飯田重太郎、羽太忠次郎、安藤文雄、関水正文（法大）長谷川泰雄（鎌師）高橋貞二（鎌師）等の努力により、着々と基礎を固め昭和二年神青クラブを設立、のち県陸上競技連盟に発展する。この間大正二年熊谷政吉（鎌師）が東京高師主催全国中等学校大会六〇メートルに優勝、大正十一年極東オリンピック及び大正十三年パリオリンピックで岡崎勝男（東大）が活躍している。また昭和十一年ベルリンオリンピックでは佐藤秀三郎（東京高師）がマラソンコーチとして孫選手を優勝に導く功績を残している。この他戦前活躍した選手に矢沢正雄（専大）、山下勝（専大）、井上由造、森町三之助（早大）等がいる。また異色の選手として河野一郎（早大）謙三（早大）兄弟があげられ、ともに本県陸上競技発展のため貢献その功績は大である。戦後は国体において常にトップグループとして活躍するが、特に高校選手権大会においては、三十四年小田原高校（監督 武井竜郎）、三十九年横須賀高校（監督 本間慎司）、四十五年相原高校（監督 高橋重清）がそれぞれ総合優勝をしている。また本県は大学箱根駅伝等の影響で長距離走者の層が厚く、かつレベルも高いが全国高校駅伝に優勝するチームは出なかった。この宿願を四十五年相原高校は、服部誠（現東農大）を切り札に完全優勝で達成した。戦後活躍する選手に高木八千代（大津高）、平山可都良（日大）、落シゲ子（日大）、夏目綾子（日大）、男子では木村衛利（日産）、田副

尚(日大)、安成敏郎(日大)、木村修三(立大)、木暮祐久(法大)、梅沢一美(立大)、横溝三郎(中大)、和田哲(早大)、小沢欽一(日体大)、太田徹(青山学院大)、石井隆士(日体大)がいる。

(四) 水 泳

本県の水泳は、水府流太田派忠泳館(横浜ドッグ沖)で教えをうけた鶴飼彌三郎の出現により幕をあける。鶴飼は大正四年極東大会に唯一人出場、四種目に優勝。日本水泳界に新紀元をもたらす。その後一毛政信(早大)、臼井春雄(現会長)、鈴木吾郎(現副会長)、木島小彌太(早大)、鈴木伝明(俳優)等大正時代活躍の選手である。また昭和により白山源三郎(神戸高商)・広子(昭和初期二〇メートル・四〇メートル自由形・一〇〇メートル背泳日本記録保持者)夫妻が来県、本県水泳の普及に尽力する。戦後は日本鋼管に福島滋雄(日大)、松本健次郎(早大)、伊藤勝二(日大)、木谷晃彦(日大)等オリンピック出場選手が入社、実業団の雄八幡製鉄と覇を争う好敵手となる。

(六) 野 球

明治二十九年、横浜公園において一高対外人クラブの我が国野球の国際試合が開催され、これを契機に本県の野球は普及して行くが、この試合が直接の契機となり、明治三十一年横浜商業学校に学校初のチームが誕生する。横浜商業チームは、一高野球部青木敏男をコーチに招き、中等学校としては当時大学チームに匹敵する超大型のチームが生まれる。明治末期はこのチームの他鎌倉師範・一中(現希望が丘高)の二校であったが、大正の初期より藤沢中、本牧

中、浅野中、関東学院等が加わり次第に普及する。これらの学校から東京の各大学に有名選手を送り出すが、特に小野三千磨、森秀雄(慶応)、荻田久徳、若林忠七(法大)等の名選手がいる。また昭和十年代では飯田徳治、小松原博喜等がプロ野球で活躍する。戦後野球は驚くべき普及をし、その中で昭和二十四年湘南高校が夏の甲子園で大活躍、本県宿願の初優勝を成しとげる。続いて三十五年法政二高が夏の大会に優勝、翌三十六年春の大会に連続優勝を行う。また四十五年夏の大会で東海大相模高校が、翌四十六年の夏の大会で桐蔭学園が優勝するなど大活躍が続く。都市対抗野球では日本石油、日本鋼管の活躍があり、軟式野球では横浜日本発条、富士火災、川崎市水道局、厚木部品等が全国大会、国体等で活躍し、高校野球、社会人野球ともに野球神奈川の名を高める。

(七) ホ ッ ケー

明治三十八年、居留外人により横浜公園でこの種目が初公開され、四十年には慶応対外人クラブの我が国初の国際試合が行われている。本県におけるチームの創立は、大正十三年、岡野憲七(慶応)、小林定義(明大)、原公平(早大)等の大学OBと、横浜YMCAの広田等により結成された横浜クラブである。戦前では昭和十一年ベルリンオリンピックに小林定義、浅川増之(慶応)が出場している。戦後立野高校に本県初の女子チームが設立され、昭和二十五年には立野女子クラブが全日本選手権を獲得、翌二十六年第六回国体で優勝するなど大いに活躍した。また昭和三十五年ローマオリンピックに小島芳夫(明大)、矢口照夫(明大)、飯島健(慶応)が、東

京オリンピックには山口順一(明大)がそれぞれ日本代表となり活躍している。

(八) フェンシング

日本フェンシングの草分けといわれる、日本フェンシングクラブの一員であった平沼五郎(慶大)は、昭和十一年横浜YMCAの広田とともにYMCAにフェンシング部をつくり普及につとめた。昭和二十三年県協会発足、全国に先がけて高校にクラブが誕生、高校生を中心とした活躍で名門県となる。これらの選手の中から藤巻惣之助(法大)、小沢嗣史(中大)のローマオリンピック出場、上原進子(専大)、東京オリンピック、木川保子(法大)一九六一年世界選手権、中島寛(法大)一九七〇・一九七一年世界選手権出場等世界の檯舞台で活躍する選手がでる。また国体においては総合優勝六回の好成績をあげている。

(九) バスケットボール

本県のバスケットボールは、大正四年F・H・ブラウンにより横浜YMCAに紹介され、横浜YMCAを舞台に普及する。YMCAの指導者達の尽力により、大正九年から十一年にかけ、中華学校、関東学院、横浜一中にチームが生まれ、大正十三年にはYMCA主催第一回神奈川県バスケットボール大会が開催されるまでに発展する。以後大正の末期から昭和初期にかけ、飛躍的に普及し、YMCAのメンバーが中心になり、昭和五年県協会が発足する。戦後本県のバスケットには、日本鋼管、東芝等実業団チームの充実でめざましい発展をとげる。日本鋼管は、ベルリンオリンピックやその他国際競技

に活躍した横山堅七(早大)、高橋実・修兄弟を中心に、昭和二十四年から二十六年に至る間、公式戦九十四連勝という快挙をなしとげ、また東芝女子は昭和二十九年全日本選手権を獲得、最近では日立戸塚がチャンピオンとなる。オリンピック及び国際大会には、これら実業団チームの中から、多数の代表選手を送り出し、日本鋼管関係で藤田学(明大)、糸山隆司(教大)、鎌田正史(早大)、若林薫(教大)、諸山文彦(日大)、谷口正明(中大)、服部信雄(慶応)、本県出身者で日本鉱業に勤務した奈良節夫(立大)、小玉晃(教大)がいる。女子では日立戸塚の林田和代(飯塚女商)、大塚宮子(市邨短大)がモントリオールオリンピックで活躍した。

(十) バレーボール

大正五年、横浜YMCAに室内体育場が完成。本県のバレーボールはこの体育場の完成とともに本格的普及活動が展開される。横浜YMCAでは広田を中心に、大下繁喜、村山捨吉、山室忠一等とともにバレーボールの普及につとめる。YMCAで指導をうけた人達では、県下各地域で普及活動を展開するが、河口政治は藤沢バレーの草分けとなり、広田、河口に指導をうけた阿曾俊四は、藤嶺学園藤沢商業のバレーを指導。昭和十年には全国征覇を果たす。また小田原では椎野万吉が、県央地区では下島長夫が、それぞれバレーボールの普及に努力している。これら活発な動きの中で、昭和六年第一回県バレーボール大会がYMCA主催で開催され、これを契機に県協会設立の気運が高まり、翌七年県協会が発足した。戦後は昭和二十七年、阿曾の指導をうけた名監督柳川賢の藤沢高校が全日本高校選

手権大会に優勝。昭和二十七年、二十九年の国体に優勝する。また戦後優秀な選手の入社により、着々と基礎をきずきあげた日本鋼管は、昭和二十九年全日本総合男子選手権を獲得、以来今日まで日本バレー界の牽引車の役割を果たしている。また日本鋼管チームを中心に数々のオリンピック選手を送り出す。東京オリンピックに出町豊（明大）、佐藤安孝（日大）、樋口時彦（法大）以上日本鋼管、小山勉（関学・富士フィルム）、メキシコオリンピックに大古誠治（東芝学院）、小泉勲（中大）、白神守（中大）、三森泰明（中大）、森田淳悟（日体大）以上日本鋼管、佐藤哲夫（相馬高・富士フィルム）そして待望の金メダルに輝くミーン・ヘン・オリンピックに嶋岡健司（中大・日本鋼管）、大古誠治、佐藤哲夫が出場活躍している。また優勝監督となった松平康隆（慶応）は二十九年日本鋼管優勝時の選手である。女子ではヤシカの浜恵子、小野沢愛子がメキシコ、ミーン・ヘン・オリンピックに活躍した。

(注) 武道（柔道・剣道）

明治の初期、武道は極度に衰微するが、明治後期より警察で柔、剣道が必修となり再び台頭し、大正になり学校教育においても体操要目に加えられます。当時は、柔、剣道ともいづれも警察師範に優秀な民間指導者が吸収され、これらの人々が学校、民間の指導にあたって中心になったと考えられる。柔道では内村外次郎、五十嵐忠吉。学校指導者として福本弥太郎、加藤喜録等が中心となり、剣道では荻原太郎、門奈正、田口己之吉、大和田金時、横松勝三郎、菊地龜松、沼田保三郎、岡田正美、学校指導者として



林 忠 明

回明治神宮大会兼全日本卓球選手権大会一般女子で優勝するなど隆盛の途をたどる。同時代に、県立平塚高女校友会主催県下小学校女子卓球大会が開催されるが、当時の普及ぶりが伺える。

る。戦後は林忠明が昭和二十七年第十九回世界卓球選手権大会に出場、ダブルスに優勝。日本卓球旋風の一翼をになう活躍をする。本県女子卓球の名門校京浜女子商業は、高橋紀代子、仁科宣子、磯村淳、猪飼栄子等の高校チャンピオンを生んでいる。また世界選手権で活躍した加藤妃生子（旧姓渡辺・専大）は、現在本県にあって家庭婦人卓球連盟の会長として健在であり、川井一男（早大）は川崎で幼稚園児まで対象とする、川井卓球教室を開くなどそれぞれ市民スポーツの普及に貢献している。

(注) その他

プロスポーツについて簡単にふれる。

中村寅吉（ゴルフ）。アプローチ・パットの神様といわれカナダカップ優勝、ゴルフを大衆スポーツの仲間入りさせたバイオニアといわれる。他に河野高明、光隆兄弟がいる。

高村永伍（競輪）。逃げの神様といわれた競輪界不世出の名選手。荻田久徳（プロ野球）。二塁手としてその華麗な名人芸は今も語りつがれる。野球殿堂入り。他に若林忠七、小松原博喜、飯田徳治、

石川八千代、小峰天明、和田賢二等により、武道の振興が行われる。またこれらの指導者の他に、柔道では講道館より山下義経、剣道では東京高師教授高野佐三郎の両者が来県、本県の武道振興に強力なバックアップをしている。戦後柔道は国際競技として発展するが、猪熊功（教大）は一本背負の大技で三十四年全日本選手権者となり、東京オリンピック重量級金メダル、四十年世界選手権無差別級優勝、笹原富美雄（県警）は世界選手権（四十四年、四十六年）軽重量級で優勝、佐藤宣践（教大）は四十九年全日本



猪 熊 功

選手権者となる。

(注) 卓 球

明治二十年、すでに横浜開港地で外人のプレーをまねてピンポンを行ったという記事があるが、当時は単なるまねごと程度であったと思われる。明治三十年代になりようやく横浜商業学校、第一銀行等にクラブが誕生、対抗試合も行われるようになる。しかしながら本格的に普及するのは大正時代である。大正時代には会社、官庁、学校等に広く普及し、横須賀においてはすでに協会が誕生する。昭和に入り、橋本幸次郎（横浜YMCA）等明治神宮大会で活躍する選手が生まれ、昭和六年川崎チームは、第四回全国都市対抗東郷優勝旗争奪大会に優勝、昭和十年には杉本育子（横須賀実科高女）が第八

大沢啓二、佐々木信也、桑田武、現役では柴田勲が活躍している。

武蔵山（大相撲）。三十三代横綱、近世稀にみる強剛横綱かと期待されたが不幸にして右腕故障のため挫折。押しの大関若羽黒、小結広川、金の花、美声の呼び出し小鉄がいた。

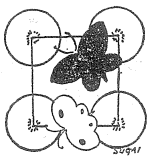
アントニオ猪木（プロレス）。NWF世界ヘビー級チャンピオン。ルスカ、アリと闘い話題を呼ぶ。力道山の愛弟子。

花形進（プロボクシング）。元世界フライ級チャンピオン。

四 おわりに

以上本県の体育・スポーツについて、その概要を簡単に紹介したが、紙面の関係で登場人物の説明不足や、多くのスポーツや人物を割愛せざるをえなかった。また人物本位の構成に徹し切れず、単なる体育・スポーツ史の抜粋的記述になったことをおわびする。

（神奈川県立体育センター指導研究部長）



人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史



— 埼玉県 —

池 田 久

わが埼玉の近代スポーツ・体育の流れの概要を述べるに当たっては、日本の多くの県がそうであるように、歴史的に最も古い陸上競技から始めるのが至当と思われる。

* * *

本県最初の陸上運動会は明治二十一年秋、埼玉師範体育ケ原運動場で開かれた。明治四十二年全国中等学校大会の初参加は飯島、松本（埼師）であり、翌四十三年に野中新平が四位に入賞し、埼玉陸上全国大会入賞のはしりを築きあげた。

大正三年全国中学、師範選手競争一万メートルに笠原佐市が、翌年山田敬介が見事優勝し、全国大会優勝第一、二号となった。

大正六年我が国初の国際競技、第三回極東大会が東京で開かれ野口源三郎が十種競技に優勝、山田敬介も十マイルに出場活躍した。

大正九年第七回オリンピックアントワープ大会が開かれ、最初の世界の檜舞台に、野口源三郎、蓮見宏が出場し世界の技術をもち帰り、その後の普及に大いに役立たせた。翌十年第五回極東大会（上海）で蓮見宏が中距離で活躍した。大正十四年日本選手権マラソンで村岡正夫が大会新記録で見事優勝を果たした。昭和に入り全国中等学校選手権大会で栗原伝次郎、山浦直心、吉沢宗吉、鈴木開多等が大活躍し埼玉陸上界の基盤を作りあげた。

昭和十年国際学生ブダペスト大会、翌十一年第十回オリンピックベルリン大会で鈴木開多が短距離でそれぞれ入賞し国際大会でも活躍した。

埼玉陸協創立の昭和二十一年新井誠治、原田隣造、押田勤、現陸協会長茂木一郎等が貢献し以後発展の道しるべを築き上げた功績は

大である。当時走り高跳の秋間哲夫、三段跳で藤橋吉五郎が活躍し、全国高校大会八十メートルハードルで田中孝子が三年連続優勝の金字塔をうちたて、上木道夫も国際大会で活躍、日本女子選手の代表的存在の吉野トヨ子が円盤投で日本新記録を樹立、戦後初参加の第十五回オリンピックヘルシンキ大会にソ連三選手に次いで第四位の偉業を成しとげた。高校生の進展も目ざましいものであり、全国高校記録は後藤均、田中誠四郎、鎌倉光男、宮下敏夫等によって次々書きかえられていった。特に昭和四十九年全国高校総体で杉田和己（行田高校）がハンマー、円盤、砲丸の投擲三冠王に輝き、一段と華を添えた。



杉田和己

現在では棒高跳の高根沢威夫が日本陸上界の救世主として大記録を樹立、松枝茂樹、八木下てる子と共に国際舞台に活躍、又日本選手権九年連続タイトル保持している青木正純、日本陸連専務理事として臼木信雄等が国の内外で活躍、埼玉陸上発展に大いに貢献している。

「サッカー王国」といわれる本県のサッカーは、明治四十一年、全国に先駆し、東京高師時代から埼玉師範を指導した細木志朗によって創始され、その指導を受けた学生が卒業後教師となって県下各地に普及の流れを広げたことが今日の隆盛発展の源泉である。

大正八年、関東中等学校大会の開幕と共に盛んになり、大正十年四方田貞一郎、倉林茂両教諭が「サッカーの町児玉」の小学校に、

大正十三年渋谷宏三が埼玉師範附属小に着任し、サッカーは益々普及した。昭和二年、松沢藤一郎、高師康は極東五輪に参加した。これらを基礎に、昭和十二年、池田久（現体育課長）を中心とした埼玉師範の宿願の全国制覇の偉業を達成し、大優勝旗は初めて函館を越えた。一方、学童サッカーも前記四方田を草分けとし、藤浪武三、永田養三、中川電三らの熱心な指導で、関東少年大会に十六回の優勝を遂げ、浦和中学サッカー隆盛の基盤となった。

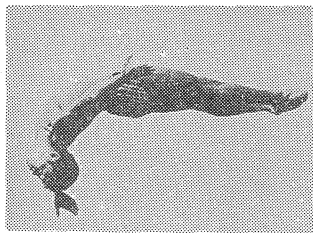
昭和二十一年、池田久、中川電三が中心となり、埼玉OB高橋直、藤浪武三、鈴木広伺、町田己代治、旧浦中OBの松沢藤一郎・正次、宮崎一弥、石川敏等らの数次にわたる協議により協会規約が完成し、岩田三史元貴族院議員が会長に、松沢藤一郎が理事長に就任し協会は発足した。以後協会は組織の強化を図ると共に次の目標を樹立し、一、高校の強化 二、中学への普及 三、クラブ実業団チームの増加と振興 四、指導者の養成確保 五、指導技術、審判技術の向上 六、サッカー場建設等これら役員の献身的な努力と協力によって着々と実現していった。昭和二十五年福永健司現会長就任。その偉大なリーダーシップは「埼玉を制する者は全国を制する」等の名言を産み、又それを実現させた。新春伝統の全国高校選手権では、昭和二十七年浦和高をはじめ浦和西高、浦和市立高、浦和市立南高、児玉高等による十数回の優勝、準優勝。昭和二十五年発足の浦和クラブは、全国都市対抗、全国社会人大会で大活躍し、日本リーグチームをも驚愕させた。昭和三十四年から始まったアジアユース大会には、毎回選手を派遣し、国体では山口国体の完全優勝を含む総合優勝七回。日本代表選手としては第一回アジア大会に堀口英雄を送ったのをはじめメルボルン五輪に高林、東京、メキシ

コ五輪に鈴木良、横山、ミューンヘン、モントリオール五輪予選には落合、川上、永井、斉藤らが活躍した。昭和四十四年浦和市立南高は、史上初の三冠王を獲得、そして今春二度目の全国制覇を飾った。昭和四十五年本県で初回大会を開催し、引続き七回を迎える全国中学生大会では、昭和四十七年大原中、昭和五十年本太中の浦和勢が優勝する等輝かしい成果を収めている。更に国際交流大会は、昭和二十六年の日瑞をはじめ日独、日ソ、日韓、日英、日豪、日丁、日米諸国に及び、特に昭和三十九年世紀の祭典東京五輪サッカー開催とそれに伴う大宮サッカー場の造成竣工、そして大会の成功に寄与、加えて昭和四十年、四十三年のアジアユース大会の開催等国際親善にも大きく貢献した。昭和四十六年、待望の大宮サッカー場夜間照明施設も完成し、現在急増した県下多数の愛好者、各種チームを統轄し、組織化し将来への展望をはかりつつ本県スポーツ界の先頭立として活躍、福永会長をトップに、倉持守三郎新理事長を中心とし文字通り役員一丸となって、一層の興隆に努めている。

次いで颯海流の始祖、宮路太郎を生んだ本県の水泳は、明治から昭和前半にかけて、埼玉師範卒業生による普及はみられたが、特に注目するものではなく、昭和二十二年に大野元美会長の下に水泳連盟が誕生し、組織の拡大強化、施設の完備、指導者や競技者の育成などを柱に充実を図り、特にベルリンオリンピックで活躍の伊藤三郎を招き、高島朗、田島金蔵等の指導陣を整え、昭和二十一年全国中学に小杉が優勝、以来幾多の全国入賞者を出し始め、本県の活躍が目立つようになった。

近年は若手指導者が多数教員となり、競技者と指導者層の厚みも

増し、昭和四十一年重原隆男が全国中学に、浅井健一が全国高校に優勝。つづく昭和四十二年埼玉に国体を迎え、水球で川口市立高の優勝など数多くの優勝者を出し一躍水泳県となる。特に飛び込みは金



浅井健一(弟)

戸俊介の好指導で木村勉、瓦井兄弟の高校ナンバーワンを生み飛び込み王国を築いた。この間オリンピック選手も誕生し、水球で東京大会に横山隆、ミューンヘンに高橋敏夫、飛び込みでメキシコに有光洋右、大崎恵子が参加し活躍した。

またバスケットボールは大正三三年、埼玉師範の今島益造が学生を指導し、全国中等学校選手権で第三位に入賞して以来各種大会において好成績を残すと共に、県内に散った卒業生によって県下小学校児童水球大会が盛大に開かれた。

昭和二十三年に県水球連盟が山崎茂会長、徳橋善四郎理事長の下に組織され、中学・高校を中心に競技人口も増加し発展した。特に関口莊次が浦和第一女子高のコーチとして就任し、高校総体通算八回、国体六回、全日本選手権一回の優勝と浦和第一女子高OG及日通チームが国体で通算五回の優勝を果たした。メルボルン、ローマオリンピックには斉藤博が選手として、東京オリンピックには関口と共にコーチとして参加した。

近年では、中学生及び小学生に人気上がり、昭和四十八年に大宮日進中男子、昭和四十九年に上尾中女子がそれぞれ全国中学生大

会に優勝し、中体連の活躍は目ざましいものがある。小学生は県下ミニバスケットボール大会に毎年百余チームが参加して盛大に実施されている。

バレーボールは大正十年頃より高等女学校等で初歩的な練習が進められていたが、昭和二年、原八郎が浦和中に着任するに及んで旧制中学校にとり入れられ、併せて指導した女学校も一段と活気づいた。昭和十四年頃には国鉄大宮工機部・日本車輛等の工場でも行われた。

昭和二十年、いち早く県連盟を結成し県体協に加盟、中村由蔵、稲山壬子等が普及に尽力、これが昭和二十四年には協会と改められ、吉田忠一会長が選出された。稲山の率いる久喜高校は、昭和二十八年の全日本高校女子と同年の国体に念願の優勝を遂げ、久喜高伝統の礎を築いた。以来幾多の名選手が輩出しているが、モントリオール日本女子チームで活躍する吉田真理子選手もその一人である。

そして本県の野球の発展は、地域的に東京に隣接している関係で日本野球史とほぼ一致している。明治三十六年頃、本県野球の先駆者宮原吉之助が埼玉師範の豪腕投手として関東で傑出した存在であった。当時、チームとして埼玉師範、浦和中学、不動岡中学、粕壁中学ぐらしいがなく主に東京の大学チームと対戦し好試合を展開、かなりの力を發揮していた。

大正十五年浦和高校主催の県下中学校野球大会が初めて挙行された。

高校野球で甲子園の未踏果は、西の宮崎、東の埼玉と全国に知ら

浦和、川越、久喜等の地区で行われていた。大正十四年明治神宮県予選会は男子十二名、女子三名の参加によって開かれている。昭和初期には浦和実業連盟を創設、「卓球タイムス」を発行し普及活動に努め、久喜高女の黒田栄子が全日本選手権で優勝して大いに気を吐いた。昭和十六年に県卓球協会が飯田静会長の下に結成され、組織の強化を図り、昭和十八年には全国学校対抗において、久喜高女が優勝した。戦後はいち早く復活し、高校生が各種大会で優勝すると共に、綱島憲次会長を中心として埼玉国体で総合優勝するまでに発展した。近年は吉田安夫が指導する熊谷商高が全国高校界の覇者として活躍し、特に昭和五十年高度高校総体ではシングルス、ダブルス、団体を制覇して三冠王に輝いた。又県下ママさん卓球クラブ等愛好家によるクラブも多数結成され盛んに行われている。

体操は大正の初期埼玉師範学校に野沢甚治が着任して、本県に初めて紹介された。

大正十二年に埼玉県学務課に体育主事制度が設けられ、初代主事に中島海が師範学校教諭を兼ねて就任し、この指導により広く県下に普及された。しかしいわゆる体操競技の芽生えは昭和七年埼玉師範に「体操クラブ」が発足し競技会に出場したことに始まり、昭和十五・十六年には関東大会や明治神宮大会等の団体徒手の部で優勝し戦前の一時代を画した。

昭和二十一年梅根悟（現和光大学長）、押田勤、金山誠人が中心となり体操連盟が設立され埼玉師範OBによる「フニックス」が国体の団体徒手で優勝する等活躍して基礎が確立した。又昭和二十九年には大島齊礼が世界選手権大会に出場し大いに気を吐いてい

れていたが、戦後は昭和二十四年熊谷高が初出場し、昭和二十六年には再び服部投手の好投により輝く準優勝の偉業を残した。その後、大宮高、大宮工、川越工、上尾高校が全国の強豪と対して大活躍、特に大宮高校長谷川監督の手腕は高く評価された。昭和四十三年には大宮工が選抜大会で優勝するまでに本県の高校野球は発展していった。

社会人野球では昭和二十年以降豊岡物産、昭和三十二年頃から日本通運が都市対抗で活躍、昭和二十七年天皇杯全日本選手権で豊多摩刑務所が初出場、初優勝。昭和四十八・四十九年国体では鷺宮製作所が二年連続優勝している。

また軟式庭球は明治三十二年埼玉師範に着任した野沢甚治の指導で始められ、この卒業生が各小学校に普及させ、対校試合も各地で盛んに行われると共に、愛好者クラブが結成された。なかでも加須早起会は旧加須高女の校庭を使用し、町内の社会体育として実践していた。大正十三年に明治神宮大会に初めて県代表を送り、昭和二年同大会で花岡しのぶが女子シングルスで優勝している。昭和十年に松永東会長の下に、県軟式庭球連盟が結成され、組織の充実を図り発展した。昭和二十四年に山岸晟が全日本軟式シングル選手権に優勝し初の天皇杯を獲得した。高校生は昭和二十四年川越高、昭和二十五年浦和第一女子高、昭和二十六年松山高、昭和四十九年川口高がそれぞれ全国総体で優勝した。一般では昭和五十年沖田豊作、大木幸一組が世界選手権第三位、全日本選手権に優勝し、読売スポーツ賞に輝いている。

更に卓球は東京に近い本県では比較的早く普及し、大正九年頃に

る。その後昭和四十二年の埼玉国体では石川正一会長を先頭に総合優勝を果たし本県体操の隆盛もピークに達した。現在は長島恭助会長（埼玉銀頭取）をトップに高校、中学生を中心に、将来の発展を期して頑張っている。

伝統に培われた剣道、柔道、弓道、相撲競技にあって、明治期の剣道は、高野佐三郎の剣風を慕って剣を磨く青少年が増加する一方、柔道では天神真楊流の福田八之助（嘉納治五郎の師）を生み、戸張滝三郎は初期の講道館において実力を高く評価された。明治四十四年には、星野仙蔵、小沢愛次郎衆議院議員等の熱意によって、中等学校に剣道、柔道を正科として加える宿願の建議案が認められて以来、本県においても隆盛の一途をたどった。その後、剣道では、高野茂義、奥田芳太郎、鈴木祐之丞等名剣士を輩出、昭和八年には、県下三十四名の精鋭剣道使館の大学渡満も実現した。昭和二十四年から小沢丘、佐藤顕を中心とした県連盟も、全国に呼応して再興の時期を築き上げ、近年は、剣道使館として中南米を公式訪問した市川彦太郎理事長の下に実績を伸ばしている。

柔道では、大正十一年に鯨井寅松等によって設立された埼玉県柔道有段者会が、宇佐美信初代会長により、昭和二十五年に再出発した県柔道連盟の礎となった。昭和三十五年には、全日本を制し、世界大会にも優勝した曾根康治、当時王座を脅かし続けた池田忠雄、長谷川博之等俊英も輩出した。

弓道では、昭和四年に、それまでの県内十数箇所の弓道場を統合して埼玉県弓道連合会を設立した阿佐見新作、倉林周助、高木葉等が今日の弓道連盟発展の基礎を固め、昭和天覧試合を飾った中島義

人、明治神宮大会優勝の森戸康之等の活躍が光り、近年では、昭和四十五年に全日本を制した桑原稔、同女子の部では池田邦子、国体総合優勝四回の実績をはじめ、高校生の活躍等まことに顕著である。

相撲では、由緒ある八幡講と呼ばれる奉納しろうと相撲が各地に進められ、近年は秩父、蔵、川口地区が活動の中心である。この間、石原倉七、松本秩夫治、栗本良勝、高橋庄次郎等の尽力、昭和二十一年から十五年間連盟会長を務めた植野助右衛門、全日本相撲研修会長であった永井高一郎が発展に多大な功績を残し、現土井義夫会長以下今後の普及発展を目指している。

この他実績のある団体としてライフル射撃、自転車がある。

ライフル射撃は明治二十四年に埼玉県小銃協会の設立され、大正期にクレー式による競技会に進み、昭和十三年まで盛んに行われていた。昭和二十三年に第一回県大会が開かれ、昭和三十八年クレー射撃と分離独立し、現船橋長夫会長が就任、会長自身選手として活躍、三十六年には団体十回出場の表彰を受け、率先して協会発展に尽くした。会員の結束は固く岐阜国体以後九連勝を含む通算十一回の国体総合優勝を果たし、優秀競技団体として飛躍的な発展をしている。一方昭和四十一年蒲池猛夫が第一回アジア選手権大会に優勝以来、メキシコ五輪に参加、昭和四十六年第二回アジア選手権に優勝、昭和四十九年アジア大会には細川幸雄、昭和五十年第三回アジア選手権に蒲池の優勝等大きい国際大会でも多くの優勝者を出し、今回のモントリオール五輪へも渡辺健コーチ、蒲池、細川、田代繁、大畑改修、松尾薫、尾崎道治選手が参加し国際舞台で活躍し

手の育成と組織の強化が図られた。

一方、昭和三十七年アジア大会に原田紀幸、川野俊一、昭和四十一年世界選手権に金子正明、アジア大会に金子、佐々木竜雄（現理事長）、昭和四十二年世界選手権に金子、昭和四十三年メキシコ五輪に金子、中田茂男、昭和四十五年アジア大会に佐々木等多くの優勝者を出し、現在は渡辺源蔵現朝霞市長が協会長となり、今回のモントリオール五輪には前川健吉、平山紘一郎、菅芳松、小林武、秋山安成、佐藤貞雄選手を参加させている。

ホッケーは市川宗貞現飯能市長が協会会長となり飯能高、秩父東高、皆野高が中心となって活躍、昭和四十八年は皆野高女子チームが、昭和五十年は同校男子チームが高校総体で輝く優勝をしている。

ウェイトリフティングは三宅義信が、東京、メキシコ五輪に連続優勝し、今回のモントリオールへも竹内雅朝を参加させた。

ハンドボールも大崎電機を中心に発展し、今回のモントリオール五輪には竹野幸昭監督を送る等活躍している。

本県スキー、スケートは、氷雪に恵まれない環境にありながら、本県に在職する雪国出身者の愛好精神とこれを理解する本県中枢部の努力により、スキーは昭和十一年、スケートは昭和三十四年以來県民に愛好され、今日の発展に至っている。草創当時、スキーは新潟出身の窪寺格二、松橋朝一らを中心とする国鉄大宮、熊谷の八木橋豊吉、秩父の清水武甲らが活躍した。昭和十六年、田中甲子蔵を会長に県協会が設立され中村由蔵団長の下に関東大会に初参加し大成果を収めた。戦後、昭和二十二年県山岳スキー連盟結成。昭和二

ている。

自転車は明治三十五年頃に県下の業者主催による競走大会が開かれたことから始まり、県内各地に普及発展し、鴻巣公園内に東洋輪士会記念碑が建てられ当時の盛況さがしのばれる。大正、昭和と自転車の実用化が進むにつれ更に発展し、昭和二十三年山口六郎次会長、田島嘉治理事長が就任し、組織の充実と共に優秀選手を養成し国体において通算三回の総合優勝を果たしている。

戦後に普及した団体として昭和二十年代にはラクビー、ボクシング、ソフトボール、レスリング、バドミントン、ハンドボール、漕艇、ヨットがある。

昭和三十一年代に入って盛んになった団体に庭球、ウェイトリフティング、ホッケー、フェンシング、馬術があり、昭和四十二年埼玉国体に向けて全競技団体全種目出場を目標に、組織づくり、選手づくりにより全力を傾けこれを実現させた。以来これらの競技は、団体開催市町を中心に発展している。この中で特に漕艇は東京五輪会場となった戸田ボートコースを持つ協会で、安藤松寿が浦和商高を指導し、昭和二十九年に高校総体、国体、全日本選手権とすべてを制覇し三冠王となつて以来、浦和第一女子高と共に各種大会に優勝している。近年では斎藤純忠現戸田市長が協会会長となり、競技力向上に一段の力を入れている。

レスリングは川口市を中心に昭和二十三年頃から東京に通学している学生の間で行われていたが、昭和二十五年に大野元美現川口市長の支援を得て、矢沢長太郎会長の下に協会が設立され、昭和四十二年埼玉国体を契機にレスリング指導者が高校に着任し、一段と選

十六年県連盟独立、福永健司会長となる。昭和三十二年、中村由蔵現会長となり、広く県民に普及。昭和四十二年埼玉国体以後国体に八年連続入賞を果たした。

一方、スケートも、昭和三十四年、松井大作現理事長らにより連盟結成、翌三十五年県体協に加盟。昭和三十六年国体に初参加。昭和四十一年熊田克郎現会長となり、埼玉、福井国体に入賞。昭和四十八年には、秩父にリンクが完成し一層の発展に努めている。

* * *

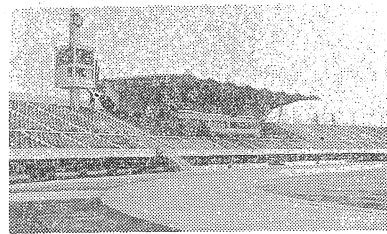
本県の競技力向上について統一した形態として組織されたのは、昭和三十五年ローマオリンピックの年に次回東京オリンピック大会を迎えるに当たり、県内の優秀選手を強化訓練し、オリンピック選手の手育成に努め、更に本県国体選手の強化を図り、広く県民スポーツの振興に寄与することを目的にして、県体協、加盟団体、学識経験者、県職員から選出された委員が、埼玉県選手強化対策委員会を結成し、加盟各団体に強化コーチ団を組織させ、強化訓練の推進に当たったことに始まる。

一方、資金面では昭和四十二年の埼玉国体の必勝を期して、昭和三十一年に県スポーツ選手強化育成資金財団を設立した。

埼玉国体決定と同時に、この強化対策委員会が重要な役割を果たすことになり、中村由蔵委員長の下に団結し、埼玉国体総合成績天皇杯二七点、十六競技優勝という国体史上いまだかつてない記録的な成果をあげ、その後九年間の長期にわたり、天皇杯成績第三位五回、第四位二回、第六位二回と常に上位を占め、本県スポーツ界の競技水準の高度化を維持すると共に、これを起点として一層の普及

活動にも力を入れている。今回のモントリオール選手団には選手、監督、役員三十名を送り、これに続く選手の育成が、今、競技団体において計画的に実施されている。指導者の養成は小・中・高校・大学はもとより一般、実業団に至るまで一貫性のある指導体制の下に実施され、特にコーチ研修会、トレーナー講習会、競技別研修会等各分野に亘って実施され、競技方向上に努力している。

一般社会体育については、太平洋戦争終了後間もない昭和二十二年、埼玉県教育部に体育課が設置され、高田通が初代課長に就任し戦後の体育行政が再開された。当時は連合軍の占領政策に影響されてスクエアダンスを中心としたレクリエーション活動が活発に展開され始めた。こうした情勢を反映してレクリエーション協会設立の気運が高まり昭和二十四年に福永健司を会長として誕生を見た。



県営上尾陸上競技場

昭和二十六年には中村由蔵（現体協専務理事）が体育課長になり、課内に社会体育係が設けられ組織的な指導が行われるようになった。又、現在の体育指導委員の前身ともいえる社会体育指導委員制度が発足し、全国に先がけて四百人が県教委の委嘱を受けて地域スポーツ振興の第一歩を踏み出した事は特筆される。

昭和二十八年には三笠宮殿下同妃殿下をお迎えして第一回社会体

育レクリエーション大会が開催されたが、これが契機となり民踊連盟、サイクリング協会、ラジオ体操連盟等が相次いで結成され組織の整備が進められてきた。この間民踊の普及に尽力した大室輝の功績は大きい。スポーツ振興法の制定に伴って体育指導委員が任命されることになったが、本県では前述の通り以前から社会体育指導委員が委嘱されていたのでそれが極めてスムーズに移行され、県体育指導委員協議会の会長には佐藤幸衛が選ばれ、現在は青木一三（早大教授）以下千九百余人が活躍している。

第二十二回埼玉国体が成功裡に終了した翌四十三年には教育事務所社会体育担当の指導主事九人が配置されると同時に県営の体育施設に指導課が設置され十人の専任職員がおかれた。翌四十四年には町村の社会体育専任職員設置補助制度が新設され、栗原伝次郎、島村政光両体育課長時代は本県社会体育の発展期といえる。昭和四十八年から池田久体育課長となったが周知のスポーツ主事の配置をはじめ、スポーツ振興宣言都市の設定、公共体育施設の整備、社会体育指導者の養成事業、スポーツ教室、スポーツ少年団の増強、レクリエーション活動事業等に懸命な努力を払っている。

学校体育の概要としては、本県の場合埼玉師範がその発生、発展の根元をなしている。明治二十一年同校教諭井口栄治が中心となって初めて運動会が行われて以来、県下各地の小学校で盛んになっていった。同三十五年体操伝習所出身の野沢甚治が体操専門教師として着任、笠原義平らとともに小学校や青年団招待対抗等を行い青少年の体育活動の育成に努力した。大正四年中島海、同十二年鍛本政吉が同校教諭とともに県の体育主事を兼務し体育振興に大きな業績

を残した。昭和十一年文部省から加藤橋夫が県体育主事に着任、清新高邁な体育理論によって指導に当たり体育行政の基盤を確立した。後任の塩沢幹は県体協をはじめとする実践機構の充実整備を図り、専門の体操をもって全県の体操ムードを起すなど同氏によって戦前の県体育行政が完備されたといえよう。

戦後、昭和二十二年初代体育課長に高田通就任、同年結成された体育協会とともに、「復興は体育・スポーツから」と他県にさきがけた活動が熱烈に展開された。同二十三年小体連（初代会長大塚仁之助）、中体連（初代会長星野喜代四）、高体連（初代会長五十里秋三）が生まれ、県教育委員会と共に本県体育振興に大きな力を発揮した。同時に学校体育協会（初代会長五十里秋三）も発足した。以来小体連は原田豊助、石井文作、須永九重、高橋直、森田寛、中体連は関山錦一、押田勤、加藤雅信、長島敏男、石黒硬、塩田禎男、高体連、学体協は下山憲、木村泰夫、西川好明、柳瀬忠、小関一郎、矢代登会長へと引き継がれている。

戦前オリンピック等で活躍した野口源三郎、吉沢宗吉が埼玉大大学教授として体育指導者育成に当たった。昭和三十八年頃から本県における児童生徒の体力低下の傾向がみられ、昭和四十七年には体力向上推進事業を発足させ、各種講習会研究会、指導資料「体力つくり指導事典」を発行し、推進校を設定して、学校体育における最重点施策として、目下課をあげてこの向上に当たっている。

＊ ＊ ＊

以上の如く主として各競技団体別に夫々の業績やそれを成しとげるために努力した主な人物をあげたのであるが、最後に行政と常に



福永健司

一体となって、本県体育・スポーツの統轄、指導に当たっている県体協の大きな力を忘れることはできない。本県体協は、大正十四年、当時の体育主事鍛本政吉を中心に、蓮見安、山口六郎次、石黒寛治、笠原義平、新井誠治等の熱意によって、全国にさきがけて創立されたのであるが、第二次世界大戦による改組を経て、終戦後早くも昭和二十一年、古曳保正、中村由蔵等が中心となって復活し、各競技団体の結成を促進すると共に、郡市体協、学校体育協会（小・中・高体連を含む）、青年団体等を包含して結成され、初代会長山口六郎次から福永健司に引きつがれ、その強力な指導力のもとに、現在三十三競技団体を中心に三十七郡市体協、学体協等が常に綿密な連係を保ちつつ活動し、極めて円滑に本県体育・スポーツの発展に寄与している功績は極めて偉大なものである。

△付記▽

本稿は、埼玉県体協が発行している「埼玉県体育史」にもとづき、体育課職員が分担して書いたものである。

（埼玉県教育委員会体育課長）

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

——高知県——

近 藤 勝



鯨鯢吼ゆる 南溟の
怒濤逆巻く 快天地
万岳の翠 北に負い
ここに生まれし 健男児

(旧制高知工業学校校歌冒頭の一節)

土佐の学校の校歌には、必ず海か山が出てくる。海と山が、土佐人の形成に威力を持っているからだ。

さて、人間はいやおうなく一定の地域に生まれる。地域の諸種の特性は微妙にからみ合って風土を醸成し、この風土が厳しく人間を規定する。人間はまさしく風土の子だ。

土佐独特の風土の醸成に最も力のあったもの、それが海と山である。果てしなく南に広がる太平洋と北にそそり立つ四国山脈が、土佐を大きく抱きかかえる。空あくまで青く、空気はこよなく清い。高温・多雨で快晴に恵まれる。夏の台風と冬の季節風はこよなく厳しい。この男性的で明るい自然が、土佐人を陽気にし、豪気にした。

四国山脈と太平洋に囲まれた土佐の僻地性と孤立性が、土佐を典型的な流人と落人の国にした。流人や落人の多くは、いわゆる政治的敗北者だ。だから、彼らの共通心理は権力者に対する反抗心・反逆心である。そして、これがやがて土着土佐人の血に流れ込む。さらに、関が原の戦いで一敗地にまみれた土佐の大守長宗我部盛親は家康に土佐一国を没収され、代って山内一豊が入国する。土着土佐

人は約二百七十年間、他国者である山内進駐軍に支配された。が、決して心服はしなかった。山内進駐軍に対する反抗心・反逆心は、胸中深く燃え続けた。こうした妥協なき歴史と彫り深き社会が、権力に対する本能的ともいえる土佐人の反抗的・反逆的態度の基盤である。

この反抗的・反逆的態度は、必然的に一人一党的・一匹狼的性格を生む。西南戦争に際して土佐人を熟知していた県外人たちは、土佐は決して西郷に味方しないと断言した。その理由は、「薩摩なら西郷の一声でみんながいつせいに立ち上がるが、土佐では一人を説得するのに半日はかかる」だった。言いてまことに妙である。

土佐人のこういう性格は、チームワークを中核とするスポーツには全く向かない。従って、相撲と水泳が土佐を代表するスポーツの両横綱になったのはごく当然の帰結だ。なづか土佐人は生来いたって相撲を好む。かつて中岡慎太郎は西郷隆盛に「兵を養ふに相撲を学ばしむ。勇を養ふに似たり。如何」と問い、「然り、林子平士風を興すの説に、撃剣を三年学ばしむるよりは、相撲一年勝れりと言ふ。是れ妙法なり」の答をえ、大いに満足している。また目を覚ませば必ずせせらぎか潮騒を聞く土佐だから、土佐人が水泳好きになるのもきわめて当然のことだ。

こうして相撲と水泳がまず土佐の代表的スポーツとなり、しかも断然他を引き離していたが、戦後になってその趣きがやや変わってきた。それは野球のめざましい発展であり、ソフトボールなどの激

しい追い上げだ。確かに相撲と水泳は、相対的に見るかぎり斜陽化している。その原因は端的に言って、土佐と土佐のスポーツの近代化である。だが、もしも近代化の名にかくれて土佐人の個性的性格が色あせ、いわゆる日本人のより平均規格的性格に移行しているためだとすれば、この現実をどう受けとめ、どう評価すべきであろうか。なおざりにできない問題である。

近代スポーツの黎明と発展

琴堂尾崎行雄が明治三十四年「徳育と体育」と題し、高知市で講演した。土佐で体育が高く評価された証左であろう。どこでも同じだろうが、師範学校の体育教師の影響はまことに大きい。この師範学校へ、明治四十年うら若き女子体育教師が着任した。二階堂トクヨ（一八八〇～一九四一・日本女子体育大学創始者・宮城県出身）である。四年間の在職期間中、県内各地で講習会をたびたび開き、啓蒙するところまことに大であった。ちなみに二階堂は藤村トヨ・井口あぐりと共に、日本女子体育の大先覚者だ。

二階堂のまいたタネに立派な芽が出た。これを健やかに育てたのが、若き日の戸倉ハル（一八九六～一九六八・お茶の水女子大教授・香川県出身）である。大正七年から四年間高知師範に在職し、県内を駆けめぐり、体育全般にわたって指導したが、特にダンスに力を入れた。「私の郷里は土佐だ」と口ずさんだ戸倉は、戦後も二十数回ダンスの講習会で土佐に來たし、戦前に教える水谷光（旧姓

山田)を女子師範に送り込みもした。

大正九年三月、精悍で小柄な若き体育教師が高知師範にやってきた。山本芳松(一八九二—一九七四・中京女子体育大学教授・香川県出身)である。東京高師体育科第一期生で、翌年の十月まで在職した。僅か一年半の期間だったが、土佐スポーツ界に与えた影響は偉大だった。枚挙にいとまなき功績中、特異なものは、高知師範の優秀な生徒がこぞって東京高師体育科の門をくぐる氣運を醸成したことだ。鶴岡英吉(一九〇二—・元東京教育大学体育学部長・現日本女子体育大学学長)、宮畑虎彦(一九〇三—・元東京学芸大学教授・現日本体育学会会長)、今村嘉雄(一九〇三—・元東京教育大学体育学部長・現専修大学教授・現日本武道学会会長)、竹内一(一九〇三—一九四五・元朝鮮総督府体育主事)、浜田義明(一九〇二—・現中京女子体育大学副学長)らがその代表だ。山本擔任の年に高知師範に入学した河瀬正実(一九〇五—・現県体協副会長)は、この五名を「芳松門下五人男」と呼ぶ。この五名はそろって優等生だった。今村などは終始トップだったという。文科や理科に進む実力を持ちながら体育科を選んだのは、確かに山本の感化だった。山本は五名を通して日本体育界を牛耳ったと言えそうだ。また、五名はそろって万能選手だった。例えば鶴岡は陸上・柔道・相撲・ボートなどの名選手だ。特に五名ともボートに勝れていた。大正十年、鶴岡(四番)、宮畑(三番)、今村(舳手)は琵琶湖での全国中等学校漕艇大会で初優勝を飾った。翌年は今村(整調)、竹内(五番)が

家に引き入れ一杯やろうとしたことだ。現在の晩酌はかつちり二合?とのこと。

水 泳

土佐で水泳が体育として組織的に教えられ始めたのは明治初年からだ。海南学校の二代目校長吉田数馬(一八四七—一九一〇)は戊辰戦争の勇士で、特に水泳を体育として重視し、自ら率先垂範する熱の入れようだった。

土佐の水泳界に初めてクロール泳法を持ち込んだのは山本芳松で、その体得者は宮畑虎彦だった。東京高師に進んだ宮畑は、大正十一年の全国競泳大会の二百、四百自由型で見事に優勝し、翌年にはパリのオリンピックに出場した。土佐人のオリンピック初参加だ。

躍進する土佐水泳界は昭和六年、青山茂(一九〇八—)らが中心となって水上競技連盟を結成し、会長に高知商業学校長小沢欽之助(一八六九—一九五四)を選んだ。翌年のロスアンゼルスオリンピックに土佐から北村久寿雄(高知商)、横山隆志(高知商→早大)、杉本盛(高知工→日大)が参加し、若冠十六歳の北村は千五百で優勝、全世界をアツと言わせた。水泳王国土佐の誕生で、土佐全体がわきにわいた。なお、この時には陸上で相良八重(一九一三—一九六七・千葉県出身)も参加した。土佐からオリンピックに四名の選手を送ったのは、後にも先にもこの時だけだ。ちなみに相良

参加し、連続優勝を果たした。高知師範はさらに続けて二回優勝し、連続四回優勝という偉業を達成した。この栄光に輝く高知師範ボート部も、全国制覇六回の記録を最後に、昭和十二年さびしく解散した。浜田も高知師範卒業後、ボートでオリンピックに参加している。なお、河瀬も芳松門下で、県体育界で幅広い活躍をしている。

昭和二年四月、山本芳松と体つきのよく似た新進氣鋭の体育教師が高知師範に赴任してきた。山下市平(一九〇五—・静岡県出身)だ。東京高師では今村嘉雄、本間茂雄らと同期であった。以来



山下市平

四十三年間、高知師範・高知大学教育学部に勤務、晩年には付属中学校長を四期つとめた。この間、教え子は県内各地に散らばり、学校を中心として体育・スポーツの普及発展に貢献した。

た。県教委体育保健課長は現在まで七名だが、そのうち五名(邑田一郎、利岡完、森沢栄晴、吉永五郎、豊永幸男)までが山下の門下生だ。山下は几帳面で人情に厚く、正義を貫き「市平」の愛称で深く生徒に慕われた。昨年、勲三等旭日中綬章をさずかる。全く土佐人化した「いっぺーさん」はこよなく酒を愛し、酒にまつわる逸話はまことに多い。最近の筆頭はある宴会でちょっとやりすぎ、家に帰る途中ぶったおれ、パトカーで輸送されたが、家に着くや警官を

は「オリンピックスの果実」(田中英光著)のヒロインである。今回のモントリオールのオリンピックには、土佐から神野正英(高知高↓日大↓新日鉄)が参加し、不振にあえぐ土佐陸上界にちょっぴり活を入れた。

高知商業の黄金時代を築くに当たって校長と共にあずかって力のあったのは、部長福井春政(一八八四—一九七四)である。容赦なくドラ声の雷を落としたが、人情に厚く「福春」のニックネームで部員に慕われた。これより早く福井は同校相撲部長として、全国大会で団体優勝二回、個人優勝一回の記録を持っていた。

さて、ここにもどうしても忘れない人物がいる。進んで高知商業のコーチ役を引き受けた溝渕治助だ。魚市場に勤め時間に恵まれたうえ、根っからの水泳好きで大正十年頃から水泳指導をかって出た。本人自らも松山市での四国大会に数回出場しており、高知市から会場まで自転車で行ったというから、相当のいごっそうだ。終戦後は高松市に転住した。



西野恭正

戦後の土佐水泳界の大立物は西野恭正(一九二五—)である。城東商業(現高知高)から日大に進み、昭和二十三年から三年間日本選手権の五十、百の背泳で連続優勝し、昭和二十七

年にはヘルシキのオリンピックに出場した。城東商業の伝統は水泳部長平田安（一九〇五～一九三九）らによって作られた。平田は底ぬけに部員を可愛がった。昭和三十三年頃には、潜水泳法で平泳ぎの世界新を次々に更新した木村基（高知高↓日大）が出て注目された。

西野が現役時代の県水連理事長は藤尾恒九郎（一九〇四～）で、高知商業の部長でもあり、戦後の土佐水泳界に尽くした功績は大きい。ついで理事長に北川正水（一九二二～）がいるが、いわゆる「いっぺー」門下で、独自の手腕を発揮して斯界の発展に尽くした。率直に言って現在の土佐水泳界は斜陽をかねているが、西野は県水連理事長として昔日の栄光の回復に全力投球している。

柔道

尚武の国土佐へ講道館柔道を伝えたのは、鈴江吉重（一八六七～一九五一）である。鈴江は森沢吉次に柔術を学び、のち上京して講道館に入門し加納治五郎に師事した。数年後に帰郷するや講道館を開くかわら、警察や学校にも勧め、明治から昭和にかけて長期間柔道の発展に貢献した。

戦前から戦後にかけて土佐柔道界に寄与した人物には福井春政・斉藤琢磨（一八九三～一九六九）、橋詰実（一九〇一～）、池知正男（一九〇七～）らがあり、特に異彩を放ったのは長崎勝（一八八五～一九七二）である。長崎は講道館で修業し、帰郷するや安芸中

学校剣道で異彩を放ったのが山本名置（一八九二～一九六〇）で、東京高師で高野佐三郎に師事し、卒業するや母校海南学校（現小津高校）に迎えられ、三十有余年にわたり剣道一筋に生きた。山本の胸から東京高師に進んだ西野悟郎、川添恵美（旧姓内村）などが、大きくはばいた。

太平洋戦争の敗北で、日本古来の武道は壊滅的打撃を受けた。文部省通達で学校武道は全面禁止となる。尚武の国土佐では、進駐軍の武道特に剣道に対する処置はきわめて厳しく、刀剣類はもとより道具、竹刀まで捜査没収する有様で、違反者は重労働二十五年に処す、とまで威嚇した。だが、それでひるむ土佐人ではなかった。愛好者らは神社の広場などで、夜間ひそかにいっさい無言の稽古を続けた。片山巖城（一九〇七～）が中心となって、県下初の柔・剣・拳道大会を吾川郡春野町で開催したのは、昭和二十二年四月のことであった。また、そのころ紀元節校長溝淵忠広（一九一八～）は坂本土佐海（一九〇五～）、門田豊（一九二二～）らを招き、南国市中谷の山間で稽古に励んでいた。これらは特筆すべきで、権力に屈しない土佐人の心意気が如実に反映されている。

なお、戦前から戦後にかけて土佐剣道界に貢献したものに田岡伝（一八九七～）、上田蔵刑（一九〇七～）、加賀野井卓（一九一二～）らがいる。戦後の栄光の代表的なものは、国体教員の部での団体優勝、川添哲夫の全国選手権優勝（二回）などである。

学の柔道教師となり、寝業を中心として県下中学校体育大会で、昭和七年から八年連続優勝の快記録を樹立した。この安芸中学の前に大きく立ちだかったのが、森沢栄晴（一九一〇～）の指導する高知師範であった。森沢は高知師範在学中は相撲の名選手で、全国大会の個人決勝戦では惜しくも横綱を逸し、準優勝にとどまった。

こうした指導者たちの努力にもかかわらず、なぜか土佐の柔道は全国に名をなすまでには至らなかった。だが、戦後になって漸くその悲願が達成された。川添利雄（一九二二～・徳島県出身）は県警本部に勤務するかたわら道場を開き多くの人材を育成したが、その筆頭は松永満雄で、昭和四十一年の日本選手権と翌年の世界選手権無差別級で見事に優勝した。また、河野親安も昭和四十年の全国警察軽量級で優勝している。川添は昭和三十四年から県柔道協会の理事長の要職にあって、後進の指導に情熱を注いでいる。

剣道

維新後、無用の長物視される風潮に抗し、土佐でよくその孤望を守ったのは石山孫六（一八二八～一九〇四）である。藩校致道館、立志社、警察、学校などで精力的な指導を実践した。石山の後を受けたのが川崎善三郎（一八六〇～一九四四）で、高野佐三郎、高橋超太郎と共に「三傑三郎」と称えられた。大正元年に帰郷してから県外に出ず、武徳会支部、諸学校、警察などで後進の指導に専念した。

弓道

土佐弓道界の恩人は、何といっても川崎庄五郎（一八七九～一九四五）である。昭和五年ごろ、当時の金で五万円をポンと投げ出し、間口五間の立派な道場を作った。自らも範士の称号を得たほどで、熱心の後進を導いた。ついで、和泉吉次郎（一八八九～）がいる。昭和二年、東京から帰った和泉は、まだ土佐にない公営道場の必要性を力説し、前記川崎の寄附となった次第である。

こうした先達の努力で学校弓道が盛んになり、昭和十年には土佐高女が全国武徳会女子の部で団体優勝し、昭和十七年には明治神宮大会中等学校の部で本県チームが団体優勝した。

戦後の土佐弓道は川崎庄五郎の嗣子幾三郎（一九一七～）の特別な援助と、和泉吉次郎、浜川虎一郎（一九〇三～一九六〇）らの努力で見事に復活した。昭和二十七年には県弓道連盟も誕生した。こうした中で、とりわけ女子軍が目いっぱいの活躍をした。第十四回国体（近的）と第十九回国体（遠的）の団体優勝は、文句なしに立派だった。この女子軍にはきわめて話題が多いが、とりわけ藤原定子（一九二〇～）は国体へ連続十三回出場、昭和四十九年には全日本女子弓道選手権で、見事に優勝をかつぎ取った。現在も寸暇を惜しんで後進を指導すると共に、国体女子軍の監督業にも意欲を燃やしている。

国体優勝女子軍の監督が島中春雄（一九一六～）である。女子

軍をうまくまとめた手腕は立派だ。現在は連盟の副会長だが、現役としても活躍している。昭和四十四年の全日本選手権では決勝に進出したが、惜しくも準優勝にとどまった。しかし、これは土佐ではもちろん、四国内でも初めての快挙だった。

軟式庭球

土佐軟庭の隆盛は、高知商業から始まった。吉良馬吾というまことに熱心な部長がいて、毎日コートに出て目を光らせていたという。大正十年ごろから急速に力をつけ、昭和二年の第二十回全国中等学校大会で永田、山下組がダブルスで初優勝、翌年の同大会では惜しくも第三位にとどまった。が、昭和八年の同大会では西岡がシングルスで見事に初優勝を飾っている。

こうした伝統に立ち、戦後、土佐軟庭界を背負ったのが西山順一（一九五〇—一九七二）である。昭和二十四年、公立小学校長を勇退し、土佐高校に就職して軟庭部の監督となった。温厚な人柄だったが、指導には不動の厳しさが内に秘められていた。西山の努力は昭和二十九年の全国高校選手権での団体優勝、昭和三十三年の同大会並びに団体での大野、畑山組の個人優勝、さらに昭和三十八年の同大会における西山、石元組の個人優勝などとなって結実し、軟庭土佐高の名声を全国に高めたのであった。西山はこの間、長期にわたって県軟庭連盟の理事長の要職につき、連盟の運営に多大の貢献をしている。西山が土佐軟庭界に尽くした功績はまことに偉大である。

卓球

土佐卓球界の父は松岡松喜（一九〇二—一九六二）である。高知一中（現追手前高校）から早大に進み、卓球部主将として大いに活躍した。大正末期に帰郷し、有志をつかって本格的な練習を始めた。この影響で卓球熱は急速に高まり、昭和六年には土佐高女の山本スミが第六回明治神宮大会で個人優勝、翌年の第二回全国女子卓球大会では惜しくも準優勝にとどまっている。

戦後の復活に最も力のあったのは広松泰三（一九一九—）で、昭和二十一年には卓球場を開設し、後進の指導と卓球界の発展に努力した。また、松岡会長のもとで六年間理事長をつとめ、縦横にその手腕を発揮した。なお、広松は戦前の明治神宮大会のダブルスで二回準優勝している。彼こそ土佐卓球界中興の祖といえよう。

土佐卓球界で最も立派な成績をあげたのは、土佐女子高校（旧土佐高女）である。戦前からの伝統に立脚し、昭和三十九年の第三十三回全国高校選手権では浜田、福谷組がダブルスで優勝、翌年の同大会でも浜田（美）、浜田（泰）組が準優勝という戦績を残している。

この当時の土佐女子高卓球部の実力は全国トップレベルにあったが、現在はやや斜陽の憂をかこっている。

ソフトボール

最近、急速に実績をあげているのがソフトボールだ。まさに、旧

の出の勢いといえよう。そして、その推進力となったのが松田明栄（一九一六—）だ。昭和三十一年から十数年間ソフトボール協会の理事長をつとめ、斯界の発展に全力投球した。現在は副会長で、土佐で最も盛んなのはソフトボールだと豪語している。

松田は理事長時代、中央での会議のたびに高校男子の全国大会の開催を主張し続けた。だから、実現した以上は是非でも勝たねばならなかった。そして、よく勝った。この大会は昭和五十一年で第十一回を数えるが、四回まで土佐勢が優勝している。また、西日本中学生大会でも、五回のうち三回まで土佐勢が制覇している。こうした栄光のかけに各監督の努力が秘められていることを、特に強調しておきたい。

野球

土佐スポーツ界で、戦後急速に頭角を現わしたものは野球だ。投手に前田祐吉（一九三〇—）・元慶大監督（を擁する城東中学が、

昭和二十二年春の全国選抜

大会で準決勝に駒を進め、

土佐の野球に大なる自信を

与えた。

土佐勢はいま一步のところ

で何回か全国優勝を逃し

たが、ついにその悲願を達



溝 淵 峯 雄

相 撲

相撲は土佐の代表的スポーツであり、学生相撲に関する限り相撲王国土佐は実質的名誉称号である。もし、高校野球が相撲ほど全国優勝したら、テレビを見たり応援にかけつけたり、或は歓迎会、祝勝会などで土佐の経済は大打撃を受けると、妙な語りぐさがあるほどだ。

さて、土佐の相撲の恩人は自由民権運動の総帥板垣退助（一八三

成した。昭和三十九年夏、溝淵峯雄（一九一三—）監督による高知高校の全国制覇だ。溝淵はこれより早く土佐高監督として、夏の甲子園で準優勝を経験していた。溝淵のライバルが高知商業の監督松田昇（一九〇五—）だった。松田は昭和二十五年と三十二年の春の選抜で、共に準優勝を飾っている。ちなみに、三十二年の決勝戦の相手校早実の投手は、今をときめく巨人軍の王であった。

この二人に適切なアドバイスを与え、かつ新知識を土佐球界に注入したのが、高知新聞運動部記者水口源（一九〇八—一九七二）である。ひょうひょうとして我が道を貫いた水口の野球人生は、まことに興味深いものがあった。溝淵の弟子岡本道雄（一九四六—）は母校高知高監督として、昭和五十年春の選抜で見事に優勝をさらった。岡本のライバルは名門土佐高監督の籠尾良雄（一九三四—）だ。この二人のせり合いが、土佐球界に栄光をもたらす原動力となるであろう。

七〇一九一〇）である。地元相撲に力を入れると同時に有望力士を
どんだん大相撲に送り込んだ。続くは野村茂久馬（一八六九～一九
六〇）だ。昭和十七年、現在の高知市設相撲場をボンと高知市に寄
付した。若い頃は小柳のシコ名で地元相撲も楽しんでた。

戦前の名門高知師範の部長は、小笠原鶴吉（一八八四～一九四
六）で、その門下から大豪大島政次郎、村上信義、利岡完、森沢栄
晴、浜田保、高石次郎らが育ち、全国中等相撲界を風靡した。戦
後、弟子たちは「ハンマー会」を結成し、毎年一回墓参している。
ちなみにハンマーとは小笠原の愛称であった。



福 永 伝

戦後最大の功労者は福永
伝（一八九二～一九七〇）
だ。いち早く自宅に道場を
建て、土佐の相撲の発展に
情熱を注いだ。福永道場か
らは土佐を代表する名選手
が、陸續として輩出した。

また、福永の人柄を慕って県外からも続々とつめかけ、多い時はな
かなか出番がないほどの稽古場風景であった。このほか土佐の相撲
に貢献したものには、連盟の会長を二十数年勤めた松本喜一（一九
〇三～）、現会長利岡完（一九〇九～）、現副会長森田富明（一
九一一～）、昭和二十一年から数年間全国唯一の相撲主事を拝命
した森沢栄晴（一九一〇～）、名門高知工高の監督として全国選

手権団体優勝五回の記録を持つ土居武夫（一九二〇～）らがい
る。

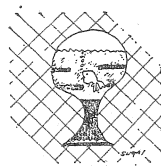
そして、昭和四十九年の全国高校選手権で史上初の三連勝を見事
に達成した高知高監督山崎一男（一九三四～）らが中堅となり、
明日の栄光を目ざし第一線で指導に専念している。

付 記

原稿を仕上げる途中で、この仕事のむつかしさをいやというほど
痛感した。何回、やめたいと思ったかしかない。とても、私の手に
おう仕事ではなかった。しかし、引き受けた以上、仕上げねばなら
ない。この義務感だけで、何とか仕上げることができた。

読み返してみると、独断と偏見がいっぱいのようだ。が、今はた
だ、何らかの参考になればとひたすら祈るだけである。

（高知学園短期大学教授）



人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

——静岡県——



渡辺 福太郎

気候、風土に恵まれた静岡県は、体育、スポーツの普及振興には条件のよい県としてあげられるであろう。事実、今日「スポーツ静岡」を築いてきた人たちはあまりにも多く、小論では書き尽くせないが、明治以降の流れとその跡を辿ってみたい。

一 日本体育の先駆け

幕末から維新にかけて近代教育への胎動が始まった時、静岡に静岡藩小学校、沼津に沼津兵学校付属小学校が学制発布に先だって設置され、これらの学校で体操、撃剣、乗馬、水練、水泳などが行われた。これは日本体育史序章のでき事といえる。少し遡って、菫山代官江川太郎左エ門がオランダ式調練を実施しており、これが日本の体育・スポーツの濫觴であるとみる者もいる。

沼津兵学校付属小学校校規書「童生の事」によれば、素読、手習（学書）、算術の三課は自宅学習でよいとし、体操と講釈聴聞の二科は校内必修、水練は毎土曜稽古、剣術と乗馬は体操の間にいったとある。なお、「小学校役々」として、体操・別所貫一、福島邦太郎、剣術・小野田東市、伊藤銘一の名がとどめられている。

二 静岡師範学校（静岡）を中心として

静岡師範学校六十年誌には体育に関する幾つかの回想記がある。「何が母校の体育を旺盛ならしめたか」の記には、明治十二年明治大帝臨幸に扈從の大隈侯爵の警告によるもので、同十二年には剣道の稽古が行われていたとある。また「母校追憶記」に「運動場に大ブランコがある。……音楽、体操、手工、英語等なし。但し、体操は佐藤保祐先生着任後中学生と合同に授けた」とある。中学生は十

一年に併置された中学科、後の静岡中学の生徒である。初の体操教師として登場する佐藤保祐は、明治十六年七月、時の東京師範（後の東京高等師範）の師範学科取調員の卒業であった。次に登場するのは夏目秋蔵である。夏目は明治十九年三月、東京師範の体操伝習員第三回卒業である。後に静岡勤務となり、明治二十九年野球部創立の時初代部長となった。三人目は原久吉である。「折々の陸上競技に八百米競走を開始し……器械体操に至っては原氏独得の妙技で、当時静岡の器械体操は実に天下一品の覇があった」とある。明治二十年半ばの頃である。

柔剣道の指南は服部長賢で、古武士とか剣客とかいわれた。明治三十年代には山下与作（欧米）、小坂喜十（兵式）、大友武次郎等の名があげられている。なお、付属小学校の木剣体操、長刀体操が、創始者中島賢三訓導とともに有名であり、明治四十五年学習院長であった乃木大将も来校し、諸名士の注目を集めた。

三 中等学校スポーツの台頭と発展

明治二十年末から三十年代にかけて、中学校に次々と運動部が設けられ、高等女学校、実業学校十数校の新設に伴い、運動部の活動は拡大していった。明治三十二年静岡中と横商の野球試合、菫中端艇部設置、明治三十五年浜中水泳部設置、弁天島における遠洲学友会との競泳、明治三十六年浜中での東海五県連合野球大会、静岡女子師範にテニス部、競技部設置、明治三十七年静岡と静岡市の庭球大会、沼中の狩野川での端艇競争等々多彩であった。

一方、小学校では明治十八年頃より運動会が行われ始め、次第に盛んとなった。

中等学校の対校試合が活発になるにつれ、大正年代に入ると組織的な大会開催の機運が高まり、大正十年中等学校体育大会（陸上競技）の誕生となり、各種目の大会も持たれるようになった。他方、大正四年の全国中等学校野球大会をはじめ、蹴球、陸上競技、剣道、水泳等の全国大会も開催されるようになった。

四 体育行政に携わった人々

大正十年静岡教諭となった中島海（一八九四～一九五一）は、十年に体操視察員の肩書を持った。後に東京高等師範付属小学校に務め、小学校体育に重きをなした。大正十五年県学務部が独立、教育課学校体育指導員に静岡教諭田久雄が任命された。昭和三年には県体協の設立を控え、初代体育主事（後に体育運動主事）に神戸から静岡に迎えられた佐久間敬三（一八九九～一九四二）が就任した。千葉出身。浜松高等工業専門学校（後の静岡大学）の助教授をしており二度目の静岡入りであった。在任十二年、文部省初代体育官に栄転したが、昭和十七年八高線の鉄道事故で不慮の死を遂げ惜しまれた。体育指導員に任命された松山清治（一八九五～一九五一）は、十四年間務



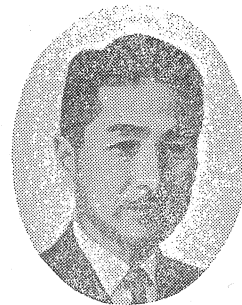
佐久間 敬三

め相良高等家政女子校長に転出した。

昭和十四年暮、佐久間の後任に岡山県体育運動主事岩野次郎（一九〇四）

した。十六年静女師教諭の田口政義（一九〇七）は、体育運動主事補から山梨県体育運動主事に栄転した。

岩野の後任は栗野正（一九〇七）である。山形師範東高師



栗野 正

卒で葦中に赴任、「葦山バレーボール育ての父」と呼ばれる実績を残した。静師に転じ陸上競技に力を入れた。昭和二十一年教育部体育課の誕生により初代課長となり、教育委員会体育保健課へと続いた。課の名称

を保健体育でなく体育保健でいくと貰いた。藤枝西、清水西高校長を経て退任。現在茶道裏千家の師匠をしている。

浦辺秀夫（一九一〇）は指導主事から第二代課長となった。

千葉出身。静岡国体には演技部長として手腕を発揮した。吉原高校長を経て清水市教育長となっている。第三代は英語科出身の相佐明一（一九一三）で県視学、高校長等の経歴を持ち体育を幅広く

ら会長に受け継がれた。

斉藤は人も知る大昭和製紙社長である。沼中時代陸上競技部主将で早大へと進んだ。県陸協会長は二十七年から現在に至っている。社長として職場のスポーツに力を入れ、大昭和といえば、陸上競技、野球の強さがすぐ頭に浮かぶ。静岡国体開会式には最終炬火リレー走者として炬火台に立ち、閉会式には県選手団長として自ら天皇杯をおし戴く榮譽を担った。次の会長根岸正一（一九〇三）は久しく副会長として補佐の任を果たし、会長は一期で去った。二十二代会長佐野嘉吉（一九一〇）は昭和三十五年以來現在に至っている。静岡東商大に進み、ラグビーマンで今でも時々ユニホーム姿になる。今は亡き弟理平（静岡中早大）はベルリンオリンピックに出場、サッカーの名ゴールキーパーといわれた。佐野は実業界から県政界入りし、議長、自民党幹事長三期を歴任するなど政界での活躍、業績も大きい。彼がその真価を発揮したのは、静岡国体の専任事務局次長としてその采配を振り、見事な大会運営と天皇杯獲得の大成を収めたことである。佐野の下で十一年間事務局局長を務めた竹原政一（一九〇四）は中学校長からで、静岡教諭時代には、県陸協の中心となっていた。

六 競技スポーツ界の群像

陸上競技

大正から昭和にかけて、静師、浜師の黄金時代を作った指導者は、静師では治田久雄、有坂和雄、宇野勝房、栗野正で、浜師では尾崎剛毅、山口国一、久内武、菊本耕作、加月秋芳等であった。戦後、竹原政一、恩田周平、天野忠司等が中心となって新しい組織づ

教育の中に位置づけた。静岡高校長を経て浜松市教育長となっている。この後は筆者の渡辺、二ノ宮祐一（一九一九）（一九六九）、竹田昌平（清水西高校長）、現中村駿太郎課長となった。

五 静岡県体育協会の歩み

県体育協会は昭和三年秋発足したが、時の長谷川久一知事は「より積極的な県民性を作り出すために、スポーツを盛んにすることは必要である」と県体協の設立を強調した。創立時会長は学務部長足立達夫、副会長は教育長中村四郎で、知事は総裁に推戴された。県は佐久間体育主事、松山体育指導員を任命し行政の強化を図った。設立後主事に杉村嘉久治（一八八八）（一九五八）が就任した。杉村は大正十五年県属兼視学となっており、体協設立に力を貸し、主事となり三十年この仕事に専念した。彼こそは「県下スポーツ育ての親」であった。



杉村 嘉久治

また競技団体の面倒もよくみ、「バレーボールの恩人」ともいわれ、静岡国体の翌年その輝かしい成果を見取めて他界した。

歴代の会長は創立時から県学務部長が就任し、官界の会長は十六代まで続いた。昭和二十一年県体協は新発足し、十七代会長に民間から初めて戸塚昌宏（一八八七）が就任した。戸塚は県スポーツ祭を開催し、国体誘致の名乗りをあげた。国体誘致のことは川井健太郎（一八九六）（一九七四）斉藤丁英（美英改名一九一六）

くり努力した。昭和二十七年会長に斉藤丁英（同年県体育協会長就任）を迎え、理事長有田寿雄、後に勝又五郎（静大教授、一九一四）となった。勝又は大世帯の陸協でよくリーダーシップを発揮し、静岡国体で「オレンジ旋風」を現出させた。時の監督は和田明（現理事長）望月尚夫（大昭和）であった。国体における総合優勝六回、二位七回の偉業継続の源をつくった。

人材の多い陸上競技では秩父宮章に輝く功労者だけでも十九人に及んでいる。斉藤、有田、勝又、竹原、和田のほか副会長の木村修六、鈴木実治郎、松浦元男、杉山竹次郎、指導陣の塚本宇之吉、磐田南を育てた伊藤菊造、西遠の名を高めた生駒定文らである。若手指導陣で浜松北の加藤晴一、富士見の花崎隆司、静岡商の亀山敏郎らが頑張っている。

水泳

かつての「水泳王国」の開拓者たちは、田畑政治、内田正録、小野田一雄、野田一雄等であった。その温床となった浜名湾游泳協会の設立には内田正録の兄千尋の働きがあった。また静岡游泳協会は斉藤享、伊豆游泳協会は井原為吉がその設立に尽力した。

見付中で牧野正蔵、伊藤（寺田）登、杉浦重雄の三選手を育てたのは、英語教師として赴任した小林寛（一九〇五）であった。「師弟同行」の彼は、雨の日は洋傘をさしながらブルーサイドを泳者とともに往來したという。

田畑政治（一八九八）は日本水泳界、体育界の大御所で、浜中一高↓東大を経て朝日新聞社重役となり、日本水連会長、日体協専務理事、メルボルンオリンピック選手団長など歴任し、日体協副会長、日本オリンピック委員会委員長の要職にある。

昭和二十二年県水上競技連合が誕生し、会長は牧野敏一、稻勝正太郎、鈴木清蔵と続いた。浜名湾の井上利夫、後に宮本秀夫、静岡の宮崎作之助、伊豆駿河湾の井原一夫、三泳協合理事長会談で統合が進められ、昭和三十四年県水泳連盟として新発足した。会長は津倉彦次（一九〇四～一九六五）となり、その後大石益光（静岡新聞社長、一九二六～）は十余年間にわたり「水泳静岡」再建の努力を続けている。

サッカー

志太中のサッカーは初代校長錦織兵三郎が校枝にとり入れ、これを育て全国にその名を知らしめたのは小宮山宏（一九〇五～）である。ここで育った鈴木六郎、宮崎作次、横原徳治、松永湊等によって志太クラブが生まれた。戦後のサッカーは藤枝市での国体開催で基礎づくりができ、クラブチームの育成には松永信夫らの尽力が顕著であった。

今日の「サッカー王国」は、副会長白井喜太郎、宮崎作次、理事長杉江悟一、井出多米夫、横原徳治、小林一男、松永弘道等歴代役員、利幸、静工の松本博之等々目白おしである。中、小学校（スポーツ少年団）も藤枝、清水地区のチームが全国の舞台で優秀な成果をあげている。

高校サッカーは各種全国大会に大活躍で、その優勝は藤枝東の八回、清水東、浜名を加えると計十二回、国体選抜四回を数えている。その指導陣には藤枝東の長池実、清水東の勝沢要、浜名の美和利幸、静工の松本博之等々目白おしである。中、小学校（スポーツ少年団）も藤枝、清水地区のチームが全国の舞台で優秀な成果をあげている。

バスケットボール

昭和初期県組織結成の中心となったのは中村満雄（一九〇六～）、池田秋也であった。中村は静岡精華の黄金時代を築き、後に理事長、会長となった。国体総合優勝四回に及ぶ貢献者としては元会長川村弘（一九〇六～一九七四）前会長塩原保六（一九〇六～）、現会長の川村壮太郎（一九〇九～）、日本協会の事務局長に迎えられた馬渡猛（一九一五～）らがいる。

バレーボール

大正十二年以来五十余年バレーボールとともに歩んできた真田賀吉（一九三三～）は、八十三歳の現在も各大会にプレーヤーコートで顔出しする程元気である。

菰山高の全国大会七連勝の不滅の金字塔をうちたてたのは川嘉雄（沼商）であった。浜松市立女子の安達忠勝が実績をあげている。

卓球

卓球史に、昭和のはじめ女子卓球界は「日本の静岡」を実現したとある。河村忠篤（一九四四～一九六二）は静岡の歯科医であったが、この頃より個人的に選手育成を図ってきた。昭和二十一年連盟設立とともに会長に就任、卓球界の再興を図り成果をあげた。県体協副会長としても広く貢献した。理事長の森山栄雄（誠心）らが指導に努力している。

庭球

宮崎久太郎（一九四四～）、保次郎の兄弟が自宅にコートを作り、硬式に転向したのは大正九年である。後に初代会長となった三宅勉らがこれに加わり静岡ローンテニスクラブを結成した。会員の大石光之助（元静岡新聞社長、一九九六～）は静岡トーナメント

を育てた。旧制静岡グループに麻生武雄（一九〇一～）、現会長の斎藤久雄（静岡女子大学長、一九〇三～）がおり、大地忠雄らとともに今日の基礎を築いた。最近の国体では総合で中位入賞を維持している。浜下市造がよく動いており、高校では浜工の山本宗五郎が実績をあげている。

軟式庭球

大正末期から中等学校の全国大会で、静岡精華の優勝もみられるなど活躍が目立ってきた。

昭和二十四年庭球連盟と分かれ芝野清一（清水水産社長一九〇六～）が初代会長となった。芦屋真雄、石川幸男らが協力し、国体でも継続的に成果を収めてきている。

柔道

講道館菰山分場が私立伊豆学校（菰中）に設けられたのは明治二十一年であった。嘉納治五郎門下四天王の一人といわれた山田常次郎（後に富田）が、英語、体育の教師をしていたからである。「姿三四郎」の著者富田常雄の父である。

昭和四年武徳会支部が設置され、静岡教諭青木恭太郎らが県有段者会を結成した。

大蝶美夫（一九〇五～一九六八）は昭和六年岡山から静岡に招かれ、翌年静岡中も兼ねた。昭和二十三年有段者会を発展解消して協会を設立し副会長、後に会長となった。昭和四十五年九段位。中大法科出身らしく理論家であった。現会長の西田亀（一九〇七～）は岡山県警から大蝶に招かれた。沼津の高田貞治、工藤勝太郎、浜松の山口国一、静岡の佐々木義男、稲葉茂男らが地区或いは高校指導の中心となってきた。

剣道

維新後県剣道界の先駆者となったのは中条金之助で、牧の原台地の開拓にあたり、金谷に道場を開いた。明治三十二年武徳会支部の最初の教授は無刀流の服部長賢で、彼は既に静岡師の指南をしていた。

大長九郎（一八七五～一九六四）は岡山から県警柔道師範に招かれていたが、明治四十一年剣道師範を兼ねた。それ以来三代にわたる剣道界の重鎮として君臨してきた。昭和三十年、古武道力信流技術保持者として県無形文化財に指定された。剣道範士、居合道範士、十段位、柔道、棒術教士であった。

武徳会解散時、大長のほか岡文雄、杉山和民らがいた。一時腕競技に変身したが二十七年連盟結成の運びとなった。三島の深谷廣治、富士の大村市太郎、清水の勝瀬光安、浜松の永峰晃の面々が支部を育てた。なお、桑原進、山田康雄、平川竜夫、羽賀忠利らも県や地域の功労者である。高校は高体連主事も務めた静岡の大橋専一が中心となってきた。

弓道

その人口全国第三位を占め国体で二回の総合優勝をしてきている。

昭和二年武徳会の専任教授となった松井政吉（一九二二～一九七六）は、この春まで六十余年弓道一代の旅を続けた。掛中出身。

「若い時にはよく射場を荒したものです」と語る程にすばらしい腕の持主であった。昭和四十五年に十段位の最高を極め、日本で一人の存在となった。初代会長で一時去ったが、再び会長として最後を遂げた。晩年は暫々沖繩に赴きその指導にあたった。四代会長蒔田

誠作、六代会長渡辺敏雄、事務局長甲賀一の功績も大きい。高校では静岡にいた三輪卓一(副会長)、沼市立の白石曉らがあげられる。

野 球

明治年代野球の理解者、協力者は、静岡に加藤周司、島田に鈴木金苗がいた。大正元年清水に巴クラブを創立したのは井上幾太郎(一八九〇〜一九七五)で、社会人野球草分けの一人であった。郷豊(一八九二〜)は連盟創立時より今日まで三十余年会長職にあり功績甚大である。県体協副会長、市体協会長、自転車連盟会長も務めた。創立時の斉藤喜次郎、現副会長島田国松、池田信、山本金一、理事長稲森鐵一らも長い実績を持っている。また地域の功労者として池田春行、松本孝市、高木七太郎らが、高校野球では長く理事長を務めた稲毛森之助があげられる。

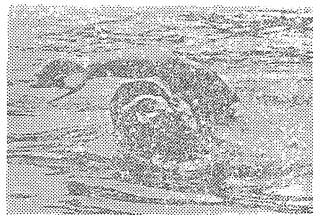
ハンドボール

静岡を代表してきたものは、女子の静岡城北、男子の清水である。静岡城北は全国優勝五回、藤田純男(静女大教授)が芽を育て、望月正(県体協事務局長)が開花させた。清水商の片瀬喜代次は理事長となっている。

その他

自転車の栗田政男、杉山正文、レスリングの宮崎作次、広沢巡、体操の葭川郁次、池上守、長束盛俊、村上さだ、ソフトボールの上田勇吉、杉山繁、牧野巽、鈴木安太郎、ヨットの大橋茂登英、クレイ射撃の大石省三、バドミントンの塩川甫、山岳の尾崎忠次、池田徹、渡辺研造、ラグビーの石坂均等々それぞれの競技団体を育成発展させてきた指導者は数えきれない。

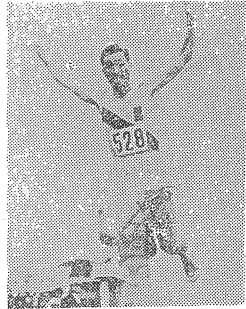
なお、高体連では静岡城北、静岡高校長時代会長を務め、県教育



古 橋 広 之 進

この大会にはサッカーで加茂健(浜一中↓早大)、加茂正五(同)の兄弟、松永行(志太中↓東高師)、佐野理平(静中↓早大)、笹野積次(志太中↓早大)、堀江忠夫(浜一中↓早大)の六名が参加した。

戦後、日本のスポーツ再建の希望の星となった古橋広之進(浜二中↓中大↓大同毛織)は、昭和二十三年、一人でこの一年に四百、八百、千五百自由形等で、実に十七の世界新記録等を樹立し、「フジヤマのトビ魚」といわれた。ヘルシンキ大会に出場したが既に峠を過ぎっており、この大会では二百平泳ぎの長沢二郎(沼中↓早大)の六位が唯一の入賞だった。



二 照 掛

本県選手のオリンピック参加の流れは変わり、メルボルン大会からは「陸上静岡」となった。小掛照二(広島、早大↓大昭和)は三段跳に世界記録を出して臨んだが八位にとどまっ

た。ローマ大会に陸上競技六選手が参加し、和田明はコーチを務めた。一九六四年第十八回東京大会には巨人軍コーチの鈴木章介(浜商↓早大↓大昭和)ら十一人の陸上選手、サッカーに山口芳忠(藤

長から副知事となっている諏訪卓三(一九一〇〜)、設立時の世話人宮林武雄、藤田純男、竹原政一、主事を務めた重田一、石坂均、大橋専一、久保田俊影らの名をとどめなければならぬ。

七 世界の舞台で活躍した人々

本県関係者でオリンピックに出場した選手は百名を数え、役員等の参加者は二十八名である。初の参加選手は一九二〇年第七回アントワープ大会の水泳に出場した内田正練(浜中↓北大)で、彼は片抜き手でクロールに対抗、クロールを土産に持ち帰った。ついでパリ大会に小野田一雄(浜中↓明大)野田一雄(浜商↓慶大)が出場し、野田は竹林隆二(中泉農↓明大)とアムステルダム大会にも参加した。第十回ロサンゼルス大会には五種目に十一名を送り、田畑政治が総監督の水泳で、浜一中四年生の宮崎康二が百自由形で優勝、水泳日本大活躍の口火を切り、八百リレーでも世界新の優勝で二個の金メダルを手にした。千五百自由形では牧野正蔵(見付中↓早大)、二百平泳ぎで小池礼三(沼商↓慶大)が銀メダルを獲得した。陸上競技棒高跳に望月俊夫(静師↓東高師)が五位入賞した。次のベルリン大会には総勢の約一割にあたる二十二名が参加した。千五百自由形で伊藤(旧寺田)登(見付中↓慶大)が優勝、世界新で優勝した八百リレーメンバーに新井茂雄(浜農蚕↓立大)、杉浦重雄(見付中↓早大)がいた。四百自由形では鶴藤俊平(見付中↓立大)が銀、連続出場の牧野が銅をとった。鶴藤は千五百自由形でも三位、二百平泳ぎで連続出場の小池が三位、伊藤三郎(中泉農↓明大)が五位に入賞し、「水泳静岡」の名をほしいままにした。なお、

枝東↓中大↓日立)、富沢清司(藤枝東↓新日鉄)、杉山隆一(清水東↓明大↓ヤマハ)の三人が出場した。次のメキシコ大会にはサッカーの杉山、山口、富沢のトリオが連続出場して銅メダルだった。女子バレーボール監督山田重雄(藤枝東↓教大↓日立)も参加している。ミューンヘン大会には陸上の室伏重信(日大三島↓日大↓大昭和)ら八人を送った。ことしのモントリオール大会には十四人が参加し、女子バレーボール監督山田がメキシコの雪辱を成し遂げ金メダルをもたらした。

オリンピック以外世界選手権等で活躍した選手も多い。一九五四年ロンドンで開催された世界卓球選手権に、男子川井一男(浜商↓専大)、女子加藤(旧渡辺)紀生子(富士宮東↓専大)が出場し共に団体戦に優勝した。渡辺は二年後の東京大会で個人二位、団体三位、更にその翌年のストックホルム大会で再び団体優勝に輝いた。バドミントンでは中山(旧高木)紀子(掛西↓日女短大)、天野博江(同)が、一九六六年ユーバー杯第四回世界女子選手権に優勝、中山は更に第五、六回大会に出場し連続優勝を飾った。昨年マドリッドで開催された新体操世界選手権で、平口美鶴(静岡城北↓日女体大)がリング優勝、ボール四位となった。

八 地域ぐるみのスポーツ

地域のスポーツがいわゆる「町ぐるみ」となっているモデルはサッカーの藤枝市である。志太中のサッカー校技に始まり、クラブが生まれ、静岡国体の会場となるに及んで爆発的となり、老人、婦人もオフサイドがよく見ている。ここに至るまでには県会長でこの六月まで市長だった山口森三がいたればこそである。また、市体協会長だった佐藤政治、理事長だった小沢和三郎らがあり、一市でこの三人が文部大臣賞を受けている。

静岡国体に「バド持ってお母さんといっしょ」の親子マスゲームを行った富士市はバドミントンの町といわれた。清水市は早くから校区、企業別の組織活動でスポーツをしんとうさせている。市会長は軟庭会長もした芝野清一である。浜松市の国分忠之助（一八九八―一九七〇）、沼津市の林宙田（一九一七―）、静岡市の鳥羽国松（一九〇三―）はいずれも市会長、県副会長として主要都市のスポーツ振興に実績をあげている。

町村部では榛原郡の本杉亮平、福田町の鵜飼俊雄、菊川町の沢崎登与次、森町の三倉嘉助、富士川町の大田原政治など多くは体育指導委員揺籃時代からの貢献者である。その他吉田町、金谷町、由比町、三ヶ日町、浜岡町などで住民スポーツが活発である。

なお、県をあげての母親バレーボール大会は十四回目、二千近いチーム、約三万人、父親ソフトボール大会は六回目、千八百余チーム、約三万七千人の参加で盛況を呈している。

九 職場スポーツの進展

大昭和といえは陸上競技、野球の大会である。社長斎藤了英の情熱によるもので、陸上競技では小掛照二はじめ十名の選手をオリンピックへ送った。望月尚夫（沼商↓早大）の功績も見逃せない。野球では久保田喜延の尽力があった。鈴木自動車の上競技は県副会長の鈴木実治郎の力によるものだ。日本軽金属といえは野球とサッカーである。日本サッカーリーグへ進出させたのは松永信夫（藤枝東↓東高師）である。またサッカーにはヤマハの杉山隆一、本田技研の桑原勝義ら若手指導陣がいる。河合楽器の体操は県会長である社長河合滋が本腰を入れている。国産電機社長の小林完（一九〇八

―）は工場内に公認陸上競技場をつくり、社内で奨励したほか、県東部大会の会場を一手に引き受けてきた。長らく県教育委員長の要職にあり、スポーツ振興に大きな役割を果たしてきた。最近高木産業（社長高木一三）が従業員全体のスポーツで成果をあげている。

十 「県民一人一スポーツ」へ

昭和三十三年体育指導委員制度が発足し、その連絡協議会長となった岩崎亀（一八九九―）は「県民一人一スポーツ」を提唱した。三十六年スポーツ振興法が成立し翌年県スポーツ振興審議会が設置され、岩崎はその会長ともなった。沼中↓東農大↓日大（政治学）と進み、県、文部省の教育行政畑を歩き沼農高校長を最後に政界に入った。県議会議長も務め、郷里の裾野市長をこの一月までしていた。ここ二十年來県体協会長佐野嘉吉と気脈を合わせ、「県民一人一スポーツ」を唱導し、県民スポーツの展開と前進にその情熱を傾けてきている。東京オリンピック以後、県の健康、体力づくり運動も進められ、県スポーツ界はあげて「県民一人一スポーツ」みんなのスポーツを志向しているのである。

△参考資料▽

「静岡県体育史」静岡県体育協会、「静岡師範学校六十年誌」同校、「わが青春の日々」上下・毎日新聞社、「静岡県教育史」通史と年表・静岡県教育委員会

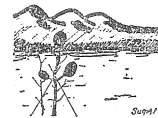
（藤枝東高等学校長）

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

—愛媛県—

佐藤 巖



一 はじめに

愛媛県は、四国の北西部に位し、北は芸予諸島や忽那七島の島々が連なる波静かな瀬戸内海が開け、西は豊後水道のリニア式海岸が黒潮に洗われ、背後地には、四国の霊峰石鎚山がそびえる風光明媚の地である。

古代神話の伝えによると、四国は「伊予の二名島」と名付けられ、伊予は日本最古の「道後温泉」にちなむ「湯」の訛ったものとされている。また、日本書記の六百六十一年（斉明天皇七年）には、「一月十四日、天皇は築紫に赴く途中、熱田津石湯（道後温泉）の行宮に寄る」と記されており、古くから都人たちが多数往来していた様子をうかがうことができる。

県内は地形上、東・中・南予の三つの地域に分けられ、東予地域は、製紙、重工業、タオル等を主産業に燈籠に臨んで早くから工業地帯として開け、海上は瀬戸内海国立公園に属して、多島海の美しさを見ることが出来る。

中予地域は、道後平野に広がる松山市のほか、二市三郡を含める地域で、本県商工業の中心として開けているほか、九州、中国、京阪神への交通の要衝となっている。

また南予地域は、大洲市以南を指し、みかん、酪農、養蚕などの農業をはじめ、林業や漁業を主産業としており、海上は足摺宇和海国立公園区域に入り、宇和海海中公園など南予レクリエーション都市の整備が進められている。

このような、「伊予の国」愛媛県は、輝く太陽と青い海、そし

二 近代スポーツの普及に貢献した人びと

（一）相原正一郎

大正から昭和にかけての本県スポーツを語るには、まず相原正一郎を紹介せねばなるまい。

明治二十五年一月、松山市の近郊重信町に生まれた相原は、大正三年愛媛師範学校を卒業以来、小学校訓導を歴任、つとに体育指導に異色の存在と認められた。

大正十一年旧制松山高学校の体育教官として迎えられ、昭和三十三年まで愛媛大学教授として勤務したが、その間バスケットボール、ラグビー等の近代スポーツの紹介をはじめ、気骨と熱意にあふれた指導は、当時を回想する者に、「汗はじわりじわりと流れ出るものではなく、皮膚面に直角にふき出るものである」といわしめた。体をねじまげ、ねじくれ」と号令した相原式殺人体操の名とともに今も広く教え子に語りつがれている。また彼の発案になる体育界にとつて異色の「相原式マラソン」というのがあった。順を競うのではなく全距離を完走することがねらいで、所要時間は約二時間、コースは一定せず、白鉢巻で先頭を切る御老体の意のままに決定されたが、市内の繁華街に突入し、美しく着飾った御婦人の前では急にビッチがあがったとは、後走者の告白するエピソードである。

また昭和二十八年の第八回国体には、当時六十一歳で炬火の最終ランナーに推されるや流れる油に燃える手を省みず、これを立派に成し遂げたことは、氏の面目躍如たる物語りとしてまた有名である。

て緑のしたたる山を持ち、自然に恵まれた南国らしい明るい県で、県政は、「新しい生活福祉県」の建設を理念として、

・安らぎのある家庭
・調和のとれた社会

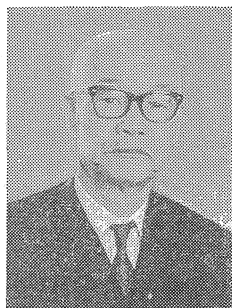
・歴史と文化に浸る風土

・連帯と参加と表現の体制

を基本課題に、県民一人ひとりが、幸せと安らぎと生きがいのある生活がおくれる郷土づくりをめざし、いろいろな施策が推進されている。

スポーツについては、これらの施策を具現し、協調、連帯、調和のとれた豊かな地域社会を建設するため、指導者養成、施設づくり、体育関係諸団体の育成強化等の重点を指向し、また毎団体には全国屈指の大選手団を派遣し、競技力の向上に努める一方、昭和四十九年には白石知事の発起により、県下市町村、一般、企業の協力をえ、基金五億円で財団法人愛媛県スポーツ振興事業団を設立し、県民総参加スポーツ活動の実現を期するため、きめ細いファミリースポーツ、コミュニティスポーツを推進する体制を整備するなど、ユニークなスポーツ振興施策を推進している。

以下過去、現在にわたって本県スポーツの普及発展に貢献し、また貢献しようとする人々を紹介することとするが、人材は多士齊々、きら星のごとく、勉強不足と限られた紙面では、多くの人々を割愛させていただかなければならなかったが、お許しをえてその概要を記述することとする。



相原正一郎

「こんな彼も家庭では、一男二女のよきお父さんぶりを發揮した。それというのも昭和二十年の松山空襲で最愛の奥さんを亡くし、子宝はすべて戦後の生まれであつたからで、かつて、一番小さい子供を連れて未知の病院を訪ねたとき、孫と間違えた医者がかしきりに「お孫さん」を連発するので、さすが強気のお父さんも早々に退散したとかしなかつたとか。

大学退官後も引き続き本県体育界の大先輩として、体育を基底とする人間教育の理想に心魂を注ぎ、総合グラウンドの建設、各種競技大会の開催、体育協会の設立、スポーツ少年団の育成、選手・指導者の育成指導に一意尽力するとともに北条青少年スポーツセンターの誘致にと、終生を信念と体験にもつぎ体育を通しての全人教育に捧げ、広く県民から「愛媛体育の父」と仰がれているところであるが、昭和五十二年二月一日脳血栓に倒れ、教え子の野本病院長の献身的看病のかいなく他界した。行年八十三歳。生前の功績を讃えるものは、愛媛県スポーツ功労賞、愛媛県教育文化賞、勲四等旭日小綬章と数限りなく、逝去に当たり、正五位が追陞され銀杯をうけた。

思えば剛毅、誠実、豪快な先生であつた。

(二) 鶴田義行

えたことを最高の名誉と喜んでいたことなど……やはり鶴田は世界のツルクである。

その鶴田は、愛媛新聞水泳学校の校長先生や、また昨年十月末、松山にオープンした松山スイミングクラブの理事長として、水泳王国愛媛、いや水泳王国日本の再建を夢みているオールドボーイで、昭和三十七年の紫授褒章をはじめ愛媛県教育文化賞、愛媛県スポーツ功労賞、日本水連四十周年功労章など表彰は数えきれない。また、昭和四十三年にはアメリカフロリダにある国際水泳殿堂に永久に「鶴田」の名が刻みこまれ、そのことを無上の光栄と喜ぶツルクのたえず笑みをたたえた銀髪姿には、えもいわれぬ風格がある。まだまだ活躍が期待される得難い指導者である。

(三) 山中義貞



山中義貞

「剣は術にあらず道である。道に精進するには、心と条件が必要であり、剣に志す者は多くを語るな。」と説き、知育偏重といわれる現在の教育環境を根本から問い直すためにも、剣道を含む社会体育、国民体育の振興に一言をもつ山中義貞は、明治三十年父祖代々、文と剣の道をきわめることを家訓とした山中家に生まれ、播磨の頃から厳格なしつけのもと常に竹刀に親しみ、心技の錬磨に励み育つた。かいあって中学三年にして早くも全国大会に出場、昭和十五年に

「ただ今プールサイドを歩いていかれる方は、オリンピック二回連続優勝の鶴田義行さんです。」場内アナウンスにおもはゆい表情でむつとりと歩く鶴田義行。その分厚い肩にスタンドから惜しみな拍手が起る。国体など全国水泳大会でしばしば見られる光景である。

昭和三年、アムステルダムオリンピック二百メートル平泳ぎで、日本水泳界に初の金メダルをもたらした、続くロスアンゼルスオリンピックでも二百メートル平泳ぎに連続優勝、不可能とされていた前人未踏の偉業を打ち立てた日本水泳界で世界に誇れる「水の勇者」鶴田は、明治三十六年鹿児島県生まれ、彼が松山の人となったのは昭和二十二年、時の県水連会長平田陽一郎（現南海放送社長）が、愛媛の水泳強化をめざして名古屋にいた鶴田に、三顧の礼を尽くして引っ張ってきたからである。

その鶴田が、県内の若いカップたちにアドバイスし始めるや、靈驗たちまちあらたか、平田会長の企図はみごと開花結実した。鶴田もまた平田の知遇にこたえ、松山を永住の地と決め、田中守、吉村昌弘ら愛媛から出たことのないオリンピック水泳選手を養成して平田の恩義に報いた。

こんな鶴田は、みずからの栄光を道具に使われることを極度にきらう。それを歯がゆがる人もいる。だが「水の勇者ツルク」が偉大なことにかわりはない。かつて宿敵としてゴールを争った故イルデフォンゾ（比）の孫が、祖父から話を聞いてはるばる日本に鶴田をたずね、また昭和三十九年東京オリンピック女子百メートル自由形で三連勝をとげたドン・フレージャー（豪州）が、ミスター鶴田に会

は全国四人の剣士に選ばれ、御前試合出場の栄に浴すなど前途を属もくされたが、慶応義塾大学卒業後故郷土居町に帰り、県議会議員、衆議院議員を歴任する一方、代々の山中道場をさらに拡充強化して、「鉾石館道場」と命名して広く門戸を地域青少年に開放し、その子弟は常時百名にも及んだという。

戦後は主として財界活動のかたわら、昭和三十六年から十年にわたって愛媛県体育協会会長を勤め、多難な本県スポーツの普及振興に尽力するとともに、県剣道連盟会長として全国のトップレベルにある本県の剣道界を率先指導し、昭和四十二年勲三等瑞宝章、昭和四十三年愛媛新聞社賞を受賞したが、昭和四十三年には、相原、鶴田につづいてスポーツ文化振興への功績により、愛媛県教育文化賞をうけた。

現在は、県体育協会顧問、県剣道連盟会長、南海放送会長として、スポーツ界、財界で活躍する得難いスポーツマン紳士である。

三 本県が生んだオリンピック選手

日本が生んだ水の王者鶴田は前述したが、この鶴田と相前後して、日本体操初参加のオリンピックロスアンゼルス大会に出場、さらに次のベルリン大会には主将として活躍するなど、草分け時代における日本体操界のエースとして出場した選手に武田義孝がいる。昭和四年松山商業を卒業後日体専へ進学した、やせ形の性格温厚な好青年であったが、本格的に体操を始めたのは、昭和六年日体専を卒業し、体育研究所に入ってからだとか。それが翌七年にはオリンピック代表選手となったのだから驚異であったが、当時としてはあり

えたのである。しかし、年若くして病死したため、直接本県の体操を指導することはなかったが、本県の体操界は大きな刺激をうけた。この時代愛媛にあった中等学校生徒を指導し、直接体操競技の発展に關与した者に、田辺義治、星加勇、西谷栄一、篠永忠信等がある。

昭和十一年のベルリンオリンピックには、昭和九年の日本中等学校東西対抗百メートル背泳に三位入賞した門屋桂が、現松山北高校を経て立大に進学の後出場したが、大東亜戦争の決戦場となった沖縄で戦死した。

戦後のオリンピックでは、ヘルシンキ大会に潜水泳法の開拓者ともいうべき田中守（丹原高・早大）が出場したが、エントリ制限で本番出場ならず涙をのんだ。しかし、帰国途中の国際交換大会では泳ぐ都度日本新記録を樹立し、悔しさをうさばらしたのは今に有名である。またウエイトリフティングに監督もコーチもおらず、単身参加した白石勇は、減量に苦しみ、けいれんを起こし残念ながら棄権したが、後の三宅選手らによるオリンピック優勝の貴重な礎石となったことは、本県ウエイトリフティング界の誇りとなっている。

昭和三十一年のメルボルン大会には、水泳二百メートル平泳ぎに吉村昌弘（宇和島東高・日大）、同女子四百メートル自由形の和田暎子（御莊中・奈良五条高）、体操の河野昭（宇和島中・日体大）の三選手が出場、吉村が二位、河野も団体で二位を占め、本県勢で二つの銀メダルを獲得した。河野の外はいずれも県外に在住するが、河野はその後愛媛大学に迎えられ、現在は教授として体育実技



ダルフイロ金メダルを
大会より
ヘン知事
ユ県知事
ミ白石
ク白石
ッ白石
ン白石
オリを
受け

された田口は、百メートル平泳ぎで順調に準決勝に進んだが、泳法違反とされ失格、二百メートルでは予選で落選し、涙をのんだ。奮起した田口は、最後の四百メートルメドレーリレーで自己最高の日本新をマーク、後日のミュンヘン大会に大きな夢をつないだ。

口信教が再度出場、百メートル平泳ぎに一分四秒九の驚異的な世界新記録を樹立して金メダルを獲得、不振を続けた日本水泳陣にとっては十六年ぶりの日の丸で、国民を欣喜雀躍させた。続く苦手の二百メートルでも健闘し、決勝ではヘンケン（米）、ウイルキー（英）に敗れたが、二分二十三秒九の日本新で銅メダルに輝き、みごと日本に期待にこたえた。

また水球にも中野皓司（黄桜酒造）が連続出場して気を吐いた。続くモントリオール大会には、田口が三回連続出場の夢を果たし、女子バスケットボールには門屋加寿子（聖カタリナ高・ユニチカ）が久しぶりの本県女子選手として初出場、五位入賞に貢献した。一方、田口は低迷を続ける日本水泳陣の例外たらず、決勝進出さえも果たし得ず、連続金メダルの夢破れ、帰国後は第一線引退

を講ずるかたわら、愛媛県体操協合理事長として後進を指導する一方、愛媛県体育協会の若手理事として、体育・スポーツの普及振興に献身、地方には得難い第一級の指導者として活躍している。

続くオリンピック東京大会には、本県在住の陸上・片山美佐子（帝人松山）をはじめ、体操・山下治広（宇和島東高、日体大教員）、陸上・山田宏臣（松山市出身、東急）、ボート・山内正勝（松山北高、立大）、カヌー・岡本敬子（川内中・大阪東方二高）、馬術・法華津寛（宇和島市・日本石油）、ボクシング・浜田吉次郎（新田高・近大）、丸山忠行（御幸中・自衛隊体育学校）の八選手が出場した。なかでも体操の山下は団体二連勝に貢献した後、個人総合でも初出場ながら六位入賞を果たし、種目別では得意の跳馬で従来の「山下跳び」にさらにひねりを加えた「新山下跳び」なる「ウルトラC」の妙技を披露して金メダルを獲得した。ローマ大会で、小野喬が鉄棒でみせた「ひねりとびこし」、ミュンヘン大会で塚原光男がやはり鉄棒で演じた「月面宙返り」とともに歴史に残るウルトラC技であった。山下はこの金メダルを記念に後輩の佐野公子と結婚、松田家へ養子縁組みし「松田」姓を名乗り、現在は日体大勤務のかたわら後進の指導に精進している。

昭和四十三年のメキシコ大会には、水泳平泳ぎに田口信教（壬生川西中・尾道高）、陸上走り幅跳び・山田宏臣、ライフル射撃・楠成人（松山工高・自衛隊体育学校）、水球・中野皓司（大洲高・日大）の四選手が出場した。なかでも陸上の山田は七メートル九十三の自己最高で十位に入る健闘をみせ、水球の中野も日本チーム念願の三勝をマークする立役者となった。しかし高校選手で活躍が期待

を表明、後進の指導に専念することとなった。日本水泳界再建のため健闘願いたいものである。

四 各種スポーツの発展

（一）野 球

打ちはつす球キャッチャーの手に在りて

ベースを人の行きがてにする

今やかの三つのベースに入満ちて

そぞろ胸の打ち騒ぐかな

本県が生んだ俳聖正岡子規は、わが国野球草創期に選手として活躍した。その妙味を強調し広く世に推奨、「野球の名づけ親」と称されるわが国球界の先駆者でもある。また、普及振興の功労者で、明治二十二年松山で河東碧梧桐に野球を教えたのが、本県での草分け野球といわれている。

このような土地柄にはぐくまれた本県の野球は、県の代表的スポーツとして発展した。本県勢は中学・高校野球を通じ甲子園での優勝は、選抜大会二回、夏季大会五回を数え、熱狂的ファンならずとも、多くの人々は本県を屈指の野球県と自負してはばからない。また甲子園での球史に残る名勝負は数々あるが、われわれの忘れぬ名勝負は、昭和四十四年の夏季大会における松山商業高対三沢高の一戦にとどめを刺す。三沢太田、松商井上両投手の大投手戦、延長十八回の末、大会規程により0対0の引き分け、再試合の結果四対二と三沢高校を降した世紀の一戦である。

野球するなら

こういう具合にしやしゃんせ

投げたら

こう打って 打ったならこう受けて

ランナーになったらエッサッサ

アウトにセーフにヨイヨイノヨイ

あいこでホイ

こう唄って愛媛の野球狂は乱舞したものである。

なお、プロ野球にも多くの逸材を送っているが、古くは藤本（元阪神監督）、千葉（元巨人）、藤田（元巨人）等々で、現在では南海の新人王藤田（南宇和高出身）、巨人の遊撃手河埜（八幡浜工高出身）等である。

（二） 陸上競技

陸上競技は、まず走ることから愛媛の各地に根をおろしていった。大正に入ってから旧制松山高校、愛媛師範等が陸上競技界をリードし、昭和期に至って私学の済美高女、県立松山高女がこれに加わり、次第に組織的活動を行い、県下のスポーツ全般を支配するまでになった。これらを指導した者は、前述した当時新進気鋭の体育教師相原正一郎、金井滋雄等で、側面から援助を惜しまなかったのが伊予鉄道株式会社社長井上要であった。大正十三年井上は、スポーツ振興のため、道後に野球場、陸上競技場、プール、テニスコート等をもつ、いわゆる道後グラウンドを開設したが、残念戦後は見る影もない。現在の県陸協を支える者は会長・野本清一、副会長・清水宗吉、池内行夫、理事長・兵頭寛等で、社会体育への貢献により野本は藍授褒章、清水、池内はともに文部大臣表彰を受けている。

（三） ウェイトリフティング

本県の重量挙げ競技は、新居浜市を中心に大きく息吹いている。昭和二十一年、日本ウェイトリフティング協会会長である本県選出衆議院議員、小西英雄が普及のため新居浜市にバーベルを持ち帰ったことに始まる。以来現協会副会長・清村義明、理事長・黒川普等の献身的な努力により多くの全日本級選手を輩出した。主な選手は、白石勇、清村義明、黒川普、松垣大、加藤忠吉、明星敬二、森金男、小野正等で、特に黒川は、国体出場二十回、全日本選手権優勝四回、数々の入賞を果たし、五十歳を最後に現役を引退したが、現在は理事長として痛々しいまでに協会の発展と選手の養成に努力し、また新居浜市体育協会会長として市立体育館の建設にも奔走、実現にこぎつけた。地方における第一級の指導者としての誉が高い。

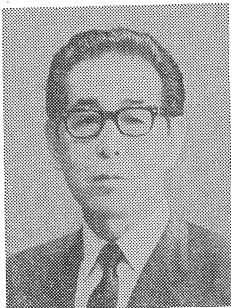
五 愛媛県体育協会の歴史

県民の体育・スポーツに対する理解、関心など世論の支持を背景とした愛媛県体育協会発足までの過程は、明治初年度以降、学校、地域での運動会、演武会、水泳などの隆盛につれ、漸次組織的活動の必要性が認識され、県下各地に大小の体育会、体育協会または体育委員会などが結成されたことにはじまる。

大正後期に入り、当時の松山高専学校長由井實、同校教授根岸和一郎、同校講師相原正一郎、伊予鉄道株式会社社長井上要、県教育協会体育部門の松永詮季等が中心となり、体育協会設立の機運を醸成、その後岩崎一高、加藤彰、仲田伝之助、秋山好古等が発起人となり、大正十三年十月、会長に由井實を選任して正式に愛媛体育

その後県体協は種々苦難の歴史を経、昭和三十六年からは会長に山中義貞（県剣道連盟会長）を選んだが、山中は政財界の経験を十分に発揮し、武道館の建設、北条青少年スポーツセンターの誘致、

総合運動公園の建設に尽力するとともに、懸案であった県体協の法人化を実現して、昭和四十六年には後輩



高橋 士

の高橋士（県スケート連盟会長）にバトンタッチして

大日武徳会教士七段の剣士に似ず、軽妙洒脱な話術と実行力で曲角の本県スポーツ界の取締役としての任をよく果たしている。一方日本体育協会の理事も勤め、折にふれて国にスポーツ省の設置を勧告するなど、競技力の向上と国民総参加スポーツ活動の推進に精力的に活躍する、余人をもってかえ難い英国型紳士の文化人である。

六 おわりに

長い歴史に支えられて発展する本県のスポーツ界は、また同時に多くの指導者や名選手を輩出した。

あの人もこの人もと思いはめぐるが、紙面の関係というよりも、筆者勉強不足のため、多くのスポーツや人物を紹介しえず、単に一部体育・スポーツ史の抜粋的記述にとどまり汗顔の至りである。

なお、文中の人名は簡略を期するため、敬称を略させていたこととお詫びする。（愛媛県教育委員会保健体育課社会体育係長）

協会を発足させた。その後由井会長の転出にともない昭和二年松山高専商業学校長加藤彰が会長に就任、次第に組織活動を行うに至り、明治四十四年に創立された大日本体育協会に加盟手続をとり、承認をえたが、加盟金五十円が財源難から納付できず、除名されるなど波乱はあったものの、昭和七年までは加藤が会長を勤め、以後は時の知事が会長となり終戦を迎えた。

戦後における本県スポーツの歴史は、「祖国再建はスポーツから」をスローガンに、時の青木知事、安井松山市長、愛媛新聞社松本鎮等が中心となり、米軍によって占有されていた堀之内を、スポーツと文化のセンターとしての施設に充当することを条件に返還させたことにはじまる。

このようなこともあり、昭和二十年十月には、鞍懸琢磨を中心とした大日本体育協会愛媛県支部が発足し、レクリエーションを中心に活動したが、県体協も一時中断した活動を再開すべく、時の青木知事を会長に選んで活動を再開した。

昭和二十四年に至り、本県の体育行政面を国家的事業の国体開催によって再建しようと、十二月県議会に第八回国体誘致意見書が上程された全員一致で可決され、昭和二十五年の二月県議会では「国体誘致特別委員会」の設置が可決されるなど国体誘致に大きく第一歩を踏み出した。

昭和二十八年十月待望の第八回国体が、松山市を主会場に四国四県で開催され、本県は秋季種目二十八種目のうち十九種目を実施、堀之内競技場に天皇、皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、一大スポーツ絵巻を繰り広げた。

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史



—秋 田 県—

大 友 康 二

はじめに

一般に呼ばれている「スポーツ県」の定義は、明確ではない。ある人はオリンピック選手の出数で、あるいは国民体育大会天皇杯得点順位で、またある人は、国力がその国のスポーツ興隆に及ぼす影響の多いところから「民力」でと、さまざまな見方がある。最近では、社会体育の充実度を是とする論もあり、スポーツ条件の充足率も大きな意味を持ってきている。

秋田県はスポーツ県を自認している。その理由は、スポーツ県の定義はともかく、国体天皇杯得点順位が主なるものとなる。各県のスポーツ力とも言うべき順位づけがなされるのは、非公式ではあるが、国体だけだからである。第十六回秋田国体での二位獲得以来その後の成績は、八位の入賞二回、最低が福井国体の十七位で、平均十位と十位前後に固定しつつある。もちろん毎年、開催地と天皇杯を争う東京都や、フルエントリーのできる北海道のような、上位県からみれば比較は別になるが、人口百三十万、人口順位では三十一位の小県としてはできすぎというほかない。

現行の国体天皇杯得点計算法には長所短所があり、開催県優先の原則から、開催県はかつては二位に、最近では新潟国体以来ずっと天皇杯優勝のパターンの繰り返しである。しかし、国体開催是非の問題は、「国体その後」の県民スポーツ活動の実践と施設活用の充実であることは、前々から識者により指摘されてきたことである。だ

が、国体が県民のスポーツ向上度と必ずしもマッチしていないことは、国体開催県のその後の国体成績の凋落ぶりを見れば、一目瞭然である。かつての総合優勝の面影いずこ、という例が多い。大会のためだけの施設、華美な運営、ジブシー選手等、国体に対する批判の多くはこうした現象についての反省が大きいと言える。

「国体その後」という観点にたてば、秋田県の天皇杯成績の安定したランクは、まことに目さましい。その安定したスポーツ土壌から多くの名選手の輩出も、むしろ当然ということになるか。最近のオリンピックでも東京オリンピックに十四人、メキシコに六人、ミュンヘンに八人、モントリオールに十人、しかも金メダル獲得者も多い。この見方からすれば、秋田は明らかに全国有数のスポーツ県ではないかとの自負が生まれてくる。

秋田のスポーツは、ではなぜ強いのか。

ラグビー王国・体操王国

見渡す限り重くのかかる灰色の空、来る日も来る日も、止むことなく降りしきる雪、強い風。北国秋田を覆う暗い季節は長くきびしい。雪に耐え、雪と戦う生活環境は、いつしか粘り強い県民性をつくりだすのであろうか。内向的、保守的、後進的地域の特性は、秋田のスポーツとしてラグビーと体操に開花する。

秋田といえば、すぐラグビーを思い出すほど有名になったラグビーは、どのようにして強くなったのであろう。大正十二年三月、秋

田運動倶楽部が池田徳治（元秋田県知事）を中心にして発足した際、旗上げとしてとりあげた種目がラグビーであった。市内に秋田鉱山専門学校という好敵手があり、練磨しい、その影響が中学校に及びチーム校が増加した。しかし、秋田がラグビー王国と呼ばれるようになったのは、秋田工業学校の活躍による。秋田のラグビーは、そのまま秋田ラグビーの歴史といえる。

昭和二年、秋田工業に赴任した鎌田徳治（明治三十五年五月二十日生）昭和四十一年四月三日没）の指導は、全くのスパルタ式であった。グラウンドに出る同氏の手には常にボブラの杖が握られており、選手達は練習にでると、まず最初にグラウンドの棒切れの整理をしたほどである。祝祭日でもモーニングを着たままグラウンドに出て、タックル・セービングがうまいかないと、「もう一度、もう一度」と気合いを入れ、たまりかねてモーニングのままタックル・セービングをやり泥まみれで帰ったこともある。この強烈な指導が実り、県内の秋田中学、秋田師範を制し、全国大会では宿敵京城師範と四度目の対決で、昭和九年遂に劇的なベナルティゴールで破り、全国初征覇を遂げたのである。昭和十二年第十二回全国中等学校ラグビー大会出場以来、二十八回連続出場の偉業等を



鎌田 徳治

範と四度目の対決で、昭和九年遂に劇的なベナルティゴールで破り、全国初征覇を遂げたのである。昭和十二年第十二回全国中等学校ラグビー大会出場以来、二十八回連続出場の偉業等を

はさんで、全国征覇十三回という不滅の大記録をたてた秋田工の伝統スポーツの育ての親は、鎌田徳治の力による。毎年の全国大会出場場で、正月は大阪の宿で迎え、十年間にわたって一度も自分の家で正月をしないというのもすさまじい。鎌田徳治は昭和十四年、十年連続全国大会出場、全国優勝二回の金字塔をたてて秋田工を去る。そのあと武田兼治（本県初代体育課長）を経て、秋田工OBの高桑栄一を迎える。

高桑栄一は、昭和五年鎌田徳治ひきいる秋田工ラグビーチームのスリークォーターバックスとして活躍、東北・北海道予選会決勝の北海道中学との試合で、右肩骨折のまま奮戦、一トライをあげラグビーマンと称讃された男である。秋工・東芝を経て戦後母校に勤めた。彼の指導は鎌田・武田の秋田工ラグビーの伝統を受けつぎながら、徹底して教育的なところに特徴がある。試合は勝つことが目的である。しかし勝つのは練習量のみではなく、すべて日頃の積み重ねであり日頃の生活態度の表われなのだという彼の哲学は、徹底して私生活の指導と、精神教育に終始した。ラグビーマンは、どこに出てもちがいのない人間であらねばならないという信条の裏りは、育ての親の記録を着実に伸ばし、彼の時代に全国



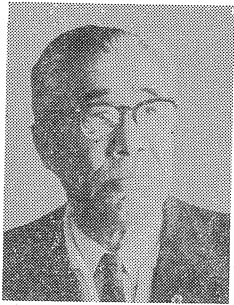
高 桑 栄 一

に伸ばし、彼の時代に全国

優勝十一回という栄光を樹立する。研究心も人一倍熱心で、雪国秋田のハンディーを克服するには、積極的、効果的に雪を利用することだとして、雪の中を走らせ、足跡の形を見ての走り方の指導や、深雪から足を抜くことによる腰の強さの鍛えなど、中央に負けない独自の練習法を編みだした。一方、地方のハンディーをおぎなうために、中央との交流を重視し、生徒の家庭をまわり、もともと進学校でない秋田工業高校の生徒の進学をすすめて、進学した先輩が、中央のレベルを吸収するという形で、自然に秋田工業と中央との交流が行われるよう努力を重ねたのも目につく。

* * *

ラグビーと並んで「体操王国」としての秋田の実績も輝かしい。ラグビーと異なり、体操は屋内競技とはいえ寒冷地、雪国むきの競技ではない。その体操で小野喬、遠藤幸雄等数々の好選手を生み出したのも偶然ではない。日本の体操はヘルシンキオリンピックで一躍脚光をあびる。その主役が秋田の鍋谷鉄巳（東京教育大学・慶応大学・大丸東京店）と小野喬（能代高校―東大―慶大―池上スポーツクラブ）である。二人ともシベリヤおろしの強い風の吹く日本海岸能代市の能代中学の出身である。その能代中の体操を育てたのが、太田口政治（明治三十二年生）昭和四十八年没 元県体協副会長）である。太田口政治は大正九年秋田師範を卒業、小学校勤務を経て能代中に奉職。赴任した太田口政治の担当クラブは陸上競技と体操。陸上競技の練習はさつと切りあげて彼は体操へ。だがもとも



太田口 政 治

と柔道出身の太田口に体操のわかるはずはない。他の競技と異なり、体操の指導は誰にでもできるものではなく、体を通した者でなければできない技能の獲得を、彼はスパルタ式に鍛えあげた。暗くなった体育館のとび箱には、チークを白く塗る、選手は泣き泣き赤く腫れた手豆で、鉄棒にすがりつく。体育館のすきま風は冷たく鉄棒は氷のように冷え、下級生は懸命にこすって温める。体操を知らない太田口は傍らで、大声で宙返りの指導でも「離せ！ 回れ！」と叱咤激励する。「離せ、といわれても、どこで手を離れたらいいのか、どう体を回転させたらいいのかわからなかった。」とヘルシンキオリンピック候補だった三田元悦（現本県保健体育課長）は回顧する。スパルタ式だけがも多かっただけに太田口は技能の指導を、中央から東京文理科大学の岸野雄三を招いてマスターさせ、鍛えあげた。

そんな厳しい指導でも、生徒がついていったのは太田口の人柄である。練習が終わると馬面一杯が口になるほど笑い、わが子のようにかわいがる。いい親爺だったと教える子は異口同音。当時の能代中では何度かストライキがあったが、太田口が説得に行けば、生徒は一言もなくスト中止。生徒の信望は絶大であった。

選手。遠藤幸雄は東中一年から感恩講児童保育園へ。体操技能を惜しまれて秋田工へ入学。食糧難の当時「ほかの子は白米の弁当で、僕だけはサツマ芋」。施設から通った彼の苦しみは誰も知らない。語る彼の目は赤く光る。秋田工では体操はもちろん、学業も二番とくならず、東京教育大学へ進学。小野の後をひきついだるように全日本チャンピオンとなり、初のオリンピック個人総合優勝を果たす。彼にとって体操はハンダグリーススポーツであったといえる。苦しみに耐えた者だけが知る強さを持つ。

その他のスポーツ

△陸上競技▽

戦後の沈滞した国民のムードが、水泳の古橋、橋爪の活躍で明るい希望を持つことができたように、秋田のスポーツ界にはポストンマラソンでの山田敬蔵（同和鉱業・ワシントンホテル）の優勝が大きな影響を与え、士気を鼓舞した。期待されたヘルシンキオリンピックの大会では、小幡に逆風を受け実力以下の成績に終わっただけに、ポストンでは精進よく走り、二時間十八分五十一秒という世界最高記録で優勝、日本唯一の世界記録を飾ったのである。その大活躍を讃え、地元大館市で開催されている山田記念マラソンは、二十四回を数え年々盛会をきわめている。この山田が県陸上界オリンピック出場の二入目であり、トップを切った者に佐々木吉蔵（元文部省運動競技課長―現日本体育大学教授）がいる。

昭和十二年、全日本中学校大会で、一部能代中、二部秋田工と揃って優勝、それが体操王国のはじまりとなる。太田口教室からは佐々木史朗（能代高―東教大―能代北高教員）・佐々木繁の兄弟、鍋谷鉄巳、三田元悦、富浪良夫（現堺市大浜体育館長）、小野喬等の名選手がでた。能代高も第一回京都国体で優勝、個人戦でも、鍋谷、小野、富浪と三位までを独占。さらに記録すべきことは、戦後のインターハイで能代高が三十年から全国優勝を七回なしとげていることである。これも太田口の播いた種の結実といえよう。

小野喬、遠藤幸雄（秋工―東教大―日本大学）。秋田の生んだ体操の金メダル組の少年時代は恵まれていない。小野は父を亡くし、遠藤は孤児として施設育ち。小野は教員の母に育てられて努力。能代中の体操に恵まれた環境で大成。器用ではないといわれているのは嘘。運動神経は抜群。努力も実を結んで昭和二十七年全日本で優勝、以来オリンピック出場連続三回、世界的に「小野に鉄棒」として有名となる。特に東京オリンピックでは日本選手団の主将として、また宣誓者として晴れの舞台を踏んだ他、痛み止めの注射を打ち男子体操陣の金メダルに貢献した記憶は生々しい。奥さんは小野清子（秋田北高―東教大）で東京・ローマオリンピック



小 野 喬

て、また宣誓者として晴れの舞台を踏んだ他、痛み止めの注射を打ち男子体操陣の金メダルに貢献した記憶は生々しい。奥さんは小野清子（秋田北高―東教大）で東京・ローマオリンピック

佐々木は戦前、ロサンゼルスオリンピック、ベルリンオリンピックの名スプリンターであり、東京オリンピックでは名譽ある百米トールのスターターとなる。著書「ヨイ・ドン」にはスポーツマンをひきつける魅力があり愛読者も多い。日体大教授として、奥深い説得力のある講義、端正な風貌は学生の信望を一身に集めている。文部省当時行政官としてスポーツ振興法の作成等、新しい社会体育に眼をつけた慧眼も高く評価されている。その他、明治神宮大会で優勝した山方甚一郎、蒲田久之助、柴田忠一郎（現県議）、国体では高橋慶治、高橋実、鈴木重晴、大倉富士男、伊藤勝悦、伊藤匡光、中川衛、藤島俊和、鎌田俊明の名が光る。

△スキー▽

スキーの歴史は、雪国だけに古い。明治四十三年永井道明という人が体操講習に來て試乗したのが始まりといわれる。明治四十五年、時の知事森正隆が特に雪国スキーの奨励を県訓令をもって呼びかけたというのも珍しい。スキーの発展はスキー王国新潟県より若干早く、新潟のスキーが軍事訓練から出発したのに対し、秋田のスキーは最初から体育としてスタートしたのも特徴となる。昭和三年全日本学生スキーで神沢謙三が複合で優勝、六年明治神宮大会で武田のり子がスラロームで優勝したが、秋田のスキーが全国的になったのは昭和九年で、この年の神宮大会の二部で総合優勝してからといえる。その後、秋田林友（秋田管林局の競技団体）、尾去沢鉦山、小坂鉦山等の各企業等が力を入れたことも因となり、県内のスキー

は急速に充実した。

多くの名選手の誕生をみたが、選手づくりでは入江種友（横手一中―日大―羽後高校教員）の右に出る者はない。湯沢北高校時代に育てた高橋弘子（大東文化大学―北野建設）、石川きぬ子、照井美喜子（日大―生保内中学教員）は特に有名で、高橋、照井はオリンピック選手として、また国内では長距離の女王として、それぞれの時代を築いた。

高橋弘子は湯沢北高を卒業後湯沢市役所で勤務。勤務の傍らの練習では不足と大東文化大に進学、腕を磨く。秋田・岩手の親睦を兼ねる奥羽横断駅伝では、湯沢クラブの選手として紅一点で走り男子顔負けの活躍、スキーに備えての足を鍛える。その根性が実り、高校三年で女子距離で初優勝して以来、競技生活十二年、この間オリンピック、世界選手権等国際競技会に四回日本代表として出場、国内でも金日本五キロ・十キロに十二回、国体四回、全日本学生三回優勝という他の追従を許さぬ、みごとな成績を残している。

この高橋を四十三年の全日本選手権十キロで、一分の差をつけ優勝したのが、中学三年生の石川きぬ子である。阿仁第二中学校で全県優勝した石川は、入江監督にスカウトされ入江宅に泊り、高校一年でホルメンコーレン遠征、高校三年インターハイでリレー優勝、田沢湖国体でも高橋と組んで優勝、個人二位と大活躍。しかし、石川のシュプールはここで切れる。進学できない家庭の事情がある。父は営林署の保安要員で出稼ぎ同様、母と妹は病弱。石川は

自ら進んで米内沢総合病院の看護護学校に入り、好きな道、栄光の道を断つ。現在、家にあつては母の看護、病院では昼夜交代勤務制、かつてあこがれたオリンピックとは何の関係もない。

一方、男子でも秋田営林局黄金時代の中心選手、角昭吾がいる。藤枝昭三、角幸造、菅生裕市、角昭吾と並んだリレーチームは、全日本選手権で史上に残る天皇杯五連覇の偉業をとげており、角はスウェーデンの世界選手権にも出場した。多少古くなるが、第三回冬季オリンピック・レックブラシット大会に谷口金蔵が出ている。最近では成田耕治（小坂高校―日大）がブレ世界選手権等に二度出場しているが、いずれも距離の選手であり、秋田が距離王国と呼ばれるのも無理はない。その他、今野仁五郎、菅原サカ、村上吉五郎、平泉ノブ、小林嘉雄、江村豊子、上野満、児玉兵一、森公夫、吉沢広司、遠藤徳義、桜庭隆夫、根本むつみ、小野垣宏子、佐藤有一、竹田幸博、成田忠夫、大井英利、細川洋等、全国優勝をとげた名が残る。

ハレスリング、ウエイトリフティング、フェンシング

スポーツ秋田の国体天皇杯得点の多くは、この三種目にスキー、バスケットを加えたものである。スポーツ普及の歴史からみれば、比較的遅く誕生したこれらの競技が、どのようにして秋田に入り、ポイントゲッターともいえる役割を果たすようになったのだろうか。

レスリングの創立は昭和二十四年、早稲田大学OBで国際試合の

経験を持つ小玉正巳（早大―小玉合名会社）を中心に発足した。粘

り強さと根性を身上とするこのスポーツは、秋田の地域性に合致するのであろうか、関係者の努力も実って三十年には個人で、三十一年には秋田工が国体全国優勝するなどめきめきと腕をあげた。小玉合名や帝石秋田など、企業にも優秀なクラブの定着を見、名実ともにレスリング王国が誕生したのである。めばしい選手をあげると、

東京オリンピック七十八キロ級で五位の佐々木竜雄はその後、メキシコ、ミュンヘンにも出場、ミュンヘンではベテランの味を生かして八十二キロ級で第五位。世界選手権の五十七キロ級では柳田英明が二連覇、ミュンヘンオリンピックでは堂々金メダルを獲得した。オリンピックにはこの他、茂木優（モントリオール）、石田和春（ミュンヘン）、菅原弥三郎（モントリオール）がいる。国際的選手としては、菅原正夫、池田実、高橋征夫、天野準衛、伊藤正勝、大淵康治、柏崎正毅、妹尾武三郎、伊藤勝春、原田政光、谷村正春、斎藤勝彦、三戸豊治、佐藤幸雄、安田武美、伊藤良和、二田隆、菅原陵治、小柳美代志、堀井健一、畠山仁美、宮原章、佐藤勉と多士彩々である。

ウエイトリフティングの歴史はさらに浅く、昭和三十年である。

秋田国体に備えて大野米蔵、小川準三（元秋田高校教員、昭和四十九年二月三日没）等が中心となり、わずかの人数で発足。強化策のひとつとして当時法政大学主将だった小林努（法大―県立体育館）を招き技術指導をさせたこともあたり、小世帯ながらチームワーク

のよさで、バーベル秋田の基礎ができた。東京オリンピック

での最初の競技であり、はじめて日の丸をあげた銅メダルの一関史郎（法大―牛島小学校職員）が印象深い。国体では和歌山国体を皮切りに種目天皇杯五連覇の輝かしい成績を納めている。上記一関史郎をはじめ白川賢一、藤原富秋、桜庭喜七郎、夏井武美、熊田孝夫、斎藤久治郎、安保重明、小松秀海、夏井文弘、山谷薫、下坂義昭、椎名彦晴、嵯峨光男、戸松実、小野弘等が知られている。

フェンシングはまさに泥縄的に秋田国体開催の前々年の三十四年に奈良泰夫（元毎日新聞秋田支局長）、佐々木信勝（二ツ井高校教員）等の奔走により発足、秋田国体では総合七位に入賞、昭和四十一年秋田開催のインターハイで完全に秋田に定着した。この大会で二ツ井高校（男子）、聖霊高校（女子）がともに準優勝、それがきっかけとなり爆発的な強さを発揮、国体でも他種目を尻目に、三重、佐賀と二連覇の躍進を続けている。モントリオールオリンピック選手の鎌田弘子をはじめ、国際経験豊かな小山悦子、小玉和成、大塚清等粒ぞろいである。

活躍の人々

第一回柔道世界チャンピオン夏井昇吉。夏井は秋田工業でラグビー選手。雪中での腰の鍛えが柔道に役立ったという。八段、県警機動隊長。

能代工業高校バスケット二年連続の三冠王の指導者加藤広志（能

代工―日体大)、緻密な計画と選手の自主性を尊重。オールラウンドの選手づくりをめざす。勝っておごらず謙虚。勝利の感想は常に「いい選手がよく動いてくれたからです。淡々と選手をたてる。その姿勢、そのマナー、悟りの人である。

卓球世界チャンピオンの木村興治(秋田高―早大―ゼネラル物産)、四回転ハンマー投げの菅原武男(花岡工業高校―中央大学―リッカーミシン)、オリンピックポートの伊藤次男(本荘高校―中大―秋田県庁)、女子バドミントン世界選手権優勝の横山満子(敬愛学園高校―帝國石油)、サッカーの藤島信雄(由利工業高校―日本網管)、足利道夫(秋田商業高校―三菱重工)、平沢周策(秋田商―日立製作所)と国際的選手は名まえだけに止めておきたい。プロ野球では「日本一の阪急」の山田久志投手(能代高校―阪急)を筆頭に元巨人の菅原勝矢(鷹巣農林高校―巨人)、篠内政雄(能代高校―日本ハム)等多く、相撲でも横綱をはった照国(伊勢ヶ浜親方)、相撲の神様といわれた幡瀬川、若の花を育てた大の海(花籠親方)等いるが別の機会としたい。

普及の父、人見・大野のコンビ

スポーツ秋田の急速な普及と競技力の向上、生活スポーツの定着・実績にはそれなりの理由がある。スポーツマンは単に自分だけ、あるいは自分の競技・協会だけに努力をするわけではないが、全力を尽くせば尽くすほど、他に向ける力が不足するのでもまた現実で

会東北ブロック代表理事、評議員ともなり、中央でも信頼が高い。

この人見を補佐し、秋田のスポーツの基盤を確固たるものにしたのが大野米蔵といえる。実践力・行動力豊かな彼は、大正二年に生ま



大野米蔵

れ、秋田師範を卒業、成城大学を経て役所入り、昭和三十三年保健体育課長、県体協理事長となり、縦横無尽の活躍をする。人見とのコンビを組んで、秋田国体の誘致開催はもちろんのこ

と、「国体その後」の堅実なプランも誘致前から既に計画済みであり、運動広場、学校プールの年次計画の樹立や県立体育館建設実現など、力をそそいだ。特に全国にさがけて、市町村へスポーツ主事の設置という画期的構想を打ち出し実現をはかり、全国の注目を浴びるとともに、社会教育主事(スポーツ担当)設置運動に一石を投じたことは高く評価されている。また野外活動の重要性を認識し、早くからユース・ホステル運動の推進や、田沢湖に野外活動とスポーツの殿堂としての青少年スポーツセンターの建設を行うなど、「国体その後」が一躍、「スポーツ県」としての地位を獲得する原動力となったのである。仕事に向かえば鬼ではあるが、野人でものにこだわりを残さぬ魅力は多くの人に慕われている。人の面倒を見ることが好きで、自然に大野一家というべきグループができ、彼

やむを得ない。秋田が他県に誇り得る活動のできたのは、コントロールタワーともいうべき組織が完全にでき、しかも有効適切な指導活動をしていたからに他ならない。そのタワーとは秋田県体育協会であり、会長の人見誠治と理事長の大野米蔵の働きである。



人見誠治

人見誠治は大正四年秋田市に生まれ、秋田中学を卒業後秋田魁新報社に記者として入社。以来スポーツを担当、スポーツ記者として未開の分野を開拓、その健筆は紙上を飾るたびにスポーツファンを増やした。社長となっても、紙面をスポーツ欄に大きくさき、地方紙では見られない豪華なスポーツ記録紙ともいべき編集をしてスポーツマンをよろこばせた。昭和二十五年に秋田県体育協会会長に就任してからは、総合的なスポーツ発展を計画、秋田国体の誘致・開催、国際的大会の開催、優秀選手の育成等、大きな成果をあげた。しかも県スポーツ振興審議会々長、県教育委員長、全国新聞協議会々長、芸術文化団体連盟会長等幅広い活動と多くの要職を兼ねられたのも広い意味でスポーツの発展につながったといえる。子どもに恵まれないせいもあってか、選手たちを特にかわいがり、国体等で試合の激励にまわると、ポケットから大枚を出してがんばらせるのが常であった。昭和三十六年以来、日本体育協

の手足となり大野を助けるのも人徳といえようか。彼の口癖に「俺がやらなきゃ誰がやる、今やらないでいつできる」というのがあり、部下はこのことを体して鍛えあげられる。指導力の豊かさは他に比がない。

人見・大野のコンビは、ここ二十年余の秋田のスポーツの変革に顕著な役割を果たした。日体協、文部省、全国各県に知人の多いのも見逃せない理由の要因ともなるが、歯車のごとく、二人がそれぞれ役割を自覚して推進してきたことは語り尽くせない大きな功績である。人見は県文化功労賞、藍綬褒章等、大野が教育功労賞、文部省の社会体育功労賞等多くの栄誉に輝いているのもむべなるかなである。

秋田のスポーツのひとつの時代は終わる。全国にさがけての体育協会の法人化等常に前向きだった姿勢が、今日からどのような変革とたしかな歩みを遂げるのか。先人の築いた栄光輝やく積み重ねの歩みをどのように今後に生かしてゆくのか。秋田の体育人の使命は重いが、若いスポーツマンたちは、まなじりをあげてあすのスポーツ風土づくりに燃えていることを告げて稿を閉じたい。

― 限られた誌面と、重点的な人名のとりあげ方という編集者の意図もあり、多くの方々に割愛せざるを得なかったことをお詫び申しあげる。―

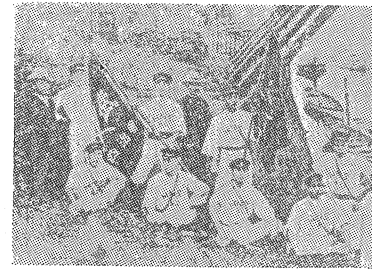
(秋田県教育委員会保健体育課主任指導主事)

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

— 広島県 —

横手 三千雄



広島師範漕艇部（明治40年）

広島県民は、スポーツ愛好者が多い。瀬戸内海に面し、温暖な気候風土に恵まれているというスポーツに適した本県の自然的条件と、進取の気性を持ち、何事にも熱し易い広島人気質という条件がわが県を全国屈指のスポーツ県たらしめて今日に至っている。

明治初期からわが国に少しずつ伝わった近代スポーツは、明治末期、大正前期につぎつぎととり入れられた。この播らん時代以来、それが結実開花した大正後期、昭和初期を経て今日まで広島県のスポーツ界は、多少の浮き沈みはあるが全般的に眺めて全国水準に達していた。全国水準に保たれてきた種目としては、陸上競技、水泳、サッカー、バレーボール、野球、ホッケー、ソフトボール、軟式庭球、卓球、ラグビー、バスケットボール、柔道、体操、弓道が挙げられる。

本県におけるスポーツの普及発展は、他府県同様学校が中心であった。東京高等師範学校を卒業し、広島師範学校、広島高等師範学校、各中学校に赴任した先生によって輪がひろがっていった。

広島県のスポーツで初めて全国大会に優勝したのは漕艇競技である。

広島でボートが始められたのは明治中期で、海と川に恵まれていたことから広島師範、広島

中学、修道中学、明道中学、広島商業学校、仏教中学（現崇徳高校）忠海中学、広島高師、広島高等学校などであった。そして明治三十四年には第一回の競技会が宇品市で開かれている。

この中で広島師範は、明治三十九年の第六回全国中等学校競漕大会（大津琵琶湖）で初優勝、その後も、四十年、四十二年、四十四年、四十五年と七年間に五回優勝を飾り、「琵琶湖の覇者」として天下にその名を高めている。以下は五種目の歩みの一こまである。

陸上競技

昭和三年（一九二八年）八月二日、アムステルダム陸上競技場に「ナンパーワン、ミキオ・オダ、ジャパン」の放送が場内に響いた。わが国オリンピック参加史上初の実績が、郷土が生んだ織田幹雄選手であった。広島郊外、安芸郡海田小学校の校庭に高さ十五メートル二十一センチのポールがたっている。地元出身の織田選手が世界一になった三段跳びの記録をポールの高さで示し、その栄誉を永遠にたたえているものである。オリンピック参加四回目で獲得した栄光は、広島県民のみならずわが国民に感動と希望を与え、日本陸上競技の夜明けを告げた。

織田選手が陸上競技を始めたのは広島第一中学校三年生からである。アントワープオリンピック選手であった野口源三郎を迎えて陸上競技の講習会が開かれた。体操の宇佐美先生にさそわれて沖田芳夫氏（アムステルダムオリンピック選手）らとこれに参加し、最終日、走り高跳びに素足で一メートル五十九センチを跳びみんなをあっという間に驚かせたということである。

五年生で主将となり神戸高等商業学校主催の全国大会に参加し、走り高跳び、走り幅跳びで優勝、三段跳びで二位、投てきの沖田選手、長距離の貫田選手の活躍で優勝している。

広島一中を卒業し、広島高師教員養成所に在学した二年間に第六回極東大会、第八回オリンピック・パリ大会に出場し、極東大会では走り幅跳び、三段跳びで優勝、走り高跳びで三位、またパリ大会では三段跳びで六位に入賞し、日本、アジア、世界の織田へと成長した。パリ大会の翌年早稲田大学に入学し、アムステルダム大会で優勝したのである。大正末から昭和初期にかけて走り幅跳び四回、走り高跳び一回、三段跳び七回、十種競技三回、四百リレー三回と年度別国内最高記録を保持していた。

広島に陸上競技のレールを敷き始めたのは、明治四十二年に広島師範に着任された河津彦四郎先生であった。先生は、陸上、水泳、球技に通じた万能選手で、その手ほどきを受けたのが多田徳雄氏（大正八年、第四回極東大会陸上兼水泳日本代表、後記バレーボールの節参照）を中心とした生徒達であった。多田氏も万能選手で、師範卒業後小学校に勤務のかたわら、大正十年に神戸高商にゆかれるまで、陸上競技の普及に貢献された。大正十年、織田選手を教えた東京高師の野口源三郎先生を迎えての陸上講習会で広島陸上競技界も軌道にのった。

この間広島青年団の方たちによって次第に盛んになり、大正十一年には広島高師の杉浦卯三先生を会長にした「アスレチッククラブ」が誕生し、呉市でも「オリンピッククラブ」がうぶ声をあげて各選手がぞくぞくと輩出していった。

織田選手が三段跳びで優勝した第九回アムステルダム大会の投てきに沖田芳夫（広島一中卒）と住吉耕作（呉第一中学校卒）が参加している。沖田選手は一中時代全国大会砲丸投げで優勝し、早稲田に進んでから、織田、南部らとともに早大の黄金時代を築き、第六、七、八、九回極東大会、第九回オリンピック大会の代表選手、第十、十一回大会にもコーチとして選ばれている。

住吉選手も第七、八、九回の極東大会、第九、十回のオリンピック大会の代表選手、十一回大会にコーチとして参加している。

また第六回極東大会の代表岩井勝治（広島一中卒）、浅岡信夫（呉一中卒）、第八回の高田静雄（広陵中学校中退、故人）、第九回の菅沼昇（呉一中卒、もと広島大学福山分校教授、故人）ら本県出身選手の投てき陣の活躍はめざましいものであった。

第十一回ベルリンオリンピック大会の選手高田静雄は広島で生まれ生涯広島を離れなかった砲丸王であった。昭和二年から十年までに六回日本選手権で優勝し、十七歳のときから二十余年日本記録保持者であった。不幸にして原爆の洗礼を受け、五十四歳で生涯をとしたが晩年はカメラに興味を持ち、鈴峯女子高校のハードル選手橋本光子さんをモデルにした「準備運動」をローマオリンピックの芸術競技に出品し入賞した。

本県陸上界に女子選手が姿をみせたのは大正末期ごろである。織田選手の妹みさ子さんが県立高等女学校で始められた。昭和二年、青年団で活躍していた堀山忠夫氏（故人）が山中高等女学校のコーチになって選手の育成に当たった。そして本県出身で国際大会に出た第一号選手となったのが石津光恵である。石津選手は昭和六

年、第六回明治神宮体育大会で、砲丸投げ、円盤投げで優勝し、翌年のロスアンゼルス大会に沖田コーチ、織田選手（主将）、住吉選手らと代表選手に選ばれた。大会二日目にやり投げに出場、三十三メートル八十一で第八位、円盤投げは三十三メートル七十二で第七位と、あと一歩力不足で入賞をのがした。

昭和六年には、箱根駅伝につぐ古い歴史を有する福山く広島間の中国駅伝が開催され、今年（昭和五十二年）は第四十四回大会であった。わが国の長距離ランナーは、戦前戦後を通じてほとんどの選手がこの大会に参加している。

広島県の陸上界は、増西春三（現会長）、藤野良一（現副会長）、海部恵一郎（現副会長）、倉西胖（現副会長）、遠藤伝右衛門（現理事長）の各氏は共に現役時代活躍した選手であり、各役員も多士済済である。日本体育協会事務局長の千葉久三氏、日本陸上競技連盟の高橋進、小掛照二の両氏も本県出身である。

水 泳

織田静雄選手が郷土が生んだ陸上のホープなら、水泳では、わが国の黄金時代を築いた第十回ロスアンゼルスオリンピック大会で三本の日の丸をひるがえし、県民の期待にこたえてくれた修道中学校卒業の三人トリオが輩出している。

その選手は、昭和四年卒業の河石達吾、六年卒業の大横田勉、七年卒業の河津憲太郎の三選手である。

河津選手は、自由形百メートル、予選三位、準決勝一位で決勝に進み、五十六秒六のオリンピック新記録で第二位、銀メダル。自由

形四百メートルの大横田選手は、予選二位、準決勝三位、決勝では、四分五十六秒二、オリンピック新記録で第三位、銅メダル。河津選手は百メートル背泳、予選、準決勝、決勝共に三位。修道中学出身の三人がそれぞれメダリストの偉業を樹立している。

同じロスアンゼルス大会の水球競技にも三人の選手が選ばれて参加している。

広島一中卒の松本隆重選手はゴールキーパー、同じく一中卒の藤田明選手（現日本水泳連盟会長）と広島二中卒の土井修爾選手は共にフルバック、日本チーム守備陣は本県出身で固められた。初出場のこともあり、世界の壁は厚く五か国参加で零勝三敗。ブラジルの失格で第四位であった。

ロスアンゼルスで三人のメダリストを生んだ修道中学は古い歴史をもっている。

明治四十四年七月二十一日から佐伯郡廿日市町地御前の海浜で、大正三年からは安芸郡坂町横浜の海岸で、臨海訓練が行われている。生徒を寝泊りさせて水泳訓練をしたいから協力してほしいと横浜小学校長に申し込みをした。この校長が、ベルリンオリンピック百メートル背泳で六位に入賞した坂町横浜出身（修道中学卒）の児島泰彦選手（戦死）のお父さんである義雄氏であった。

昭和五年には水泳部が合宿し大横田選手も参加している。この影響を受けて地元の谷花玉三さん（坂町在住）は横浜学童会をつくり、少年達を指導し、姫宮宣雄（元県水泳連盟理事長）、前記児島選手ら多くの水泳選手が育っている。メキシコオリンピックで最年少で日本代表になった竹本ゆかり選手も坂町出身である。

大正六年には、広島本川の川口から宮島の長浜まで大遠泳が行われ、午前十時十分にスタートして夕方六時まで十九名中十七名が完泳している。

大正八年には広島高師主催の近県水泳大会が開かれたが、これがわが国における対抗水泳競技会の最初とされている。勿論プールがあったわけではなく向字品の海上に舟を浮べ、いかりで固定した丸太棒が競技場であった。

このころ広島市内を流れる太田川の七つの支流、三次の江川、坂町横浜、江田島の小用など広島湾一帯が天然プールであった。

太田川支流の猿俣川の栄橋付近は広島競泳の発祥の地といわれ、大正の終りごろから学童の水泳大会が行われ頼も子も先生も熱をあげていた。

広島が生んだ競泳の第一人者は前記多田徳雄で、このあとをついだのが佐竹孝である。

佐竹さんは修道中学から早稲田に進み、元県水泳連盟理事長・選手強化委員長、現顧問で第七回極東大会の日本代表選手である。



佐竹 大正十年、修道中学二年生の時、東京から帰った先輩にクロールという泳ぎ方があることを聞き向字品の大会で自由形五十メートルに参加し、はじめてクロールを試みている。抜手とちがいほとんど顔をあげないので息がつまるのではない

かと観衆が見守るなかで二位以下に大きく水をあげてゆうゆう優勝している。

その後、クロールは清水みのる（呉市在住）、旧制広島高等学校の学生村上弘さんらによって本格的になっている。

また佐竹さんは背泳もクロール同様の泳ぎ方で試み、これが今日の背泳と一致している。

大正十三年、修道中学六名の部員と大阪築港プールで開催された西日本大会に出場し、百メートル自由形で第一位、二百メートルリレーで第二位、参加四十九校中第四位になり、秋に開かれた第一回明治神宮体育大会に県代表として参加し自由形八百メートルで第四位となった。早稲田に進学しマニラの極東選手権大会では、千五百メートルで第二位に入賞している。現在も本県水泳界発展に尽力されている。

修道中学は第二回大阪大会で初優勝、昭和二年にはプールが完成、河石選手らの活躍で三連勝、第一期黄金時代を築いている。

昭和七年、八年にも優勝し、東西対抗でも東部中泉農業学校に百二点対六十三点の大差をつけ、翌年も名門静岡の見付中学を二十八点差で破り連勝している。

野球が広島中学時代より、本県の早慶戦といわれている広島商業と広島中学のせりあいで発展したように、本県初期の水泳界は修道中学と広島一中がしのぎをけずり、三次中学、広島二中がこれにつづいていた。

広島一中も常勝修道中学をおびやかす昭和四年の西部大会では、高知商業学校、修道中学、三次中学を制して初優勝し、昭和七年、

旧制広島高校主催の地元大会で修道、三次を破り優勝して以降、広島二中に敗れるまで八連勝して広島一中時代を築いている。

一方女子では、立教大学卒業の鎌田寿夫（故人）が第十二回東京オリンピック大会（中止）の中国ブロック強化対策委員長として帰広し、呉士肥高等女学校が昭和十一年から二年連続優勝、呉精華高等女学校（土肥・精華両校は現在の清水ヶ丘高校の前身）も優勝、全国レベルに達し東京大会が開かれていたら数名の日本代表が選ばれていただろうと惜しまれる。

現在では日本水泳界においてモントリオールオリンピック大会男子競泳選手は全員尾道高校の卒業生と在学生でしめられ、フジタドルフィングクラブと共に水泳界をリードしている。

サッカー

広島は、わが国サッカー界の名門県でもある。一番歴史の古いのは広島高等師範学校で明治の終りごろからボールをけっていた。

そのころ広島師範学校に出射栄、広島一中に松本寛という東京高等師範学校卒業の若い先生が赴任してサッカーを指導され、大正のはじめに広島師範と広島一中に蹴球部ができ対抗試合が行われるようになった。

広島一中では、灘尾弘吉（現衆議院議員）らが入学したとき、上級生が蹴球部に入部を勧誘したら半数以上が申し込み困ったという話が残っている。

大正四年の正月休みに野津謙（前日本サッカー協会会長）ら蹴球部が関西に遠征し、神戸一中、神戸二中を破り、神戸外人チームと

も対戦し一勝一敗、意気揚揚と帰広したところ、学校に無断で遠征していたため職員会議で大問題となったが松本部長のはからいでこのなきをえている。

昭和七年、広瀬時治校長が野球を禁止してからいっそう蹴球熱が高まり、大正八年、同十年には神戸高商主催の大会で御影師範、神戸一中を破り優勝している。

広島の蹴球が全国的に名声を挙げたのは、大正十三年、同十四年の第一回、第二回明治神宮体育大会（全日本蹴球選手権大会を兼ねた）でOBの鯉城蹴球団が連続優勝を飾ってからである。

鯉城蹴球団は、OBの伴勇（第六回団体開催時県蹴球協合理事長、広島在住）らが神戸高商を卒業して広島に帰り、後輩たちを指導しているうちに話がまとまり結成されたクラブで、昭和二年には朝鮮に遠征し全朝鮮と対戦し一勝一敗の成績を残している。

広島高師といっしょに練習していた附属中学校も名門で、大正十一年、四年生であった山県不二磨（広島在住）ら二人の生徒が高師のチームにまじって第二回全日本選手権大会に出場し、優勝戦で名



鯉城蹴球団（大正14年優勝当時）

古屋蹴球団を圧倒しながら一対零で涙をのんでいる。

このころ修道中学校蹴球部も台頭し、大正十四年山口で開かれた

関西大会で優勝し幸先よいスタートをきっている。修道中学卒業の中野重美（現広島県体育協会副会長・県サッカー協会副会長）は第六高等学校、京都帝国大学に進み黄金時代を築いている。

このようにして、広島高師、広島一中、附属中学、修道中学によって本県の蹴球は大地に根をおろし今日に至るまでの基盤が形成されている。

またこのころから子供のときからボールをけらないと強くないなといと、鯉城クラブの結城康治（元県蹴球協合理事長・元広島県体育協会理事長、故人）、臥虎クラブ（県師のOB）の小松百合男（もと小学校長）らがゴム製のボールで小学校に普及し、学童の大会も盛んに行われ極めて盛会であった。現在の本県サッカー協会の役員や指導者の多くはこうしたなかから育った方たちである。

戦後もサッカーはいち早く復活し、附属中学、修道中学が全国優勝したし、オリンピックでもメルボルンとメキシコの全日本代表チームの大半は本県出身選手で占め、現在日本リーグ参加チームにも多数の選手が活躍し、日本サッカー協会専務理事の長沼健も戦後育った選手である。

バレーボール

わが国バレーボール界の先駆者は本県スポーツ界の大先輩、多田徳雄氏である。

多田先生は昨年安田女子大学を退任するまで孫のような学生に体育を指導し、スポーツ一筋に生きた方である。

明治四十四年に広島師範学校を卒業、学生時代からスポーツは万

能で、野球は豪速球の名投手、柔道は当時数少ない初段の腕前であった。河津彦四郎先生の弟子で卒業後も小学校に勤めるかたわら先生のもとに通いスポーツの手ほどきをうけ、陸上競技に若い情熱をうちこみ、メキメキと腕をあげ、広島青年団員に陸上競技の基礎を指導された。大正九年に神戸で開かれた陸上の講習会に参加したあと、県下各地を巡回指導し、普及振興に尽力された。

大正八年、第四回マニラ極東大会には陸上・水泳両種目の日本代表選手として参加した。この大会でバレーボールに興味をもち、大正九年神戸高商に迎えられ、学生有志を集めてバレーボールの研究指導を続け、大正十年第一回全日本選手権大会で優勝、第二回大会は不参加、続く第三回大会から十一回大会まで九連勝、神戸高商時代を築き、わが国バレーボール界をリードする基盤を培っている。

また第六回から第九回までの極東大会日本代表チームの監督であった。また文部省や新聞社の要請により東京から鹿児島に至る二十九府県を巡回指導されバレーボールの普及、技術の向上、指導者の養成に尽力され、現日本バレーボール協会西川会長、高橋副会長（広島出身）をはじめ、わが国バレーボール界の指導者は直接・間接に先生の指導を受けている。

昭和三十一年に広島に帰られ、安田女子大学のバレー部長として退任されるまで、指導に専念され、女子バレーボールの水準向上に尽力された。

中学校でバレーボールが芽ばえたのは大正末期である。広島二中の体育教師として赴任した増谷隆市（故人）先生は、当時市内の中学校では、広島一中が蹴球、修道が水泳、広島商業と広陵が野球と

大会で優勝し、昭和十年は一般男女、高女と三タイトルを広島勢が獲得している。広島二中也、昭和十一年全日本、昭和十二年全日本と神宮、昭和十三年全日本に優勝と、文字通りバレーボール王国広島であった。



重 芳 崎 長

広島が生んだ選手の最右翼は長崎重芳さんである。長崎さんは広島二中・早稲田の黄金時代を築き、強烈なスパイクは今日でも語り草になっている。早稲田と呉工廠は共にトップレベルの好敵手であった。長崎さんのスパイクに対し呉工廠は前衛三人に中衛一人を加えた四人防禦、そのストップ陣を抜いたボールが後衛の頭に当たりはね返ってネットを越えてエンドラインをわたったといわれている。また満州に遠征したとき、長崎さんのスパイクを受けたバックセンターの指が脱臼したというほど強烈であった。名前の重芳がいつとはなしに「重砲」と呼ばれるようになった。

戦後長崎さんは全日本チームの監督として活躍し、昭和三十八年にはフランス政府の招待によりナショナルチームのコーチとして二年間派遣されている。

広島県立高女のバレーボールチームが全国大会で優勝したときの監督であった中島太郎氏（現県バレーボール協会顧問）も本県の学校におけるバレーボールの普及振興に尽力された功績者である。今日でもオリンピック大会に四回出場した専売広島チームの名を

それぞれ特技をほこっていたので、ほかのなにか強い種目を振興しようという熱意に燃え、神戸高商卒の高橋哲雄氏（現日本バレーボール協会副会長・多田先生の教え子）からバレーボールをすすめられたのがきっかけでとりくまれた。正課の時間はもちろん、放課後も生徒といっしょに技術とルールの習得に努め、みるみるうちに全校にひろまった。昭和二年広島高師で開かれた関西大会で優勝、第二回全国大会で準優勝、昭和六年には全日本、神宮の二タイトルを手中にし、日本一をほこるチームにのしあがった。こうして先生は多くの名選手を育て日本バレーボール界に送っている。第九、十回極東大会には赤木功（故人）、長崎重芳（現県バレーボール協会会長）、温井政記（故人）、山口祐一郎、前田豊（現日本バレーボール協会専務理事）、佐伯晃（現広島工業大学）の各氏を送っている。

呉市では大正末期、呉海軍工廠を母体とした実業団のバレーボールが盛んであった。その指導者は河野実一氏（現県バレーボール協会副会長）である。河野さんは白球バレーボールのとりこになり呉工廠チームを熱心に指導され、大正十四年第二回明治神宮体育大会に出場したが、神戸高商に惨敗した。守備のチームで攻撃力が劣ったためである。昭和五年には水雷部チームが生まれ互いに腕を磨き、昭和七年全日本選手権大会では呉工廠チームは当時九連勝していた神戸高商を破り優勝、翌年は広島二中OB、翌九年は再び呉海軍工廠と三年連続広島県のチームが優勝、昭和十一年にも呉工廠が三度目の優勝と全盛時代であった。

また女子でも、広島地方専売局が、昭和九年、十年と全日本選手権大会で二連勝し、広島県立高等女学校も同じく、九、十年に全国

ッター猫田選手、崇徳高校バレーボール部員ら、数多くの名選手を輩出し、指導者層も厚い。

野 球

広島は野球王国と言われている。それにふさわしい古い歴史と輝かしい伝統に培われて今日に至っている。大正四年から開かれている全国中等学校野球選手権大会、十三年からの全国中等学校選抜大会には広島県から数多くのチームが参加し、いくたびか優勝の栄冠をかちとり、大学、社会人、プロ野球界に多数の名選手が輩出し、熱狂的ファンも全国に類をみない。

広島に野球が伝わったのは明治二十二、三年ごろとされている。明治二十六年には野球を熱心に指導していた県の参事官佃田一予氏の転任を機に、広島中学と広島師範の生徒、職員合同で送別ベースボール会が開かれている。これが記録に残る最初の試合であったと思われる。

明治三十年代には県下の中学校につきつぎと野球部が誕生している。

当時は広島中学を筆頭に広島商業、修道中学、明道中学、崇徳中学、呉中学、忠海中学、尾道商業、福山中学、三次中学等が打倒広島中学を目指して闘志を燃やしていた。

明治四十年から第六高等学校主催の近県中等学校野球大会が開催され、第一回、第二回大会では広島中学が、第三回、第四回大会では呉中学が優勝している。

明治四十二年に広島中学OBの島正一氏によってグロブが持ち

帰られた記録がある。

大正二年にハワイ中学が来日し、全戦全勝の余勢をかって広島に訪れ広島中学と対戦。広島中学が九対七で勝ちハワイ中学に初黒星をつけている。この試合は広島高師の幣原教授（のち台北帝国大学長）によって始球式が行われている。

大正四年、第一回全国中学校野球選手権大会予選会の山陽大会は八月六日から炎天下の三日間、広島高師の校庭で開かれた。優勝戦は広島中学対広島商業。赤いアンダーシャツの広商石本秀一投手の投球を広島中学小田二塁手はすくいあげるように打った。打球は左翼線にのびて校庭のアカシアの枝に当たった。グラウンドルールにより二塁打となり勝敗が決まった。全国大会の出場は広島中学、広島商業ナインは、「憎きはアカシア」と地団駄を踏んだといわれている。ちなみにこのアカシアはいつのまにか切り倒されていたということである。

さて、八月十八日から豊中球場（大阪市）で開かれた第一回大会の第一試合で広島中学は鳥取中学と対戦。一回表、田部捕手（元毎日新聞記者）がフウルチップで右指骨折、主将であった広藤省三遊撃手がマスクをかぶって対戦する。結果は十四対七で敗れたが最終回中村選手がホームランを打っている。大会第一号ホームランであり、負傷第一号でもあった。

第二回の山陽大会は広島商業対広陵中学で人気を呼び三千人の観衆が詰めかけたということである。広島商業のエース石本投手の活躍ぶりは、投げる、打つだけでなく、投球と同時にストライクと叫び球審の判定を誘う強心臓ぶり。またポケットから歯磨粉をとり出

しボールのすべりどめをしたり、ルールブックをめくって解説したといわれている。

このようにして中学校を母体として、野球は軌道にのり、戦前の全国大会では、広島商業が四回、広陵中学が二回、呉港中学が二回優勝している。

このほか、明治四十四年には早稲田大学が来広して広島中学と対戦し、明治末期には社会人野球として呉造船廠（のち呉海軍工廠）野球部が活躍し、広陵中学は大正十四年に朝鮮、昭和四年にはハワイに遠征、広島商業は昭和六年に渡米している。また昭和初期には少年野球もさかんになっている。

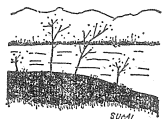
このようにして普及発展して来た本県野球界の主な功勞者としては、第一回全国大会に広島中学主将として出場した広藤省三氏（故人）、第二回、三回大会のエース投手でもあり、第十五回、十六回の連続優勝監督として広島商業の黄金時代を築いた石本秀一氏を筆頭に、広陵中学の朝鮮遠征、選抜第三回大会優勝の監督をつとめ、戦後高校野球の審判長をつとめた山崎数信氏、第八回極東大会に出場し、国鉄の監督をされていた浜崎真二氏、広陵中学の全国大会優勝時代の選手で、現在社会人野球広島支部長で、野球に今なお情熱をかけている三浦芳郎氏等をあげることができる。

（財団法人広島県体育協会常務理事・事務局長）

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

——鹿児島県——



稲田 敏文

島津歴代藩主は文武両道を奨励した。中でも島津忠良、貴久は忠孝をもって経とし、武道をもって緯となすことを信条として薩摩士風の作興をはかった。そして若き者は、武芸、角力、水練、山坂歩行にわたって達者であるべきことを掟とした。とくに武芸においては東郷示現流、薬丸自顯流、日置流、腰矢、潮手、練方、神統流など薩摩独特のものを作りあげた。また天真流や柔の鞍馬揚心流、馬術、砲術も奨励して士気の練磨につとめ、頼山陽をして「衣は野に至り袖腕に至る。腰間の秋水鉄断つべし」とうたわしめたのである。薩摩藩はまた琉球を介して南方諸国との貿易等を行い天下の雄藩として栄えさらに島津重豪、斉彬は近代的感觉に傑出し文教政策を重視して近代科学文明の導入につとめ、明治維新の原動力を培ったのである。

近代スポーツの台頭と展望

近代スポーツの創生期には鹿児島県人が、日本スポーツの発展に大きな役割を果たしている。それは明治維新にぶつつけたエネルギーと質実剛健の薩摩魂が新しいスポーツへ脱皮したのかも知れない。

明治から大正にかけて本県出身者が他県において活躍し、昭和初期も全日本級の名選手が続々として生まれスポーツの伝統を守りつづけた。

本県には昭和の初期、第一師範学校に陸上競技に堪能な有田一郎、柔道の中亮、剣道の紫垣正純、第二師範学校に速藤力雄、一中に陸上競技の鴻澤吾老、二中に高橋喜一郎、鹿児島市体育主事として浜田義明、西山実幾などの優秀な指導者が招請され、県内在住の

指導者とともに昭和初中期の全盛時代をつくった。戦後も陸上競技の児島文や柔道の吉松義彦等が健在で選手としてまた指導者として活躍、県外にあった指導者も帰郷し戦後のスポーツ界も華やかであった。しかし一時中だるみとなった鹿児島県のスポーツ界も太陽国体を契機として多くのスポーツが全国のトップレベルに達し、ようやく充実期を迎えようとしている。以上概観を述べたが以下、各競技について述べることにする。

クレイ射撃の元祖

村田経芳。明治八年マルセイユ万国射撃大会で優勝。村田銃の発明者として、明治維新の立役者の一人であり、また日本最初のクレイ射撃の経験者でありしかも名人であった。

村田は天保九年生まれ。島津斉彬の命を受け、イギリス公使館護衛生の射撃を見学。そのうち対抗試合が行われ、村田は個人競射で二回優勝して、天才の一端をみせる。フランスのカンドシャロン射撃学校に入学、パーミングラム工場見学記に「球を空中に投げ射撃するなど俗にいう曲射をなしたり。村田競点に同じ全勝に帰したり」とあるがこの球がクレイであろう。十か月の視察ののち前記大会に参加する。日本射撃界の天才として称賛された。帰国後自宅に射場をつくりスポーツとしての射撃普及に努力した。昭和初期より本県クレイ射撃は愛好者がふえ国体等に好成績を収む。戦前、戦後を通じて上村豊、吉河辰市、本田政則などが代表となり公式大会に活躍した。

薩摩の弓道は、日置流によってはじまる。

薩摩日置流は十三代島津家久時代に創設され島津の実戦射法として伝えられ、二十八代斉彬が腰矢と命名。これが溝口武夫（昭和十年八十三歳没）、伊藤信夫によって伝承され、東京オリンピックなどのデモンストレーションとして披露された。鹿児島県の弓道界は溝口武夫、種子島常助（日置流）、平田千束（昭和四十三年七十五歳没・尾州竹林流）で形成され、ほとんどの高段者がこの流れを汲んだ。平田の弟子小溝武志が中心となり戦後鹿児島県の弓道界の組織を確立した。

大窪哲雄が昭和三十八年、真島己則が昭和四十年、志々目義宏が昭和四十二年、それぞれ全日本弓道選手権大会に天皇杯を獲得、現在児玉秀治理事長と共に後輩の育成につとめ国体において三度総合優勝を飾っている。とくに少年女子チームは佐賀国体で優勝。石沢和子は高校大会で優勝をとげた。

伝統を誇る鹿児島県柔道

徳三宝（一八八四―一九四五）の生涯はそのままドラマである。

徳は一中時代当時七高の柔道師範佐村喜一郎に手ほどきを受く。その上達はめざましく、七高五高戦に特別出場、豪快な体落しは「九州に敵なし」と恐れられた。佐村師範のすすめで講道館の門をたたき、東京高師にすすみ、明治四十三年の鏡開きに三船五段と試合し、即日四段に昇段、柔の三船、剛の徳と盛名をはせる。いっもけんか早い徳はその年の暮れ、見学にきたブラジル海軍水兵十五

着絶ち難く、毎朝の城山登山等苦しい練習を続けた。

そして昭和二十七年、二十八年、三十年と輝かしい全国優勝の金字塔をうちたてた。これを機会に引退を決意したが翌三十一年の第一回世界選手権に敢然と参加。準決勝でヘーシンクを



吉松義彦

破ったが決勝において夏井に敗れた。しかし吉松の戦績は永く日本の柔道会に輝くであろう。現役を引いて現在県警察学校副校長、術科師範、八段、柔道会強化部長として後輩の指導にあたっている。

柔道については名解説者、だじやれの好きなユーモリスト。「今西郷」の呼び名で県民から親しまれている。

昭和二十五年、学校柔道の復活と同時に、鹿児島の高校柔道は戦前の黄金時代を目指して、しのぎをけずり全日本級の選手が輩出した。なかでも松下三郎（現日大講師）、朝田紀昭（現富士製鉄）、上口孝文（現警視庁）が学生選手権を獲得、特に上口は世界選手権軽重量級二位となった。一般柔道の母体である警察柔道は北島清教等によって大きく成長した。

鹿児島大学で中亮、法丸保晴から指導をうけた者が今県下で柔道の普及にあたりっている。中は四十数年の教職をひき、「武芸相傳」を出版した。

剣道

明治に生まれ、大正、昭和の初期にかけて剣豪と呼ばれる人たちが

人を道場破りと誤り徹底的に投げとばし、これがために破門、退学となる。それから五年四国で山窩と暮らしながら空手を修業、ようやく破門を許され講道館四天王の一人となる。早大師範をつとめるかたわら東京・江戸川区に道場を開き若手の指導にあたったが昭和二十年三月九日の東京大空襲で焼死、遺体も発見できなかった。徳の強さはいつまでも語りつがれることであろう。

楠力（一九〇六―）は十七歳で佐世保海兵団に入団、昭和元年九州有段者大会で九人投げを行い四段昇段、やがて海軍現役最初の五段となり、その実力をまとめられ、三船九段の助手となる。昭和十三年全日本、昭和十五年都道府県対抗と二回全国優勝をとげる。

その後鹿児島県予科練の師範となり、剣道、柔道、銃剣道、空手をくみ合わせた楠式海軍武道を考案、さらに警察逮捕術の基礎を作った。現在市内に道場を建て後輩の指導にあたる。柔道会副会長。八段。

徳、楠が講道館を中心に日本の第一線で活躍すれば、郷里の鹿児島で黙々と柔道を育てあげたのが林岩三（一八九七―）。林は、母校鹿児島商業に柔道教師として勤務、着々として鹿商の実力を高め、昭和十年京都商業を破って優勝以来、四年連続全国大会優勝の記録を作る。日本柔道界の中心となった川俣国雄、吉松義彦、松下三郎を送り出した。昭和二十四年県柔道会長、九段。現在八十歳、九州柔道界の長老である。

吉松義彦は林の門下生で鹿商黄金時代の中心選手、全国大会三連勝の主力であった。昭和十三年には大阪浜寺の全国中学相撲大会に優勝、第二十二代の中学横綱になった。柔道専門家を目指して日本武道専門学校に入学。終戦で帰郷。柔道追放のなかでも柔道への愛

が多く輩出した。

島谷八十八(一八七二—一九四五)、志賀矩(一八八一—一九四九)が県外で活躍した。この二人が中央で活躍すれば、県内においては重岡栄之助、福留矢太郎につづいて丸田兼寛、津崎兼敬、上脇武雄、堀切源一がそれぞれ剣士の養成にあたったが今はみな故人となった。また大正十一年今村貞治(一八八九—一九六六)は鹿児島市に大道館を設立、昭和二年には大道館武道専修学校を併設し全寮制によって猛訓練を施した。中倉清はその一期生である。

前にも述べたが昭和の初期、鹿児島第一師範学校に招かれた紫垣正純は卓絶した指導力をもって昭和四、五年と連続して全国優勝をさせ、酒匂久、夏迫丸喜、竹下義章、西寛行等の逸材を次々に養成した。一方第二師範学校には上脇武雄が着任、指導にあたった。重岡昇もその生徒である。この両校の優秀な剣士が県下各地に赴任し剣道王国鹿児島を築いた。

酒匂久(一九〇九—一九五一)は昭和四年在学中無段で昭和天皇試合に出場、五人を倒して名声をあげ、のち武専から大阪府警の主任師範をつとめ関西剣道の指導にあたる。戦後鹿児島市の小学校の建物を利用して作られた俗称「破れ道場」の指導にあたった。

戦後復活した剣道は昭和三十年代になって全国に頭角をあらわした。一般が神奈川県において優勝、岡山国体でも(矢崎、中倉(清)、溝口、新村、石田、中倉(英))のメンバーで優勝を飾った。ようやく軌道にのった剣道界から、会田彰、有満政明などの戦後派剣士が生まれた。会田は第一回日米親善学生剣道使節に選ばれ、有満は全国警察官大会で個人優勝、新人進出の先達となった。

太陽国体総合優勝以来、高校では矢崎時雄、吉村正純、鵜飼賢省、

大口昭三等が、一般の児島克、楠元忠雄等と共に剣道振興に情熱をもやしている。教員で活躍した俣木正喜が五十一年日本教職員剣道大会に個人優勝をとげた。

水 泳

鹿児島の水泳選手は錦江湾周辺と川内川水系から生まれる。水泳指導者を代表する東郷清一(一九〇三—)は、少年時代川内川で泳ぎまくり、川内中学から日本体育専門学校にすすみ、一年の時明治神宮大会五十米自由型に優勝する。卒業後宇和島中学から加治木中学に迎えられたのが昭和四年、東郷流のスパルタ訓練がみり、重山孝、河野道広、横内保典、永岩清、下前純男等の全日本級の選手を育てた。戦後川内高校より宮之城高校に移り、メルボルンオリンピック出場の前川徹など多くの「宮之城グループ」を育て九州大会五連勝、全国大会でも上位に進出、「水泳宮之城」を築き指導者としての名声を集めた。

一等機関水兵鶴田義行は大正十二年明治神宮大会で優勝し報知社に入社、アムステルダムオリンピックで二百米平泳ぎに優勝、つづいて再びロサンゼルスオリンピックに驚異的な底力を発揮して二回目の金メダルを獲得。日本の水泳史にその名を飾った。現在松山市に在住。

石原田愿(オノダ)はベルリンオリンピックで千五百米自由型に四位。二十五年日本水連から南米ベルーの水泳コーチに派遣される。現在ベルー在住。ヘルシンキには石原田と同郷の西松が日本代表となった。西は予科練から明大に進学。戦後の鹿児島水泳界の中央進出突破口を目指し二十九歳という年齢のハンディをのりこえ、ついに八百米

リレーメンバーとして出場した。現在県水泳協合理事をつとめ後輩の養成にあたっている。メルボルンには高校生古川徹が、これに刺激され次々と日本を代表するような選手が生まれた。慶応大学時代四百米個人メドレー日本新の高嶺隆二、全国勤労者優勝の高嶺由紀子兄妹、旭化成で「宮之城トリオ」といわれた小牧順子、藤田陽子、杉元丸美などがその主力である。また近代五種水泳で世界最高をマークした紺屋国守も宮之城グループである。東京オリンピックを前に、すい星のように現われた平泳ぎの鶴峯治は東京オリンピック入賞者である。

優秀な素質をもった少年選手が大きな夢をもって本県を離れたが、出口渉、小園勝一等の努力によって今又新しい芽がめばえつつある。鹿児島に残った坂元要は法政大に進み活躍している。太陽国体に前後して、水球指導に専念した野入弘良、豊増穂積によって鹿児島の水球は開花した。いま鹿児島高校水球は全国のトップグループとして発展しつつある。

スポーツ界をリードする陸上競技

一九二二年ストックホルム大会に派遣されたのはマラソンの金栗四三と本県出身三島弥彦である。三島はオリンピック予選会で百米十二秒、四百米五十九秒六、八百米二分十九秒で優勝し日本代表となった。その時のオリンピック百米優勝記録は十秒六、そのへだたりおして知るべしである。

鹿児島県の昭和の陸上競技は昭和初期多くの県外出身の指導者の導入によって躍進をつづけた。明治神宮体育大会において昭和八年、十年と連続優勝(山次申、宮田豊志、山下友城、川井田吉二、堀之



文 島 児

内清、竹之内一男、稲田敏文、千田一郎等)して初期の全盛時代を作った。この頃県外で本県出身の児島文が砲丸投で次々と日本記録を更新、ベルリンオリンピックには円盤投に出場する。

昭和十七年帰郷し昭和二十一年、二年の日本選手権に連続優勝。第二十五回日本選手権の開催に努力する一方選手の育成にも努力する。ニューデリーのアジア大会では、円盤、砲丸投に銀メダルを獲得、砲丸投十七年間、円盤投十五年間日本記録を保持した(現鹿児島短大教授、陸上競技協会副会長)。

山下友城。昭和八年の明治神宮大会走り高跳びで一米九十一を跳びオリンピック候補となるが、従来の記録が未公認のため涙をのむ。東京高師に進み、のち鹿児島師範学校に帰り指導者の養成にあたった(元鹿児島大学教授陸協副会長)。

「児島道場」で育った選手の活躍は戦後の陸上界の全盛期をつくった。小島義雄はメルボルンオリンピックに出場、二十九年のアジア大会で金メダル(ハンマー投げ)・銀メダル(砲丸投げ)を獲得。田中みどりは二百米で金メダル、溝口は砲丸投げ、円盤投げ両種目に銅とそろっての大活躍であった。東京オリンピック棒高跳に出場した盛田久生も帰郷、後輩の養成に意欲を燃やしている。この外鹿児島で育った女子八百米の高橋律子、ポストンマラソン五位入賞の船迫義和の功績は大きく評価されている。

最近では、妻鹿功、広津匡、野間弘毅、前村悟、小浜正典、津田

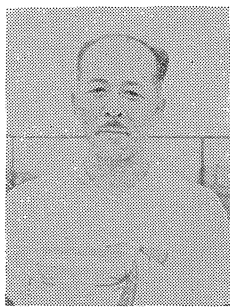
束などによって養成された選手の活躍が見事に開花した。日本長距離界に活躍する浜田安則、高校時代三冠王（百、二百、四百米）となった短距離の北林裕子、投てきの宇住庵節子、走幅跳の大山憲雄、短距離の森田美知子、百米、二百米に日本新記録を樹立した大迫由起子と枚挙にいとまない。

鹿児島大学で指導にあたっている鳥丸卓三、末永政治が歴代の理事長をつとめ豊富な競技歴と緻密な計画によって玉川秀一郎会長を中心に鹿児島陸協をがっちり支えている。

軟式庭球

軟庭を育てたのが萩原秋彦。さらに薩摩びわも一流という器用人である。五高時代「萩原のスマッシュ」はコートにひびがはいる」とおそれられた。大正十四年鹿児島に帰り軟庭の普及向上に努力、六十二歳で国体出場。

さらに選手歴の長いのが中村麒麟児郎、戦前台湾で活躍、戦後鹿児島で教鞭をとる。国体出場十三回、優勝四回、佐賀国体では六十四歳で優勝を飾った。高校では南史郎、小田哲郎、松元



中村 麒麟児郎

義男、中村久雄等の指導によって全国トップクラスを保持。なお中脇努、草宮三良、川畑城等の教員ブレイヤーが活躍。かつて本県軟庭をつないできた江口正純、北原省市につづいて島津行

隆、有島健治、立本立美、中村宏之等がいる。高校時代活躍した向吉佳代子が全日本で二位、徳永ひろみ、福元絹代が連続皇后杯を獲得した。本県軟庭界は、長野清一会長、鹿児島大学教育学部部長四本健光副会長を屋台骨として前途洋々である。

漕 艇

白坂力。早大在学中ベルリンオリンピックに出場、拓大在学の下茂義男とともに中央で活躍、下茂は建設会社社長をつとめ、漕艇会長として本県の漕艇をリードした。大正末期から昭和初期、上野三兄弟（次郎男、次郎吉、四男）は七高在学中全国大会で活躍。現在実業界の重鎮。太陽国体と前後して、シングルスカルで前野義春、三浦義雄が全国上位に進出。現在面高正俊、宇都電行を中心に川井田博、有元賢隆が指導にあたっている。鹿大クルーをはじめ、牧野幸男がひきいる鹿屋市役所女子クルーが平田準市長の激励にこたえ国体上位入賞をつづけている。

ラグビー

本県出身の高木善寛が英国のセント・トーマス大学で本場ラグビーを修め帰国後関東ラグビー協会長となる。この先輩に刺激され、昭和初期全盛を誇った明大に多くの県人が進学、赤星輝也、伊集院浩、三宅良吉、中村不二男、中村規矩男の名プレイヤーが続出した。赤星は卒業後鹿児島に帰りラグビー振興に努力する。この頃山元正義が七高ラグビー部を誕生させた。伊集院は復員後二十二年秩父宮ラグビー場を作った。立教OBの早川も鹿児島でラグビーの再興に尽力。現在は下荒磯会長のもとに、鹿児島大学の山崎秋則を中心に

川崎敏二、大山稔、寺田健一がラグビーに意欲を燃やしている。山崎の指導を受けたラガー等が県下各地で活躍。この教員チームは全国大会で善戦している。

バレーボール

バレーボールが鹿児島に入ったのは昭和三年。原田福吉（一九〇一～一九七四）と川野敏男がともに二十数年女子バレーボール指導にあたり多くの実業団選手を送りこんだ。昭和三十三年六人制になつてから四人の国際級、全日本級の選手が生まれた。野口馨（住金）、小瀬戸俊昭（帝人三原）、渡辺一史（住金名古屋）、児玉美代子など。現在白井進、薮川利勝、池畑正、末広芳郎などが協会をささえ、上原敬、門内吉則等が過渡期の高校バレーを乗り切る努力をしている。国体以来の教員チームは今なお健在である。

体 操



直塚 鉄太郎

不毛の地だった鹿児島に体操を実らせたのが鹿大教育学部教授の直塚鉄太郎。直塚は若松の出身、小倉師範より東京高師に進む。昭和十七年全日本体操選手権で総合三位となる。昭和二十一年鹿大教育学部において体操指導にあたる「直塚学校」の名のもとに、八色通博をはじめ日高良広、井手堅司、山田督郎などを育て、全日本インカレ二部で

二回団体優勝。新体操では尾辻義、下田富良が日本一のチームを育てその伝統を守っている。特に松元俊一（日大）、薮久美子（純心高校）はその大成を期待されている。

野 球

野球の元祖牧野伸顯。ベースボールを野球と定訳した中馬庚、日本最初のクラブ溜池クラブの闘将町田一平等いずれも本県人で日本野球史の一頁を飾る。

明治三十七、八年鹿児島野球は七高を中心に近代野球へと脱皮した。七高の名投手鵜飼宗平、安田量之助について発展期をリードしたのが折田士（一九四二～一九六六）。一中、七高の監督として手腕を発揮し、また理論の研究、コーチ力は抜群であった。

折田力、士の弟、拓大卒業後鹿児島でオール鹿児島を組織。三十六年社会人野球「鹿児島市電チーム」を創設した。豊富な野球知識をもってラジオ解説を一手に引き受けている。猿川満も折田力につづいて鹿児島市鴨池運動場長をつとめ軟式野球連盟の運営に尽力している。

その他のスポーツ

フエニングで岩崎友二、藤沢洋二郎の指導によって、上国料修、上野寛彦、中園みづえなどが中央で活躍した。特に加治原由香利は四十七、四十八年と全日本優勝、モントリオールオリンピック代表となった。

相模は福山盛吉が自宅に道場を作り指導した結果、青年、高校は全国上位にすすむようになった。遠矢正雄、福山力雄等が毎回国体

で活躍し、また昭和三十九、四十年村岡満蔵が連続教員個人優勝をかざり、村岡の教え子花田安が四十八年高校横綱となった。遠矢が指導する鹿児島実業高校は、高校総体優勝、同高校通村哲史が宇佐大会で個人優勝をとげた。

ライフル射撃では桂甚吾、関山哲郎が学生大会で入賞、セクターファイバピストルの上村正明も警察官大会で活躍している。近年鹿児島実業高校が四十八年より三年連続全国優勝、第二十六回日本スポーツ賞を受賞した。

レスリングでは、かつて米盛勝義、永里高平等が学生選手権や国体で優勝、また昭和三十一年鹿屋高校から中央大に進んだ村野力は国内選手権二回優勝、現在ニューヨークでコーチとして活躍中。その後しばらく振わなかったが、平山紘一郎がオリンピック二回出場入賞し、また田上高、梅田昭彦、平田茂などが活躍した。県内では四元登、加治佐正昭、寺本司等が高校生の指導にあたった。なかでも加治佐の功績はすばらしく、全国高校、国体に優勝し、佐賀国体でも加治佐一門が二十名以上準決勝に残った。杉野浩吉をはじめ二、三人がモスコーを目指している。

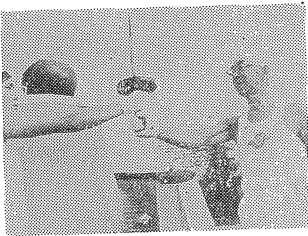
ホッケーは昭和二年七高に同好会結成、昭和十一、十二年と全国高専大会に優勝、宮崎淳弘、森一郎、岩崎福三、池田正辰らがそのまま協会役員をつとめている。理事長本田啓太郎がよく協会をまとめ、前田達治、鶴田稔、富田善文の努力によって全国のトップレベルにこぎつけた。ホッケーの町、樋脇には、町民ホッケーの日が設けられ、役場その他の団体、ママさんチーム十数チーム、中学生、小学生のホッケーに歓声があがっている。

ボクシング育ての親は京田薩夫。国際級の内山昇（ライトフライ

バスケットボールに終始情熱をかけたのが野元五造。高校、大学を指導、多くの指導者を養成している。なかでも川田隆一が指導する女子チームは一時全国高校のトップクラスになった。江藤文俊、下園洋子、小島悦子が中央で活躍した。

女子スポーツとして大いに誇っている「なぎなた」は、鯉坂節代、黒川久子、塩田一子によってひろめられ、竹下裕伸が指導する純心女子学園は全国大会に優勝、一松環、綾子姉妹は、個人優勝を飾った。

鹿児島県の体育行政をあずかった人々



遠藤力雄(右)

遠藤力雄。初代体育運動主事として体育行政にあたる。まず小学校体育充実のため体操査閲を実施したが、それは昭和三年、昭和十七年まで続いた。中学校の各種競技大会の奨励、青年スポーツの振興に尽くした。とくに水泳、陸上競技はたえず中央より名選手を招き本県のスポーツを全国のトップレベルに引き上げた。また霧島登山、桜島横断遠泳等を普及した。高潔な人格と卓越した指導力は県下体育指導者の尊敬と信頼を受け、よく本県体育スポーツの基盤を確立した。八十八歳にしてなお、かくしゃく、老人スポーツの普及に尽力している。

蒲山弥太郎。昭和二十二年初代の体育課長となる。十年間戦後の体育、スポーツの振興につとめた。また学校給食の普及、学校保健

級、モントリオール出場)、日本のチャンピオン吉国幸二(フライ級)、用皆政弘(ライトウェルター級)、山口正一(ライトミドル級)を育てる。県内では武田哲博が社会人で二年連続チャンピオン。今一人和泉哲人、沖永良部高校で田中米富を育てた。栄功助とともに、第一回モントリオールベルト戦で勝ち抜き将来を嘱望される。

鹿児島県のヨットを盛り上げたのが、吉田信夫、丸山信男、大田森郎である。鹿児島大学、鹿児島経済大学も学生大会で活躍、最近馬場一広が世界フィニッシュ級選手権大会、プレオリンピックに参加、また野元健一郎、南純治が世界スナイプ選手権に派遣された。

馬術では種子田濯が終始世話役をつとめ藤園昭が理事長をつとめ馬術の普及にあたっている。前園清隆、窪園順一郎が優勝の経験を持ち、上村叶が生徒を指導しつつ国体に十三回出場している。上村が指導する高校チームが四十七年全国優勝をかちとった。

ウエイトリフティングでは、千葉国体で水迫勇が高校ライト級で優勝、上園一春が国体及び高校総体でライト級に優勝、将来を期待される。

硬式庭球では、樋口佳雄(一九〇七—一九七三)が慶応で活躍、山形屋デパート副社長をつとめながら普及に努力した。林慶徳、太西洋逸、浜田和郎などが熱心に指導。今では尾辻輝男、生駒綱雄が一線にたち、柳川商業高校から日本選手権をとった大西儀明も鹿児島出身である。

小牧勇蔵を会長とするサッカー協会は、青柳真平、七尾猛雄、奥保安等がデビッ子サッカーによる底辺拡大、クラブ育成に努力、日本リーグを招き、レベルアップをはかっている。教員チームの充実はこのましい。

の充実に努力、学童の体力向上につとめた。昭和二十五年全日本陸上競技選手権大会、翌年日米対抗陸上競技大会を開催した。現在鹿児島大学教授、体協理事長をつとめる。

稲田敏文。昭和三十三年第二代体育保健課長。体育施設の充実に計画し、まず県体育館を建設。全国学校給食大会等を行い学童の体力向上にとりくむ。スポーツ少年団の育成につとめ国体誘致準備にとりかかる。四十二年より国体事務局次長をつとめ、終了後は体育協会事務局次長、総合体育センター所長をつとめ社会体育振興をはかり県民総スポーツの推進にあたった。

遠竹卓也。昭和四十三年第三代体育保健課長に就任。競技団体の育成、競技力の向上、競技役員養成、集団演技の実施等に尽力、太陽国体を成功にみちびいた。現在総合体育センター所長。

前田純夫。昭和四十九年第四代体育保健課長。多岐にわたる体育保健行政ととりくみ、学校給食の充実、スポーツ主事の確保に努力、あらゆる学校保健体育団体と協調しつつ実績をあげている。

体育協会長、金丸三郎知事は、シラス土壌に眠る薩摩魂を発掘し県民一致して新県風を起こすべく国体の陣頭に立った。総合優勝十四種目をもって天皇杯、皇后杯を獲得。五十一年も天皇杯五位、皇后杯三位の好成績を収めた。教育事務所にはスポーツ担当指導主事が設置され、加盟競技団体四十、加盟市町村九六をもつて組織された県体育協会は、各機関、団体と相提携して競技力の向上と、県民総スポーツを両輪としてさらに躍進を期している。

へ付記)これを書くにあたって、郷土人系(南日本新聞社刊行)と鹿児島県体育史の草稿を参考にした。なお文中敬語は略したので御了承いただきたい。

(鹿児島県体育協会事務局長)

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史



—富山県—

二 川 卯 吉

一 はじめに

立山たてやまの空にそびゆる雄々しさに

ならえとぞおもう御代の姿も

立山たてやまにふり置ける雪を常夏に

見れども飽かず神からならし

前者は今上天皇が皇太子の頃、行啓の折、雄大な立山連峰をめで
てお作りになった御歌であり、後者は万葉の昔、越中の国司であつ
た大伴家持が詠んだ歌である。越中平野から仰ぎみる立山は雄大で
神秘的な美しさをもっており、古代の人びとは、この山を神がやど
る霊山と考え立山を神の山としてあがめていたのである。古来立山
を歌ったものは多く、「県民の歌」をはじめ県下中学、高校の校歌
の殆んどといってよいほどが立山連峰を歌いこんでいることは、そ
の雄姿にあやかりたいという気持のあらわれであろう。立山は越中
富山のシンボルであり慣れの的であり信仰の山でもある。

この環境が豪気で質実剛健、ねばり強い越中魂を育てたのだと思
われる。「立山」その名の起こりは「タチャマ」ではなく「タチャ
マ」である。明治・大正の名横綱太刀山峰右エ門（二十二代）は富
山市出身の名力士であり、万葉集から板垣退助が名付けたものであ
る。

又二十代横綱梅ヶ谷藤太郎も富山市水橋町の出身である。古来、
富山は尚武の気風が盛んで、剣山、九紋龍、階ヶ嶽などの大関を生
んできたし、また、名寄岩、安念山、明歩谷、魁傑など、富山に血

縁を持つ名力士も多い。

さてここで本県スポーツの進展を展望してみよう。明治・大正時代はいわゆる基礎時代であって柔道、剣道等が謳歌された。特に富山県は学校柔道で全国上位に進出していたのである。その先駆者としてあげられるのは故正力松太郎十段（一八八五～一九六九）、故湯口正次九段（一八八九～一九六六）、工藤二三九段（一八九三～）等である。



正 松 太 郎

主、日本テレビ、読売テレビの会長をつとめた本県の生んだ逸材であるが、高岡中学、四高在学中、青だたみを血でめるといふ猛練習ぶりで、他校との対抗試合等では必勝の水杯を交して出場するなど常に母校と越中健児の榮譽を一身になつて活躍、その期待に十分こたえたものであった。

剣道において有名なのは幕末の剣士齊藤弥九郎である。氷見の出身で幕末の三道場の一つである鎮兵館主で門下に武田彦九郎、藤田東湖、桂小五郎等があり、水戸公の知遇をうけ時代を洞察し、人格の高潔卓越した人物であった。外に齊藤雅直、齊藤理則等幾多の名剣士を輩出した。降って湊辺邦治、中山博道、白井久雄、苗加鉄次郎等があげられる。特に湊辺邦治は大日本武徳会の助教授、武道事

では「の合言葉通り臥薪嘗胆の結果であり、当時の知事をはじめ、県関係者、体育協会、各競技団体など、県民一体となつての辛抱強い精進のたまものであった。ワインレッドカラーにみられる県選手団の特色は、ここに漸く基礎づけられ、体育スポーツのレベルも上り、第一級級選手の強化と共にスポーツ人口の拡大、体力づくりの一環としての新しい時代を迎えたのである。その後、昭和三十一年開かれた第十八回東京オリンピック大会には九名の選手を送り出した。体操の三栗崇（金メダル、東海大教員）をはじめ、レスリングの堀内岩雄（銅メダル、日大商学部教員）、マラソンの寺沢徹（倉敷レイオン、朝日国際マラソン、別府毎日マラソン優勝）高障害の安田寛一（新日鉄富山）、競歩の江尻忠正、走幅躍の河津光朗、フエシングの岩原多美子（旧姓保井）、ボートの松田征男、水泳飛込の山野外嗣夫等がそれである。

次に大書すべきものは、北陸で最初に行われた「おおやま国体」（即ち、第三十一回国体冬季大会スキー競技会）であろう。「立山に美と力と友情と」を合言葉に県民の総力を結集して開催され、それを契機に県民の冬季スポーツに対する理解と関心が飛躍的に高まつて来たのである。しかも成年男子（教員二部）純飛躍に最上満（上滝中教員）、同複合に篠村幸夫（高野小教員）、教員一部大回転に山中茂（雄山高教員）、同一部に中村昭男（雄山中教員）等の優勝者を、その他多数の入賞者を出し多大の成果を収め、簡潔にして実りのあるモデル国体として有終の美を飾つたのである。今や県民は中田知事（体協会長）のスポーツに対する深い理解と熱意ある推奨

門学校の初代剣道主任教授となり、当時東（東京）に中山博道、西（京都）に湊辺邦治ありと日本剣道界の話題の的であり、しかもいみじくもこの二人は共に富山県出身の剣士であった。

大正の後半、陸上競技をはじめ各種球技、スキー等の導入に先輩諸氏の開拓的努力がなされた。その結果、大正末期に始まった明治神宮大会への出場に始まり、昭和三年県体育協会（会長白根竹介知事）が発足してから各種スポーツ団体が組織化され、戦前の発展期を迎え、陸上競技大会、学校対抗競技会等、百花繚乱たる観を呈して来たのである。第一回明治神宮体育大会では陸上競技（青年団）走幅躍に、故国技清作が見事優勝の偉業をなしとげている。

昭和十三年を境として次第に戦時色が濃厚となり、東京オリンピックが返上と決定され、学徒は戦場運動にかりたてられ、スポーツの暗黒時代を迎えたのである。

そして戦後のスポーツの復興は食糧事情や生活状態が極度に悪化していたにもかかわらず他の文化活動に先んじていち早く立上ったことは、本県スポーツ界先輩諸氏の熱情のほとばしりと言わなければならない。特にレスリング、ボクシング、ウエイトリフティング、クレー、ライフル、フエシング等を取りあげたことなど本県人らしい先駆的意欲が見受けられる。

本県スポーツ史の中で庄巻として特筆大書すべきものは、昭和三十三年に開催された第十三回国民体育大会であろう。昭和二十六年頃から早くもその誘致にのり出し、最初の民宿をとり入れたモデル国体として成功を収めることができたのは、スポーツ人の「国体ま

により「県民一人一スポーツ」のスローガンのもと体力増強に、競技力の向上に邁進しているのである。以下いくつかの競技について順を追ってのべることにする。

二 各競技団体

相 撲

郷土出身の梅ヶ谷、太刀山の両横綱を頂点として本県から輩出した五大関、三関脇、三小結、他十八名に及ぶ幕内力士の盛況ぶりと活躍ぶりは越中の若者達の血をわかせた。現在と違ってスポーツといえは相撲か柔・剣道か野球という中で、日清、日露戦役での戦勝が一層相撲熱を高め、県下全域に草相撲、花相撲、奉納相撲といった大会がひんばんに開かれ、力自慢、技自慢の青壮年達が締込一本を自転車荷台にくくりつけて転戦した。中でも立山山麓の新川地方では十三部屋と称し、後輩育成の任に当たる親方をもつ、現在のクラブ制の先鞭ともいえる組織と名称が今日も受け継がれている。当時の相撲は盆踊りと共に現在のレクリエーションのはしりともいえた。また土気の鼓舞のため軍隊相撲が行われたが、その中でも「海軍相撲掃り」、学生相撲出身者、地元青年が三つ巴となり覇を競い、更に関東、関西の大学や地方巡業の大相撲を招き、対抗戦を行うまでに盛況を極めた。学生相撲界の本県出身は入江松次（富山商船→明大、県議、大学大会個人準優勝二回、アメリカ遠征、相撲・柔道共九段）が先達で、続いて第十九代学生横綱となつた城崎将雄（拓大、大学選手権団体四連勝）が双壁と共に健在。城

崎氏は現在も郷里の小、中学校に土俵をきざす少年スポーツ教室の指導につとめている。更に全国のアマチュア相撲界の指導者としての故橋喜朔（砺波中→日大、同体育局長、前日本相撲連盟理事長）は、日大の総帥として黄金時代を築き輪島、魁傑、荒瀬などを今日あらしめた名伯楽。次いで全日本実業団連盟を創設して実業団相撲の振興に尽した会長、理事長コンビの大谷竹次郎（大谷重工社長）と故根塚繁夫（中大、大谷重工総務部長、尼崎市議）があり、この三氏のアマチュア相撲界における功績は大きい。大谷、根塚両氏は富山国体の強化練習に当時のアマチュア選手権者、平聖一選手ほか、麾下のコーチ陣を経費会社もちで中心校の小杉高校へ長期派遣した。一方、全国大会に出場した郷土選手と共に橋理事長が指導激励しつづけた。橋理事長から締込鞭をもらった選手は数十名を下るまい。この環境の中で先ず高校が開花し、小杉高校（本保菱雄監督）が選抜で全国制覇し、更にインターハイで早実に惜敗したが準優勝や三位（四回）で地歩を固め、更に稲沢勝夫（富山水産）が全国東西対抗で軽量級を制し、香川文二（福野高校→早大）が全国金沢大会の決勝戦で輪島を寄りきって三万観衆をわかせた。

小杉高校を出て日大に入った富田政英が大学選手権で準横綱になり今一步のところで先輩城崎のあとをつげなかった。中学校も高校に刺激され大門中学が全国優勝し個人でも正水（氷見南部中学）が中学準横綱となり、その後も県勢は上位入賞を果たしてきた。

一方全国青年（体重別）大会では早くから県勢が入賞を続け、婦負郡に引き続き黒部市が共に国技館で全国制覇をとげ、更に青年の部

は熊本国体でも準優勝した。先述の香川、富田らをふくむ一般の部は鹿児島国体で団体準優勝するなど、本県出身のプロ勢の退潮に比しアマチュア界での越中相撲は全国上位に定着してきた。この原因は先にあげた先輩に加えて特に国体のリハール大会として開かれた全日本選抜実業団相撲大会を今日まで継続的に開催しつづけてきたこと、今一つは本年第五十回の記念大会をむかえる県下青年相撲選手権（大正十二年創始）の功績があげられる。伝統の青年相撲は県下最古の歴史を誇る大会として相撲人はもとより全てのスポーツ人の活躍の場になり、柔道、レスリング、ラグビー、陸上の投てき陣、野球の捕手などの多彩な面々が県内十六郡市に分かれ、万余の観衆をあつめる年中行事として相撲の普及に大きな足跡を残してきた。しかし今後は、競技人口の増大と普及、老齢化した指導陣の若返りへの補充、強化などに幾多の課題をもっている。

柔道

明治四十四年、文部省通達により旧制中等学校に正課として柔道（武道）が課せられることになったがそれに先立ち富山中学が明治二十八年、高岡中学が明治四十一年に運動部活動としてとり入れており、これを機に富山中学が講道館より県出身の故舟崎清藏二段（後八段）を、高岡中学が故磯貝誠三段を迎える。その他の学校でも専任の柔道教師が採用され加速度的に発展し、大正四年には県内第一回中学校武道大会が開催されるに至った。その後、一般、警察、武徳会、学校を通じて柔道が目ざましい普及発展を遂げると共に県内外の各種大会も盛んに開催され、爾後大東亜戦争勃発に至る

間、これ等大会に参加した県選手は優秀な成績を挙げ幾多の名選手や指導者を輩出して伝統を築き上げた。主な戦歴と人脈をあげてみると、一般の部においては第三回明治神宮大会（大正十五年）に青年団の部で団体優勝、大日本武徳会全国青年演武大会（昭和二年）に団体優勝、中等学校においては、全国中学校柔道大会（第二回、大正九年）に富山師範準優勝、富山中学三位、同第三回大会（大正十年）富山中学優勝、第七回大会に神通中学が準優勝（優勝した御影師範と引き分け抽せん負け）、北陸関西中学校柔道大会、北信五県大会においても常勝を誇っていた。その頃活躍された人々には今は故人の萩野啓助八段（天覧試合出場）^{三鍋義三七段}（全国高専大会優勝、衆議員議員）、香川弘八段、高広三郎八段、金子周造八段、畔田与秋八段（明治神宮大会個人優勝）、志甫周平七段（全国選抜青年柔道大会個人優勝）等であり、現在もなお活躍中の人々には入江松次九段、高島吉次郎八段、坂井吉雄八段（県柔道連盟会長）、堀健治七段（高岡市長）、浦上与市八段、老松信一八段（電通大教授）、山岡保孝八段（富山第一高校）等がある。以上の外にも本県柔道の普及発展に貢献した人々が多く、中小県としては珍らしくレベルが高かった証である。戦後活躍した人々には昭和二十四年から三十年まで連続で全日本柔道選手権大会に出場し、二十八年度に準優勝した伊藤秀雄八段（旧姓大久保、名古屋矯正管区柔道師範）、久保照夫七段（県警察道師範）等があり、一方学校柔道も昭和二十七年再び体育の選択科目として採用され、高校生を自宅に泊めて指導する熱心な向健三教諭を中心に徐々に戦前の盛況をとりもどしつ

つある。活躍した人々には全国警察柔道大会個人優勝の裴浦登司広（県警）、山地隆雄（県警）、国際柔道大会（昭和四十年）軽量級優勝、第五回・六回世界柔道選手権大会軽中量級二連勝の湊谷弘（砺波高校→天理大→金沢工業大学助教教授）、第十七回全国高校柔道大会重量級優勝の松永義雄（砺波→東海大→東海大講師）、昭和四十三年・四十四年の全日本学生柔道選手権大会軽中量級、軽量級にそれぞれ優勝した津沢寿志（砺波→中大）等有名選手が多い。又、砺波高校は国体においても二、三位を、全国高校柔道大会にも二、三位を占めている。以上のような現況をふまえ、更に飛躍的な向上をめざし、指導者の一人ひとりが情熱を堅持しつづ、たゆまざる精進をつづけているのである。

野球

明治二十九年富山中学（現富山高校）が神通川の河川敷でベースボールを始めたのが最初である。当時のメンバーには故牛塚虎太郎（元東京市長）等がいた。三十二年に魚津中学、三十五年高岡中学が始め、ボールも硬球を使用し、純びれば縫い、破れば継ぎして使えるだけ使った。富山野球界の元老、故吉田友三郎、故西塔公俊、故志甫徳次郎等はこの期間に育成された逸材である。大正時代に活躍された人に、故高井三郎、故三鍋義三、宮川三郎、館川宗清、故高広三郎、故梅田新三郎、高島正雄等があげられる。また大正、昭和にかけて少年野球に情熱を燃やした細正信（県野連副会長）は各種大会の運営とともに審判技術向上のため、審判員育成につとめるなど、その功績が認められ、敘勲の栄に浴した。



昭和に入って活躍した人
には、武内宗八、磯野芳
夫等があげられる。昭和三十三年富山国体を迎え、ス
ポーツへの関心が高まり、
この年甲子園にシシキロー
旋風（魚津の近くの海にし

んきろうの見えることがまれにある）がまきおこった。初出場の魚
津高は浪商、明治、桐生を破り、準々決勝で徳島商高と対戦。村椿輝
雄と板東英一との死力をつくす投手戦は大会初のナイターとなり延
長十八回、零対零で引き分け、翌日の再試合で涙をのんだ。しか
し、村椿投手が一回ごとに球をビッチャーズプレートに返すマナー
の良さは魚津高チーム全員のマナーであり、魚津のホタルイカと共
に光彩を放ち、現在にいたるまで語り草となっている。

巨人軍の王選手の母親は富山市生まれで、その巨人軍は高岡出身
の故正力松太郎が昭和九年に創設。大洋の捕手魚満芳（新湊高校、
阪急の内野手大橋獲（亜細亜大↓東映）、クラウンの吉岡悟（富山
商）、ロッテ捕手土肥徳二（高岡商）、大洋内野手清水透（佼成学
園）などもある。

軟式野球も盛んで第三十回国体（三重）では武内プレス（社長は
県野連会長）が優勝している。社会人野球では昭和八年全国都市対
抗において優秀選手として表彰をうけた。堀行弘（神通中↓名鉄）、
六大学野球で活躍した選手には、東大↓島村（神通中投手）、井波、

選手権バンタム級優勝）、中島治郎（早大OB）、川尻建三（早大
主将）、平野万司（早大主将）、渡波節儀（中大OB）、神谷文二
（明大OB、国体優勝）、相山紘治（明大OB）等多くの著名選手
を輩出し黄金時代を築いた。

その後、高岡商業高校、富山第一高校にもレスリング部が誕生
し、高村勝義（拓大OB）、沢田修（大東大）等がアメリカ遠征、
オリンピック候補にあげられた。

このような実績の影に富山県のレスリングを育て上げ充実させた
浦田教師の努力があったことを忘れてはならない。これらの功勞に
より氏は昨年文化の日富山県知事より表彰をうけられたのであ
る。

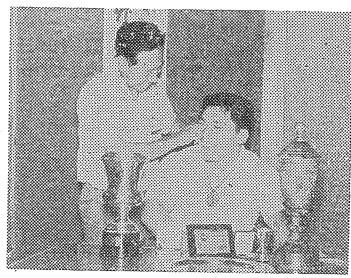
卓 球

昭和二年、富山県卓球協会が創立し、その初代理事長に県卓球界
の草分けの一人である重杉俊雄（富山県庁）が選ばれた。それまで
の「ピンポン」も「スポーツ卓球」となり以後長足の進歩を促した
のである。二年後の第二回東郷優勝旗争奪全国大会に市立富山高等
女学校が全国制覇をし、更に進歩を上げた。以後国体や全国高校卓
球大会等に数多くの入賞者を輩出するに至った。戦前活躍した選手
に木谷政雄（安田鉄工）がいる。昭和初期から三十年代まで息の長
い選手であった。又彼は自分の家の土蔵に卓球台を置き後輩の指導
にも熱心であった。その門下生から戦後、一上貞夫（高岡工専）、
奈部谷秀一（高岡工業高校）等優秀な選手が生まれた。両氏は日英
交歓卓球大会、日印交歓卓球大会に参加し、その名を広めた。二上

堺（高岡中内野手）、早大↓谷井（八尾高投手）、慶応↓浜谷（永
見高捕手）、明治↓岡崎（富山商投手）、道吉（富山商内野手）等が
挙げられる。

レスリング

本県レスリングの発祥の地は「ホタルイカ」で有名な、人口三万
余りの滑川市である。昔は米騒動でも有名な熱血の町で、滑川精神
のあらわれか、陸上競技では「スパルタクラブ」、軟式庭球では
「鉄壁クラブ」などの名があり、スポーツの盛んな町である。ここ
の滑川高校にレスリング部が



堀内岩雄(右)と
喜義(左)
優勝を喜ぶ
浦田久義

が発足したのは、昭和二十二
年、情熱の人、浦田久義教師
が赴任してからであった。昔
の柔道量を昇降口のセメント
の上に敷いて練習を始めたの
が最初である。黒田市長の息
子、汎が第一号といえよう。
土地柄、彼は立浪部屋へ入り
序二段まで進んだが、明大へ

進んで、世界選手権（トルコ）に出場、ウエルター級五位になっ
た。後輩の石倉俊太（明大主将、世界選手権、ローマオリンピック
代表↓現県レスリング協合理事長）が「鬼の石倉」と呼ばれ、スパ
ルタ式コーチにより、堀内岩雄（日大OB、世界選手権ライト級優
勝、東京オリンピッククライト級三位）、福田富昭（日大OB、世界

氏はその後世界卓球選手権大会に日本選手団総務として出場。奈部
谷氏は県卓球協会副会長として卓球の普及振興に努力している。女
子で頭角をあらわしたものに宮城日出子（富山商業高校）がいる。

高校時代に県体三連勝、九年連続国体出場など輝やかしい実績を
残した。日清紡富山に入社してからは、湊谷圭子（福野高校）、西
村律子の良き先輩に恵まれ、更に上達し、第九、十回県体は湊谷、第
十一、十二回は西村、第十三、十五、十六回は宮城と三人で県内の
大会で優勝を占めていたものである。この良きライバルのおかげで
西村選手は昭和三十三年の全日本軟式卓球大会に優勝、湊谷、宮城
両選手は昭和三十七年の岡山国体軟式男女の部決勝で東京都チーム
に三対二と惜敗したものの準優勝という成績をおさめた。その年の
秋の中学選手権大会に優勝し頭角を表わしたのが福野美恵子（藤園
高校）である。高校二年の時、全日本卓球選手権ジュニアの部でベ
ストフォーに入り、三年になってからは北信越大会三冠王、全国高
校卓球選手権で優勝、更に専修大学に入学してからは、日中対抗、
世界選手権出場と本県出身としては輝かしいページを残した。又同
じ藤園高校出身の後輩をひきつれて埼玉、福井国体連続優勝と立派
な成績をあげた。

このほかに活躍した選手としては昭和三十一年全日本卓球選手権
ジュニアの部に優勝した米田従道（魚津高）、昭和四十年全日本
卓球選手権ダブルスの部に優勝した斉藤敏男（砺波工業高校↓早
大）など数多くの選手が全国大会で好成績を収めている。このよう
な好成績のかげに幾多の監督、コーチ陣の苦勞のあったことを忘れ

てはならない。
バドミントン

富山県の入善町での全日本レクリエーション大会（昭和二十三年）にバドミントンが競技種目として採用された頃、県内の庭球経験者や、太平洋戦争の南方方面からの帰還者のバドミントン経験者が指導者となり、戸外で縄を張って羽根を追う人が日ごとに増え、又各地での講習会や交歓会が開かれ県民に関心を与えた。昭和二十四年、村松文雄（十条製紙伏木工場長）を会長に推し、川倉馨（県教育委員会）を初代理事長とし、県バドミントン協会が発足した。

その年第一回富山県バドミントン大会が高岡市で開かれ、全国的にも気運が盛り上がり、日本バドミントン協会の結成がなされた。バドミントンが団体種目に採択されるや富山県の男子に清水、筆谷組（十条製紙伏木工場）、女子に斎藤、西田組（富山南部高校、現在の富山高校）を送り競技の先進性と県民の真摯な気性の一面が躍如として出ているといえる。この成果は第一回全日本実業団大会（昭和二十七年）の団体優勝で開花し始めたのであって、その十条製紙伏木工場チーム（監督、石上実、選手、清水正、筆谷浩二、工余夫、宮下芳一、釣谷友一、佐野善次郎、正村慎一郎）は以来三連勝。翌年高岡市にこの大会を誘致するや毎年優勝街道を薦進し七連勝、通算十回目の優勝という大偉業を成し遂げた。昭和三十三年の第十三回国民体育大会にはバドミントン競技は高岡市で開催され、ときの理事長故森本一雄が高校女子の中島玲子（高岡女子高校）、高嶋洋子（高岡商業高校）の二人を軸に中央から講師を招聘して強

化を重ねた。その結果高校女子第二位、一般女子も五位に入賞し皇后杯二位の総合成績をおさめた。



金 森 藤 平

これが県下の高校生や指導者に大きな自信と誇りを与えたのであった。

ときに協会長も二代目の金森藤平（金森商事社長）にバトンタッチされ、関係

方面の財政的なバックもあって県下で他の競技団体の追隨を許さない強力なものであった。コーチの人材も豊富で、宮地次吉、江尻兼三、瀬川浩、清水正、中山邦夫、内多小五郎、不破裕、川上洋一、大野幸雄、と多士済済である。

さてこうしたことを背景に実業団、団体の好成績など次々と立派な競技成果を収めるとともに、日本的、国際的選手を送り出している。団体では二度の総合優勝、全国高校総体では、男子が団体四回（富山商業高校、三回、高岡商業高校一回）個人戦、シングルス七回、ダブルス六回の優勝を遂げ、女子も団体一回（高岡女子高）、個人戦、ダブルス一回の優勝を飾っている。外に入賞者の数は枚挙にいとまはないが、これらの入賞者の中から国際的に活躍している人達が多い。ダブルスのチャンピオンの池田信幸、桐野尾昌一（富山商OB）、最近自信をつけ大器の片鱗をみせている尾崎幹雄（富山商OB）、谷口寛（上市高校OB）、地元富山県で万丈の気を吐

いている高岡市役所チームの河村博之、今泉勉、関村順治、牧野光男、米沢和男、米原照男の面々が内外でバドミントン富山の名を上げている。女子では大学一年生ながらナショナルチームのメンバーに選ばれた米倉よし子（藤園女子高OG）の成長が期待される。今後とも一層バドミントン王国の名を確固たるものにしたいものである。

ライフフル

新興スポーツの一つとしてあげられるのはライフフルである。呱呱の声をあげたのは昭和二十五年二月、富山中学（現富山高校）の北西にあった高さ十メートル位の土山のふもとに標的を立て、付近に立入禁止の縄張りをして競技をやり関野邦夫（世界選手権大会監督、旗手→国鉄本社）を中



八 筒 章 介

心に同好者が集まり、苦しい運営を行い、それが実を結び昭和三十一年、関野がメルボルンオリンピック候補に推せんされ、翌三十二年、全日本ライフフル射撃選

手権スプリング式空気銃三姿勢に油本一位、伏射に沢村一位、同年、第十二回団体には空気銃三姿勢に本県チームが団体優勝（野口、石倉、沢村、油本）、国産スプリング式空気銃三姿勢に野口時雄が優勝、空気銃伏射に本県チーム（石倉、野口）が優勝、国産スプリング式空気銃伏射に野口時雄が優勝するという金字塔をうち立

て一躍射撃を通してスポーツ富山の名声を博した。その後、会長土

岐幸隆（県総務部長）をはじめ副会長兼理事長笹倉義信等役員一致協力して強化充実を図り苦節十数年第三十一回団体エアライフル伏射の部に大会タイ記録で八筒章介（富士薬品工業）が優勝し、再び射撃富山の名をあげた。

山 岳

立山は信仰の山として開かれた山である。この信仰登山のガイドとして立山とともに生きて来たのが芦峯の人たちである。立山の登山口芦峯には数多くのガイドが居り、「六根精浄」を唱和しつつ宗教登山が行われたものであるが、芦峯の誇り高き名ガイドは佐伯文蔵とその娘婿の佐伯富男が有名である。

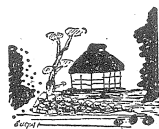
佐伯富男は幼時から山に登り、村の伝統的な登山技術を身につけ、さらに長じて北大に学び山岳部で近代アルピニズムの先鋭的登山技術の洗礼をうけ、三十一年の第一次南極越冬隊に参加、その他ヒマラヤ、アラスカに足跡を残す名ガイドである。

アマチュアの県山岳連盟は藤平正夫（北陸銀行常務）、太田昭理事長（北陸電力）、松本陸男事務局長（同）、林勝次（富山大学長）、堀田弥一（安田興業）、中田清兵衛（日本山岳会富山支部長）など関係者は多彩である。

（富山県体育協会専務理事）

人物を中心とした

— 体育・スポーツ郷土史 —



— 兵庫県 —

棚田眞輔

五つの顔

兵庫県は、水仙が咲き誇る淡路の南淡町沼島から、日本海の荒波が海蝕崖の裂け目に散る浜坂、竹野、香住海岸にいたる南北は一六六・四四キロメートルあり（東西は一一〇・九八キロメートル）、面積では八三・四二・四七平方キロメートルもあって、近畿二府四県で最も大きい。

明治四年に「廃藩置県」が公布されたときの兵庫県は、摂津のうち八郡、菟原、武庫、有馬、川辺の五郡に限られたごく小さい地域であったが、明治九年に豊岡県の但馬および多紀、氷上の二郡と名東県の淡路に、飾磨県の播磨が加わって、県発祥の母体であった兵庫の地名が残され、現在の兵庫県が誕生した。こうして北の日本海から南の瀬戸内海にいたる本州における本県の地域は、中国山脈によって完全に二分され、さらにこの本州と明石海峡を隔て淡路島が付属するという全国でもあまり例を見ない特色のある顔を持った兵庫県が構成された。古代以来の生活で身についた摂津、播磨、丹波、但馬、淡路という五つの顔は、現在もなお社会経済的な事情の違いを表わす区分として意味を持ちつづけており、本県の出身者が郷土を聞かれると、「兵庫県」とは答えずに、多くは「但馬」とか「淡路」というように返事する。

このように歴史的にも地理的にも多様な単元の「寄せ集め」な性格を持つのが兵庫県であり、当然のことながら体育・スポーツも五つの顔を持った寄せ集めの影響を強く受けており、あたかも日本

の縮図を見ような錯覚すら起こさせるほどである。

港と背山の町神戸

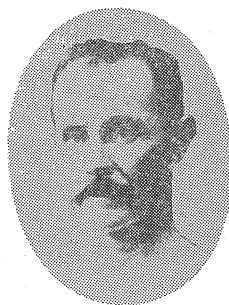
山で出会った あの人と

今日は港で こんにちは

さあさあおいでよ 神戸のまつり

神戸ええとこ ホンマニホンマ 若いまち

花と海と太陽の祭典の神戸まつりでこの神戸まつり音頭が市民に歌われているように、六甲山は神戸の庭であり毎年六百万人近い登山者でにぎわい、港は現在の大神戸繁栄の基で、昔から設備の完備した貿易港として内外船の出入りにぎわって来た。神戸のスポーツは開港後居留地に住むようになった外国人達によって、この六甲山と港を舞台に先鞭がつけられた。居留地は「雨期には膝を没する沼地になり、夏には肌を灼く埃だらけの砂原と松林で何らの価値のない土地だ」と言われるほど不適当な場所であったが、彼らは数年後に、「インドやペルーの富をいっばいめこんだ立派な倉庫が建ち



A・C・シム

並び繁華街も美しく飾られた。治外法権の別天地をつくりあげ、本国での生活習慣で身につけたスポーツを次々と展開していった。その最初の貢献者は、明治四年に神戸レガッタ・ア

ンド・アスレチック倶楽部(KRAC)を創設したA・C・シムであらう。彼の業績で最も特筆すべきことは、イギリスのパブリックスクールで発生したアスレティシズムの性格の強い競技的なスポーツを中心としたKRACを、社会活動をも含めて外国人共同体として広く一般居留民の参加を促進していったことがあげられる。また居留民の衛生状態をスポーツやレクリエーションによって改良するという名目で、グラウンド設置の要求を外務省を通じ日本政府にして、明治七年「外国人と日本人の間の永久不変の信頼のもと、レクリエーション場として使用する」という通常「一八七五年協定」と言われる覚書を取り交わし、内外人遊園(のちの東遊園地)を居留地に完成させ、そこにクラブハウスやボートハウスを建設し、多様なプログラムを展開するなどしてKRACを神戸における外国人共同体の最も大きな組織の一つに発展させたことである。

浜で財と体力に恵まれ比較的時間の取れる外国人によって競技スポーツが華々しく展開していた明治二十一年に、ケンブリッジ大学を卒業したばかりのW・ウエズトンが神戸に来て、能福寺の近くに住みセントアンドレス教会の教師となり、夏に限って日本アルプスの連山を精力的に開路登山した。彼は明治二十七年にイギリスの著名な山岳会機関誌の『アルパイン・ジャーナル』へこれらの記録を発表し、明治三十九年にはロンドンのジョンマアレイ書店から『日本アルプス登山と探検』を出版した。ウエズトンは、ヒル製の簡単なピッケルとロープを持ってH・W・ベルチャーやH・T・ハミルトンの山友達と共に浦口文治を通訳に雇い、日本人の巡礼団が六

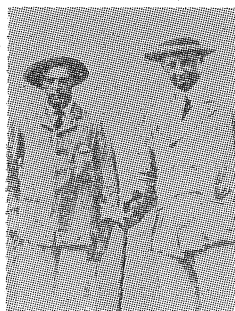
根清浄御山快晴「南無阿弥陀仏」を反復し祈願するのを聞きながら、田舎の宿屋に泊って先駆的な登山を続け、その壮麗な山岳美を出版物によってはじめて内外に紹介したのであるが、これら日本における近代登山の黎明は神戸を出発点として活動したものであった。

その頃神戸でモウリヤン・ハイアン・アンド・カンパニーを経営して茶の貿易をしていたA・H・グルームが六甲山上に別荘を建て、それを居留地にある自分の商館番号と同じ「百巻」と呼んで住み、良きような土地に別荘を建てては外人仲間にも山頂生活を宣伝して、五・六年後には赤い屋根の洋館が建ち並ぶ夏期異人村をつくりあげると共に、明治三十四年に四ホールの日本最初のゴルフコースを開設し、明治三十六年には、神戸ゴルフ倶楽部(KGC)を創設した。彼はイギリス人らしく絵を描き芝居を演ずるなどの趣味を持ちKRAC創設当初から水泳、ボート、クリケット、登山、射撃と好んでスポーツを実施した。

若かったKRACの会員も三十年も経過すると、体力が衰えて激しい競技スポーツに参加できなくなってきたことに気づいたグルームが静かな自然の中でも仲間と楽しめるゴルフの必要性を感じ、いち早く低廉な六甲山頂の土地を確保したことが注目される。

明治三十七年にイギリスの最古のゴルフ雑誌である『ゴルフ・イラストレーテッド』の十二月号にFan Kwai 名で「世界の全文明国の注目が戦艦のサーチライトのように日いつる帝国に向けられている今日、ゴルフ・イラストレーテッドの読者に次のような日本

の記事を報告することは大変興味のあることと思う。」と高らかな書き出しで創設者グルームやコースの写真入りの二ページにわたる記事が掲載されたが、このFan Kwai というのがH・E・ドントのペンネームであった。ドントは明治三十七年から大正九年までにKGC選手権を六回取り、ホールインワンを二度記録し、横浜とのインターボートマッチでは十二回のうち九回までKGCの主将や主力選手として出場しており、KGCのキャプテンを明治三十六年から四か年間、大正十年からは理事長を二か年間勤めるほどクラブの中心的人物であった。ドントはまた、明治四十三年十一月に神戸ガット・マンティン倶楽部(KGMC)を創設し、土、日曜日毎に北野の三本松に集合の後昼食を西六甲の彼の別荘でするという特色ある登山形式で再度山、摩耶山、西六甲附近を活動して、大正四年から九年間にわたり機関誌『TAKKA』を全十八巻発行し、六甲山のゴルフと登山の実績をまとめ、当時の貴重な記録を残した。



左 J.P. ワーデン
右 H.E. ドント

このドントより少し若くて名ゴルフファンのJ・P・ワーデンも、西六甲一帯の別荘とゴルフ場が、夏季の避暑とスポーツ活動にかぎって利用され、寒冷の激しい冬季には閉鎖されて山上一帯が無人状態になるので、ゴルフ友達とのA・T・ホワイト、J・D・トンブソン、P・L・スペンス、J・G・

S・ゴースデンなどをさそい出し冬の六甲山全域に楽しみを求め、別荘を利用して土、日曜日の休みに一団となって行動を起こした。彼らの活動が、神戸のインテリ層を刺激し、これが庶民層にまで影響して生活圏内にある六甲山に親しみ健康増進と仏閣名勝巡拝を主眼とした、いわゆる神戸登山団体が山の中にいたる所の茶屋を根拠地として発足した。また大正十三年に、ロッククライミング倶楽部(RCC)が、藤木九三、直木重一郎、三木高嶺、榎谷徹蔵、後藤正彦、加納一郎、米沢牛歩、富田碎花、毛間新次郎、西岡一雄、小川五十郎、中原繁之助、影山寅造、ゼーパーワーズ(日本名、赤星清人)によって創設された。

ドント、ワーレンによって洗礼された積雪期の山にいどむ登攀熱が、京阪神のこれらの山の猛者達を呼び起こしたのであり、高山岳への攻撃に六甲山を舞台として開拓と研鑽を重ねさせ、大正十四年の『岩登り術』をはじめ『RCC報告』(昭和二年)などを発行させたのである。さらにこのRCCの流れをくんで新進気鋭の学生の山岳部が関西学院、甲南高校、神戸高商に創設され、大正、昭和における兵庫県登山史のうえに大きな足跡を残した。

知事や神戸市長の果たした役割も誠に大きいものがある。その大先覚者として明治三十三年に第十三代目の知事に就任した服部一三があげられる。

十五年間の在任記録を残し退職後も七十八歳で死去する昭和四年までずっと神戸に住んで、兵庫県飛躍の重大な時期を見守った。彼

姉の順子と共にこのクラブでラケットを振った。国体で本県のテニス陣が連勝を重ねているのもこのクラブの主力選手の活躍に負うところが大きい。

KLTCは数度移転し、現在は真合区宮本通一丁目にあるが、移るについて、原口忠次郎元市長や現宮崎市長が協力しているのも神戸市長に伝わるテニス愛好の伝統である。テニス兵庫の名も大正十四年黒瀬市長のテニス熱に端を発している。

工学博士で『弾性基礎上の短形板』、『技術屋の夢』など多くの著書を出し、昭和二十四年以来五期連続して市長に当選した原口忠次郎が独自の健康法を加味し、いわば原口式ともいうべき健康体操を作り、昭和四十三年『健康のすすめ』を出版し、精神と身体両面による活動で体内の代謝をはかろうと主張したことも注目されよう。また原口市長のもとで十六年間助役を務めた宮崎辰雄が、昭和四十四年原口氏のあとを受けて市長となり、自ら神戸市体育協会長や県山岳連盟の会長をして、アラスカやネパールの高峰に登山し、昭和四十七年には日中国交正常化が国会で決まる前から日中友好青少年水泳選手団長となり中国各地を親善訪問するなどして日中スポーツ交流の立役者となっていることも見逃せない。

県下の体育スポーツの普及振興に大きな影響を与えた御影師範学校の体育教師を見よう。さすが教員養成の学校に勤める専門の指導者だけに古くから各方面にその足跡を見ることができ、高等師範や体操伝習所の関係者が書いた指導書の内容と遜色なくほぼ同期

は東大の予備門主幹や各科の総理時代に、当時バッテリーと言われたボートを採用し学生に漕艇熱を高め、明治十六年六月にはF・W・ストレンジの提唱で開催された運動会の指揮官となり、洋傘を振り下してスターターを勤め、服部のやぶれ傘、というニックネームがついたという人である。明治三十六年KGCの九ホール開設式に招かれ処女ショットとスピーチを依頼された時、「色々なる屋外遊戯が外国から日本に輸入されまして、今日では大変盛んになってまいりました。日本と外国との習慣の相違は、日本では戸外運動をする人は若い人と決まっていますが、外国では老人である点であります。それが証拠に皆様の頭の毛を見て御覧なさい。日本がもしも次の時代に強壮なる国民になろうとするには、この点を我々は学ばなければならぬと思います。」とユーモアを交え格調高く結んだ。

大正十四年に第七代目の神戸市長に就任した黒瀬弘志が坂本助太郎、吉川小三郎、横田地直内、森堅吉、曾根軍太、白石英一郎らと発起人となり神戸ローンテニス倶楽部(KLTC)の創設に乗り出し、松岡潤吉などの奔走もあり比較的早い時期にクラブ制を採用して目ざましい発展をさせた。昭和十年頃までKLTCで活躍した会員や外来の名プレイヤーをあげると、熊谷一弥、原田武一、清水善造、布井良助、鳥羽貞三、佐藤俵太郎、福田雅之助をはじめ辻秀吉、村上保男、秋本収、吉岡和治、堀越春雄、鶴原謙造、伊藤英吉、桑原孝夫、山岸二郎、村上麗茂、永光正一、牧野元、関沢房豊、川崎日出男らがいて全日本大会や国際大会に活躍した。

昭和五十年にウィンブルドンダブルスで優勝した沢松和子も、

に多様な書物を出版したのが松岡彪と佐藤福雄である。松岡は『小学体操書』(明治十九年)のほか体操や兵式体操の指導書を出し、佐藤は『実験遊戯』(明治三十二年)をはじめ多くの遊戯書を出し、動的遊戯を提唱してその頃高まりつつあった遊戯研究に一層拍車をかけた。この二人は、時代は異なるが同じ御影師範の卒業生であった。体育の実技やスポーツ指導については枚挙にいとまがない程である。県書記官であった武田千代三郎が明治三十二年から同校生徒に運動を奨励し、ストレンジ伝来のボートと長距離走を指導した。彼の指導は「あぶら抜き練習」と呼ばれる厳しいものであった。武田は後にこの体験にもとづいた『実験運動競技』を書いたが、武田の意を体した徒歩部長高宮龜善の情熱と尽力が御影師範の長距離走の伝統を作り、井上寅之助、竹内惣太郎、沢田武哉、弓岡広次、相原弥三郎、菅原貫治、向井繁次郎などの優秀選手を育成した。また剛剣の剣風に加えて試合の理論と技術を教えた剣道の吉田専吉、明治四十二年にア式蹴球部を創設した玉井幸助と彼の後を引き継いだ神谷怡之吉の功績も見逃すことはできない。

学校のスポーツ活動で顕著な成績がみられる場合かならずと言って良いほど担当教師の意気と気魂のほかに学校長の協力や理解がみられ、例えば「運動即宗教論」を説いた池田多助(県立第一神戸中学校)、東大卒のサッカー校長高山忠雄(現神戸高等学校)、女生徒にスポーツの普及をはかった篠原辰次郎(県立第一神戸高等女学校)ほかに水島鎮也(官立神戸高等商業学校)、平生鈺三郎(旧甲南高等学校)などの校長がいた。

指導者としては日本バレーボールの組織と技術の基礎を確立した多田徳雄（官立神戸高商）、サッカーの河本春男（神戸一中）、新しい年代ではサッカーの中村久（長田高校）、卓球の沢田敏夫（神戸市立商業高校）、高校野球の釜内利夫（神戸市立商高）が永年により尽力した。このような指導者によって水泳の白山源三郎（官立神戸高商）、バスケットボールの岡三郎（県立第三神戸中学校）、東京教育大学教授の和田健雄（神戸三中）、サッカーの右近徳太郎（神戸一中）の日本的な大家が誕生している。

昭和五年六月に兵庫県体育協会の発会準備委員会がもたれたがその時、能谷一弥（テニス）、加藤吉兵衛、松田捨吉、村上彦一（野球）、多田徳雄、檜崎正雄、大谷（陸上）、和氣肇（ラグビー）、玉井操、岩野次郎（サッカー）、藤井正太郎（水泳）、村治清治郎（柔道）、早坂広道（剣道）、真野太郎（漕艇）、小山伸夫（卓球）、清水（軟式庭球）、山地四郎（乗馬）の十二種目の代表が集まり会長に高橋守雄知事を推し協会が発足した。その後白根竹介、湯沢三千男、岡田周造、関屋延之助、坂千秋の各知事が会長を歴任しその間事務局は県学務部社会教育課におかれた。終戦後阪神間で国体が開催されることなどいち早く再組織されたが、昭和二十四年からは田村亨（田村商會会長）が会長をつとめている。

野球とテニスのメッカ阪神

酒造の歴史で「灘の生一本」よりも古い小西酒造が伊丹にある。この土地は寛文元年に関白太政大臣の近衛基綱が領有していて、財

にあたることから、甲南と号した事を附記しておきたい。

西宮に若人の祭典の高校野球に使用される甲子園球場がある。第一回中等学校優勝野球大会は大正四年に豊中球場で実施されたが、第三回大会（大正六年）からは西宮市鳴尾で、更に後には同市甲子園で開催されている。大正十三年に完成された甲子園球場は、この年が六十一年に一度しかめぐってこない甲子の年であったことから甲子園と名づけられた。当時東洋一の球場建設に大英断を下したのが阪神電鉄の三崎直三専務で、入社したばかりの青年技師野田誠三に設計を命じ佐伯達夫、小西作太郎、腰本寿、加藤吉兵衛、松田捨吉等を設計顧問に依頼し大林組に建設費百万円で請負わせた。以来、この球場は代々の場長をはじめ関係者の努力によって、多くの球児が日頃鍛えた技と団結を発揮するのにふさわしい野球のメッカとしての責務を十分に果たしている。

この西宮市に大正八年全国競泳大会を開催した西宮帝國水友会があり、極東大会の背泳ぎに三好康和、中田留吉、松本楢雄、自由型に野口末吉、粕谷二郎、平泳の足立祐次らが出場し、第五回全日本水泳大会の二百メートルリレーで鴻沢吾老、石田恒雄、吉川義一、入谷唯一郎が二位となるなどの活躍をした。彼らは香櫨園水泳場を開設し一般住民の水泳教室を開き、松本千吉、高島秋介、高石勝男、高島裕雄らが先輩からの伝統を引き継いだが、第二次世界大戦で中堅の指導者が応召し致命的な打撃を受け、海水浴場は閉鎖し水友会の活動も中断した。西宮帝國水友会の理念と伝統は高石勝男に

力を誇る小西酒造の小西新右衛門が政治経済面にわたる町の代表者である総宿老をしていた。新右衛門は自分の屋敷内に能演場を建て、多くの武芸者を呼びよせ屋敷の警備に当て武芸十八般にわたる稽古をさせた。これが後に修武館と改称され明治期に小西業茂が自ら撃剣柔術の師範となり、修武館長を兼任して自家で働く青少年や土地の若者を指導し、明治三十年に天道流十四代宗家の美田村頭教を招き薙刀を科目に加え、武道摘要をつくり一貫した指導目標を形成した。彼は道場での指導のかたわら御影師範や近辺の中学校にも指導に出かけ剣道の普及に尽力して明治三十九年に没した。この伊丹からそう遠くないところの御影にあって灘の酒造家として知られる嘉納一族に講道館柔道を



嘉納五郎

を造り普及に尽力していたことは十分承知していたであろうし、彼の還暦祝賀式で「自分は幼時母の庭訓と父の実行とから、すべてを捧げて世のために尽くそうと決心した」と生涯貫かれた態度を述べているが、これらはここで身につけたものであると考えられる。彼の柔道、体育協会や教育に残した功績については紙面の都合で割愛せざるを得ないが、還暦までの雅号を、生地の御影が六甲山の南

よって芦屋水友会として再建され芦屋水練学校（高石勝男校長）を開設するなど大いに発展していった。高石勝男が昭和四十一年六十歳で逝去し芦屋水練学校の使用した浜が都市開発によって泳げなくなると、その活動は新設された市営プールにおいて実施されている。ベルリン・オリンピックの飛込に入賞した香野夫佐子が今津小学校の卒業生で、昭和七年に完成した甲子園室内プールでの活躍から、昭和九年飛込選手権の高飛込と飛板飛込の両種目に優勝するまでに育った。最近では松蔭高校出身の馬淵かの子（旧性津谷）が西宮に住み、昭和四十三年から西宮原生年金スポーツセンターのダイビング指導をしながらアジア大会やオリンピックの国際大会に出場し、二十年間にもわたり日本の檯舞台で活躍している。終戦後には坂口修子、木村富子、昭和四十年代になると久保たえ子、関育代、川田啓子、角丸房子の全日本レベルの選手が出たが、これを指導したのが飛込元日本選手権者の久保欣治でたえ子の父親である。

今一つ西宮はテニスのメッカである。昭和五年に東洋一を誇り百三面のコートを持った甲子園国際庭球倶楽部が誕生し、片岡直方が会長となり、早朝庭球会を開催して地域住民のテニス振興の先覚者となった。昭和十年頃に戸田定代、沢田佳子と村上保男、堀越春雄が全日本選手権者となり、現在も芦屋クラブ、宝塚クラブ、夙川マリーメイドクラブなどとテニスブームに乗って活動がなされている。また昭和四十七年に関西学院で講師をしていた坂上紀元が兵庫県庭球指導者協会を発足させた。彼はオーストラリアの世界的権威者ドン・トレゴニングに学びコーチの資質を高め、一般人のためのテニ

ス教室や科学的テニスの研究を進めて、同会を法人化し全国に先がけたテニス指導者の組織化を進めている。

桜井体操と単独行を生んだ但馬

文部省が大正二年に小学校令と同施行規則を改正して普通体操を体操、兵式体操を教練と改称したことによって、学校体操の実施熱が高潮することを予知した桜井恒次郎（出石町出身）は、大正三年から五年間をかけて東京、九州、山陰の各地で学術調査を行い従来のスエーデン体操を修正し合理的体操を考案した。当時九大医学部解剖学研究室の教授をしていた彼は、この研究室で体育研究所的な活動を開始し、桜井体操と呼ばれる合理的な体操を作り上げた体育界を風靡していった。桜井の体育観や体操に関する学説は、石丸節夫著の『桜井博士体操講演集』や今井学治著の『合理的体操学』さらに鈴木鐔太郎著の『体操学理一般』に収録されているが、彼自身も『体操教授用図譜』『体操の話』また『小学校体操科教材と其配当表』などを出版して、その頃皆無と言われた自然科学に立脚した体育研究を推進させた。大正十二年再度ヨーロッパへ学術調査に出かけ翌年に帰朝したが、五十七歳の若さで死去した。彼に熱心に師事した鈴木と今井は神戸市の視学委員となり、石丸は小



桜井恒次郎

野中学校教諭となつて共に兵庫県内の教育に従事した。昭和四十五年八月浜坂町の坂山園で「不撓不屈の岳人加藤文太郎

ふるさとの碑」の除幕式が行われた。この碑は遠山豊三郎、前田浩、綱島定夫、林茂、弓削豊紀に木本善一、山本茂信、竹内文男らの発起人がいろいろと尽力して完成した。加藤は大正八年に三菱内燃機神戸製作所に入社。設計課員として精励するかわら六甲山、但馬連山、日本アルプス等に単独登山を続け「不死身の加藤」と呼ばれ岳人仲間、国宝的存在とまで賞賛されたのであったが、昭和十一年一月鉄道省騰取工場勤務で二十七歳の吉田登美久と槍ヶ岳尾根に向う途中、天上沢で三十一歳の命を絶った。昭和十一年に『単独行』が遺稿集として発行され、昭和四十五年にも『不撓不屈の岳人加藤文太郎の追憶』が出版された。この但馬からもう一人単独行による登山家が生まれた。加藤の果たせなかった世界の高峰登頂を次々と成功した植村直己である。豊岡高校から明大農学部に進み、山岳部へ入部して実力を養い、卒業してから、モン・ブラン（欧州）、キリマンジャロ（アフリカ）、アコンカグア（南米）、エベレスト（アジア）、マッキンレー（北米）の単独登頂に成功した。彼は「五大大陸の最高峰を踏んだ登山家と人に言われるとすぐく恥かしい」と遠慮がちに話す純粋の但馬人である。

体育界の礎石を生んだ播磨と淡路

明治三十三年三十二歳の永井道明は姫路尋常中学校長となつて、その頃毎年実施されていた遠足旅行を大いに奨励した。吹雪の中を

夢前川まで徒歩したり、野営訓練や雨中行軍など、教練化した行事が姫路の名物の一つにまでなった。明治三十八年の春に姫路中学は豊岡出身の文部大臣久保田譲による学校視察で賞賛を受け、永井の健心健体の教育方針が全国を覚醒するところとなり、翌年彼は体育研究のため文部省より海外留学を命ぜられ五か年にもわたり諸国の体育を見聞し、帰国後日本の学校体育の発展に貢献した。その頃大谷武一が姫路師範学校に学んでおり、後に東京高師に進み大正六年に文部省の在外研究員となつてヨーロッパに留学し研鑽を積み、帰朝して日本体育界の礎石となった。彼は昭和四十一年老衰のため七十八歳で死去した。



大谷武一

明石に、昭和八年甲子園で輝く二十五回戦を演じ、新聞が「光落目に映ゆるは若人の頬を伝う白い涙！黒い汗！」と絶賞した明石中学がある。監督の竹山九一とコーチの高田勝生が投手のピカ一楠本保を外野にまわし、中田武男をプレートに送り、八月十九日午後一時十分に中京商業と対戦。中田の二百四十七球目のカーブが打たれ四時間五十五分の試合は終わった。同じ年に、昨年までこの明石市の収入役を勤め現在小野市長をしている井上増吉が、小野中学から第十九回全国中等学校陸上競技選手権大会に出場し、四種目に優勝。一人で二十七点を獲得して団体の全国優勝をもたらした。



川路寛堂

明治三十八年十一月号の兵庫県教育委員会報が淡路高女水泳の実際と題し「聞く者皆眉をひそめ、そのあまりにも好奇に走るを難じ、且つあるいは、為に世評をひきおこす原因になりはせずや」と伝えている。女生徒に二十四日間にわたり海水浴を実施させたのは川路寛堂で、彼はイギリスのトップモードの水着を取寄せ、浴衣地で水泳服を作らせて旧藩士の水練の達人や漁師の妻女で泳げるものを指導者に招いて海水浴を実施した。彼は明治四年に岩倉具視一行に加わり欧米巡回をし、帰朝後大蔵省に出仕を命ぜられたが、広島で教員となり明治三十二年に州本中学で英語教諭心得をした。淡路高女を大正二年に辞し神戸松蔭高女の校長をしていたが昭和三年八十四歳で世を去った。

おわりに

移り変わる時代の中で本県の体育・スポーツは多くの人々によって支えられ発展してきた。兵庫県全域にわたるこれらの功績者を十分紹介しえずに、体育・スポーツの抜粋的な記述に止まって稿を閉じた。紙面の関係で割愛せざるを得なかった人が多いこと、文中敬称を略させていただいたことをお詫びする。

△参考資料▽

スポーツ人風土記、神戸スポーツ草創史（共に道と書院発行）

人物を中心とした

— 体育・スポーツ郷土史 —

— 青 森 県 —



一 戸 哲 雄

一 はじめに

本県は、本州の最北端にあり、北は津軽海峡を隔てて北海道と対し、南は秋田、岩手の両県に接し、東は太平洋、西は日本海に面し、三面海に囲まれ、都から遙かに遠い地にあるが、スポーツは多くの先駆者達が苦難を重ねて道を開き、多くの名選手達が日本の、世界の檜舞台で華々しく活躍を見せた。以下、明治、大正、昭和前期、昭和後期に分けて選手、指導者を紹介したい。

二 明治時代

明治時代における体育は、学校を中心とし、主として学生生活の間に行われ、社会人を対象としての体育、スポーツは微々たるものであった。明治十年代の後半ごろから、撃剣（剣道）の修練によって身体を鍛える場として弘前市に町道場が数か所できた。各道場からは剣客が次々と生まれ、元国務大臣笹森順造もその一人である。

（一） 剣豪市川 宇門

小野派一刀流の達人市川は、真剣をもって立ちあえばおそらく実力日本一だろうといわれた。宇門は、津軽の城下町弘前市における最後の剣豪であった。

宇門は明治十六年（一八八三）二月七日弘前藩士市川竜之助の四男として生まれ、少年時代「武平」と呼ばれ、成人してから人々は宇門と呼ばず単に剣術使の「ブヘッ」と呼んでその名を恐れたくらいだ。

宇門が剣術の教えをうけたのは、おじの市川喜代太郎からである。少年時代から負けん気で激しい気性の持ち主だった。東奥義塾に進んだが四年生のとき先生とケンカして中退した。東奥義塾を飛び出した宇門は、京都にある大日本武術教員養成所に入り本格的な技をみがいた。明治四十年第十二回大日本武徳会演武大会で優勝し、大刀とメダルを受けて一躍有名をなした。

その後満洲に渡り、長春（のちの新京）の日本人学校や警察の剣道指南をしていたが、当時頻頻として跋扈した馬賊を真つぶたつに斬り倒したと伝えられる。真剣で戦えば実力日本一というのもこの辺の事情を物語るのだからである。

三年で大陸生活に見切りをつけた宇門は、大阪の警察署指南、東京本郷春日町の中山博道道場の師範代をつとめていたが、大正十一年帰郷、県立弘前中学校・県立青森中学校・東奥義塾の教師となり青森県剣道普及につとめた。昭和十四年九月五日脳いっ血のため急死、剣道八段範士である。

(二) 本県へ初めて卓球用具を入れる

教育者の山内元八（一八六五～一九三四）は、青森尋常師範学校を明治二十二年卒業、青森高等小学校的の訓導、青森県視学となり、明治三十二年青森市浦町小学校四代校長に就任以来勤続三十年青森県普通教育発展と県スポーツ発展に尽力した。東京へ出張した明治三十六年四月土産として卓球用具を二組買い求め、青森高等小学校的で披露の式を行った。これが本県の卓球の最初である。山内は本県スポーツの先覚者であるとともに、いままではばらばらに動いていた



前田 光世

へ進んだ。明治二十九年十六歳のとき初めて柔道を習った。光世が故郷を出て上京するさい村の人々は相撲取りになった方がいいだろうとささやき合ったものさうだ。

明治三十年講道館に入門した光世は、またたく間に頭角を現わし、同三十七年には四段に昇格し実力日本一といわれた。

このころ早大や一高、学習院、東京高師などの柔道指導に当たっていたが、日本の柔道を広く世界に紹介するというので、富田常次郎六段とアメリカ各地の大学で指導に当たったが、特にレスリングの学生チャンピオンと対戦、雲つくような大男をこてんこてんに投げとばして日本柔道の面目を發揮した。

富田六段と別れ、佐竹五段とともに欧州に渡り英国、ベルギー、スペイン等を廻った後、中米キューバ島に渡り、次いで明治四十二年七月メキシコに赴き再びキューバに戻り、そこから永住の地ブラジルに移った。

コンデ・コマの称号をうけたのはスペインのバロスナ市に行くときである。

当時マドリッドに自称日本一の柔道チャンピオンを名のる日本人がおり、興行上具が悪いというので前田光世の名前を伏せることになった。そこで前田コマルはどうだといったら、劇場の支配人が、

各種スポーツを団体にまとめ、青森県体育協会設立に特に功績があった。

(三) わが国スキーの先覚者、青森県スキーの父

油川貞策（一八八五～一九五六）は、南津軽郡大鰐（おび）の人。県立弘前中学校から陸軍士官学校に進み、明治三十九年から長い間軍籍にあって小隊長、中隊長、秋田県立大館中学校、青森県立弘前中学校の配属将校を務め、後に青森連隊司令部員となり大東亜戦争では南方輸送隊長として出征、昭和十六年陸軍中佐に昇進、翌年退役した。

本県は勿論わが国スキー界の恩人で、明治四十五年新潟県の高田でオーストリアからリルヒ中佐が来てスキー講習会が開催されたとき、弘前の第八師団から派遣された。その後配属将校時代からスキーの普及につとめ、民間スキー、スポーツスキーとして実地に推進したのが油川貞策であった。また、大鰐スキーの名を高め本県スキーの存在を全国に誇示した功績は誠に大きく、その魂魂は大鰐スキー神社に合祀されている。

(四) 本県が生んだ世界の柔道家

コンデ・コマ＝前田光世（一八八〇～一九四一）。明治時代に柔道行脚で世界を制覇したコンデ・コマといえは、ああ、あの人かとうなずく人が多いだろう。日本人前田光世は国内のそれよりも外人名コンデ・コマとして、より多く外国でその勇名をはせたのである。

前田は明治十三年十一月十八日青森県中津軽郡船沢村大字富栄字笹崎（現弘前市大字富栄）に生まれた。弘前中学校から早稲田大学

「それでは困る。『コンデ・コマ』がいい。」というので、それが通称になったという話がある。コンデはスペイン語で「伯爵」のことである。光世は南米ブラジルに三十年近く居住し、昭和十六年十一月病氣のため死去した。柔道七段（コマ伯爵）。

三 大正時代

わが国のスポーツは大正時代に入りめざましい普及をとげ、本県においてもスポーツ人口は年を追って増加してきたが、さらに広く県民へのスポーツ普及と幾多のスポーツ団体の統括・育成する団体として大正十三年十一月三日青森県体育協会がめでたく誕生した。

(一) 本県スポーツの父、芳賀徳蔵

彼は明治二十二年（一八八九）十一月九日青森県中津軽郡堀越村（現在弘前市門外）に生まれた。青森中学、仙台医学専門学校（東北大学医学部の前身）を卒業、大正五年、生地の堀越で医院を開業した。



芳賀 徳蔵

選手であった。青森中学時代は県下でチームのあった八戸中学、三本木農学校など三巴戦などを行ったりしたが、野球を知らない者は肩身の狭い思いをするというような現在とは違って本県ではまだ草創期のころ、選手はジャケツに巻きゲートルでタビをはくという珍妙な格好

で徳蔵は遊撃手、二塁・三塁手などをつとめた。当時全国的にも強豪として知られた北海道の雄、オール函館、函館中学との試合のときは、さすがに北海道側はズック靴をはいていたため、盗塁のときなど足を踏まれてケガをする選手もいた。

医専在学時代も野球部にはいり慶大野球部のコーチを受けて仙台高等工業学校や二高と試合を行ったが、徳蔵は快腕投手として鳴らしたものであった。後年本県スポーツの父とたたえられるようになった最初のスポーツとの結びつきである。

ところが野球に打ち込みすぎたためついに肋膜炎になった。このことが徳蔵のスポーツにたいする考え方の一つの転機になった。スポーツマンは健康でなければならぬ。そのためには総合的に運動しなければならぬと痛感し、その基本は陸上競技にあるというので以後マラソン、駅伝を主とした陸上競技に身をいれるようになった。

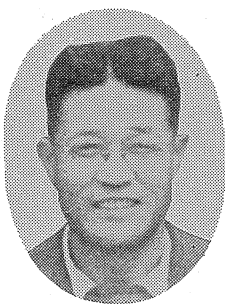
当時本県陸上競技の長距離界は道川茂作が健脚を誇っていた。車夫のランナーとして有名だった道川を徳蔵は後援し、道川はそれにこたえ第八回極東オリンピック大会の一万メートルに優勝の栄冠をかちえた。マラソンが青森県人の性格に合っていることを徳蔵は発見し、第二、第三の道川を育成しようと中南陸上競技連盟を結成したのは昭和七年のことである。

昭和十二年には岩木山神社・猿賀神社往復マラソン大会も徳蔵によって始められ、樺沢繁市等多くの選手を育成した。この間多くのスポーツ関係の役職についた。昭和二十一年おされて青森県体育協

(現弘前中央高校)の先生となり、女子スキートの育成に人生を捧げ、その厳格な猛練習は、「浅吉式」と呼ばれた厳しいものであった。大正十四年の二月高田市で開かれた第一回全日本女子スキー大会に参加させ、弘高女チームを見事全国優勝に導いた。戦後昭和十九年から三十九年までの十年間、青森県スキー連盟会長を務め本県におけるスキートの普及発展に尽力され、昭和四十六年五月十七日、八十一歳で死去した。昭和四十三年(七十六歳)スキー振興発展の功により勲五等双光旭日章をうける。

(三) 国際大会初の代表、陸上の岡本喜作

明治三十六年青森市沖館篠田に生まれ、青森中学から中央大学法学部に進み昭和三年卒業、県庁社会課へ勤務のち運動具店を経営、昭和十一年青森市会議員(二期)、同二十八年同市教育委員を務めた。岡本はスポーツマンで、大正十二(一九二三)年大阪で開催



岡本喜作
された第六回極東選手権大会に四百メートル選手として日本代表で出場した。これが本県スポーツ選手としては初めての国際大会代表選手だった。青森中学時代四百メートル、五種競技で

活躍、日本陸上選手権大会に本県初の出場者となる。大学時代は、走幅跳、走高跳、三段跳、二百メートル、四百メートル、五種競技等で活躍、青森県の記録を更新した万能選手であった。その後第七

会長に就任。徳蔵はこの年開かれた第一回国民体育大会の本県選手団長として選手役員を引き連れ大会地京都に乗り込んだ。食糧不足のため団長はじめイモを食い、酒好きの徳蔵はお手のものの医療用アルコールを持参して水に割って飲んだ。第二回金沢、第三回福岡、第四回東京と回を重ね、第四回国体で天皇杯第八位という本県にとっては空前の金字塔をうちたてた。これも徳蔵の徳望のもとに役員・選手が力を合せた結果であった。団長としての掌握力はその人望に支えられまことに群を抜くものがあつた。

余生はもっぱら自ら創設した中南陸上や猿賀マラソンで若い選手たちが育って行くのを目を細めながら見守ってきたが、昭和二十九年四月十六日食道ガンのため平賀町の自宅で死去した。葬儀は本県初めてのスポーツ葬としてスポーツ関係者多数が集り盛大に営まれた。

(二) わが国女子スキートの先覚者、工藤浅吉

明治二十四年十月五日南津軽郡猿賀村大字八幡崎(現尾上町八幡崎)に生まれた。青森師範学校四年の時、明治四十五年の旧正月元



工藤浅吉

旦、青森市の新城スロープで歩兵五連隊の市島中尉からアルペンスキー一本杖の講習を受けたのが始まりである。

その後大正十二年からは、県立弘前高等女学校

回極東大会(一九二五年)マニラ大会、昭和二(一九二七)年第八回上海大会へと連続三回出場した。第八回大会の選手選考会ではメンバーに入っていないが、あとで追加されたのに感激して四百メートル(第二位五十秒七)では必死のレースを見せ、ゴール寸前までフィリピンの人を抑えていたが胸一つの差でエストラダに敗れた。ゴールに入るとバツリ倒れ担架で控室に運ばれたが、その健闘は日本の役員・選手を深く感動させたといわれている。戦後青森県陸上競技協会初代会長として県陸上競技発展に尽力、昭和四十一年死去した。

(四) 県陸上界のレベル向上に貢献

——ス・ノ・ゴ三巴戦がスタート——

大正十四年陸上競技団体として、スパルタ(青森中学)、ノーマル(青森師範)、ゴルゴン(弘前中学)という、それぞれO・Bに在校生を加えたクラブができた。この三クラブによる競技会の実現は、岡本喜作(スパルタ)、古川儀三郎(ノーマル)、長谷川仁也(ゴルゴン)らの努力によるところが大きく、第一回大会は大正十五年青森で開催された。

古川儀三郎は、北津軽郡中里町出身で青森師範時代円盤投の選手として活躍、アメリカ南カリフォルニア大学留学中の昭和七年第十回ロサンゼルスオリンピック大会の日本陸上チームの役員として参加した。戦後は中里町長を二期務め故人となる。

長谷川仁也は、南津軽郡藤崎町出身で弘前中学校時代柔道選手として活躍、大正十三年三月より昭和十三年二月まで弘前中学校の教

師として勤務した。ゴルフ倶楽部の初代会長で、現在福岡県に在住している。

スノゴ三巴戦は昭和十六年の第十七回大会まで続き、数多くの名選手や、名勝負・話題を生み県記録が次々と更新された。これに刺激されて八戸中学校に八戸倶楽部、青森商業学校に商門倶楽部が結成された。

四 昭和前期

この時代は昭和元年から太平洋戦争結束までであるが、本県スポーツ界の水準も一部は漸く全日本の水準に近づいてきた。即ち昭和二年第八回極東選手権大会の活躍である。

(一) 極東大会一万メートル優勝、道川茂作

道川は中津軽郡堀越（現弘前市堀越）の出身で、弘前市小野病院の人力車夫であった。走る姿も人力車を引く姿に似ている。当時の本県五千メートル、一万メートルの記録を更新した。大正十五年明治神宮大会マラソンで優勝し、昭和二年上海で開かれた第八回極東大会日本代表として一万メートルに出場した。競技前に一杯ひっかけぬと元気で走れぬという変り者で、この日も平沼団長から特別の許しを得てビールを飲んだので、まっ赤な顔をしてスタートについた。道川は初めから先頭に立ち、暑さなど気にしないもののようにグングン他の日本選手を引き離す。中国やフィリピンの選手は途中で何度も抜かれるので、どこが先頭かわからぬ競走になった。道川はそのまま先頭をまもりつづけ、悠々と優勝した。これには皆あき

れかえったそうである。記録は三十四分五十六秒であった。

(二) 本県卓球の父、松井礼七

黒石市出身、八戸中学、東京歯科大学専門学校卒（現在の東京歯科大学）。大正十一年一月、東京・大阪の代表で行われた第一回東西争覇戦大会で優勝、大日本卓球協会設立の柱となった。大日本卓球協会副会長、東京歯科医専教授をつとめる。松井は板ラケットでショート一点張りの本県卓球界にロングやカットの最新技術を持ち込み、その後の本県卓球の発展に大きな力となった。本県の有力選手を東京歯科医専に引っぱってトップクラスの選手に養成、これらの選手が県内に帰って現役選手・指導者として本県卓球の土台を作った。

(三) 卓球界で初めての国際試合出場、小笠原栄造

第八回極東大会（昭和二年）に日本代表として出場した（参加国は日本と中国だけ）。

小笠原は青森商業在学中第三回（大正十五年）明治神宮大会に出場、得意の一本指しのショットで快進撃、決勝でロングの名手といわれた幸田栄二郎（福岡県）にセットオールを演じて敗れ二位となったものの卓球青森の名は一段と高まった。小笠原は青森から東京歯科医専に進み極東大会選手となる。卒業後青森市で歯科医を開業、県卓球協会の会長を務めるなど県卓球界の発展に力を尽くした。

(四) 本県初めてのオリンピック選手

——名スプリンターの井沼清七——



井沼清七
明治四十年七月二十七日
北津軽郡中里町に生まれ、
県立弘前中学校、早稲田大
学卒業。
中学四年のとき県内の
「少年オリンピック大会」
に出場したのが初めてであ

る。弘前市の法源寺に下宿していたが、はじめてスパイクを東京美津濃運動員店から金一円五十銭で買った。うれしくてしょうがなく、お寺の畳の上をスパイクをはいて歩き、お尚さんの奥さんからひどくおこられたという話がある。早稲田へ進んでからは、山本忠興先生の指導と先輩に励まされ早大の名スプリンターとなり、百メートル十秒六の記録は県人での最高記録である。在学中数多くの国際大会に日本代表として出場したが、なかでも昭和三（一九二八）年オランダ・アムステルダムで開かれた第九回オリンピック大会に本県初めて出場（四百メートルリレー・メンバー）であった。現役選手引退後も後輩の指導にあたり、日本陸運評議員、東京陸協副会長を務めた。松坂屋百貨店常務取締役、株式会社松栄食品社長を最後に昭和四十八年十月一日六十六歳の若さで死去した。特に青森国体誘致には日本体協関係者との幅広い交友があるところから積極的なバックアップを惜しまなかった。

(五) 奈良岡良二

第十一回オリンピック大会（昭和十一年ドイツ・ベルリン）出場。

奈良岡は南津軽郡浪岡町出身、青森師範に学ぶ。青師時代は県陸

上界が最も盛んだった。恵まれた環境に育ち、短距離から駅伝、スキーなどなんでもこなす選手だった。昭和六年東京へ出てから、いつでもトレーニングできる種目と考えたのが競歩だった。オリンピック種目としても復活し、当然ながらベルリンをめざし計画的なトレーニングを積み、最終予選会で五万メートル競歩に優勝しオリンピック代表選手となる。その後、教職に就き、柏木農業高校、県立体育館長、県立大湊高校長を歴任、県立浪岡高校長を最後に高校教育界を去り、現弘前学院大学教授である。県陸上競技協会理事長として県陸上競技発展に力を尽くされ、第十八回オリンピック（東京）代表となった栗林喜右衛門を育てた。実弟の健三（青師、東京文理大卒）は全国中学校東西対抗で活躍、一万メートル競歩の日本記録保持者だった。

(六) スケートでオリンピック大会に初入賞、石原省三

石原は満州で生まれ育った。本県人ではないが、八戸市の日東化学工場の勤務時代が長く石原自身も「八戸は第二の故郷」と考えている。昭和七年第三回冬季オリンピック大会（一九三二年、アメリカ、レーク・プラシッド）に日本代表として初参加、次の昭和十一年第四回冬季オリンピック大会（ドイツ、ガルミッシュ・パルテンキルヘン）へも参加し、スピードスケート五百メートルで第四位となる。戦後オリンピック選手となった浅坂正次、全日本選手権をとった佐々木邦子等は、石原が手塩にかけて育てた名スケーターである。また昭和二十七年第六回冬季オリンピック大会（ノルウェー、

オスロ)には日本選手団監督として参加した。石原の本県スケート普及発展に尽くされた功績は大きい。

(四) スキー距離オリンピック選手、山田伸三

山田は南津軽郡大鰐町に生まれ、県立弘前中学を卒業、青森管林局に入る。

昭和三年樺太の豊原で行われた大会に弘前中学の生徒として出場し複合で六位、距離に八位となり「青森に山田あり」と将来が期待された。弘前中学を卒業して青森管林局にはいつてから、その期待は見事に実を結び、第四回冬季オリンピック大会に出場。現役選手引退後、長らく県スキー連盟理事長、現在は副会長として県スキー発展に尽くされている。昭和五十二年第三十二回冬季スキー大会(大鰐)青森県選手団団長として総合第二位を得る。

五 昭和後期

(一) 卓球王国青森

(1) 佐藤博治

昭和二十七年卓球日本、卓球王国青森の名を世界にとどろかす一人のヒーローが生まれた。二月にインドのボンベイで開かれた第十九回世界卓球選手権大会に日本が初参加、佐藤博治選手(青森商業卒)がスポンジバットで暴れ回り、男子シングルス世界チャンピオンとなった。佐藤は戦前から選手として活躍昭和二十一年の全日本硬式では決勝まで進み二十二年には全日本軟式の単複に優勝する実力の持主だった。佐藤には自らが考え研究を重ねたスポンジバット

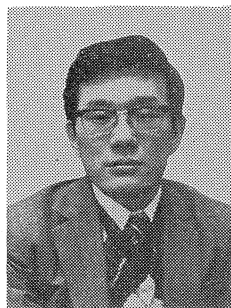
という秘密兵器があった。ボールが変化するし、球も速いし伸びるという利点を生かし、青森伝統のカットを中心に威力あるバックハンドとショートで多彩な攻撃を持ち、見事世界の王座についた。

また、県卓球界には多くの指導者がいた。笹森秀雄、小笠原栄造、福士敏光、佐藤光男、田中喜代治、辻村良次、沢田富蔵、館山六郎、武田尚昌、楠美知行、竹内健三等である。

(2) 国体四連勝

戦後の卓球史上最大の記録は、三浦実(弘中→早大)監督とする青森卓球チームの国体四連勝である。昭和三十一年から三十四年まで、本県一般男子チーム、成田静司(弘高→日大)、渋谷五郎(青高→明大)、村上輝夫(青高→明大)、小倉喜八郎(青商→日大)、のチームでうちたてられた。小笠原栄造、今孝、佐藤博治、小中健それに前記国体優勝メンバーは国際大会日本代表となった。その後河野満(青商→専大→県庁)が活躍している。

(3) 河野満



河 野 満

イギリス・パージンガムで開かれた第三十四回世界卓球選手権大会シングルスで優勝。昭和二十一年九月十三日和田市に生まれる。昭和四十年県立青森商業、昭和四十四年専修大学商業部卒、出版社、運動具メーカー等に勤め、現在県教育委員会体育

技術指導員。

全国卓球界へデビューしたのは、全日本ジュニア選手権シングルスに初優勝した昭和三十八年で、四十一年世界選手権初出場でシングルス第二位になったのをはじめ、世界選手権出場は五十二年に連続六回目となり、四十四年には団体一位になる。五十、五十一年と全日本選手権大会シングルスに二年連続優勝し、文字通りわが国卓球界のトップになっていた。佐藤博治の選手権優勝以来二十五年目である。

(二) 駅伝王国青森

青森(東京間の約八百キロを一週間で走破する「青森(東京間都道府県対抗駅伝競走)」は講和条約締結を記念し昭和二十六年に始まった。第二回大会から四年連続優勝で「駅伝王国青森」の名を高め、沿道の観衆を熱狂させた。この駅伝大会で数多くの名ランナーが生まれ育った。なかでも鹿内憲吉は、昭和二十八年の全国勤労者陸上の二十キロでマラソン男の山田敬蔵(秋田)と競い合い日本新記録をマーク。二十九年の第三十回全日本選手権大会マラソンで第二位になり、三十年の毎日マラソン、朝日マラソンでも入賞した。また、故村上喜代衛総監督の功労は最も大きかった。自宅を合宿所に開放し、選手の就職やお嫁さんの世話までした村上喜代衛、とみる夫妻の努力に対しては、筆者もその監督の一員として深く感謝しているところである。

(三) 青森国体「あすなろ」へ力強い前進

第三十一回佐賀「若桐国体」秋季大会では、「あすなろ国体」へ

の飛躍を目ざす本県選手団は長谷川進(県体協副会長)団長以下総勢二百七十余名を送り各地で熱戦を繰り広げ天皇杯四位に輝いた。

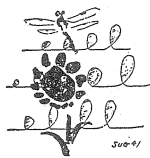
本県選手は二十七競技中、二十一競技に出場。まず相撲は少年・教員が優勝、青年一般とも入賞を果たし二回目の総合優勝、自転車も成年団体追抜きと少年ロードレースに優勝して総合二連勝、前年三位と振わなかったボクシングは素晴らしい活躍をみせて成年優勝、少年準優勝で文句なしの総合優勝、卓球も女子勢の活躍が目ざましく、少年成年ともに優勝を飾って総合優勝、また近年不振のレスリングは優勝五人を出し総合四位となる。

このように本県のお家芸といわれる競技の活躍により、総合成績(天皇杯)四位と、本県国体史上で初の快挙を成し遂げた。本年十月開催の「あすなろ国体」への明るい兆をみせた。

六 おわりに

長い歴史に支えられて発展する本県のスポーツ界は、また多くの指導者や名選手を輩出した。紙面の関係で多くの種目・人物を紹介しえず割愛せざるをえなかった。

(青森県立深浦高等学校長)

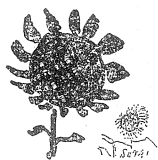


人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史

—熊本県—

阿 部 平



熊本は昔から尚武の国として、自他ともに認めている。そのよって来たところは、世界的偉人と称せられる加藤清正公、続いて歴代細川侯の名将、名君の文武両道の奨励によるところが大きい。特に、藩祖忠利公は文武兼備の名将であり、公が肥後の武道を大成したとつたえられている。

更に宝暦（江戸時代中期）の名君重賢公は、文武両道の練磨のため、講文所の時習館、講武所の東榭と西榭を創建し、能力のある者は、武士の家庭以外の子弟にも門を開いたと言われている。

— 学校体育のはじまり

維新後の社会は新しい国づくりに、めまぐるしく動いていた。その中で大きな役割と期待を寄せられていたのが学校である。

熊本では学制公布前の明治四年熊本に洋学校を創立、外人教師を招へいし新しい時代をになう青少年の育成に当たった。当時の生徒で文豪徳富蘇峰は自伝に「ジェインズ先生の指導で英式操練を課せられた」と書いている。英式操練の内容はつまびらかでないが、何らかの型のスポーツが導入されたことは想像にかたくない。

次に本県スポーツ界で草わけ的役割を果たす熊本師範は明治七年創立。

常に、文武の中心校として誇ってきた済々黌は、明治十五年開校、当時の教育内容は、皇漢学、物理、法律文章のほか必修科目として、撃剣、体操があり、さらに、毎月五里以上の遠足をなす、とある。柔術は副科とされた。文部省が柔剣道を正科としたのは明治

四十四年。それまで「撃剣を正科とするのは天下に濟々鬘のみならん」と誇り、体育、武道に教育の重点をおいたのが特色であった。

中央と熊本を結ぶパイプ役として、大きな役割を持ったのが第五高等学校である。創立は明治二十年。

初代校長は、明治十一年に体育教師の養成を目的として作られた体育伝習所の所長をした野村彦四郎で、まず体育会を組織し、演習する種目として、体操、うさぎ狩、競走、フットボール、ベースボールなどをあげ、知育万能、欧化主義の全盛時代にもかかわらず、大いに体育に力を入れた。

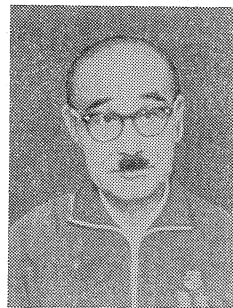
明治二十四年八月、講道館柔道創始者、嘉納治五郎（三十二才）が第三代校長となり、柔道のみならず、運動部を設け他の競技も奨励した。初期の校長に二名の偉大な体育の先駆者を迎えたことは、五高のスポーツを隆盛に導くとともに、本県近代スポーツの発展に大きいプラスであった。

二 近代スポーツの黎明

本県の近代スポーツの黎明期に忘れることのできない四人の男がいる。

宇土虎雄は東京高師を大正五年に出て、九州学院中学の体育教師となる。以来熊本の宇土となった。隣県長崎県島原の産。

初め政治家を夢みて明治大学に進学したが、当時、東京高師の嘉納校長は彼の性格と柔道の技にほれこみ、新設する高師体育科に勧めたので転学。学内で柔道は群を抜き、すもう、陸上、ボート、水



宇 土 虎 雄

泳の五種目に技能賞を受けた。

「今度九学（九州学院）に來た宇土はけしからん、脇の毛の見える袖なしシャツば着て走っとる。」靴の裏に金釘ばはやしとる。あ

ぶのうしていかん。」赴任当時の彼に対する県下中学校長会の席での話題である。当時の熊本のスポーツ界は、このようにまだ近代化の夜明けを迎えていなかった。彼は、専門の柔道は勿論、陸上部を創設し、田尻祐之をはじめ多くのスプリンターを育て、新しい体育を押しすすめた。これを見て、多くの学校から彼の指導を懇請して來た。遠山院長も、体育振興のためと許可し、五高、工専（熊本工業専門学校）、医大（熊本医科大学）、師範（熊本師範学校）、熊農（熊本農業学校）を非常勤で兼務すると言う前代未聞のレコードをつくり、さらに、精力的に県下各地で各種講習会や競技会を開き、近代スポーツの隆盛へ導いた。数えきれないユーマラスな奇行とエピソードの持ち主としても多くの県民に親しまれ、熊本にとっ

て忘れることのできない、近代スポーツの父である。

宇土と車の両輪のように協力しあいながら黎明期の郷土スポーツ界をひっぱっていたのが飯星良弼である。菊池市に生まれ、小

業を前に練習中腕を折り二度と剣士として竹刀を握ることができなくなった。高師卒業を断念し帰郷。心をとりにおし、高師で習得した新しいスポーツを普及するため、野にありながら県下小中学校の児童・生徒の指導に専念。陸上、バレーボール、バスケット、ラグビー等の彼の指導は精力的で行く先々で人気を集めた。

また、大正十二年には熊本で初のスポーツ組織「熊本体育会（県陸上競技協会の前身）」を誕生させた。これが刺激となって同年夏熊本市がスポーツ支援団体の「体育奨励会」を発足させた。大正十五年には、その実力を買われて、市の体育主事となり行政面でも大いにその手腕を発揮した。昭和八年発足の「熊本アルコウ会」は今なお広い層の会員を持ち、活動を続けているが、これも彼が産み育て、八十歳の今も良きリーダーとして面倒をみている。

熊本の体育・スポーツ界は野にある好指導者とともに、行政、教育関係でも優秀なリーダーに恵まれていた。その一人が栗本義彦である。

大正十三年、五高校長溝淵進馬は従来の兵式体操にかわって学校スポーツを盛んにしようと、優秀な体育教師の斡旋を在京の金栗四三に依頼した。金栗は、郷土スポーツ振興にもっとも役立ちそうな人物を物色し、推せんしたのが栗本義彦（和歌山師範、東京高師）である。その頃、パリオリンピックのマラソン候補だったが、五月の国内最終予選で先輩金栗に敗れて代表権を失い、その足で熊本に向った。

五高教官としての彼は、校長の期待どおり、熊本における近代学

校体育のバイオニアとして率先垂範その役割を果たし、生徒から信望も非常に厚かった。又、社会体育面での貢献度も大きく、小中学校教師や市民のスポーツグループに顔を出し、陸上、テニス、サッカー、ラグビーなどの普及に力を注いだ。

昭和四年に五高から県の初代体育主事に転じ、体育行政面で体育スポーツの発展に努力した。最初手をつけたのが、熊本県体育協会の設立と、中学校の熊本——玉名間の駅伝である。学校体育については、田舎の隅々までまめに学校を訪ね、体操の模範授業をしたり、先生達の指導力を高めるための実技指導を行い、学校体育へスポーツの導入をはかった。昭和九年、文部省の初代体育官兼課長に栄転した後も、自らも熊本は第二の故郷と称し、熊本人の面倒をよくみてくれた。

現在の熊本県の体育指導者の大半が、彼の手塩にかけられている。次に、中央にあって、日本のスポーツ界を支えながら、郷土熊本に強い影響を与えたのが、郷土の誇る金栗翁である。明治二十四年生まれ。玉名郡出身。玉名中、東京高師へと進む。

日本最初のオリンピックとして、第五回のストックホルム大会以來三度、マラソンに出場、国内では何度か世界最高記録を出しながら、檜舞台での勝利を得ることが出来なかった。

以後は、マラソンの普及、強化のため、箱根駅伝の実現に努力するなど、半生をマラソンのために尽くした。また、外国の女性の活躍を見て、将来母となる女性の体位向上こそ国力の源泉だとして、女子体育の振興に力を入れ、女子テニス大会や陸上大会を開き、



三 四 金 三
關東女子体育連盟の設立にも尽力した。
戦後は熊本に帰り郷土スポーツの振興に尽くした。
「日本マラソンの父」の父「現在なお壮健。」

三 学校体育の充実

昭和になると、野球、陸上をはじめ多くのスポーツが盛んになり、明治神宮大会でも、柔道、剣道は勿論、陸上、水泳、女子のテニスなど数多くの優勝をとげ、野球は熊本工業が甲子園で活躍した。

一方学校体育は、すばらしい二人の指導者をむかえ、充実期にはいった。

西園富吉は、栗本の後任として昭和九年赴任。栗本が陸上、球技に力を入れたのと対照的に、体操を通して児童生徒の体力向上につとめるため、教師の指導力を高めることに努力した。昭和十五年の十一回明治神宮体育大会開会式に、本県教員団四百余名を派遣し、集団体操を三万余の大観衆の前で奉納、一糸乱れぬその美しさとたくましさにより「日本一の教員体操」と関係者の絶賛を博した。また、体操の權威大谷武一が絶賛した正しく美しく歩くことを目的とする「熊本の正常歩」も彼の残した大きな功績である。

告会」を開いた。会には金栗、宇土、飯星をはじめ、古荘次平（水泳）、瀬口竜之介（バレーボール）、坂本達也（すもう）、田中典次（テニス）、平井敬徳（陸上）、白取義輝、中島茂白（野球）、玉名金助（登山）、高田知義（卓球）の競技関係者と吉田三二、西岡寅雄、川端保、技川福馬、平橋久人の学校関係者、行政の阿部平、地元熊日新聞の武田国勝など戦前からのスポーツ人が集まった。これをきっかけに熊本のスポーツ組織づくりが急ピッチに進み、金栗、飯星、阿部らが中心となって準備をすすめ、二十一年四月一日に県体育会が発足した。（名誉会長—永井浩（県知事）、会長—金栗四三、副会長—宇土虎雄、飯星良範）

一応、組織はできたものの、食糧難、施設用具の不足とないないづくしの時代、とてもスポーツなどと言う中で、金栗会長は若者たちに必死になってスポーツの効用を説いて回った。精力的な会長の働きに負けまいと、各役員や戦前からのスポーツ人たちは郷土スポーツ復興に全力を注いだ。

そして競技団体も二十一年に卓球、二十一年には水泳、陸上、バレー、体操、ボクシング、二十二年には、柔道をはじめ戦前に行われたスポーツの殆どが再発足した。

二十一年十一月第一回県民体育祭が実施された。最初の提唱者は白取義輝である。白取は、自ら雲助と名のり、行動派。青年時代に陸上短距離で神宮大会で活躍しただけにスポーツには熱心、昭和十六年昭和製練の佐敷工場に転任してきた。増産増産の重労働で疲れた体と心に精氣をと、工場内で運動会形式のレクリエーション

「体操の鬼」遠山喜一郎が、東京高師を卒業し、熊本師範の教師として赴任したのは昭和十年。すばらしい技術の指導を受けるためとさらに文検合格もねらって、県内の小中学校教師が集まり「熊本県体操研究会」を組織し指導を依頼して来た。月一回の研究会と夏休みの合宿に若い教師は全県下から集まってきた。彼の熱心な指導で、五十人に一人と言われた文検にも三年後から合格者が次々と出て、文検制度が続いた昭和二十二年までに百人を超える合格者を出し全国に誇った。遠山の教えを受けた中で、本県の体育・スポーツ界のリーダーである熊本大学教養部長の西岡寅雄と、本県バドミントンを全国レベルに引きあげ、日本のバドミントン界をリードする熊本女子大教授の伊藤基記がその代表である。彼の直接の指導を受けた熊師の体操部は、昭和十一年頃から全日本レベルの選手を輩出し、体操県熊本の伝統の基礎を固めた。遠山の在熊は五年余であったが、本県に大きな足跡を残した。

四 戦後のスポーツ

県体育協会の再建と県民体育祭

民間スポーツ団体を再建しようと最初に行動を起こしたのは、戦時中に郷里の玉名に帰り、農業をしていた金栗四三であった。おりをみては県下の友人、知人に民間スポーツ再起の必要性を書き送った。昭和二十年の十一月二十二日に「大日本体育会県支部改組基本打合せ会」を開き、翌二十一年の三月には、当時文部省体育官で近く熊本の中学校長として帰郷予定の林田敏貞を迎え、「中央情勢報

大会を開いたり、終戦の年の二十年六月には、町をあげての第一回町民体育祭を成功させていた。

この白取が、「県下全市町村で、いっせいに運動会をやるう」と提案。これがきっかけとなって第一回県民体育祭が開催されることになった。第一回は、交通事情等で、十一月三日を中心に各市町村ごとに運動会を実施。郡市対抗となったのは翌年からである。白取がスポーツ用品を調達、資金面は吉田三二が県内の企業をかけ回って集めた。第三回からは、十五万円の県費補助も出るようになり、第六回から地方持ち回りとなり、第一回国体と時期を同じくして始まった県体は、本県地域スポーツ振興の柱となっている。

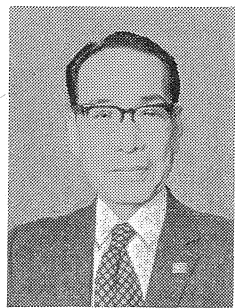
白取は今も県体協普及部長として県のスポーツ振興に大きな力を注いでいると共に、日本カヌーの発展にも力を貸し、地元水俣から六名のオリンピック選手を出し、自らもモンテリオールに監督として出場した。

全国にさががけての体育指導主宰・社会体育指導員制度の実施

地域スポーツを普及振興するためには、地域の指導体制の整備が急務であるとして、二十一年の四月から県下十一の教育事務所には体育指導主宰を置き、ついで二十三年には町村校区のスポーツ指導を目的として、県教委の任命による「町村体育指導員」制度を設けた。これが、現行の体育指導委員制度の引きがねとなった。次に二十四年には、県の社会体育研究協力町村を指定し、地域スポーツ振興をはかった。このように、当初の熊本の指導体制はどこよりも固く、社会体育先進県として高く評価された。

この制度を推進したのは、体育行政の吉田三二と阿部平のコンビである。

吉田は五高教授から二十二年初代県体育保健課長となり、在職十一年間に戦後の体育、スポーツの普及振興のための条件整備に努めた。現在、熊本商科大学教授、県体育指導委員協議会長として、県



吉田三二

民総スポーツの旗頭の一人として活躍。

阿部は、熊本師範、サッカー黄金期の選手、十六年から二十六年までの戦中、戦後の苦難時代を体育行政で過ごす。戦後のスポーツ

再建に命をかけた。その後、四十八年まで、二十二年間、小学校長として、学校教育の中での体育の重視を実践し、現在、県体育協会事務局長。

第十五回国民体育大会と県民総スポーツ運動

昭和三十五年開催の熊本国体は、本県スポーツ史上空前の催しであり、当時県が赤字再建団体であっただけに、県政史上でも大事業であった。国体の成功が競技力の向上のみならず県民のスポーツ意欲を急激に高めたのは当然であった。

国体開催に当たっては、田中典次などの県議会スポーツ議員や県知事桜井三郎、寺本広作をはじめ多くの人々の熱意によるが、最も大きな推進力となったのは、二十六年に金栗からバトンを受けて県

体協の二代目会長となった伊豆富人である。わが国マスコミ界の長老で、現在、熊本日日新聞社の最高顧問、県体協名誉会長。

競技歴はないが、スポーツの良き理解者であり、五十一年までの



伊豆富人

二十六年間会長としてスポーツ振興につとめ、また、自社の熊本日日新聞社で四十年から、県民みんなにスポーツをの一大キャンペーンを展開し、紙面は勿論、県や関係機関とタイア

ップして、「皆泳コンクール」「健康・体力相談室」など幅広い行事を実施し、市民スポーツ、体力づくりの実践化をはかった。

四十九年になると、スポーツマン沢田一精知事が県政の大きな柱として「県民総スポーツ運動」を提唱。行政と関係機関、団体が力を合わせ、スポーツをみんなのものとして、健康で明るい社会をつくろうという呼びかけは、老人のゲートボールクラブ加入者八万人にみられるように着々と実を結びつつある。

五 肥後の武道

柔道

明治四十二年まで全国で範士は六人であったが、その中三人は熊本で占めた。星野道場の星野九門、矢野道場の矢野広次、江口道場の江口弥三であり、この三道場から数多くの強豪が輩出している。

明治の熊本が生んだ最高峰は十段佐村嘉一郎で、明治十三年に熊本市に生まれ、豪快な捨て身投げの名人と言われた父正則の指導と矢野道場で鍛えられた佐村は十八歳で講道館の門をたたき以後講道館柔道の発展に一生をささげた。

明治の末から大正にかけて熊本の柔道をささえたのは、星野道場で技をみがき東京高師を出て熊本にはじめて本格的な講道館柔道を普及指導した神江恒雄と、江口道場の出で、熊本古来の肥後流体術を最後迄守った町野貞吉であった。

昭和戦前の熊本の柔道はまさに黄金時代で宇土をはじめ熊本で生まれ育った吉沢一喜、丸山三造、松前顕義、牛島辰熊らがその代表でいずれも「全日本選士権者」のキャリアを持つモサゾロい。中でも牛島は、鎮西中学出身、神宮大会の青年柔道で三連勝、激しい闘志で「鬼の牛島」と怖れられ、後、皇宮警察の柔道師範に抜てきされ、東京赤坂で牛島塾を開き、熊本出身の若手柔道家を育てた。その中の一人に、鎮西中学の後輩で現役時代の十五年間に一度の敗北も知らず、神宮大会、天覧試合など十数度の全国的な大会に優勝を遂げた木村政彦もいた。

戦後は柔道王国再建の努力が続いた。まず花を咲かせたのが木村と鎮西高校、拓大と一緒で昭和十九年の全国個人優勝を遂げた船山辰幸の率いる鎮西高校である。四十二年全国高校で優勝して以来優勝二回、二位二回、三位三回という輝かしい成績をあげた。また国体でもモントリオール優勝の上村春樹が高校で出場した四十三年に総合一位、四十五年二位、さらに警察柔道も、本年の全日本選手権

出場の上野清吾、喜納政美、パリー国際大会に優勝の阪口和秋、闘将坂本綱正を擁し輝かしい成果をあげている。特筆すべきは中学生の強さである。四十五年から行われた全国中学生大会では、現在までの七回のうち四十五年から白石礼二監督の藤園中学校（現在、東海大在学中の山下泰裕がその中心）が三連勝、四十八年は天明中学が二位、四十九年からは白石監督が転動した九州学院中学が三連勝と絶対の強さを誇り、本県の柔道界は今や日の出の勢いである。

剣道

明治の熊本剣道界が生んだ逸材はあまりにも多い。道場をかまえていた和田伝、宮脇弾次をはじめ、済々黉の出身者だけでも、各県知事を勤め、全日本学生剣道の生みの親となった大塚惟精、皇宮警察署長を勤めた坂口鎮雄、陸軍戸山学校の戸山剣道を代表した江口卯吉、五高の師範として五高の全盛時代を築いた鶴田三雄など多士済々である。その他、剣道の生き神様と言われた十段大麻勇次など枚挙にいとまがない。

昭和の本県剣道史は済々黉によって作られた、明治十五年学校創立と同時に正課としてとり入れ、熊本の剣道をもりあげる中心となっていたが、昭和六年に全日本中学校剣道優勝大会の覇権をにぎって以来十年間毎年全国制覇を遂げ、天下に「剣道の済々黉」を誇った。この偉業をなした指導者は、林田敏貞である。鮎託郡出身、熊本中学校から東京高師体育科の一回生として卒業。その指導力は抜群、多くの優秀な剣士を育てた。

終戦時は文部省の体育官として、剣道の復活に情熱をかけたが実



林 田 敏 貞

現せず、体育教師の免許のない武専（武道専門学院）等を出た武道教師に体育の免許を出すための検定講習会の開催に努力した。昭和二十二年には熊本に帰り、人吉中学校長、熊本商科大

教授、県体協理事長として活躍した。

剣道が復活し、二十八年から全国都道府県大会が開かれ、三、四、七回大会では見事優勝。そのときのメンバーは、全国教員大会の大学高校の個人の部で三連勝を含む四回の優勝を果たした済々黷高校教員の石原勝利（済々黷——東京体育専門学校）、済々黷——早大出身の緒方敬夫、済々黷——武専出身の天才型の剣士緒方敬義、この三名はいずれも済々黷全盛時の主将経験者、そのほか八代東高を男女とも全国制覇に導いた八代中出身の井上公義、八代中出身で現在、熊本の武道のメッカ熊本武道館の事務局長の一川格治と豪華なメンバーであった。以後本県の剣道は、優秀な指導者に恵まれ、各部門に全国制覇をとげているが、近年では、全日本剣道選手権大会四十八年優勝の山田博徳（鹿本高——県警）五十二年優勝の右田幸次郎（八代東高——熊本西高教員）を頂点に、中学生全国大会の七回のうち、泗水中、菊池南中が三回の優勝をとげるなど輝かしい成績を収めている。

県剣道連盟現会長の増田英夫（県議会議長）は、熊本武道館を建

設し、学校剣道の振興に尽力、会長の陣頭指揮のもと、本県剣道の前途は洋々たるものがある。

「弓道」細川藩時代から熊本弓道は盛んであり、戦前の大正、昭和でも福岡と優勝を争ってきた。戦後も、渡辺重義（県弓道協会会長）、南裕之（同理事長）、金子清則らの熱意と好指導で、国体で三回も総合第一位をとり日本のトップクラスを維持し続けている。

六 本県の誇るスポーツ

ハンドボール王国

モントリオールオリンピックには二名の監督と選手六名を出している。とくに女子は、一般、高校、中学とも全国のトップレベルにある。この基礎を作ったのは、日体大で戦前日独対抗に出た藤田八郎と北川浩である。モントリオールオリンピック日本チーム男子監督の竹野幸昭、女子監督の井藤は済々黷高校における藤田の教え子。

北川は、女子ハンドボールの強化に努め、熊本市立高校を三十二年のインターハイから三連覇させた。市立高校のあとを受け継いで四十二年まで菊池農高が全国に覇をと見え、現在は熊本女子高が全国のトップにある。また、中学生女子は北川の教え子達が頑張る、全国三連覇をつづけている。女子実業団は、大洋デパートの活躍の後立石電気が、四冠王を達成した。

水泳

二百年前から肥後に続く「小堀流」の伝統と土壌の中から、ロー

マ大会百メートル背泳三位の田中聡子、ミュンヘン、百メートルバタフライ優勝の青木まゆみが生まれた。その他オリンピックには競泳で十七人、水球ではベルリンの古荘次平（熊本商業高校——早稲田大）以外は水球日本一を何度も果たした済々黷の名部長だった平田忠彦（県体協強化部長）の教え子七名が出場している。

ボクシング

日本を代表する名選手「戦前の永松英吉、戦後の藤本数馬」を頂点に多くのチャンピオンを生み、鎮西高校、九州学院がインターハイ、国体で優勝、国体の得点源であり、中央では永松英吉（明大教授、ベルリンオリンピック選手）がリーダーシップをとり、熊本では弟の英三（熊本高——明大）がリーダーである。

体操

戦後、熊本の体操を再建したのは遠山の真弟子西岡寅雄と、鎮西高校に戦後赴任した江頭幹治である。江頭は新しい器具を揃え、各学校の選手を集め合同練習をはじめ体操を盛りあげた。オリンピックには二名の女子選手を出し、国体では毎年得点源となっており、新体操では芦北高校が最近日本一を誇っている。

陸上競技

戦前では、金栗のほか、ベルリン大会に、三段の戸上研之と短距離の谷口陸夫が出場。戦後は四盤投げの横山弘子がローマ、東京に出場、インターハイでは二十五年にメルボルンに出場した短距離の清藤亨を中心に九州学院が活躍。三十年には川野征夫を中心とした済々黷高校。三十二年には、ファイター部長、富永勝美（県陸協

理事長）の率いる熊本工業が優勝を飾り、陸上日本一を誇った。

金栗翁の影響で風伝が盛んであり、金栗の出身校の玉名高校が三十七年に全国優勝以来、熊本工、第一工業、九州学院が出場し、常に上位入賞を果たしている。

▲付記▼

本県スポーツの流れと武道に重点をおいたので他の競技の紹介が十分できなかった。ご容赦いただきたい。

参考…熊本の体力（熊本日日新聞社刊行）

（熊本県体育協会事務局長）



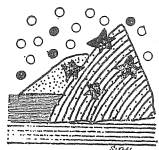
200/11

人物を中心とした

— 体育・スポーツ郷土史 —

— 山 梨 県 —

水 上 和 夫



はじめに

山梨県は「日本の屋根」と言われる中央高地の一部を占め、地形はけわしく、北東部に秩父山地が連なり、西部には赤石山脈、南部に霊峰富士を中心に富士五湖や御坂山系、北部には八ヶ岳等多くの山々に囲まれた「富士箱根伊豆」「南アルプス」「秩父多摩」の三つの国立公園と八ヶ岳中信高原国定公園を有する風光明媚の地である。県土の約八十パーセントは山林であり、人口は約七十八万人という小県である。本県は、甲府盆地を中心とする「国中地方」と県東部に富士山ろくを中心とした「郡内地方」に大きく分けられる。気候は地域によってかなり異なるが、甲府盆地は盆地特有の大陸的気候で特に夏は高温多湿で、冬は季節風が強い。この風土の下、良き指導者を得て冬季のサッカー等が盛んである。富士山ろくや八ヶ岳山ろく地方は冬はかなり低温となり昔から湖、池、水田、校庭に水を張りスケートを行って来たが、現在は、富士山ろくと八ヶ岳山ろくに人工スケートリンクが設置され、スケート山梨のメッカになっている。

主な産業は、古くからの米作と養蚕に加え野菜、果樹園芸、酪農を中心とした農業と、昔からの繊維産業として郡内地方を中心に甲斐絹の生産が盛んであった。また、食品などの軽工業に加えて機械、電気、精密、金属関係の工業が伸びてきている。特産物として

のぶどう、ももなどの果実生産物は日本における約二十五パーセントをしめている。さらに、水晶研磨工業は古い歴史と伝統に支えられ、その技術水準は世界的に認められているが、現在は原石をブラジル等から輸入して加工している。

一方、本県は甲州商人として知られた行商人の出身地としても有名で現在でも行商に出ている人が多い。経済界、財界で活躍している人も多く、甲州財閥と呼ばれる人もある。

このように緑豊かな自然に恵まれた本県は「健康山梨」を県政の重点施策にかかげ県民の体育・スポーツの普及振興を図っている。

一 近代スポーツの普及に貢献した人びと

本県体育の黎明期は行政が中心となっていたようである。そこで先ず行政で活躍した人をあげてみよう。

明治の末期から大正期の体育は衛生行政をもって管轄されていた。大正九年に県学校衛生主事に任命された手塚富三は、学校衛生会、体育研究会の設立など保健、体育の両面にわたって本県の行政の中心人物として活躍した。このように衛生技師による体育行政が進められて来たが、昭和四年に体育専門家である土屋満美が県体育運動主事となった。しかしこの時は師範学校の教諭と兼任であった。また、県民のスポーツ広場である県営の運動場が建設されたのもこのときであった。

今福神明

明治の中後期の体育として注目されたものに柔道、剣道、弓道等のいわゆる武術があげられる。明治二十二年には甲府市桜町に剣法館が設立され今福神明、斉田斉等によって剣道の教授が行われ、次第に剣道が普及されていった。今福は中巨摩郡忍村（現在の田富町）の出身で、山岡鉄舟の門下となり、北辰一刀流を学び鉄門四天王と称せられ、明治二十九年第二回全国武徳祭演武大会において精錬証を授与されている。

野口二郎

大正末期から戦前、戦後を通じて本県のスポーツを語る時にはまず野口二郎を紹介しなければならない。野口は明治三十三年甲府市に生れ、甲府中学校時代野球部員として活躍し、第八高等学校を経て東京帝国大学法学部政治学科を卒業した。大正十四年の九月には山梨庭球協会を創立し会長に就任したが時に弱冠二十五歳であり、



野口二郎

父の家業を継いで山梨日日新聞社社長であった。その後山梨県体育協会の設立に尽力し、昭和四年に同会が設立されるや理事長に就任し協会の運営に当たった。同八年には第一回民衆体育

昭和六年に専任の体育運動主事が置かれ、青山正文が就任し、県蹴球協会等競技団体の結成や運営にも尽力した。

次いで十三年には体育運動主事は宇野勝彦にバトンタッチされ、さらに十六年には田口政義に交替した。

田口は戦時中は県体育振興会理事となり、練成大会等の指導にあたった。戦後は県体育協会、県スケート連盟、県ラクロスフットボール協会、県体操協会、県ハンドボール協会、県ヨット協会等多くの競技団体及び県高等学校体育連盟等学校体育団体の結成及び復興に奔走した。二十三年九月に県教育部体育課長に就任し、三十四年に県立巨摩高等学校の校長として転出するまで長年にわたり、本県体育行政の責任者として活躍した。その間、県体育協会の理事、事務局長、理事長なども歴任している。そして巨摩高校に転出してからは県高等学校体育連盟の副会長、会長としても活躍し、三十九年に県立巨摩高等学校を退職するまで高等学校の体育・スポーツの振興に寄与し、退職後は日本スポーツ少年団本栖湖センター所長を六年間つとめた。その間三十七年から四十五年まで県スポーツ振興審議会の委員としてスポーツ振興に尽力した。これらの功績により五十一年に県教育功労者として表彰されている。

次に民間で明治後期から大正、昭和にかけて活躍した人をあげよう。

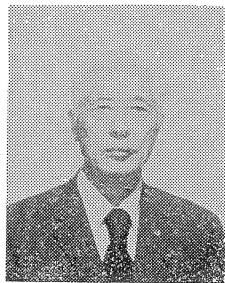
功労者として文部大臣賞を受賞している。同九年には山梨陸上競技協会、甲府ワンドラーが設立され野口はこの理事長としてこれらの団体の運営に尽力した。十二年には山梨蹴球連盟の会長となり、翌十三年には山梨水上連盟、山梨山岳連盟の会長に就任した。また、この年に体育功労者として財団法人奨健会長賞を受賞している。

戦後、二十一年に野口は同志の先頭に立って山梨陸上競技協会及び山梨蹴球協会を再建し会長に就任した。また、同じ年に山梨卓球協会、山梨水泳連盟、山梨排球協会が再建されその会長に就任した。戦争中、組織変えにより生まれた県体育会もこの年に山梨県体育協会に改組され野口はこの会長に就任した。二十三年九月には、第一回山梨県体育祭りを開催するはこびとなったが、野口はこの大会の趣旨として「県民みな体育」を提唱し、早くからスポーツの大衆化を図った。二十七年には県体育協会、県陸上競技協会、山梨日日新聞社が主催して第一回県下一周駅伝競走大会が開催され、本県長距離界の発展に寄与したがこれも野口を中心として計画されたものであった。

野口は青少年の野外活動にも非常に関心をもち三十一年六月に県野外旅行委員会が設立されるやその会長となり、県下に十四のコースと十三の宿舎を指定し、これを拠点としたこの運動の発展を図り、三十四年五月にはこの委員会を発展的に解消して山梨県ユースホステル協会を創立し会長に就任した。三十七年には山梨県スポー

ツ振興審議会が設置されたが、野口は審議会の委員長として本県スポーツの振興計画の作成等に尽力した。そして、五十年に健康上の理由で審議会委員、県体育協会会長など多くの役職を退くまで本県の体育、スポーツ、文化、経済に大いに活躍し、その発展のために多大の貢献をした。その間昭和四十五年には「勲三等瑞宝章」に叙せられている。そして、野口二郎は多くの人々に惜しまれながら昭和五十一年一月十八日七十五歳の生涯を閉じたのである。実に生涯を通して本県スポーツの振興に情熱を注いだ人物といえよう。

国民体育大会参加の折なども忙しい日程をやりくりして選手と一緒に国体臨時列車に乗り、車中でも「〇〇君調子はどうだ！しっかりたのむよ。」などと激励されていた。思えば、若い選手にとっては気軽に話せる親父のような人であった。



二 「サッカーとスケートの山梨」実
現に貢献した人々
岩崎 鋭市郎
本県の競技スポーツの特色
色と言えはサッカーとスケ
ートであろう。以下両競技

の振興に貢献した人の紹介をしよう。

岩崎 鋭市郎

盛れた。このように岩崎の率いる葦中は戦前の全盛期を迎え、やがて戦後葦高となり第七回国民体育大会（昭和二十七年）で明星高校と両校優勝となった。葦中、葦高と三十六年間サッカーを指導して来た岩崎にとって一度も完全全国優勝ができなかったことは誠に残念なことであらう。岩崎は十六年から三十七年まで県蹴球協会の副会長をつとめ、葦高退職後は剣道スポーツ少年団の指導など地域のスポーツ指導者として活躍しているが、山梨県剣道連盟の副会長を四十二年からつとめ五十年からは会長として本県剣道の振興に尽力している。その間四十七年には体育功労者として文部大臣表彰を受け、五十年には県の教育功労者表彰を受けている。

川手良萬

川手良萬は大正九年三月、須玉町に生れ、山梨工業高等専門学校を卒業し、昭和二十七年に川手工業所を設立して社長となり、以来土木事業を職としている。川手は三十年に山梨県蹴球協会の理事になり、三十七年から同副会長をつとめ四十七年に第一造会長からバトンタッチされて現在山梨県サッカー協会の会長として本県サッカーの振興に尽力している。特に、川手は一般社会人のクラブチームである甲府サッカークラブを三十九年四月に有志を集めて結成しその代表者となりクラブの育成に当たっている。実業団など強力なバックをもつクラブチームの多い中で甲府クラブは地域のクラブチームであり、構成員も、教員、自営業、会社員、僧侶等多様である。

本県のサッカーを語るにはまずこの人から語らなければならないと言われるサッカーの育ての親のような人が岩崎鋭市郎である。彼は明治三十八年五月新潟県に生れ、昭和二年に日本体育専門学校（現日本体育大学）を卒業してすぐ旧制葦崎中学校（以下「葦中」と言う）へ就職した。当時葦中の校長は堀内文吉であったが、学校で剣道を専門にしていた岩崎は、「葦中でサッカーを是非やってくれ、サッカーを校技とするのでよろしくたのむ」と言う堀内校長のたつてのたのみで葦中にやって来た。そして、葦中、新制葦崎高等学校（以下「葦高」と言う）でサッカー一筋に打ち込み葦崎に永住することになった。岩崎は葦中の名物先生で「嵐」のあだ名で生徒に親しまれた。新入生などは「岩崎」より先にあだ名を上級生に教えられ、本人に向って「嵐先生」と言ったという逸話がある。岩崎は授業にきびしい先生だったが同時にサッカーに情熱を燃やし新設間もない歴史も伝統もない葦中サッカー部を天下無敵のチームに育てあげた。昭和三年に第二回県ア式蹴球大会（サッカー大会）が行われ、葦中が初優勝し、葦中全盛時代の礎をつくった。葦中は七次に松本市で開かれた近県中学大会で県外大会の初優勝をかぎり、以後関東、全国への栄光の道をたどった。即ち昭和十年には、第二回関東中等学校蹴球大会で優勝し、第十七回全国中等学校蹴球選手権大会では準決勝まで進みこの時は神戸一中に五対四で惜敗している。翌十一年の第十八回大会において決勝戦で広島一中に五対三で

このクラブは古河電工を退社した元全日本代表のゴールキーパーだった保坂司監督のもとで仕事の終った夜間とか土、日曜日に練習を続け、四十四年には、全国社会人サッカー大会で優勝し、四十七年に日本サッカーリーグ第二部に入り、四十八年に同リーグで準優勝するなど多くの好成績を収めている。川手は甲府クラブの育成に打ち込み、ここまで成長させて来た育ての親でもある。さらに県サッカー協会の会長として本県サッカー指導者の育成確保に尽力し、第二十三回国民体育大会（四十三年）での葦高、及び総合、第二十八回国民体育大会（四十八年）での教員、第二十九回国民体育大会（四十九年）での教員の優勝と数々の本県サッカーの活躍に物心両面にわたり大いに貢献している。川手は四十七年から県体育協会の理事に就任し、サッカーのみならず広く本県スポーツの振興のために尽力している。この間四十六年に日本蹴球協会表彰、五十年には県政功績者の表彰を受けている。なお、五十二年には山梨県建設業協会の会長をつとめるなど業界、スポーツ界に幅広い活躍をしている。

石丸 九郎

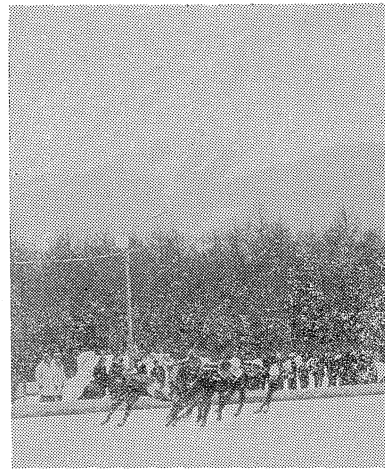
サッカーと共に本県スポーツの特色はスケート競技であるがその生みの親として先ず石丸九郎を紹介する。石丸は明治三十九年三月中巨摩郡八田村榎原に生れ、大正十五年に甲府市立春日小學校の訓導となった。この頃から大沢伊三郎、宮沢一男、島田武、高村武雄らとスケートに親しんだ。これは本県スケートの草分けであり、石

丸は昭和初期には高村と並んで本県スケート界の第一人者となった。昭和二十一年に山梨スキー・スケート連盟が結成されたが二十三年にはスキーと別れ山梨県スケート連盟が発足するに至った。石丸はこの連盟設立の原動力となり自からその会長に就任し本県スケート界発展の基礎づくり尽力した。三十三年に会長を高村にバトンタッチし、名誉会長としてスケートの指導及び審判に活躍している。石丸は国際スケート連盟(ISSU)のジャッジ・国際レフェリーとして札幌オリンピック冬季大会の審判員をつとめ多くの国際大会又は国内大会で審判員として現在も活躍している。これらの功績により、四十五年に体育功労者として文部大臣表彰を受け、五十一年には県教育功労者として表彰されている。

高村武雄

高村武雄は明治四十五年三月山中湖村山中に生れ、石丸午郎と共に大正の初期からスケートを始め、今日の本県のスケート界を育てた第一人者である。最初はスキーとスケートの両方をやり、選手としても多くの大会に出場し活躍している。戦前に竜坂スキー場を開発し、スキーハウスを建設してスキーの普及にも一役買ったことがある。高村は昭和二十七年から県スケート連盟の副会長をつとめ、三十三年に会長に就任し、峡北、富士北ろく地方を中心にスケート人口の増加と優秀な選手の育成強化に努力した。かつては諏訪湖(長野県)など、県外へかけて本場のスケートを習うことによって

県外大会等にそなえた本県のスケートが、今や北海道、長野等と並んで先進県の一つとなった。ここまで本県のスケートを育てた陰に高村の並々ならぬ努力と物心両面にわたる援助があったことを忘れてはならない。彼の家には大正時代からのスケートの写真をはじめ数々のコレクションがあり昔をしのばせてくれる。また従来池や湖等天然の氷で行っていたスケートも人工リンクで行う時代となり、



富士山麓で開かれた国体スケート競技会

次いで富士スバルランドスケートセンター、八ヶ岳バンテスコープスケートセンターと四百メートルの公式大会が開催できるリンクが県内に三か所も民間会社の手で建設された。県スケート連盟はこれらの施設の協力を得て地元スケーターの育成に努力し、これらの施

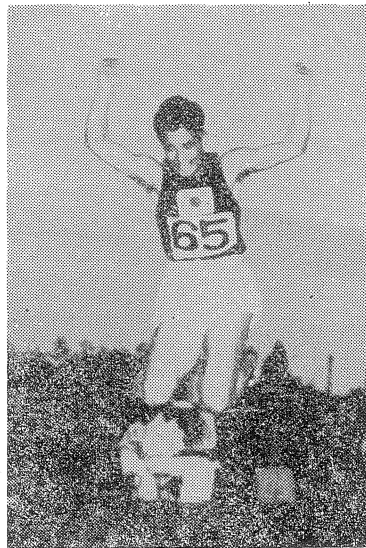
設を使って多くの県外大会が開催されるようになり、審判員の養成、競技運営の改善も進められてきた。やがて全国大会、国際大会で活躍する選手を育てるに至り、四十四年一月には本県初の国体、第二十四回国民体育大会冬季大会スケート競技会を開催し、更に同年には、第十八回全国高等学校スケート競技選手権大会と続けて開催された。高村はこの競技運営の中心的役割を果たしている。この国体で本県は男女総合第三位、女子総合第七位の成績を収めた。ちなみに国体の成績は二十二回大会は男女総合第四位、女子総合第八位、二十三回大会は男女総合第三位、女子総合第六位、さらに五十一年に本県で開催した三十一回大会では男女総合第二位、女子総合第一位であった。高村は冬になると赤ら顔にコートを着てその胸にスケート関係のバッジを一杯つけて歩いた。また彼は県ヨット協会の設立にも協力し、その副理事長をつとめたこともある。そして三十九年体育功労者として文部大臣表彰を受けている。

三 オリンピック大会に出場した人々

本県関係のオリンピック競技大会に出場した選手は次の方々である。

矢田喜美雄(山梨師範、早稲田大学卒、甲府市出身)昭和十一年第十一回大会(ベルリン)走高跳第五位(一メートル九十七)

窪田博芳(甲府中学、早稲田大学卒、敷島町出身)第十一回大会



日米対抗陸上競技大会(東京大会)で活躍する飯室選手

千六百メートルリレー出場

細田富男(日本大学卒、白州町出身)昭和二十七年第十五回大会(ヘルシンキ)百及び二百メートル出場

飯室芳男(甲府工業卒、甲府市出身・在住)元山梨陸上競技協合理事長、現在山梨県教育委員会勤務。第十五回大会三段跳第六位(十四メートル九十九)

長久保文雄(峡北高、専修大学卒、小淵沢町出身)昭和三十五年第八回冬季オリンピック大会(ストックホルム)スケート五百メートル第九位(四十秒四、日本新記録)千五百メートル第二十一位
中村昌枝(旧姓河西、巨摩高校卒、甲西町出身)昭和三十九年第十八回大会(東京)第一位、日本バレーボールチームの主将として活躍
保坂司(甲府一高、明治大学卒、甲府市出身・在住)第十八回大

会サッカー競技に出場。現在県体育協会競技力向上委員。

長久保裕（甲府一高、日本大学卒、甲府市出身）昭和四十七年第十一回オリンピック冬季大会（札幌）フィギュアスケート、ペア出場、現在プロコーチとして活躍

鶴田友美（日川高、中央大学卒、牧丘町出身）日川高時代、中央大学一年までバスケットの選手、全日本チームのメンバーに選ばれたが退部してレスリングに転向し、四十六年第十九回オリンピック競技大会（ミュンヘン）に出場、現在プロレスラー

佐野稔（日大鶴ヶ丘高、日本大学在学中、石和町出身）小学校五年生のころスケートをするために川崎市に行く。以来フィギュアスケートに打ち込み、五十一年第十二回オリンピック冬季大会（インスブルック）フィギュア男子の部第九位、同年フィギュア世界選手権大会（スウェーデン）で第七位、五十二年三月フィギュア世界選手権大会（東京）第三位

矢野広美（増穂商高卒、増穂町出身）日立製作所勤務、五十一年第二十回大会（モントリオール）女子バレーボール第一位

藤本俊（日本体育大学卒、広島県出身）五十一年一月から山梨大教育学部教育、第二十回大会体操男子団体第一位

石黒建吉（立教大学卒、名古屋市出身）第二十回大会総合馬術に出場

堀内巧（北富士工業、関東学院卒、山中湖村平野出身・在住）、第二十回大会ヨット競技フライング・ダッチマン級第十八位

た。スポーツ広場は、生活に密着した地域ごとの小規模なものから市町村のセンター的なものまで補助対象とし、比較的小規模の住民の広場が数多く整備されて来た。昭和五十年の文部省調査によると、公共スポーツ施設は施設当たり人口の少なさは、宮崎県に次いで第二位、小・中・高校の夜間照明施設の設置率は全国第一位という状況であり、夜間照明施設は、学校開放及び施設の効率的利用に大いに役立っている。県下六十四市町村に夜間照明施設の設置されていない市町村は無く、毎晩、山間の村里まで光々と照らす照明のもとで、地域住民がスポーツに親しんでいる光景を見ることが出来る。また、田辺は、国の体育施設整備費の確保のために、全国体育施設整備期成会の会長を知事就任以来ずっととめており、国庫補助金の拡充に尽力している。一方、県立のスポーツ施設としては、体育館、スポーツ会館、サイクリングロード、スポーツ公園等の建設を行っている。

次に、指導者の確保であるが昭和四十三年の十月十日「体育の日」を期して県教育庁に体育主事を設置した。この時は年度中途であり、殆どどの者が社会教育主事兼務であったが、翌四十四年四月には県下八教育事務所に一名づつの専任体育主事が配置され、社会体育の指導助言に当たっている。体育主事は、四十五年、四十六年と増員され、現在は、各教育事務所に二名づつ、総合運動場に四名、保健体育課に二名の計二十二名が配置されている。さらに五十一年度から社会体育指導員（週二十四時間程度の非常勤）を市町村

四 健康山梨の推進

本県は昭和四十二年以来「健康山梨」を県政の重要な柱としてその実現のための諸施策を進めて来た。以下この提唱及び推進に当たった人を紹介しよう。



田 辺 国 男

田辺国男
昭和四十二年に衆議院議員であった田辺国男は、知事選に立候補するに当たり公約の一つとして「健康山梨の実現」をとりあげた。知事選の公約に体育・スポ

ーツの振興がとりあげられたのはこれがはじめてであった。やがて田辺は知事に就任し、この公約を実現するための施策を進めて行った。田辺は、大正二年九月二十四日に塩山市に生れ、日川中学校時代野球の遊撃手として活躍し、以後今日まで大のスポーツファンである。次に、田辺が進めた施策の主なものを紹介しよう。

「健康山梨」を実現するためには、県民が日常生活の中でスポーツに親しみ健康で明るく豊かな生活を営むことが必要である。そのためには、県民の身近に、手軽に利用できるスポーツ施設の整備が必要であるとして昭和四十三年度から県単独の補助による事業として水泳プール、スポーツ広場、夜間照明施設等の助成を行って来

が任命する場合の助成措置を県単独で行っている。また、（財）山梨県体育協会の会長を野口二郎のあとを継いで五十年六月からつとめ、本年四月には（財）日本体育協会の理事に就任し、スポーツ振興に尽力している。

角田正久

大正八年十月十日生れ、甲府商業時代野球の選手として活躍。満鉄に就職したが、終戦で引き上げ県庁に入り県庁野球部員として活躍国体等へ出場したこともある。二十五年から県野球連盟の要職を歴任した。二十七年から県体育協会常務理事、その間四十三年から五十一年まで理事長、四十三年から五十一一年三月まで県教育庁保健体育課長をつとめ、田辺知事の「健康山梨」推進の直接の責任者として本県スポーツの振興に尽力した。

おわりに

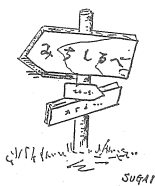
本県のスポーツ界は長年にわたる多くの先輩たちの努力によって支えられて来たと言えよう。県体育協会についても五味一男、谷口梅吉、小林昌治、原一造、故五味羊、故石沢羊一ら副会長及び理事長の保坂孝行など多くの方々の活躍によって発展して来たと言える。しかしながら、限られた紙面と筆者の勉強不足のため、多くの方々を割愛せざるを得なかったことをお詫び申し上げる。

なお、文中の人名は敬称を略させていただいた。

（山梨県教育庁保健体育課副主幹）

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史



——山口県——

福井 脩 治

長距離山口

明治三十二年二月十一日山口高等学校遠足部が、山口・防府間十マイル長距離競走を試みて、三十名の参加者全員完走し、一時間二十二分三十秒で中村隆祐が優勝しているが、地元新聞はもとより、ジャパントイムス、時事新報社など、この壮図を全国に向けて大きく報道し、県内外に大きな反響を呼んだ。これはわが国長距離競走のはじまりということで、日本体育史上有名であるが、これが計画されるについて次のような記録が残っている。

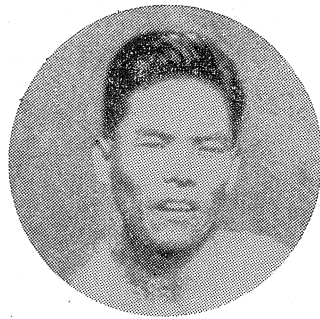
明治三十一年十二月四日、同校運動部の委員会の席で、土井教授が英米両国と東京大学と山口高校の陸上競技のレコードを比較発表したところ、杉森教授がこれに対し次のような感想を述べたことが動機となっているようである。

「土井教授の朗読せられレコードによれば彼等のレースの成績の差異は、近距離においては僅かに一秒前後なれども、すでに四百四十ヤードを過ぎれば八秒となり、即ち距離の遠くなるに従い差異の益々広がるは何たるか。しかも、未だかつて我が邦人中十マイル以上のレースをなしたる者あるを聞かず、これ体格の然らしむるところとはいえ、我の一時に急激にして、永久的速力を持続する能わざるに原因せん。換言すれば、我々に耐久力なき所以なり、ただ運動事業にとどまらず、凡ての事業に接して、我々日本人は一時的急激の傾向あり。我々は将来彼等と対抗して、世界の競争裡にたたざるべからず、誠に見よ、ランニングレースの際、後方より追い越さるれば意気とみに挫折して半途で中止する者あるは余の目撃すると

ころなり。猛進の勇を鼓して先頭者に追い付かんとする意気を出さざるべからず、けだし、先頭第一着が必ずしも運動最終の目的にあらず、体育の発達をはかり不屈の精神を養成することが体育本来の目的にあらずや。」と。

この壮図に対し県外にあっては、何事につけ負けることの嫌いな第一高等学校生徒が、それより三か月後の五月十三日、東京不忍池を十三周する十三マイル競走を行うところとなり、県内にあっては各中等学校、各市町村青年団で十キロから十二、三キロのコースを選んで長距離競走を行うところとなった。こうした機運にあった時、大正五年十二月二十四日、第一回（本年六十一回）山口県体育大会が、山口県教育会と大日本武徳会山口支部の共同主催で、剣道、柔道、マラソンの三種目ではじめられた。

マラソンは当日の呼び物で、山口高等商業学校運動場を発着点とし山口市内を一周する約十マイルのコースで、右競走に参加する者は県下中等学校生徒、各



門 尚 田 縄

郡市武徳会員、青年団員等であつて、開催は青年学生の元気を振興し、体育を奨励するのが目的であるから、「学生たり青年たるを問わず品行方正にして脚力を業とせざる者。」と規定されていて、アマチュアスポーツの基

日本人の体格や体力でオリンピック陸上競技で勝つことは無理である。先ず体格をつくり体力をつけねばならないが、それはずつと先のことで、差向きは余り体格に支配されない長距離とくにマラソンしかない。それには走ることの好きな者の中から胸廓の発達した者を訓練することだ、と村社耕平の五千メートルの日本記録を二十年振りに更新した藤井忠彦（早大）が宇部高時代昭和二十七年第四回全国高校駅伝第一区一万メートルに一位になったの目をつけたが、進学して県の手から離れた。昭和三十一年から国体青年五千メートルに三年連続優勝の金重千之（山口農高—宇部興産）を指導したが、スピードランナーとして三十五キロまでは日本一であったが後七キロに問題を残して年齢がいつてしまった。縄田氏の執念が遂げられたのは浜村秀雄（秋穂青年学校—山口県教委—協和醸造防府）と貞永信義（右田小学校—鐘紡防府）であった。何れも中肉中背特に胸廓がよく発達している。浜村には昭和三十年のボストンマラソン優勝と三十一年の第十六回オリンピックメルボルン大会の出場があり、貞永には昭和三十三年第十一回朝日国際マラソンでフィニッシュのカルボネンとの劇的な一騎打の優勝のほか、第十七回ローマオリンピック、ボストンマラソン、アジア大会など含めてマラソン完走七十六回うち優勝六回、なお東京オリンピックではマネージャー、メキシコオリンピックでは監督と豊富なマラソン体験がある。昭和三十三年アジア大会が東京で開かれた時、マラソン日本代表三選手の中、浜村、貞永と山口県選手二人国立競技場のゲートを出て行く姿を本部席より見ている縄田氏の顔は満足そうであった。下関・大阪間の近畿中国四国府県対抗駅伝で山口が昭和三十三年の

本を制定している。本大会は、学生と青年を区別しないで行つていて、優勝して懐中時計を受賞したのは、興風中学校の縄田尚門（明治三十年生）で、彼はその後早稲田大学に進学、高文取ろうかオリンピックに出ようか、大分考えた末後者を選び競走部に入り、八百メートル、千五百メートル、五千メートル、五マイル競走などで幾度か日本記録を更新し、第六・七回極東大会に日本代表選手として、千五百メートル優勝、五マイル第三位、ベルリンオリンピックでは陸上長距離陣の監督として、村社選手活躍や孫選手の優勝とその責任を果した。第八回オリンピックパリ大会予選会に縄田氏は、雨中五千メートルに優勝し、平生の力と併せ早稲田関係者などは選考されるものと思つていたが、期待に反し選にもれた。これに端を発し、いわゆる十三校問題（詳細は日本体育協会発行スポーツ八十年史一四二頁）のきっかけになったり、また、第七回マニラ極東大会では、審判への不信から陸上陣総引揚げの時は、国民の露出金を沢山使つて来て試合せずに帰るようなことは出来ない」と最後の一人になるまで引揚げに反対したり、硬骨漢縄田氏にまつわる話題は多い。その後日本選手権中長距離で優勝した県出身選手には、昭和五年一万メートルの中島基幸（名田島小教員—早大競走部主将）、昭和十四・十五年八百メートルの石田正巳（宇部工業—日大）、昭和十七・二十一・二十二年一万メートルの末永包徳（鴻城中学校—中央大）がいる。石田や末永は昭和十五年の東京オリンピックが返上されなかったら、当然選ばれる力を持っていた。縄田尚門は戦後帰県し、山口陸協の副会長に就いて会長をつとめたが、陸上競技選手を育てるに当たって国体の成績など全然考えていない。彼の頭はオリンピック選手を育ててみたい一念であった。彼の持論は、現在の

第一回から四年連続優勝した頃は十キロ三十一分台以内の選手を、毎年三十人揃えていたので、この中からきつとオリンピック選手がつくれると張り切っていた縄田氏も三十八年山口国体頃から体力気力次第に衰え昭和四十三年永眠した。今は生前の勇姿を偲び縄田賞十マイルマラソンが毎年行われ、浜村、貞永が指導の中心になって長距離選手を養成している。浜村は出雲産業高から入社した青木豊をコシチマラソン三位に、貞永は地元多々良高から入社した松原一夫を毎日マラソンに優勝させるなど漸く指導のこつを呑みこんだ。しかし、スピード化した世界のマラソン界についていくには先ず駅伝競走に力を入れスピードと共に山坂で足腰の強化をはかる必要があると、挙県九州一周駅伝に参加したり、五十一年暮から五十二年初頭にかけて鐘紡選手は全日本実業団駅伝、朝日駅伝、中国駅伝と三大駅伝に優勝し、いわゆる三冠王となり、日本大学より入社した高尾信昭は一万メートル日本記録保持、長野県上伊那高より入社した伊藤国光が駅伝王と云われ、秋田市立高より入社した鎌田俊明はモンテリオールオリンピックに選ばれ、五千メートルと一万メートルに出場、自己最高記録を出し根性は讃えられているが、世界のスピードランナーに比してはまだ遜色がある。しかし、それが刺激となって、近頃の競技会では、皆が始めからどんどんとばし世界のスピードにおくれまいとする気迫が感じられる。それかあらぬかこの原稿を書いている七月、ヘルシンキより鎌田一万メートル二十八分の壁破るとか、ストックホルムより伊藤一万メートル日本新で五位とか、こうして五千メートル十三分台一万メートル二十七分台の選手は次々生れるが、このスピードをマラソンにつないでモスクワへ乗り込むことが目下の課題である。鐘紡や協和醸造のある防府市

では、選手の練習に便宜を与えようと元体育課長西村義助の肝煎りで自動車の少ない道を選んで公認マラソンコースをつくったり、読売新聞社の力を借りて、日本陸連公認の防府読売マラソン大会を開催して浜村・貞永の抱負を側面より援助している。

長距離選手は練習につぐ練習、努力に努力を重ねなければ生れないが、短距離や跳躍は天分にたよるところが大きい。大正末期彗星の如く現れた阿武蔵夫は萩中学三年の時百メートルで県記録をつくり、鴻城中学に転校してから全国の強豪が集まった京都の賀茂グラウンド開きに学校に無届で運動具店主が申込み、百・二百に優勝したことが翌日の新聞に出て学校長と訓育主任に大目玉。運動具店主が、私が申込んで私が連れていったので阿武が悪いのでは無い許して下さいと三拝九拝やと処分はまぬがれたが中等学校日本一の折紙がついた。ところが彼にも近い所に強敵が現れた。毎日同じ運動場で練習する山口師範の藤本英雄である。三年の頃からすると記録をあげ阿武と全く同じ百米十一秒〇、二百米二十三秒〇。昭和三年の県体はどちらが勝つかの前評判も高く市内は勿論県下の話題となり、当日の観衆は例年に無く多く、スタンドの無い運動場の決勝点付近は黒山の人だかり、百も二百も殆んど同着素人目にはどちらが勝ったかわからない大勝負。発表では百メートル一着阿武十一秒二、二百メートル一着藤本二十三秒四。阿武蔵夫は慶応に進み日本代表として第十回極東大会百メートル三位、四百リレー一位、ロサンゼルスオリンピックでは四百リレー五位、藤本英雄は下関市彦島小学校につとめた。教え子の中に朝鮮姓のスポーツ好きの少年があり、日本姓に変える時藤本先生のようなスポーツマンになりました

たらオリンピックで優勝して見せるのにと、腕の細いのが余程くやしいようであった。

卓球

山口県で卓球が行われるようになったのは、明治末期から大正の初期で、大正十年頃には山口高商、山口高校、山口師範、山口中学の生徒や教職員間で対抗試合が盛んに行われ、大正十五年九州大学で西日本高等専門学校卓球大会が開催され、山口高商と山口高校の選手が遠征して、共に大活躍をしているし、同年山口高等女学校高等科主催で第一回近県女子中等学校球技大会を庭球、卓球、バスケットボール、バレーボールの四種目で開催したところ、県外からも参加があったが、県下の中等学校の多くが参加しているので、すでに卓球は県下一円に競技化して普及していたのである。

ピンポンと言えば子供の遊びのような感があるので城戸尚夫の提案によって卓球と呼ばれるようになったのであるが、城戸氏は大正七年山口高商の卒業で、在学中ピンポンに熱中し、新しい技術を次々と考え、卒業後大阪の



田 舛 彦 介

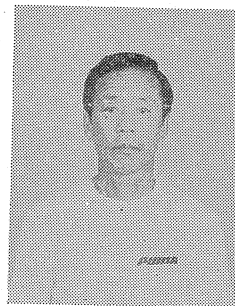
伊藤忠に就職し桜クラブのメンバーとして大正十一年第一回東西争覇戦には西軍の主将となり、昭和二年二月、日支比間の極東ルール協定会議には城戸氏の案をもとに審議

いと、先生の名前をそっくりもらって藤本英雄と名のつた。この少年こそ下関商業に入学、野球部に入り名投手とうたわれ、後巨人の大投手となったその人である。阿武・藤本の卒業で山口市は淋しくなったと思ったら、四月には岩国中学から走幅跳六メートル四十二の県中等記録を持つ田島直人が山口高校に入学、山口高校競技部は俄に活気づき広島高校との対抗戦やインターハイで大活躍し、京都大学に進み日本代表選手となり、第十回極東大会で走幅跳一位、三段跳三位、ロサンゼルスオリンピックで走幅跳六位、ベルリンオリンピックでは、遂に三段跳に十六メートル〇の世界新記録で優勝したことはあまりにも有名であるが、走幅跳にも三位に入賞、日章旗を掲げている。岩国中学は代々陸上競技の盛んなところで、広島高校に進学した村上国平（明治三十八年生、昭和四十六年没）も高校時代度々七メートルを越し、東京大学に進み日本代表選手として第八回極東大会には走幅跳三位に入賞、百メートルも吉岡選手に破られる前には日本記録を持っていたし、体が頑丈なので将来を期待されていたが医者から運動を止められ早く引退したのは惜しまれる。天才的といえは田中弘もいる。興風中学時代、その頃の走高跳は一メートル七十センチで優勝がきまっていた。一位になったと喜んでいて、それまでパスしていた田中がトレパンのまま出て来てその高さを足ならしかたがたひらりと跳ぶ。バーが上げられパンツになって懸念になる。それもその筈彼の持つ県中等記録は一メートル八十八で早稲田に進みベルリンオリンピック六位、彼の持っていた日本記録二メートル一センチは正面跳では世界最高とか。彼はまた器用で、第一回国体で見事なフォームで棒高跳に優勝、彼は細い瘦せた腕をびしやりとたたきながら、この腕が強くてくましかっ

され、同年八月第八回極東大会には監督を勤めるなど草創期以来規則改正や機構改革の重要会議には必ず城戸氏が名を連ね、卓球界の功労者として勲四等に叙せられ、両陛下に卓球の説明を申し上げたこともある。

昭和四年から山口高商と山口高校の両校で春秋開催された近県中等学校卓球大会には、はじめ県内の学校が優勝していたが大阪の天王寺商業や四国の松山商業が優秀な技術で連続優勝するところとなったが、柳井商業に卓球の鬼才田舛彦介（大正九年生れ）が現われ昭和八年一年生の時から選手、昭和十一年東洋大学卓球部の主将であった斎藤博先生が赴任し卓球部長となるに及び力をつけて以来団体、個人とも柳井商業の優勝の回数が増え多くなった。山口高商教授田中稲穂の発起で山口卓球協会が誕生したのは昭和七年。山口県体育大会に卓球が種目として編入されたのは、女子中等学校の部が昭和十二年から、男子中等学校の部が昭和十三年からであった。ここでも男子は柳井商業、女子は下関高女の優勝が目立つ。戦前明治神宮競技大会に山口県選手の上位入賞は皆無であったが、昭和二十一年第一回国民体育大会には、硬式男子一般で田舛彦介二位、硬式ベテランの部で田舛吉郎（彦介の叔父）二位、複、田舛彦介・光田利之組二位に入賞。以来田舛彦介及び柳井高校講師中村清二等の指導によって、柳井高校、柳井商（後、商工）高とも強化され、国体において、一般男女、高校男女とも上位に入賞するようになった。特に昭和二十九年には柳井商工高出身の田舛吉一（吉郎の次男）と柳井高校出身で帝人岩国に勤めていた田中良子はロンドンにおける第二十一回世界卓球選手権に団体優勝するなど、柳井の卓球を県下

一に、日本的に、更に世界的にし、昭和十三年には自ら中心となって日本卓球協会柳井支部主催として、昭和八年沖堀清と田舛吉郎らによって私的につくられた卓球大会を西日本卓球選手権大会に発展させ戦後彼の理事長時代山口県卓球協会が引継いだ、今年四十回を重ね柳井はもとより西日本の卓球の発展に貢献している。彼は昭和三十一年大志を抱いて上京し、杉並区阿佐谷で、卓球用品専門の運動具店關タマス社長のかたわら、彼に指導を乞うた本県出身の世界的選手には昭和四十四年ミューンヘン世界選手権男子単および団体優勝の伊藤繁雄（桜ヶ丘高—専修大—タマス）、昭和五十年カルカッタ世界選手権で各種目に活躍の阿部勝幸（兄）（多々良高—専修大—協和醸造）、中国遠征やアジア大会で活躍中の阿部好幸（弟）（多々良高—専修大在学中）があり、田舛氏上京後は中村清二が中心となり、特に女子の指導に当たり、三十九年に退職する迄県体十七連勝、高校総体団体四回、単二回、複一回、国体団体六回、一般女子三回、全日本選手権単二回、複一回、混合複二回、ジュニア一回と、全国一の優勝監督と自負している。



夫 敏 夫
ハンドボールは送球と
いって、昭和十年頃より
師範学校や中学校で、正
課時に時々行われていた
が、現山口大学教授藤田
信義（山口中—日体）が

ハンドボール

日体入学時の体力テストで手榴弾投げに他より二十メートルも遠く六十八メートル投げたところ送球部に入れられ山口県人として最初に本格的訓練を受け、関東リーグや日本選手権で活躍した。彼は母校新制山口高校の教師となり、部をつくり、また自ら中心となって日体の後輩やバスケットボールの経験者を集め、国体出場を目指してクラブをつくり山口県のハンドボールを開拓した。昭和二十六年第六回国体では一般男子は三位になり、チームの中に高校教師が多く急速に発達し、第八回国体では一般男子二位、高校男子も準決勝に進出した。その間藤田氏は山口大学に転じハンドボール部を強化し、それらが卒業後中学校にクラブをつくり、三十四年から中学校県体に編入され県下全域に普及した。中学—高校—教員と極めて順調な循環を繰返し毎年県下各地に四、五校は何れ劣らぬ強い高校が出現して競争するようになり、何校が出ても中国代表となり高校総体や国体で男女とも上位に入賞するようになった。その中で特に成績のよい下関中央工業高について、山口大学の体育の先生らが共同でなぜ強いのか、果して教育的指導がなされているのかについて、分析調査して昭和四十七年に発表した。百頁にわたる報告書について見ると、強化の最も大きな要因は、横敏夫（昭和三年生れ）監督とOBを中心とした指導者特性であって、入部当時未だ未知数の素質しか持っていなかった部員を強いモラルを持つようによつて、体力、技術とも高い水準に高め得るのは第一に監督を中心とする指導者の力である。しかも選手養成に付随する非教育的側面は全く存在せず、反対に勉強と両立、性格の陶冶などにおいてもクラブ活動は好ましい影響を与えており運営のあり方によつては強さと教

育的意義は両立し、両者が渾然一体となって理想的なクラブ運営のなされることが示唆された。その後も益々高校生チームは強化の道をたどり、今日までの成績は中国大会二十七回山口県優勝二十回（下関中央高七回）、全国高校総体優勝三回（下関中央高三回）、国体優勝六回（下関中央高三回）、昨五十一年は高校総体と国体に全く相手を寄せつけず二冠王となるなど体格、体力、技術、精巧なプレーは高校ハンドボール史上最高のものと評されている。なおモントリオールオリンピックには岩国工高出身の藤中憲二が選ばれた。

レスリング

斎藤道場の荒井政雄（柳井商工—国士館大中退）は、昭和五十年ソ連モンスク市の世界選手権フリー五十七キロ級で優勝、続いて二十一回モントリオールオリンピックでは三位を獲得したが、この斎藤道場は県レスリング協会会長斎藤憲（大正八年生、柳井商業卒）が開設している。氏ははじめ県警の柔道教師次いで柳井学園高校の柔道教師、昭和二十七年柳井市で学校の旧い講堂を改造柔道場をつくり、クラブ員二百五十人

を有する県下最大最強の

憲

藤

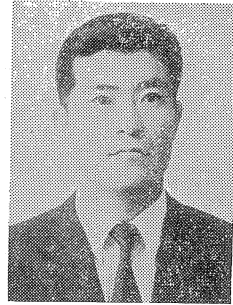
斎

クラブをつくり、本人は柔道四段で第八回国体に出場したが、体重五十七キロでは柔道は無理であり、既に体重階級制であったレスリングの合理性

にひかれ突如二百五十人を引き連れて転向したが、この勢力が山口県にレスリングが定着する基礎となった。しかし柔道からは脱されるし、高校生の父兄の理解は得られず、柔道場は思うように使えず、遂に自宅裏に浴場、炊事場つき天井裏には三十人寝泊り出来る百平方メートルの道場をつくって、一無料、二健康・気力の養成、三真理の体得と信念をもって指導しても、部員は一人減り二人減り遂に十人になって困惑状態に陥った。しまったと思ったが思い返し、小中学生と一しょに遊び、子供の時からマットに親しませ、レスリングを理解させ、子供を通じて親を説得しようとする計画をたてたがこの計画が的中し、今では、鍛えてほしいと頼みに来るスポーツ教育ママも増えている。こうして育ったレスラーは約千人、そのうち高校総体優勝十名、国体優勝十六名、世界選手権出場五名、優勝一名、二位二名、三位一名、オリンピック優勝一名、三位一名。山口県が毎年国体で優秀な成績を収めるが、この斎藤道場で育てられた選手がその中核をなしている。斎藤氏の情熱と識見は日本的に高く評価されモンスクの世界選手権には団長、モントリオールオリンピックには副団長に選ばれた。

ヨット

山口県は三方海に面し乍ら、ヨット連盟として実質的に動き出したのは昭和三十八年山口国体が目録に迫り、会場が光市に決った三十六年からであった。昭和三十七年岡山国体では、新南陽市日本ボリウレタンの鈴木忠（昭和九年生、大阪大ヨット部OB）が一般Aフイン級で第三位に入り、天皇杯十六位ではあったが県ヨット界に光



鈴木 忠
達朗教諭の若さ溢れる清新
新鋭刺のテクニク、東
奔西走骨身惜しまず裏方
役を果たした武田薬品の早
川定雄氏他、思う存分練習
させてくれる漁業組合

明を点じ一縷の望を与えた。そして山口国体では八位以内に入り天皇杯一点以上獲得しようという決意が生まれ、それには低迷する女子の部と高等学校のレベルを飛躍的に向上させねばならないという結論に達した。早速三十八年二月基礎訓練にとりかかってからたどって来た道を高体連ヨット部専門委員長鈴木英氏他の反省録から抜粋して見よう。三月の春休みに艇の整備、強化合宿、悪天候の日が多かったが、練習の出来ない日はルールの研究と帆走理論の頭脳的訓練。強化の主体を一般との合同練習においたため練習のし易い光市の光・聖光の両高校と光市に近い柳井高校にしばり、スタート練習、レースの練習とヨットの第一歩から始めたのである。中国大会を前にして実戦主義の練習に入り、男子は三校ともスナイプ四名、フィン二名、女子は光・聖光でスナイプ四名、計二十六名を常に第一線選手として保持していくことをめざした。高校総体にのぞんで見ると、何れでも勝つことに追われ、ヨットマンシップの訓練まで手が回らず、この点関東方面の選手に学ぶところが多かった。この間にあって東北大ヨット部OB松元幸三郎先生の、遠く北九州から通い私生活をぎせいに

等のおかげと、いつも二十隻を下らぬ艇が集中し、必ず勝つのだという信念に燃えた。昼夜を分けたぬ練習の結果遂に男女総合一位女子総合二位を得た。しかし、各種目毎の成績は十分ではなくセイルの優劣やフィンマストの硬軟が如何に勝敗に大きく影響するかが明らかになった。こうした合理化とともにヨットマンには潮気が必要である。即ち一時間でも人より多く乗ることを心掛けねばならない。平生の練習でも、少しも風が無くても、海に出て危険な練習をする者はライフジャケットを着用することは危険防止に対する義務であるが、果選手に習慣化したのは昭和四十年頃からである。外海では、光では見たこともない強風と大波で艇が沈没して大敗し、強風はヨット競技の真髄であることが身にしみた。霞ヶ浦では海風と違う陸風に面喰ったり、こうして自然を相手に命がけの競技の困難さを知り、困難を乗り越えての喜びを味わい、ヨットに取りつかれた高校生たちは、卒業後ヨットのできる地元企業に就職した。実業団として腕を磨き、合同練習によって後輩を導くというように国体選手団のチームワークもよく、成績も毎年上位、即ちここ十五年間に男女総合優勝三回、二位三回、三位二回、女子総合二位一回、三位二回と圧倒的強みを見せ日本選手権で優勝する選手も続出している。世界選手権やオリンピックで活躍した選手は次の通りである。即ちフィン級矢村選手（武田薬品）がポーランドの世界選手権に出場したのをはじめ、スナイプ級では藤井・沖本組（武田薬品）が昭和四十八年スペイン、五十年ウルグアイに遠征、沖枝・島田組（新日鉄光）が四十九年アルゼンチンに遠征、聖光高校の優秀選手広沢孝治は本田技研に入社、モントリオールオリンピックで活躍している

る。

山口県のヨット界に最切に火を点じた鈴木忠は、四十一年迄選手兼コーチ、四十二年より監督、四十五年より理事長となる。彼はヨットは体力もさることながら技術や知識が非常に必要であるから、ライバル意識のためにお互に技術を秘密にしているは大した成功はのぞめず、高校時代から一般のトップレベルとしよに帆走する合同練習方式が成功の鍵であると喝破している。しかしこれだけでは普及に欠けることがあると、光市に働く若人のヨット教室、徳山市に小中学生のヨット教育、大学のヨット部育成と、今では県ヨット連盟加盟団体は二十、会員二百五十名、やがて三面の海はどこでも四季を通じ毎日光のような帆走風景が見られるようになるであろう。

他に水泳では、ロスアンゼルスオリンピック八百メートル継泳で優勝した豊田久吉（安下庄中学一巨大）、ベルリンオリンピックに山口高等女学校在学中出場した松村昶子。藤島洋三、岩本和行、門永吉典、田中毅司雄らオリンピック選手他多数の優秀選手を育てた柳井商工高の監督末広力。ミュンヘン・モントリオール両オリンピックに出場の本田忠を末武中学校時代に指導した末広憲二郎。東京オリンピック柔道軽量級優勝の中谷雄英。射撃の斎藤繁美。明治時代より盛んな武道のこと、高校野球の下関商業や柳井高校、毎年国体で活躍する自転車、重量拳、女子ソフトボールなど活躍の陰には必ず熱心な指導者がいるがその姿を眼前に浮べ乍ら紙数の都合で割愛するのは忍びない。

しかし、これらは、伝統ある組織を持ち毎日強いトレーニングを

する者、それもごく頂点にある者の活動であるが、近頃は自らの健康管理の意識を持って、学校では同好会、社会では走ろう会、歩け運動、ママさんバレー、親子バドミントン、ラジオ体操、テレビ体操、自己流体操、ハイキング、サイクリングなどと自然発生的にスポーツを行う者の底面は拡大されつつある。

山口県で昨五十二年十一月、県教育委員会と、体育指導委員連絡協議会で調査したところ、スポーツの好きな人は八六・七％ありながら、スポーツを全くしていない層が約五〇％、毎日の生活で運動不足を感じている者は約六〇％もあり、県民が何らかのスポーツを通じて、体力づくりに励み、活力に満ちた健康な生活を実現し、ひいては地域社会の連帯感をすすめるために、民間と行政が一体となつて、県知事が自ら本部長となり、支部長に各市町村長をおき、各種団体に呼びかけて、県民スポーツ総参加運動を展開し、いつでも、どこでも、誰でも気軽にできる明るい体操、インディアカ（ボールを手で打ち合う競技の一種）、歩こう運動の普及を図り、頂点の高揚とともに、底面の一層の拡大に力をつくしているところである。

（山口県体育協会理事）

人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史



— 石 川 県 —

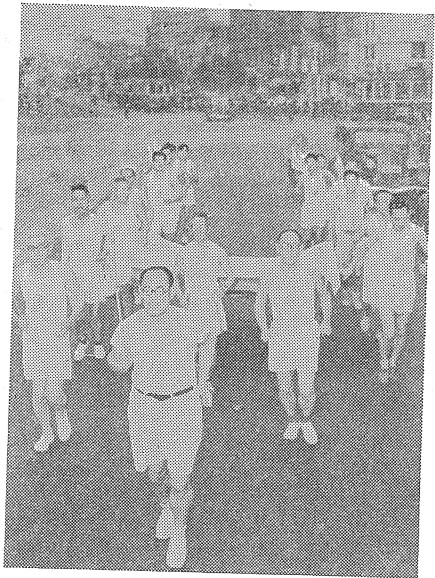
藤 江 喜 三 次

はじめに

石川県は地理的に見て南北に加賀、能登と細長い地域で、人口密度も大きな差があると同時に、文化産業の面にも開きがある。しかし、明治大正の頃のスポーツは詳しくはないが、能登地方の神事相撲がそのはしりであったように思う。なお、石川県は明治大正にかけては、相撲の他に、剣道、柔道など武道が非常に盛んであった。大正三年の官立学校武道大会に旧制第四高等学校が剣道、柔道共に優勝、同じく九年には弓道に同校が優勝している。また十一年には全国中学校剣道大会に金沢一中（現金沢泉丘高）が優勝している。

しかし、石川県としての大きな誇りは、昭和二十二年に、第二回国民体育大会を地方持ち回りの大会としてはじめて開催したことである。終戦後、日はなお浅く、国内にあらゆる難問が山積している時に、大規模の各種競技場の短期建設、そしてまだ一度も全国大会をやったことのない石川県が開催するのであるから、多くの者の関心の的となった訳である。しかるに夏の大会も秋の大会も、予想以上の成果をあげて終了し得たことは、私たち関係者として本当に喜びに堪えなかったのである。勿論日本体協、各競技団体の指導を受けたが、私たち関係者一同の文字どおり血のにじむような努力が実を結んだものと、当時を偲び感無量のものがある。

はじめて天皇をお迎えし、戦後最初に仰いだ日の丸の旗に、涙と共に祖国の姿をよびさまされたのである。またこの金沢大会にはじめて国体旗が制定され、次回の第三回福岡大会へとリレーされた。公開演技に「若い力」のマ스ゲームを披露したのもこの大会である。世人はこの大会を称して「世直しの大会」とたたえたのである。



23年国体旗リレー 先頭は清瀬理事長

ここにエピソードの一つを紹介しよう。戦災をまぬがれた金沢ではあったが、食糧不足は全国と同じ。警察の取締りもきびしい。私は当時、国体事務局印刷委員長とバレーボール協会の理事長をやっていたが、特に東京、大阪から来られる役員に食べていただく米を消防車に訓練の旗をたてて積み、石川平野から無事金沢の入口の検問所を通過したことを昨日のように覚えている。

県、市当局や日本体協の清瀬三郎氏、森田重利氏のご指導は勿論であるが、はじめての地方大会が成功裡に終了したのは、県民挙げての理解と協力、事務局につめて深夜まで毎日努力した人たちの力が大きかったと思う。今、その人たちの名を挙げよう。当時の体育運動主事で前参議院議員の宮崎正雄氏（鳥取市出身）、朝日新聞金



杉本 藤太郎

沢大会であろう。大正四年六月十三日、当時の金沢市郊外金石海浜においてスタートしていらい、今年で六十一回という全国で最も古い伝統と歴史を誇り、数多くの名選手を育ててきた。

同大会の歴史は即相撲石川の歴史である。

昭和六年に石川県で、はじめて学生横綱になった藤岡俊夫（七尾中、東京医専）のほか大鋸六郎（県立工業学校、拓大）、元理事長の大垣良則（三中、明大）ら、みなこの土俵をふみ、引続いて十年代の白山辰夫、城崎将雄、山村誠と戦前の土俵をわかせたものである。戦後に入ってから一層その名を高めたのは、三十二年に学生横綱と全日本アマ選手権を獲得した田畑外志雄（金沢泉丘高―立命館大―京都市役所）、さらに四十年から三年連続全日本アマの王座についた野見典辰（七尾実業学校―日大―和歌山県庁）も、相撲石川が育てた名選手である。その後大学大会や国体で活躍した大沢康博、井戸保、武藤弘、星野照雄、学生横綱からプロ入りした現横綱の輪島博（金沢高―日大）、この大会で個人優勝を二年続けた現幕内力士の舩田山（七尾商業高―拓大）など数え切れない程名選手を生んでいる。現在県内には相撲部のない高校は一校もないという程普及しているが、まだ一度も国体で相撲の団体優勝のないのは残念である。しかし層の厚いことは事実である。現在の会場卯辰山（うづな）相撲場は、大会当日は約五万人の大観衆があり、大熱戦とその応援合戦

沢支局長の杉本藤太郎氏、陸上の田中辰男氏、軟庭の田島秀夫氏、北国新聞運動部長の故宮田正男氏、女子師範の村立造氏（後の県教育委員会保健体育課長）、それに当時第四高等学校の助教授をやっていた筆者等であった。その中でも杉本藤太郎氏は翌二十三年石川県体育協会設立の中心的存在で、現在でも日体協の役員や果体協の副会長をつとめ、その間競技人口の拡大などに尽力した貢献者であり、当時の中心的人物で現在まで続けて体協の役員をやっているのは筆者と二人だけである。

当県は人口百万余りの小県であるが、オリンピックをはじめ数多くの国際的選手を輩出しているが、これは各種目のところで述べたい。

相 撲

相撲の歴史は古い。能登の神事相撲として発展したが、後プロに入った人々も多い。まず、その筆頭は文政十一年、第六代目横綱の阿武松縁之助（能都町出身）。二十五歳にして入門してから十四年目の三十八歳で横綱になり、すぐれたワザで八年十五場所にわたって土俵をつとめ八一・九%の勝率を残している。続いて明治初期の阿武松和助（羽咋市出身）も豪快な相撲で五年春から三年六場所勝ち続け、四十三連勝を記録し、「横綱より強い大関」の異名をさせた。近くは出羽一門の総帥として、戦後の相撲界を建て直した前相撲協会理事長の出羽海喜博（小松市出身）等多くのプロの人たちがいた。

次はアマチュアについて述べるが、アマチュア相撲界で「相撲王国」と言われるまでに育ててきたのは、なんといっても高校相撲金

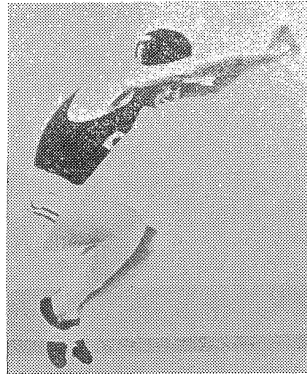
は名物である。

このような好選手を生んでいるその指導陣には、前記の大垣元理事長、審判員と指導者養成の太田平二氏、輪島を育てた現理事長の岡大和氏等、数え切れない程多数の貢献者がいることは誠にたのしい。

陸 上

戦前に二人、戦後に二人と四人のオリンピック選手が生まれている。先ずその代表格は大島謙吉選手（現大阪体育大学副学長）だろう。昭和二年、当時金沢商業五年生の大島少年は、織田、南部の二選手と共に上海での第八回極東大会に出場し、一、二、三位を独占し大島選手は二位だった。そして五年後のロサンゼルスオリンピックにもこのトリオで参加し、大島選手は十五メートル十二で三位となり、世界新記録で優勝した南部選手と見事異国の空高く日の丸を掲げ、日本のお家芸「三段とび」の名を高めた。その後も極東大会優勝、ベルリンオリンピックにも六位に入賞している。この間同九年の日米対抗で十五メートル八十二の世界新を出すなど三段とびの輝かしい歴史を築いた。現役を退いてからも日本陸連や日体協の役員を勤め、東京オリンピックでは日本選手団長として指揮をとるなど日本スポーツ界をリードしてきた。また彼は長くベルリンの毎日新聞の駐在記者として活躍した関係もあり、日本スポーツ少年団の生みの親でもある。公私共に忙しい彼が帰省する度に、実地指導に講演にと郷里のため尽している。

この大島選手と共にロサンゼルスへ乗りこんだのは故広橋百合子選手である。メダルこそ逸したが、走り高とびで一メートル五十と



大 島 謙 吉

日本新で堂々七位となった。この二人に比べ華やかさこそなかったが石川県の誇れるのは加賀の西浦勝次郎選手である。農業に従事しながら、黙々といなか道を走り続け、大正九年から昭和十六年まで県中距離界の王座を占め、昭和九年の極東大会には千五百を四分七秒八で三位に入賞している。

戦後になっては室矢芳隆選手（羽咋出身）がいる。二十六年から二十九年までに八百メートルで日本記録を書き換えること六度、そして日本がオリンピックに復帰したヘルシンキ大会、メルボルン大会と連続出場し気を吐いた。次は競歩の第一人者斎藤和夫（津幡出身）選手である。東京大会で五十キロに二十五位、メキシコ大会では十七位とよくがんばったものである。

その他、走り高とびでベリールールをはじめて石川県へもたらし玉川博（七尾高）選手、十六回国体で百メートルに十秒七を出し欧州遠征の一員に選ばれた島田茂明選手（金沢泉丘高）がおり、また三十年の全日本学生大会の三段とびで優勝した浜本昌伸（七尾高—順天堂大）選手らが光っている。また最近では中京大主将として五種競技にがんばり、その後、後輩の指導に当たっている吉田規美

恵子選手は飛び込みといずれもオリンピック選手、水泳一家として有名。

大崎氏の出身地輪島は昔から漁師町として栄え、小中学生は荒波の「日本海ブルー」で自然に泳ぎを身につける環境にあった。この少年たちから世界的泳者が生まれたのもうなずける。その代表格が山中毅選手だろう。三十一年には水上日本のホープとしてメルボルンに乗りこんだ。そして四百と千五百に日本新を出し、二個の銀メダルを獲得した。とくにローズ（豪）とせり合った千五百の決勝は同大会最大の圧巻と評され、レース後「千三百で彼がリードしているのがわかったら負けなかった」とうそぶいて人々を驚かせた。当時彼は輪島高三年生であった。ひき続きローマ大会でも宿敵ローズとデッドヒートを演じ、四百は二位、千五百は四位となり、東京大会ではついに力つき四百で六位だった。四十一年四月引退するまでの約十年にわたり、日本水泳界の大黒柱として次々と世界記録を書き換え、三回連続オリンピック出場、メダル三個の偉業は水泳石川の誇りとして長く語り継がれることだろう。この山中とともにがんばったのは大崎選手で、ローマ大会で二百平泳で銀メダルを得ている。同じくローマ大会で二百のバタフライで惜しくも八位になった井筒選手は第四回アジア大会などで優勝し、「水泳日本」の一人として活躍した。

その他国内では国体や勤労者大会で優勝した山田忠信選手（石川—せんい）、同社の川本みゆき選手らがいる。また近年輪島をはじめ小松、金沢地区に多くのスイミングクラブができて、次代を背負う少年たちの育成に当たっているのは頼もしい限りである。

子選手、昨年の国体で少年女子の円盤投げで優勝し、今年も成年女子で四位に入賞した永井公子選手（北陸大谷高—国土館大）、今年の国体教員の四百で優勝した松本彰（金沢泉丘高—筑波大）選手、昨年は二位、今年は優勝し、モスクワに望みをかけている競歩の中村博幸選手、高校時代はインターハイで優勝、その後国体でも度々入賞している女子八百の田中和美選手と数多く気を吐いている。

これら優秀な選手を育成した人達は元理事長の田中辰男氏、故生山泰氏、道下喜利氏、日野林三氏等がおり、現在では成瀬定三氏、久木周二氏、河合啓介氏、林樹氏、点田良勝氏等が献身的に指導している。

水 泳

昭和三十五年、石川県の水泳界は「栄光の年」を謳歌した。この年の八月ローマで開かれたオリンピックに山中をはじめ、大崎、井筒の競泳輪島トリオ、山野、馬淵、金戸の飛び込みトリオの六人へのぼる選手を送り、「水泳石川」の名をほしいままにした。このほかオリンピック選手には、芝原、明、宮本、大崎（妹）、西出等がおり、戦前戦後を通じて十一人を数えるのである。

戦前では、昭和九年マニラで行われた極東大会で二百メートル背泳三位の故明文一選手（小松）がいる。前理事長の大崎卯藤久氏は水泳ひとすじに四十有余年をかけてきた県水泳界の大御所、輪島中一年から平泳ぎをはじめ、戦後も勤労者大会に連続十四回出場し、九回優勝という息の長い競技生活が続けた。その間、山中、大崎（親子）、井筒、山田ら多くの優秀選手を育てあげた足跡は大きい。一子夫人も数少ない女性コーチの一人、長男剛彦選手が平泳ぎ、長女



山 中 毅 と ローズ

こうした選手を育てあげた指導者には大崎氏をはじめ、小松の黒田実、八田幹也、輪島の山形郁夫、小住正人、万正作、松任の村田一典、金沢の松井正安、加藤義彦、前田孝男氏ら数多くの人たちがあげられる。

競泳とともに水泳石川の名を高めてきたのは、中田周三氏門下から輩出した多くの飛び込み選手である。戦前に一人、戦後に六人をかぞえるオリンピック選手を出し、ダイビング王国の名をほしいままにした。中田氏は明治四十四年金沢の生まれ、ブルがでるまで栗崎の橋から大野川に飛んでいたという。いかにも草分けらしい思い出を持っている。旧制中学の二年の時に十メートルの飛び込み台のある松任のプールができた。そして友人等と毎日自転車で松任通いをやり、当時大阪から太田豊明氏をコーチとして招き、一週間みっちり基本をたたきこまれた。以後本格的な練習をつみ、さらに現日本大へ進み実技と理論にみがきをかけた。

戦後教壇に復帰した二十二年、石川県で開催された第二回国体に出場、飛び込み二種目に見事優勝した。その後はもっぱらコーチに専念、宮本、馬淵、山野、金戸、大崎、西出らをはじめ多くのダイ

パーを育てあげた。この中田学校の大先輩に昭和十一年ベルリンオリンピックで入賞した故紫原恒雄氏がいる。金沢三中時代当時県立工業学校生徒だった中田氏のコーチを受け、日大進学後昭和八年から十一年までの日本選手権大会に連続優勝、ベルリンでは、板飛び込み四位、高飛び込み六位で入賞し、この成績は日本最高のものとして輝いている。その後ローマ大会の高飛び込み監督、また飛び込み委員長として後進の指導に当たっていたが、昨年惜しくも病没された。

戦後はヘルシンキオリンピック大会に宮本まさみ選手が出場し、高飛び込み十位、板飛び込み十五位だったが、二十九年の第二回アジア大会には両種目とも優勝して面目を保った。続くメルボルンには馬淵選手その他に山野外嗣夫選手、金戸俊介の石川県トリオで出場したが惜しくも入賞を逸した。次いで東京大会には、山野、金戸の両選手が出場したが、飛び込みで「日の丸」をの悲願は果たされなかった。同じ東京大会には大崎恵子選手も出場したが入賞できなかった。しかし四十年の日本選手権では両種目とも優勝し、続くメキシコ大会にも出場したが惜しくも入賞を逸した。

これら選手その他に、国内大会でいつも優秀な成績を挙げているのは、田中他栄子、諸田健朗、長東悦朗選手等がおり、いずれも中田学校の優秀な模範生であった。

また昨年のモントリオールには同じく門下生で日大の西出好範選手が出場したが入賞はできなかった。彼は今、次のモスクワを目指して努力精進中である。

このようにダイビング王国を築いた指導者は勿論中田氏が筆頭で

ームが多数できていることもこの上もない嬉しいことであり、バドミントン王国といえよう。

バレーボール

石川県バレーボール界の栄誉はK・T・Cのユニホームによって代表される。K・T・C、つまり金沢教員チームが誕生したのは昭和六年、当時日本最強といわれた旧神戸高商の多田徳雄氏を招き、技術講習会をやったのを機にバレーの関心が高まり、数多くのチームができた。そして間もなく、四井謙次氏、岩井隆盛氏や筆者等の努力で北陸排球協会も結成された。そして後藤正之氏と筆者等の手で金沢教員チームも組織化されたのである。

その後昭和十一年には、神戸高商出身の極東大会選手の武喜代治氏（鶴来町出身）の指導で錦華紡績（現大和紡績）が全日本大会に初優勝したのは特筆すべきことである。その後教員チームは全日本や神宮大会に出場し善戦したが、やがて戦争のため中断された。

戦後の混乱の中で、いち早く県民に立ち直る勇気を与えたのも県バレー界の活躍がはずかって力があった。昭和二十一年には金沢工専（金沢大学工学部の前身）が全国大会優勝、岩井氏指導の青年師範も全国大会優勝、翌二十二年には旧制四高と女子師範が筆者の指導で全国優勝と目覚ましい活躍が続いた。

その後岩井氏の指導を金沢三中で受け、現日体大へ進み、更に明大へ入り主将となり、全日本チームの主将や名バックセンターとして活躍したのが有名な西原澄氏である。彼は帰省する度に中央の技術の伝達をやり、これが教員チームの全国制覇へと結びついた。そして教員チームは二十六年に全国大会初優勝に輝いた。そして全国

あるが、第二回金沢国体二位の林繁夫氏（松任市）があり、また最近では諸田健朗氏（金沢市役所）が中田学校の教頭格として、ほとんど毎日市営プールに顔を出し、後進の指導に当たっている。

バドミントン

戦後の新興スポーツの一つとして、石川県の誇れるものの第一はバドミントンである。渋谷弘利氏（現副会長）が兄嫁渋谷信と組んで二十六年から三年連続全日本の混合ダブルス優勝の偉業をなしてあげている。また一般女子の貝原まさえ、登悦子選手等が二十六、二十七年に全日本や国体に優勝している。こうした初期の選手の活躍とその指導で底辺の拡大が実り、高校男子は加速度的にレベルアップを見せ、二十七年のインターハイには一位が金沢二水高、二位金沢丘高と上位を占めた。

その時の選手が中心となり、教員となり、自ら優勝すること全日本三回、国体八回と文字どおり輝やかしい成績をおさめている。北方匡、河原山晴夫等がその中心である。なおまた河原山氏が指導する金沢市工業高か、インターハイに優勝すること五回、国体に一回と優勝し、昨年の国体では一般男子の三位とはじめてバドミントン国体総会優勝の偉業をなし遂げた。

またその他、竹中悦子（金沢二水高出身、現姓榎野尾）選手、銭谷欽治（大聖寺高出身）選手というような国際的選手をも生んでいるのもわが石川の誇りである。

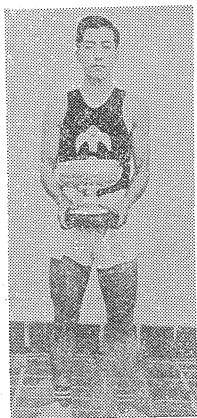
このように急速に発展して来たのは中島寿禧現理事長を中心として、協会の幹部一同が協力一致してその強化と普及に全力を注いでいる結果である。また近年バレーと同じくママさんバドミントンチ

大会三位以内入賞八回、うち優勝四回、国体三位以内入賞八回、うち三十三年の富山国体に初優勝という成果を挙げた。この黄金時代を築いた名プレイヤーとして前衛センターの木戸喜一氏（金沢大教授）中衛レフトの平沢静香氏、守備の中心としてまた名サーパーとして中衛センターの寺窪三郎氏等があげられる。

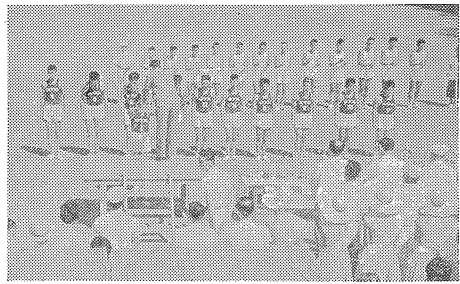
九人制から六人制になってしばらく停滞状態になったが、日体大の中田茂教授（小松出身）の門下生がほとんど県下の中学校、高等学校へ配置されてから、また段々力がつき北信越ではいつも覇をなしている。しかし全国的に見てややレベルがおちる。しかしこれらの指導が芽を出して県下高校のレベルも急速に向上してきた。その中心なのは県立工業学校の斎藤武朗氏や現監督の土田清明氏等である。

これら教員チームが各校での指導と自らの努力が段々金沢市民にひろがり、全般のバレー熱が高まり婦人バレーの発達と共に、三十七年に金沢市技としてバレーが指定されるようになったことは嬉しいことである。

一方女子一般でも石川せんいが美業団リーグ入りを果たし、今後の活躍が期待される。



このように盛んになったのは、現理事長の西原澄氏、長西尾氏等の努力で度々の全国大会の開



金沢教員チーム 34年金沢大会優勝

催や、日ソ対抗バレー、日本リーグの誘致などが大いに力をなしていることは申すまでもない。

また昨年新日鉄入りした岩田稔（星稜高出身）選手が今年ナショナルチーム入りを果し、その長身を利用した活躍が期待される。

ハンドボール

石川県のハンドボールは、小松地区が特に女子を中心として全国的レベルを保ってきた。まず升井友治氏指導の小松高女子が二十四年度団体三位、二十五年度四位と連続上位入賞したのである。次には三十二年には羽咋高女子が小松高に代わって、インターハイに有木悦子選手の大活躍によって二位を獲得している。引続いてまた小松地区がレベルをあげ、二十四回長崎岡岡団体が今度は小松市立女子高がベスト四入りして気を吐いた。

この小松市女の指導者は谷口俊春氏で、ハードトレーニングで有名である。三百六十五日のうち一日もかかさな猛練習、しかし父兄もこれを了解し、試合にはどんな遠い所でも大挙して応援に行くという熱心さには心をうたれる。この努力が実って、インターハイ優勝三回、国体優勝二回、日韓大会優勝二回と輝かしい戦績を残し

ている。

また近年このO・Gが主体となって北国銀行チームを作り、五十年年度団体四位、実業団会長杯二連勝という偉業をなしとげ、今年度は木戸、中山、千歩の三選手がナショナルチーム入りを果たし、今後の活躍が期待される。その他高校、一般実業団チームもかなりのレベルにあり、将来が頼もしい。

こんなに急速にレベルが向上したのも、日体大出身の現理事長若山博氏を中心となって、種々の大会の誘致などをやり、その強化に精進努力している成果であると思う。

その他

戦前金沢一中や四高が剣道で全国優勝したことは「はじめに」のところで述べたが、富山県出身の故中山博道範士が長く金沢市寺町に在住され、現在県連盟の師範格の人たちはほとんど中山先生のきびしい指導を受けた人たちである。今村保、今村四郎、福久力松、故森原一二、白鷺亥喜氏等教士がそれで、この門下生が第一線がなっているのである。

柔道は、戦前警視庁の師範だった故岩井美良氏が幅広い指導をなし、その成果が現在の石川県の柔道界といっても過言ではない。第四回国体のオープン競技で、故伴庭一秀、幸山彰一、森達治郎の三氏が第二位となった歴史がある。その後警察官を中心として柔道は強化されている。また、富山県出身で現金沢工大の助教授の湊谷弘氏は軽中量級で世界選手権に二連勝、オランダのヘーシンクと並ぶ偉業をなしとげ、現在は自己の修練と後輩の指導に当たっている。近年フランスなどからの招聘で外国へも普及のため行っている。

次は体操であるが、女子の藤花高校は岡田隆氏の指導で、団体で五回、インターハイで四回、そのO・Gの藤花クラブも数回優勝をしていて、特にオリンピック選手辻安子さんは、すばらしいものであった。ただ残念なのはその後が続くもの、特に男子の成績が淋しい。

次は自転車競技であるが、缶^{フナ}範男、山尾裕、小畑紬の金沢高校トリオで岡山国体において総合優勝の輝かしい歴史がある。またこの三人は後輩の辻昌憲選手とともに日本代表の国際選手としての活躍も立派なものがある。ただ残念なのは三十八年欧州遠征途上事故で印度洋で散った小畑選手の死である。東京オリンピックの開会式に県出身の大島団長の胸にその遺影がいだかれて入場したのも有名である。自転車のバンクも近くできるそうである。久しぶりに往年の活躍を見たいものである。

最後に野球であるが、福井国体で金沢電話局が優勝し、また昨年甲子園で星稜高がベスト四入りしたことなど好成績はあるが、全国的に見て降雪地方の関係もあり、レベルは低い。しかしここに大書すべきことは十年前から一般人の早朝野球が始まり、現在県下で約四百二十チームがあり各地でリーグ戦をやっていることである。また日曜リーグも五十チームを数え、河北郡には夜間リーグに三十チームがあり、ますます盛んになってくることは特筆すべきことである。

終りに

戦後とみに盛んになった石川県のスポーツ界は、いよいよ県体を開催する運びとなり、昭和二十四年第一回が金沢市を中心として開

催された。金沢、小松、七尾と持ち回りして開催し、スポーツの普及と振興に大きな役割りを果たしてきた。最初是一部として一般男女の郡市対抗、二部は高校対抗の形式をとってきたが、より多くの県民が各層にわたって参加したいとの要望が強くなり、去る四十九年の二十六回大会から、一部を市対抗、二部は町村対抗の方式に変えた。一方各町村体協の組織の強化、指導陣の育成、スポーツ人口の増加を目指し、その名も石川県民体育大会と改称し、県下の全市町村がこれに参加し、今年の総参加人員は八千三百九十六名の多きにのぼり、正しく県民の一大体育祭典となったことを心から喜ぶものである。

一方現体育協会長米沢外秋氏や県教委、市町村の教委の努力により、学校体育施設の充実、一般体育施設の建設が促進されつつあることは誠に喜ぶべきことであり、関係者に深く敬意を表するものである。

（石川県体育協会理事、石川県スポーツ少年団本部長）



人物を中心とした

体育・スポーツ郷土史



—福岡県—

田代芳郎

はじめに

福岡県は「太陽と緑のくに」九州の玄関に位置し、本州とは、東洋一のつり橋、関門橋と、新幹線をふくめて三本の海底トンネルによって結ばれている。このように本州と九州をつなぐ交通の基点として発展してきた本県は中国大陸、朝鮮半島、東南アジア地域に近接しているという地理的条件ともあいまって古くから国土の要衝として、わが国の発展に重要な役割を果たしてきた。

多様な特色をもつ福岡県では、戦前・戦後を通じ学校や企業体の運動部を中心に、古くからあらゆる種類のスポーツが行われ、多くのスポーツ人を輩出してきた。

戦前に活躍した人々

葉室鉄夫（大正六年生れ。修猷館（日大）西日本新聞社（毎日新聞社）昭和七年、中学修猷館のとき、中等学校東西対抗戦で二百メートル平泳に優勝して以来、かれの目ざましい活躍はつづき、昭和十年の日本選手権では、百と二百の平泳でともに一位となった。そして十一年八月の第十一回ベルリン五輪大会の二百メートル平泳で、二分四十二秒五のオリンピック新記録で金メダルに輝いた。かれがベルリンで出した二百メートル平泳ぎの記録は、第十四回ロンドン、第十五回ヘルシンキにおいてバタフライ泳法（当時は、平泳の中にバタフライ泳法も含まれていた）によって破られたものの、第十六回メルボルン大会でオーソドックス平泳のオリンピック記録として復活し、ここで古川勝選手らによって更新されたのである。

る。葉室の存在は、九州をもとより日本水泳界に大きな影響を与えたといえよう。

納戸徳重（明善中学→東京高師→西日本新聞社→元福岡大学教授）大正十一・十二・十四年の全日本陸上競技選手権大会で、四百メートルに優勝し、英国皇太子の来日を記念して寄贈されたプリンス・オブ・ウェールズ杯を獲得。大正十年の第五回極東選手権から第七回まで連続出場し、第六回大会では四百四十ヤードに優勝、八百八十ヤードで三位に入賞している。大正十三年十月、第一回明治神宮大会が開催された折、かれは選手代表として政府代表の内務大臣若槻礼次郎と肩をならべ、神宮の御霊に奉納文をささげた。第八回バリ五輪大会出場。

橋崎正雄（福岡師範→東京高師→元福岡大学体育学部長）第一回・第二回明治神宮大会の千六百メートルリレー優勝、四百メートル三位。第七回極東大会出場。昭和二年の第三回全国青年団対抗四百メートルに神宮新記録で優勝し、競技場正面玄関に優勝旗掲揚の栄に浴した。

竹内兵蔵（故人・豊国中学→明大→元戸畑市体育課長）大正末から昭和初期にかけての陸上競技短距離界の第一人者。大正十五年東西対抗百メートルに十秒九で優勝、同年の全日本選手権二百メートルに日本新記録で選手権を獲得した。第八回極東選手権大会出場。幸田栄三郎（故人・修猷館中学→立教大→西日本鉄道）福岡県卓球史上最高の名選手で、昭和初期に日本代表選手として活躍した。大正十五年、弱冠十五歳の中学修猷館のとき、第三回明治神宮大会

れるまで黄金時代を誇った。その後八幡製鉄（二十五年の全日本実業団・全国勤労者・国体で優勝し三冠王）住友金属（主な優勝は、全日本実業団に二十七年から四年連続、二十八年総合選手権、三十一年都市対抗・国体・選抜優勝大会、三十二年総合選手権、三十三年都市対抗・国体Ⅱ三年連続優勝Ⅱ、三十四年総合選手権などすべてのタイトルを握り、日本の九人制バレー界に輝かしい足跡を残した）などが活躍した。

ラグビーの福岡配炭公団は、選手兼監督で巨漢快足の内田仁（福岡中学→長崎高商）、全日本選手で、兵役にもラグビーボールを持って行ったという新島清（福岡中学→明大）などの強力な選手をそろえていた。昭和二十四年の第一回全国実業団大会において、強豪近鉄を五十七対三という圧倒的スコアで制覇して以来、三十一年の第八回大会に至るまで福岡の社会人チームが八連勝するという破天荒な記録をもたらした原動力となった。

陸上競技は、全三井を中心として復興したといつてよからう。大牟田陸上競技協会の会長、平山威（昭和二十四年→二十五年福岡陸協副会長、三井化学染料所次長）、副会長の森田定市（熊本工専卒、三井鉱山三池鉱業所建設部長、二十六年→三十五年福岡陸協副会長）がその中心人物であった。彼らは、三井に優秀な陸上選手を集め、選手強化をはかり、大牟田記念グラウンド建設に尽力した。主な選手に古賀新三（毎日マラソン、福岡国体、金栗マラソン優勝）、ヘルシンキ五輪出場の内川義高（マラソン）、細田富男（短距離）、高橋進（三千障害）、室矢芳隆（中距離）、ヘルシンキ・ローマ五輪

に優勝。翌年の上海における極東選手権大会で優勝、次いで昭和三年、四年の全日本選手権大会で連続優勝して不滅の栄光に輝いた。

高橋哲夫（故人・伝習館中学卒）柳川が生んだ庭球の偉材。昭和十三年、二十一歳の折、第十七回全日本選手権大会の決勝戦で、当時わが国の世界的大選手山岸二郎と対戦、一―三で敗れたもののよく健闘し、同年の全日本ランキング二位に輝いた。翌十四年から軍務につき、昭和二十二年三十歳の若さで病没。かれを知る者はひとしく、テニスに対する真剣な精進と、自分に対するきびしい態度、他面温和にして、謙虚な人柄を推賞してやまない。かれは、立花鑑徳（故人、九州庭球協会顧問、柳川の殿様^{とんざい}の愛称で親しまれた）の温かい後援と、村山長一（現関西テニス界の重鎮、昭和のはじめ、九大医学部に在職中テニスの普及・技術の向上に尽力した。かれは高橋の素質を見込み、技量の練磨に、人間としての陶冶に、親身の薫育を注いだ）の薫陶と指導を受け、大学へ進まず、テニス道に短い命を燃焼した。

戦後のスポーツ

戦後の福岡県のスポートは、石炭産業に従事する者の間から復興したといつて過言ではない。当時、炭鉱は戦後復興のけん引車として、特別待遇を受けていた花形産業であり、有為の人材が続々と集まってきていた。そのうちのいくつかを拾ってみよう。

バレーボールの麻生鉱業は、二十二年の第一回西日本実業団選手権大会に大阪代表の天辻鋼球を倒して優勝、翌年も天辻と決勝で対戦して優勝。二十五年度全日本実業団選手権大会で、八幡製鉄に敗

出場の西田勝雄（マラソン）、東京・メキシコ・ミュンヘン五輪出場の君原健二（マラソン）などがいる。

水泳では、第三回夏季国体の会場であった大谷プールを根拠地とし、背泳の黒佐年明を中心とする八幡製鉄、石井計一郎を監督とする県立朝羽高校、多くの名選手を輩出した筑紫女学園高校、オリンピックに出場した選手では、古賀学（メルボルン）や後藤暢（ヘルシンキ）、富田一雄（メルボルン、ローマ）、田中聡子（ローマ、東京）、福井誠（ローマ、東京）などがいる。また、高木恒夫（県水連会長）の果たした役割も見がせない。

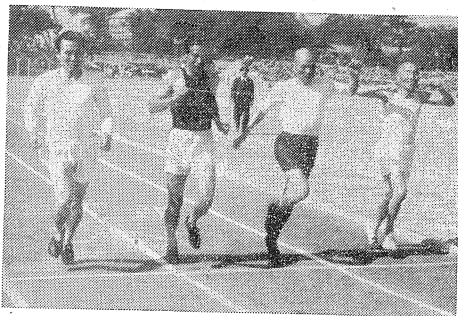
庭球では、デバ出場の選手として、隈丸次郎、岡留恒健、柳恵誌郎（四十一年から連続六年出場）、福井烈がおり、インターハイや国体に連勝記録をのびしつづけている柳川商業高校の大活躍がある。

第三回国民体育大会

つぎに、本県スポーツ界にとって大きな出来事であった第三回国体と、本県スポーツを特色づけるいくつかの競技について述べてみよう。

福岡県のオールスポーツマンが三人寄れば、いつの間にか昭和二十三年の福岡国体の話になるといわれている。福岡県民は、福岡国体に大いなる自負をもっている。福岡県民の、たぎるようなアマチュアスポーツへの情熱が、戦後の困難な状況のもとで、よく大会を成功させたといえよう。

当時、衣食住は完全な統制下にあり、旅行にも食券や配給米を持



平和台陸上競技場走りぞめ(昭23.10.18)

右から金栗四三、納戸徳重、橋崎正雄、徳永徳恵

ち歩かねばならない時期に、二万人にちかい選手・役員を迎え、交通や宿泊の準備、資材不足の中での会場設営など、まさに難関山積というところに、国体開催が決定されたのである。それは昭和二十二年十一月のことであるから、大会まで十か月しかなかった。

開・閉会式ともに悪天候にわざわざされたが、

大会全体はスムーズに進行し、いずこの会場も満員の盛況であった。福岡県は、夏季大会の総合優勝をはじめ、秋季大会においても陸上、ラグビー、体操、弓道、バレー、庭球などの好成績で天皇杯二位、皇后杯三位という輝かしい成績をおさめることができた。また運営面では、天皇杯・皇后杯の下賜と国旗掲揚、君が代斉唱、大会旗リレー、都道府県対抗形式など、新しい試みを採用し、その後の大会のモデルとなった。

この国体で「福岡市の復興と新しい町づくりは急テンポで進み、県民も久々に明るさを取り戻した。郷土にどう若人とスポーツの祭典は、平和のよみがえりを県民に告げ、町にも村にもようやく復

のエネルギー代謝」で学位をとった。三十一年から七年間、石橋文化センター常務理事、スポーツ部長として、スポーツ振興につとめた。

岡部の功績は数多いが、そのひとつは第三回国体の折に、福岡兵營跡に自ら平和台と名づけて、ここにスポーツセンターを建設したことである。昭和二十二年、戦禍の傷、未だ癒ぬとき、福岡国体事務局長に就任したかれは、占領軍に接収された兵營跡を返還してもらうことから仕事を始めなければならなかった。勇敢にもかかれは、単身、福岡のGHQに乗り込んで折衝を行った。「兵どもの夢の跡を平和の台にする」というのが、説得の台詞であった。こうして、当時、知事や福岡市長が困り抜いていた接収解除の大事業をなしとげたうえ、工事に当たってのブルドーザーの協力までも取りつけて来たのである。「奈良、平安の仏教徒は、その信仰の力で、偉大な仏像と大伽藍を建立した。われわれスポーツ人は、スポーツの力で、スポーツの殿堂を造るのだ」という名言は、当時のかれの心からの叫びであつたろう。神戸商船大学教授、岸井守一は「岡部平太先生」(西日本文化協会誌・西日本文化一一九号所載)の冒頭で、岡部像を見事にとらえている。



岡部平太

「英雄がいる。岡部平太は柔道(八段)、剣道(五段)、相撲、庭球、

興のツチ音が高らかにひびきはじめた」(「福岡百年」下巻、読売新聞西部本社編)

ちなみに、大会運営に要した経費三千百三十万円、二十一競技及び催物(登山映画、展覧会、国体の夕)の入場人員二十四万七千人、その入場料金は二十五円から百円まで(展覧会のみ二百九十九円)の区分で徴収し、総額一千八百万円であった。

岡部平太

福岡県のスポーツを語るには、まず、この人から始めなければならない。

岡部は、明治二十四年、福岡県糸島郡芥屋村に生まれた。同四十一年、福岡師範学校に入学、ここで柔道、相撲、庭球をはじめ、あらゆるスポーツをよくする万能選手として活躍した。卒業と同時に、久留米市男子高等学校に就職。大正二年、東京高師に体育専修科が新設され、入学。同五年三月、東京高師を卒業、同六年アメリカに留学、約三年にわたってシカゴ大学、ペンシルバニア大学、ハーバード大学などで体育・スポーツを研究、なかでもシカゴ大学のスタグ教授に多大の影響を受けた。同九年帰国、東京高師体育科講師となったが、十年四月、水戸高校に招かれて講師に任じた。まもなく同校を辞した彼は満州に渡り、満鉄に入社、彼の本領はそこで発揮されたといつてよからう。その後、帰福した岡部は、昭和二十三年の福岡国体に意欲を示し、大会の誘致に積極的に働き、運営にあたっては、これを見事に成功させた。のち福岡学芸大学教授、九州産業大学教授をつとめた。福学大時代「年齢別に見た水泳

陸上競技何でもござれの万能スポーツマンである一方、将棋は菊池寛をうちまかし、北京時代は、その描いた油絵が入賞し、筆をとれば第一級の歌人であり、文章を書けば、高等学校の国語読本に採用された。

まさに宮本武蔵と弘法大師と一緒にしたような天才児であった。その行動は天衣無縫、直情径行、子どもをそのまま大人にしたようなので、いたるところに波紋をひろげたが、その心根は純情で天真爛漫であった。」

昭和四十年、勲四等瑞宝章に叙せられた。昭和四十一年病没、七十五歳であった。

柔道Ⅱ竹村茂孝を中心にⅡ

柔道とともに生き、戦後柔道の復活に東奔西走し、みごとに隆盛に導き、世界の柔道にまで発展させた竹村(故人、講道館九段、明治三十二年(昭和四十四年)が、はじめて柔道衣を着たのは、明治四十四年、福岡市大名小学校六年生のときであった。

当時の福岡市の町道場は、双水執流の名門を誇る雙流館(青柳喜平師範)と自剛天真流の玄洋社道場・明道館の二流に分かれ、前者には箱崎の相羽駒祐道場があり、明道館系では、講道館の九州の一拠点であり、内田良平が開いた天真館をはじめ、大浜の吉田天真館、鳥飼の振武館(中野正剛が改築)などが競い合っていた。かれが入門した浜貞男師範の浜道場は、天真館系であった。

やがて中学修猷館に入学、二年生のとき明道館に入門した。これから学校と明道館での稽古がはじまる。竹村の柔道熱心は、寒稽古



竹村茂孝

で皆勤を続けたことでもわかる。当時、かれは柔道がおもしろくてたまらなかったよう
で、暗い三時ごろから明道館
にかけつけ、五時ごろまで稽
古して帰宅、七時には学校に
行ってまた一時間の寒稽古、
それで皆勤賞を明道館と修猷館から、毎年二枚ずつもらっている。

大正五年、五年生の折福岡日日新聞が開催した第一回九州学生柔
道大会に次鋒として出場、優勝した。以後、五高、京大と学生時代
はもちろん、社会人としても各職場などにおいて一貫して柔道発展
に努力してきたが、昭和二十二年二月、大連から引揚げてきてか
ら、かれの大車輪の活躍が始まる。

混乱と虚脱の極にあった敗戦日本を救うには、柔道以外にない
したかれは、まず柔道界の再編に取り組んだ。昭和二十二年五月、
福岡県柔道協会結成（結成当時副会長、まもなく会長）。同年七月、
協会の発会式を兼ねて第一回西日本対県選手権大会を福岡市大博劇
場で開催、九州では戦後はじめての大試合とあって観衆は五千を超
えた。団体戦は福岡、個人戦は木村政彦六段（熊本）が優勝した。
このときの副賞は、団体と個人の一位に各一万円、二位は団体五千
円、個人が三千円、個人三位に二千円。現金が贈られたのは空前のこ
とであった。翌二十三年五月の全日本選手権で優勝した松本市六
段、福岡は、楯のほかにナベ六個を副賞にもらっている。金属類

の値が高かったころである。二十三年正月、九州柔道協会結成、委
員長に竹村、副委員長に宇土虎雄熊本県会長が選出された。
九州協会の設立を記念して三月、第二回新生柔道「全関西—全九
州対抗」大会を福岡市浜新地の特設道場で開催。このとき竹村の肝
入りで、全国柔道懇談会を開催。この会議で全日本柔道連盟結成の
ルールが敷かれ、翌二十四年五月、全日柔道発足。ここに柔道が戦
後の新しい時代をスタートしたことを思えば、この懇談会の意義は
まことに大きいものがあるといえよう。

柔道の全国組織化は、二十三年秋の第三回国体には間に合わな
ったが、竹村や、福岡に帰郷していたスポーツ界の先輩である岡部
平太八段らの積極的な運動が奏効し、公開競技として柔道の国体参
加が実現した。このことによって、柔道がやっと公式に認められ、
アマチュアスポーツ団体として日本体育協会に加盟の糸口をつか
み、二十四年の国体から正式種目に採用された。

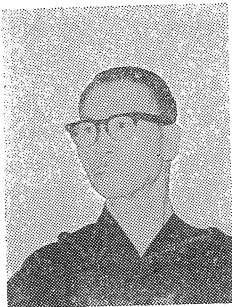
学校柔道は、二十五年の文部次官通知で復活し、高校柔道は二十
六年から許可された。福岡県内では、同年七月、第一回福岡県学生
優勝大会、八月には第一回西日本高校大会が始まった。七月、福岡
県学生柔道連盟結成。十月、九州柔道連盟結成（会長に竹村）。

このように、混乱と虚脱の極にあった戦後の柔道界再編に着手し
た竹村は、驚くべきスピードでそれをなしとげたのである。その
後、東京オリンピック選手強化委員長の大任を果たし、全日本体重
別選手権大会を福岡に定着させるなど、まさに八面六臂の活躍をし
たが、四十四年一月、東京において客死。講道館の昇段審議会に出

席した日の夜であった。現在、約一万人の有段者を擁し、柔道王国
を誇る福岡の今日は、かれによってもたらされたといつてよから
う。生前の功により正五位勲三等に叙せられた。ここで、かれがも
っとも愛着を寄せていた金鷲旗争奪高校柔道大会についてふれてお
きたい。

大正五年に始められたこの大会は、名称や参加範囲はつぎつぎに
変わったが、現在は九州柔道協会と西日本新聞社が主催し、後援に
文部省・福岡県・九州高体連ほか、主管に福岡県柔道協会があたつて
いる。戦前は朝鮮・満洲・台湾からの参加もあり、近年は東北、関
東からも出場し、三百をこす高校を数えるに至った。九州の大会が
実質的に全日本の大会に成長、伝統をほこる異色の勝ち抜き大会と
して話題をさらっている。この大会で育った選手たちの中には、全
日本や世界に羽ばたき、柔道界で広く活躍している人々の名がみえ
る。

第一回大会に出場し、優勝の感激にひたった竹村は、この大会に
は欠かさず出席して「九州を制するもの、全国を制す」と激励しつ
づけていた。



三角卯三郎

剣道は三角卯三郎を中心
に、
福岡県には、全日本剣道連
盟に登録されている初段以上
の有段者が約二万人いる。こ
れは東京都に次ぐ剣道人口で

ある。そして、国体や全日本選手権大会、都道府県対抗、全日本実
業団対抗などの全国的大会における優勝回数は枚挙にいとまがない
ほどである。このように隆盛を誇る福岡県剣道界を常にリードし、
影響を与えている人に三角卯三郎（明治二十八年生れ、範士九段）
がある。

かれは、全国でも最高齢の現役理事長である。至って壮健で、ど
んな小さな大会でも必ず姿を見せ、剣道について熱心に説く。剣道
家の尊敬の的である。

大正六年、京都武専を卒業したかれは、福岡県立小倉中学、石川
県師範学校、佐賀県立佐賀中学などを歴任したのち、大正十年再び
福岡県に帰り、以後、福岡中学、旧制福岡高校、県警察学校など
で、ひたすら剣道教育に打ち込んだ。

戦前から戦中にかけては、時代の要請もあって、かれにとって最
も充実した時期であった。戦後、剣道が禁止され、追放の憂き目にあ
うなど苦勞した頃もあったが、昭和二十四年、剣道への想い絶ちが
たく、自宅に道場を建て、これを北辰館と名付け、人々を指導する
とともに、愛好者のよりどころとした。ここに集う者は、現在の本
県剣道界を代表する錚々たる人々であった。二十五年、三角が中心
になって福岡県剣道連盟（現福岡県剣道連盟）（理事長に三角）を設
立した。以後、会長は二代・三代と代わったが、三角は元気で、今
日まで二十六年間、理事長をつとめている。

かれが最も力を入れてきたのは、玉龍旗高校剣道大会である。大

正五年福岡日日新聞によって始められ、戦争のため一時中断されていたのを、昭和三十年西日本新聞社に協力して復活させ、今や柔道の金鷲旗大会と並んで日本一といわれる大会にまで育てた功績は、特筆されるべきものであろう。

かれはまた、非常にすぐれた剣士であるばかりでなく、文をもよくする。戦前、戦後を通じて新聞紙上に書いてきた中等学校剣道大会や玉龍旗大会への簡にして要を得た講評は、多くの読者に迎えられ、その中から剣の道に進んだ人も多い。かれは文武を通じて剣道を広めた人として、高く評価されている。功によって昭和四十一年十一月、勲五等双光旭日章を受く。

弓道

戦前、福岡弓道界は、石原七蔵等の強豪がそろい中央に対しても一大勢力をなしていた。それだけに、福岡県内の弓道に対する執心は殊のほか強く、武徳会解散と同時に、弓道愛好者達は直ちに相寄り、相諮って、翌二十一年一月には早くも福岡県弓道会を組織し、森永弥久太郎（故人、四十四年八十二歳で没、範士九段。四十二年



堀川久助

勲五等双光旭日章を受く）を会長に、弓道の火を絶やさぬ努力がつけられたのであった。森永会長は、中央とも緊密な連係を保ち、同年春

全日本弓道連盟が発足するや、直ちにその下部組織に加わり、二十三年から六年間自らその副会長として弓道の振興に尽力したのである。

その後、本県の弓道人は団体や全日本勤労者大会、全日本選手権大会に数多く優勝するなど優秀な成績をおさめているが、第十八回全日本選手権に優勝した重松信夫（教士七段、鞍手郡宮田町議会事務局）や、五十年の三重国体及び全日本女子選手権、五十二年の全日本女子選手権と優勝した朝隈敏子（教士七段）などは代表的な選手といえよう。

歴代の会長の中でも特に功績のあった堀川久助について述べてみよう。

堀川が会長に就任して、手がけた主なものは、県弓連の規約を整備したことや、九州各県に呼びかけて各種大会を開催し、それを定着させたことであつた。全九州弓道連合会を結成（三十四年）、中・四国・九州教士親善射会の創設（三十五年）、西日本弓道大会（三十九年）、西日本女子弓道大会（全国最初の女子だけの大会）（三十九年）など、全国にさががけて各種の事業を実施、現在の県弓連の基礎を確立した。

昭和三十九年、東京オリンピックの弓道（デモンストレーション）の部に出場後、持病の喘息と糖尿病のため病床にふし、以後五年間の大部分は入院生活であつたが、その間、病院から直接道場に来ては後輩を指導するとともに、新しい構想でつねに弓道界をリードしていた。四十五年八月病没。

（三十ページよりつづく）

このような活動の結果が、今後のわが国の公共福祉の発展のために益する所はきわめて大きいものがある。しかしながら、それだけでなくそれらの活動の展開の中で、会員ひとりびとりが遂げていく自己充実、人間形成のための学習効果ははかり知れないほど大きいことに注目したい。

文部省はその研究委嘱事業にボランティア育成講座の実施を条件としている。既に欧米諸国にみられるように、現代社会の高度の発展に伴って、社会奉仕活動の実践のためにはかなり専門的な知識技術の修得も必要となつてきている。

今日、生涯教育の必要がいわれ、生れてから死ぬまで、生涯にわたる教育の重要性が強調されている折柄、ボランティア活動推進をめぐって単なる抽象的な理論でなく実践につながる婦人たちの学習が益々盛んになることを期待してやまない。

（早稲田大学教授）

現会長百合野庵は、範士十段。全九州弓道連合会会長、全日本弓道連盟会長も兼ねている。昭和四十八年に北九州市に完成をみた市立夜宮弓道場は、明治神宮の至誠館弓道場に匹敵するりっぱなものであるが、これの建設に際しては、県下弓道界の総意をまとめ、かれが中心となって尽力したことはよく知られている。また、錬士以上の称号をもつ者二五〇名をかえ、大世帯の県弓連をよく統率し、弓道発展にかける真摯な態度は、弓道関係者から師表と仰がれている。

おわりに

福岡県体育協会に加盟している競技団体は三十六、地域団体は三十五をかぞえる。いずれの部門をとりあげても華麗・多彩をきわめ、全国に名を知られた人がある。与えられた紙数ではとてもまかないきれない内容で、やむを得ず割愛せざるを得なかったことをお詫びしたい。

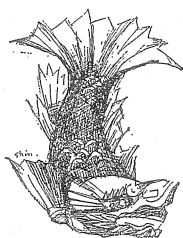
参考文献

福岡県体育協会史（福岡県体育協会発行）九州ラグビー史（九州ラグビーフットボール協会発行）竹村茂孝『柔道に生きる』（九州柔道協会発行）コーチ五〇年（岡部平太著、大修館）スポーツと禅の話（同、不昧堂）スポーツ・勝負・人間（岡部平太遺稿集刊行会）

（福岡県教育庁体育課長）

人物を中心とした

— 体育・スポーツ郷土史 —



(カットは筆者)

— 愛 知 県 —

江 口 真 一

気候風土に恵まれた愛知県の体育、スポーツは全国でも屈指のものであるが、その歴史はわずか百年をたっていない。スポーツはもとと潑刺たる学生が中心となって発展普及してゆくものである。例外ではないが、愛知県の場合その源流は一点に集約される感がある。——愛知一中と校長日比野寛である。

日比野寛就任以前

愛知一中は明治三年名古屋藩洋学校として創立、文部省直轄の愛知英語学校を経て県に移管され、明治十年二月愛知県中学校となった。英語学校時代には総理大臣加藤高明、海軍大将八代六郎、坪内逍遙、二葉亭四迷、三宅雪嶺などを輩出したが、愛知県中学校から校名を変えること数度、愛知県第一中学校となり戦後学制改革で旭丘高等学校となった。昭和五十二年は県立になって百年を閲し盛大な記念祭を挙行し、行事の一つとして八十八歳の先輩を先頭に数百人がマラソンを行った。

初期の運動については明治十二年撃剣が行われ、ほかに蹴球とフットボールだった。二十一年には名古屋の堀川に水練場を開いて泗水の練習、二十二年には東京から来た教師が見込に等しいベースボールを披露した。

二十四年、一県一校制の中学校令が改正、順次中学校が増設される気運になり、二十六年一中では撃剣、柔術、弓術、フットボール、ベースボール、相撲が正式に運動種目に採用され、その秋の運動会にベースボールが行われた。三十年六月彦根で滋賀一中と野球試合が行われ21対13で緒戦を飾り、また十月には滋賀一中を招いて

名古屋に於ける最初の試合を行い一中は30対6で大勝した。名古屋では未曾有のことで開始まえ、運動場は観衆で立錐の余地なく溢れ出たという。選手の名に宮田光雄（のち警視総監）、種田健蔵（のち東洋紡社長）がいた。次は二年の鵜飼宗平（のち三井造船社長）と加藤正一の投捕で浜松一中に一点差で敗れた以外は四年間不敗を誇り黄金時代を築いた。鵜飼は野球コーチを望んで東大進学を一年延期、一中教師を勤め日本では珍らしい「野球便用」を刊行した。

陸上競技

笹川臨風、稲田竜吉、野口米次郎、吉沢義則などが学んで名声は高かったが、反面校内は荒廃して手がつけられなかったという三年七月、日比野寛が校長として赴任して来た。第一声に「運動をもって本校の精神とする」と宣言し校風の刷新を計った。授業後毎日校長が先頭に立ち全校生徒と練兵場を周走し、記念日には郊外の清洲、津島まで遠走を試み、許可なくサボるものは容赦なく停学に処した。久松潜一、堀田庄三などもその苦しかったことを述懐している。

「上体はいつも真直ぐ腰の上、運動は手と足だけでせよ」、また「身神保健訓 病めるものは医師に往け 弱きものは歩け 健康なものは走れ 強壯なるものは競走せよ」と言っており、日比野式走法はあくまで保健、体育に重点をおいていた。余談に及ぶが保健という熟語は今でこそ常用語になっているが当時の辞典にはない。日比野の作語である。また体育という言葉も三十七年、日本で最初に作られた校歌である一中校歌に「知育、徳育、体育に秀でて得たる

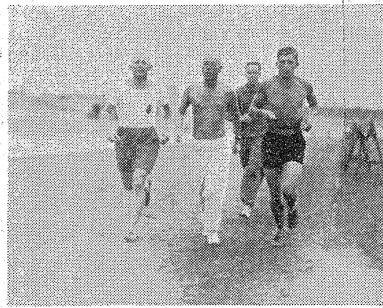
ものなれば……」と歌われ、校則にも「正義を重んぜよ 運動を愛せよ 徹底を期せよ」と定めているが、教育の三本柱に体育、運動を当時から重視した。

世間では人力車夫の真似をさせているとかマラソン（長距離走の意）の是非論などが公開の席で討論されたが、全校皆走は校風を一新するとともに、四十一年には二年生の古橋猶三郎が東京の一高、高師、京都大学の三大競技会六百メートルに三本の優勝旗を獲得、四年にわたってその名を轟かせた。

四十四年の大阪実面クロスカントリー・レースと諏訪湖周廻二十マイルマラソンに一着を占めた田舎片善次は、大正二年の第一回マニラ極東オリンピックの五マイルと一マイルマラソンに優勝し、日本総得点十一點の大半を稼いだ。四年生であった。同年の日本オリンピック四百メートルと一高の六百メートルに佐々木芳郎が、高師の一万メートルに江場綱良が、大正四年には早大の八百メートルと三高、高師の六百メートルに柴山明矩が優勝し、次々と数多くの駿足が現われた。特にその圧巻は、大正六年四月東京選都五十周年記念として読売新聞社が主催した京都東京間、東海道五十三次駅伝競走であった。東軍は一高、高師の一流選手を網羅しアンカーに金栗四三をすえ、西軍は教師多久儀四郎と五十三歳の日比野を殿りに、梅原半二（のち豊田中央研究所長）ら十五歳三人、加藤勇、小堀四郎（洋画家）ら十六歳五人を加えた愛知一中単独編成チームであった。西軍は敗れたが途中二度までリードした。三日間にわたり風雨を衝いて昼夜をわかず走り抜いたこんな競走は空前絶後で、駅伝の名もこれが始まりで、歌人士岐善磨の企画によるものであった。

校長日比野退任後は学校の方針もかわり、大正終りは伊藤敬行、梅村清明（中京大学理事長）などの活躍があったが一中競技部は次第に凋落を辿った。しかし昭和五年吉村三笠を教師に迎えると再び息を吹き返し、九年には関西選手権大会八百メートルリレーに山田一男、水谷勝一、野田修造、日吉三友で優勝、十年の同大会鉄槌投、ハンマー投、円盤投で吉村一雄が一等を独占しフィールドの部で優勝、十一年の同大会棒高跳で小畑次郎、鉄槌投で大磯一雄が一等になった。しかし、やがて時代の波は戦時体制に入り実戦的競技に移行した。

一方昭和初期の愛知の女子陸上競技界は華々しかった。名古屋高女の渡辺すみ子（現中京大学梅村清明夫人）は五年のチェコ、プラーグの女子オリンピックに県一高女の村岡英枝（現佐藤）と出場、



ライブチヒ体育大学で日比野式走法を指導

また七年の百メートル十二秒二の日本記録は実に十九年間破られなかった。八年のオリンピック・ロスアンゼルスには再び村岡と出場し女子四百メートルリレーに五位、九年のロンドン女子オリンピックには四位に入賞した。同大会では淑徳高女の井戸田きよ子が中

距離で、中京体専（現中京女子大）の山本定子が槍投で入賞、山本は十一年のベルリン・オリンピックでも五位を獲得した。十年ごろからは中京体専の児島フミ、山内リエ、山下好子、吉野トヨ子、米陀京子、溝口百合子ら日本記録保持者がオリンピック、アジア大会で活躍した。

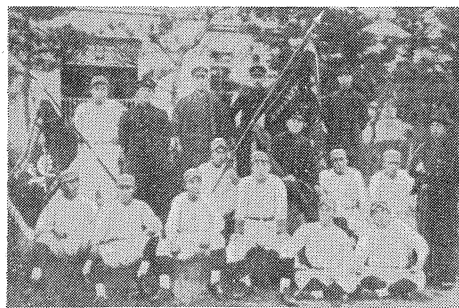
愛知県スポーツの中心であった日比野寛はその後バリ、アムステルダム、ベルリンオリンピックに出席、またライブチヒ体育大学を訪れること三度、日比野式走法を学生に指導しマラソン王と呼ばれたが、二十五年四月死去。八十四歳。愛知陸上競技協会は創立以来歴代会長は一中出身の高松定一、下出義雄、青井節郎、青木好之、江口鐘蔵と現在に受け継がれている。

野球

日比野寛が校長になって一中の野球は、たまたま名古屋電燈の教師で、一高、東大の名選手だった宮口竹雄と私立名古屋中学の英語教師でアメリカの野球新知識を持ったD・C・レーマンの指導を得て一段と磨かれた。三十四年最強の一高に次ぐ慶応大学を11対6で撃破し、明治末期は一高、早大、慶大、明大、学習院、三高の大学高校級と互角に渡りあった。当時の選手には中壘半左衛門（のち衆議院議員、半田市市長）、早稲田で活躍した高松静男、また名刹万松寺の和尚、僧衣で練習した野球の僧兵こと伊藤寛一、マネジャーに小酒井光次（号不木、探偵小説の開祖）、杉田襄（のち日比野、中央相互銀行社長）などがいた。

東海五県連合野球大会がすでに十二回を重ねていた大正四年、大

阪朝日新聞社の全国中等学校優勝大会が豊中球場で開催された。東海地区の第一回代表は三重県の山田中学、第二回は豊橋中学（現時習館高校）、六年の第三回は愛知一中が出場し一回戦に長野師範に敗れたが敗者復活戦で廻り、最後に関西学院を破って優勝した。全試合を完投した長谷川武治（現中部ゴルフ連盟専務理事）、加藤高茂、マネジャーに小島憲（のち天皇侍医、自衛隊病院長）、大木喬之助の名がある。



第3回全国中等学校野球大会に優勝した愛知一中の選手たち

九、十年は明倫中学、名古屋商業が会場し、十二、十三（この年から球場は甲子園）、十四年は一中が会場し伊藤一郎、水野鉦一のバッテリーで三年連続出場した。大正末は「打倒一中」が目標で愛知、中京、東邦の三商業が台頭し始めた。一中は昭和四年の三浦一幸、夫馬勇、吉田健男時代の第八回大会を最後に甲子園から姿を消した。わずかに十四年の夏の予選に加藤進（現NHK野球解説者）投手を擁して春の選抜優勝校東邦商業と優勝を争い3対2から逆転されて敗れた。戦前の大会で特筆す

べきは四回の出場を全部優勝で飾った中京商業で、三回連続優勝の偉業、明石中学との驚異的な二十五回延長戦などがあった。

また大正十三年に始まった毎日新聞社の春の選抜大会は第一回が名古屋八事球場で幕開けられ、東邦商業が三回、愛知、中京両商業が一回ずつ優勝を飾り野球王国の名を恣にした。この間中商からは監督山岡嘉次に率いられて吉田正男、桜井寅二、恒川道順、杉浦清、野口明、鬼頭教雄、野口二郎、松井勲、そして滝正男など、愛商からは水谷利一、勝川正義、小島利男、東邦からは高木良雄、片岡博国、立谷順一、岡田福吉、久野欽平など、享栄商業からは監督芝茂夫に鍛えられた林清一、近藤金光、中山武、滝野通則、村瀬一三などの名選手が躍り出て活躍した。十六年から野球は敵性スポーツの烙印を押され中止された。

戦後は割愛するが、割愛出来ない選手に享栄商業出身で数多くの日本最高記録を生んだ投手、現在監督金田正一が居る。

庭球

庭球の最初の対抗試合は、明治三十一年東京の高師と高商と伝えられているが、愛知県では二十九年東大在学中の数人が発起しローテニス倶楽部を設立、愛知一中の運動場にコート进行け、三十二年外人クラブと試合した。四十二年三高主催の大会で一中の加藤尚一・中笠操平組と斉藤恒一・西田末男組が五戦無敗、四十四年の同大会で中笠・宮津養造組が優勝し中学ランキング一位に推された。大正四年毎日新聞社浜寺の第八回全国大会に斉藤三郎・森田誠一組が優勝し、八、九年の東京三校主催の大会で棚橋武夫・伊東秀雄

組と安藤俊三・鍋田英之助組が連続優勝した。このあと岩崎明三郎、市野平八、墨金次郎、青山登、萩原蔵六などが、また大正の終りは準硬式に移り海部安昌、若原三雄などが活躍した。

昭和四、五年の全国高工大大会で名高工が連続優勝、また四、五、六年にわたって淑徳高女出身の小林知子が関東、関西の女子選手権を独占した。六年長谷川寛治が一中教師となり硬式を採用し、八高も指導することになって愛知の庭球王国が築かれることになる。六年の全国高専大会で名高商が、大阪毎日新聞社の全国中等学校大会で愛知第一師範学校の沢山仁三郎が単で、八年には一師の松原良弘（現水野）、岩木銅之組が、また明治神宮大会で一中の久野辰男・三浦三夫組が優勝した。九年の全国高専で八高の松山寿・安間一弥組、久野辰男・小川清一組、中林哲太郎、尾之内由紀夫（現本四連絡橋公団総裁）が優勝、安間を除いた全選手は一中OB。

十一年は全国医大大大会で愛知医大が、全国高専で八高の高橋正蔵・中林賢二郎組、久野・大竹進組が日本一、大竹を除いた三人は一中出身。またこの年の全国中等学校で一中の飯尾文一、飯尾・中条良次組が単複で優勝した。十二年には浜寺から中百舌鳥コートに移ったが全国高専、高校の部で八高の豊田幸吉郎、滝保夫、中林賢二郎、高橋正蔵、全選手一中OBが会場して優勝、専門学校で優勝、名高商の飯尾文一・田村春雄組、松島治男・上田保男組が優勝、また全国中等学校で岡崎師範の河合岩男（現沢田）が単で、河合・富田松三組が複で、明治神宮でも岡崎師範の富田が単で、富田・河合組が複で優勝し高専、中学の全タイトルを愛知が獲得した。わずかに全国ジュニア決勝で一中の豊田大吉郎、富沢節夫が慶応の山川、

藤倉に惜敗した。十四年の全国中等学校では一中の岡田英雄・阪東治男組が準優勝となった。十五、十六年は戦前の緊迫で学生選手権大会は中止となり戦前の庭球は幕を下した。

柔道

明治二十六年、愛知一中は神之真流柴田謙太郎を柔道師範に任命した。生徒では上遠野孝（のち名鉄の前身名岐電車社長）、大野内記、岡田勝利、入谷銑、島村秀雄、荒川敏政、河合誠一、米田松三、賀古弓弦などの猛者が活躍した。特に後年一中師範となり東海柔道界の鼎となった米田の強豪振りは異彩を放った。大正四年から開かれた一中夏期講習会は嘉納治五郎をはじめ山下義韶、宮川一貫、岡部平太、石黒敬七、また磯貝一、飯塚国三郎など柔道界の最高峰が来会し、恰も講道館の出店の櫛を呈した。講道館史のなかでも類例のないことである。

五年、田口利吉郎が師範になり、この年、武徳会愛知県支部主催の対校試合による県下中等学校大会が開催された。第一回以降十一回一中が連続優勝し、初期には笠井鉄雄、河原義之、青木清（のち東邦ガス社長）、鴨銅彦次郎（のち鈴木）が活躍した。九年には京都武徳会全国大会で準優勝、八高主催第一回大会では全国最強の四日市商業を破って優勝、長尾芳郎（現名鉄百貨店社長）、吉田光太郎、大島弘夫（戦前青森知事）、波多野市郎などの面々であった。

十年の東京高師全国大会で稲垣竜人、吉田重治、林雷三（のち後藤）、吉田、水野広吉（のち勝見）が全国制覇を達成した。特に吉田光太郎は名高工に進み相撲でも学生横綱を張り強豪を謳われたが

一夕の風邪で忽然と世を去った。

十一年、岡山六高の無敵時代を築いた岡野好太郎が着任し東海地方に寝技柔道が普及し、八高、名高商が台頭、特に名高商は棚橋五郎、吉田清の不倒時代を迎えた。大正十三年の名高商主催第一回大会でも鈴木輝雄、吉田新一、江口真一が中心になって優勝したが、昭和になって「打倒一中」を目指す一師、豊橋、明倫（現明和高校）、一宮の各中学や愛商が頭角を現わした。わずかに七年の大橋重信、広間俊彦時代と十三年の塚田太郎、首藤真彦時代に帝大主催と京都武徳会で京都一商、津山中学と日本一を争った。戦後は明倫中学出身の佐藤守直の率いる東海高校が全国優勝を重ね記録的な黄金時代を現出した。

剣道、相撲、端艇、水泳

一中の剣道は明治十二年からの歴史があり原不二夫、小堀休忠、鬼頭義雄、浅井季信、丹羽木太郎各師範の指南で、大正十二年京都武徳会全国大会で準優勝、昭和三年の全盛時代があり、個人では後年金沢四高の黄金時代を現出した土川元夫（のち名鉄社長）などが居たが、剣道部だけが遂に全国一の夢を果たせなかった。一師などの強敵が控えて居たが、特に後年ピンポン外交で日中友好の橋渡しとなった後藤鉦二（愛知工業大学学長）や天覧試合で優勝を競った菅原茂夫を生んだ明倫中学の竹刀は一際冴えていた。

大正三年東京に劣らぬ国技館が名古屋に完成し、五年から東海学生相撲大会が始まり近畿からも参加して盛況を呈した。八年度大阪毎

日新聞社の第一回全国大会に一中の真野茂が個人優勝、九年には団体で準優勝した。十三年には名高商の稲垣登が高専大会で日本一となった。昭和四年には一中の中山光が全国大会に優勝して二人目の中学横綱を張ったが、戦前の後半は中京商業などの新興勢力が圧倒的な力を持った。

一端艇部の創立は明治三十四年であるがすでに三十六年舵手沖鉄次郎、三十七年舵手金森徳次郎（のち国務大臣）、三十九年舵手真野毅（のち最高裁判所判事）の時代は琵琶湖の全国大会に不敗を続けた。四十一年には一高競漕会にも出艇、大正に入っては明治大学競漕会に五年連続優勝し、七年には舵手福田太郎、整調田中啓一のクルーで琵琶湖の全国大会に勝抜いて名実ともに全国一になった。しかし十年の舵手加藤将之（歌人）の頃から年齢、体力、実地練習の場所が遠く練習量などの問題から沈滞の一途を迎えることになったが、現在の旭丘高校になっても綿々と漕ぎ続けられている。

まだいくつかのスポーツがあるが、輝やけるものに水泳がある。水泳についても明治三十三年一中が伊勢湾泗水に先鞭をつけ、昭和十五年まで四十一年間続けた。大正二年の大阪毎日新聞社主催の中等学校競泳会に初出場、二百メートル、四百メートルに一着、千五百メートルに二着を占めた。十年斉藤剣次が第五回極東オリンピック大会に出場し帰国後クロールの研究が始まった。

この頃から女学校間にも水泳練習が開始されて十五年には淑徳高女の国枝美代子が五百メートルと百メートル背泳に日本新記録を出

昭和五十三年表紙図案入選者発表

「文部時報」表紙図案募集に際しましては、多数の応募をいただきありがとうございました。選考の結果、左記のかたがたの作品が入選と決まりましたのでお知らせいたします。（敬称略）

渡辺 章

東京都保谷市泉町

一目五の二三

小林 敏子

和歌山県海南市

溝ノ口三五



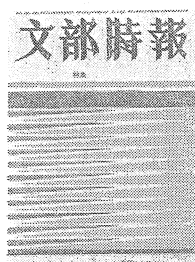
(1～3月使用)



(4～6月使用)

青木 茂生

北海道枝幸郡歌登町



(7～9月使用)



(10～12月使用)

小林 敏子

和歌山県海南市

溝ノ口三五

輝ける戦後の愛知県における体育、スポーツについて、は他日を期して筆をおくが、昭和三十四年中京大学に体育学部が設立されてオリンピック体操競技の優勝選手を育てるなど一段と進歩を加え、愛知の体育スポーツの前途は明るい。

（愛知一中「鯨光百年史」編集委員）

人物を中心とした

— 体育・スポーツ郷土史 —



— 茨 城 県 —

川 又 廣

殆んどの体育スポーツが明治以後に移入をされたのだから、明治初期の体育は、武道だけが幕末から継承されたといっても過言でない。それで、はじめに本県の武道の流れについて少しく述べてみたい。

幕末の水戸藩は、天下の副將軍とあって特に武術の盛況をみた。第九代藩主徳川斉昭（烈公）は文武の振興を図るために、藩校弘道館を建設した。その敷地は一七万八千二〇〇平方メートルという広大なもので、当時いずれの藩校もこれに匹敵するものはなかったといわれる。この弘道館内に大演武場を設け、剣術、射術、柔術その他諸々の武芸の練習場を造り大々的に武術の奨励をした。烈公は文武不岐の精神にもえ、天下にさがけて何事にも水戸精神を発揮し特に剣術については意を用いた。時代にそった独特の剣法を創案し天下にその威を示そうとしたのか、天保十二年三指南役、北辰一刀流渡辺清左衛門、新蔭流荷見茂衛門、東軍流鵜殿半七らに命じ水府流剣術の創案にとりかかった。それはこの三流の中から由緒ある太刀筋を抜すいし合作させるのが目的であった。

これよりさき烈公は天下有数の剣客を水戸藩に招請し、弘道館の顧問とし或いは師範役とした。まずその第一人者が当時江戸はお玉ヶ池で大道場をもち門下数千人を擁して剣名四隣を圧した北辰一刀流の祖千葉周作であった。つづいて江戸の神道無念流岡田十松、斉藤弥五郎らがいた。これら有名剣客たちは江戸に本拠を構えて一か月に何日というように出張教授に当たっていた。しかし天下の雄藩水戸に、しかも天下の副將軍の名をほしいままにした水戸の藩校弘

道館に職を奉ずることは剣客の身にとって無上の名誉でもあった。また藩内には常勤師範として前記の渡辺、荷見、鶴殿の三人が名を連ねており、またその傘下には有名無名の剣士が道場を圧していたといわれ、まさに弘道館は剣客群れ集い気魄がみちみちていたという。そして日々の出席者は三、四千人ずつあったというからその盛況は推して知ることが出来る。この弘道館は天保十二年（一八四一）に開館し三十年経って明治四年に閉館となっているが、この弘道館の剣術は百余年を過ぎた現在にいたるまで水戸の剣風としてその風格を水戸東武館にとどめ、東武館は同流の正統として斯界に君臨し、今日の盛況をみている。

那珂川の水術は天保十四年烈公によって、水府流水術の名称がつけられ、組織的な稽古が行われ、礼法なども確立された。水戸城を中心として上、下に水場（水練場を称した）が設けられた。上、下における泳法は型が異っていた。太田捨藏政醇（明治十七年六十四歳歿）は幼時水戸水府流の名人加治季長に上町水府流を学び、安政三年幕府講武所に入り、のち江戸水府流市村善信に就学し、上、下、両水府流を合法して水府流太田派を開いた。水場における階級はさくさく厳重で師範の下に役員として指南免許、免許、世話役、舟番等の名称が附けられ、それ以下は生徒で独泳、一級と下及び入門最初は新入と呼んだ。烈公も子息たちに稽古を勧め就藩の折には毎夏行われる大会には必ず臨席し、江戸藩邸におるときには執政を臨場させて督励したということである。この水泳がそのままの形で明治、大正、昭和と続き、戦前までは水戸の学童の殆んどが参加する

盛況をみせ、県内の各所でもこの流派が実施されていたが、戦後は、時世の推移により、現在は全くその姿がみられなくなったことは遺憾である。

弘道館で行われた柔術も明治初期から各所に道場が開設され、しばらくの間は青年の間で行われていたが、講道館柔道の普及にともなうて自然に消滅していつて、町道場等で僅かに行われているに過ぎない。

幕末から引続いて行われた種目としては相撲がある。これは神社の奉納相撲として行われたのであるが、殆んど神社の祭礼等の催し物として賑やかに開催された。その影響によって学校その他で盛んに行われたが、そのような行事もなくなって現在では殆んど衰微してしまっただ。

新しい体育スポーツの台頭

本県に入ってきた種目の中で古いのは野球と庭球である。野球は明治二十年頃に入ってきたというから保守的な県民性であるとばかりは考えられないが、他のスポーツが入ってきたのは大正の末期である。大正十年水戸高等学校の創設されるや、中央で行われていたスポーツが、陸上競技をはじめとして、サッカー、バスケットボール等が一時に移入されることになり、急にスポーツ界も賑やかになった。これらのスポーツも日を追うて普及発展に向かったが、県下一帯に普及されるまでにはなお日を要した。

終戦後の体育

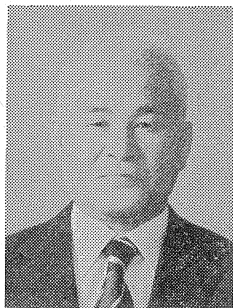
戦後各スポーツ種目団体が自主的に協会の設立をみせるようになる

るに及んで、それを統轄する代表団体の設立も叫ばれるようになり体育協会の設立をみるようになった。昭和三十年代の終り頃に茨城国体の開催を希望する声が随所に起こるようになると同時に一般にスポーツに対する関心も高まって、体育館、プール、運動場の施設も着々充実していった。特に昭和四十九年の茨城国体の開催が決定するに及んで、県は国体主会場の建設、市町村は開催種目施設の整備等形式内容の充実がみられた。国体終了後は高まったスポーツ熱を如何に生活の中に直結させるかとの施策が講ぜられて着々その効果をあげている。

体育、スポーツの指導に貢献した人々

小沢寅吉政方（初代東武館長） 千葉周作の伝を受けて明治七年

私邸に道場を創設し旧藩校弘道館の建学精神である文武不岐を標榜し、一時は西欧文化の謳歌によって壊滅寸前にあった剣道の復興と普及に全力を傾注した。嗣子一郎、二郎ともに剣技に長じ、相協力して父の遺業を継ぎ数多くの逸材を世に送った。一郎は剣道を中等



武 学校の正課にすべく帝国議会に建議し、私財を投じ全国運動を展開すること十余年、遂にその目的を達成し今日の隆盛の基礎を築いた。また館長寅吉政方の門人に内藤高治、門名正の卓越した剣士が生まれた。

内藤高治は京都に武徳会本部が設立せらるるや、招へいされて主任教授となり全国剣道の総帥となった。その門から昭和の剣道を背負った名剣客が続出した。斉村五郎、小川金之助、持田盛二いずれも範士十段である。また高野茂義も小沢の門から出ている。現館長小沢武は佐賀県出身であるが、昭和五年から四代目館長を継いだ。戦後財団法人東武館を設立し立派な道場を建設した。戦後間もなく全国少年剣道練成大会を開催したが、逐年盛会に越え北は北海道南は鹿児島までが参加し昨年の参加チーム数は四〇〇に達し、参加人員も二千四〇〇人に及んでいる。参加チームの多くは父兄同伴で来ることも特色とされている。現館長は茨城県剣道連盟会長であり、また、茨城県道場連盟会長の要職も兼ねている。

永井道明（一八六八—一九五〇） 水戸に生まれ、水戸中学校から東京高等師範学校博物科にすすみ卒業後中学校長を歴任した。見出されて明治三十八年体育研究のため海外留学を命ぜられ欧米を巡歴し、とくにスエーデン体操の研究をする。明治四十二年帰国後坪井玄道に代わって学校体操の中心人物となった。とくに文部省体操調査委員として陸軍と交渉しながらスエーデン体操中心の教授要目の立案に当たり、日本体操の父と仰がれる。大正十二年本郷中学校の教頭となり学校体操の第一線から退いたが紀元二六〇〇年に体育功労者として表彰された。

宮田寛造（一八八八—一九五二） 日立市の出身で茨城師範学校から東京高等師範学校体育科に進む。スエーデン体操中心の要目（大正二年）も時代の進展とともに遊技競技を教材にしようとする

要求により改正の気運が高まり、大正十五年改正教授要目の公布をみた。その時代に永井道明のよき後継者として活躍した。体操の専門家としての理論と実際に卓越した手腕を振り全国の体操指導に大きな貢献をした。また、その頃文部省検定試験の制度があり、いつも委員として重きをなしていた。そうした関係もあってか、県内に体育を志すものが続出して茨城の検定合格者は全国に響いており、県体育振興の上に大きな力となった。その他或る小学校を研究学校として特別指導をし、全国にその名を知られ参観者が後をたなかつた。夏季には県下体育指導者を一堂に集め大講習会を展開したことはまことに壮観であった。講習会は熱気をおび、これによって体育界は盛り上りと活気を呈した。

飛田忠順（穂州）（一八八六—一九六五） 東茨城郡常澄村大場

に生まれ、水戸中学校から早稲田大学に進み中学校、大学校ともに野球部の主将として活躍した。大正九年から大正十五年にかけて早稲田大学の監督をつとめ、大正十三年から十四年にかけて三十六戦全勝の大記録を樹立した。精神野球に徹し地力は練習によって培われると厳しい飛田式訓練法を展開した。早大監督を引退してから、野球評論家として文筆を振い戦術技術は新らしく精神は古く練習こそ野球の生命と心得よと独特の飛田理論により学生野球の大道を説いた。

江幡保 明治二十六年八月二十一日岡山県に生まれる。岡山医科大学を卒業し、大正十二年水戸江幡家の養子となる。昭和四年現在の江幡産科医院を開業する。多忙の中にスポーツに関心をもち、青



江幡保

が、昭和二十八年に会長に推され、以後四十八年茨城国体の前年まで会長をつとめた。会長在任中茨城国体の誘致を提唱し、十年後に国体の開催となったが、その間熱心に各方面に国体開催の意義を説き、遂に誠意と人格が実を結ばせることになった。全スポーツ人から慕われ名会長の名が高く、現在名誉会長の地位にある。多年にわたりスポーツに貢献した功勞によって勲四等瑞宝章が贈られた。

中野慶吉 明治三十五年笠間市に生まれる。現在全日本弓道連盟名誉会長の栄職にある。少年時代身体が弱かったため、父のすすめによって弓道の修業することになった。父が大和流を修め練達の士であったので、しばらく父について大和流を修業したが、昭和八年から仙台の大射道教大日本武徳会範士十段阿見研造の指導を受けることとなり、益々弓道に熱意を持ち心血を注いで修練した結果、昭和十七年教士号を得、昭和二十八年には最高位の範士となり、現在は範士十段位にある。昭和四十九年から全国弓道連盟会長の要職につき昨年健康上の問題から会長を辞した。その間満州建国十周年記

念武道大会の選手に選抜されて優秀な成績を収め、また昭和三十二年皇宮警察七十周年武道大会に出場して天覧の光栄に浴するとともに優勝した。また東京オリンピックの公開競技の際には日本武道館において藝目を演ずる等、数々の栄誉を得ている。又弓道の普及振興に意を注ぎ、茨城大学（二か所）、笠間高等学校、水戸第三高等



中野慶吉

学校、太田第一高等学校の射場を建設して寄附する等財的多額の援助もしている。最近中野杯を制定し、一般男女、高校男女、中学男女の選手の育成のために

それぞれ立派な杯、優勝旗の寄贈をしている。

遠山喜一郎 日立市の出身で茨城師範学校を卒業後東京高等師範学校体育科に進み体操競技の選手として活躍した。人一倍の努力家として有名である。第十一回ベルリンオリンピック大会に日本代表選手として出場した。有名なオリンピック映画「美の祭典」吊環競技の写真は遠山選手の演技されたものである。そのあとローマで開催の第十三回世界体操選手権大会には監督として参加している。また日本人では国際審判員の資格を与えられた最初の人である。第十六回メルボルンオリンピックには体操コーチ兼国際審判員として参加、モスコで開催された第十四回世界体操選手権大会にもコーチ

兼国際審判員として参加し、第四回ブルガリア、第五回キューバの新体操世界選手権大会には日本選手団の団長として参加した。現在は日本体操協会の常務理事、体操委員会委員長の外、体操関係の諸々の会の会長その他の要職にあって日本体操会の指導的立場にある。

沼尻直 水戸市に生まれる。水戸中学校から拓大にすすみ、レスリングの修行をする。茨城県のアマチュア・レスリングを零から今日の盛況に引きあげた生みの親であり育ての親である。亡父が一昨年亡くなるまで会長をつとめていたが、兄弟四人がすべてレスリングの選手で親子五人揃って県を代表して団体等の大会に参加したこともあるレスリング一家である。本県のレスリングを向上させようとの強い意欲から、外部の選手を招へいして、本県だけで編成したチームでこれに当たらせる大会を盛んにやっている。日ソ対抗茨城大会六回、日米対抗茨城大会一二回、五か国対抗茨城大会五回、全日本選手権大会三回、関東選手権大会九回、関東高校選手権大会六回、がそれである。レスリング協会が生れた当初は、水戸第一高等学校、水戸農業高等学校、勝田自衛隊、茨城大学だけであったが自分から各所を回って指導に当たった。現在では茨城大学の卒業生が教師になって、学校に配属されるようになったので、新しい団体も増加し、他県に比してレスリング王国の顔呈するほどの盛況になった。公認審判員も、国際特級審判員一名、一級審判員一名、三級六名。国内A級審判員二名、B級一〇名、C級三〇名と全国一の多数を誇っている。現在の役職は、（財）日本アマチュア・レスリ

ング協会常務理事、関東アマチュア・レスリング協会理事長、(財)茨城県体育協会常務理事、同競技力向上委員長、茨城県アマチュア・レスリング協会理事長、国際レスリング協会特級審判員、茨城大学学生部学生課技官、茨城大学教育学部非常勤講師、茨城大学レスリング部長等指導的立場にあつて活躍している。

大津明子(旧姓栗原) 大正九年九月十六日東茨城郡茨城町有賀に生まれる。水戸市内にある私立常磐女子高等学校から茨城大学に進んだ。高校時代から陸上競技、やり投の選手として頭角を現わし国民体育大会には、高校・大学を通じ連続五回出場して、優勝一回、二位二回の成績を得ている。また昭和二十七年には全国高校体育大会で二位を得ている。昭和二十九年にフィリピンで開催された第二回アジア大会には日本代表に選ばれ彼地に渡り、四四メートル〇二の記録をもって優勝をなし遂げた。同年の全日本学生大会、日本選手権大会とすべて優勝で飾った。昭和三十年四月から母校常磐女子高校で教職に就き生徒の指導に当たっているが、如何なる日でもグラウンドに立っていない日がない程の精進振り、乳飲み子を抱えた時から三人の母となつても、子供を引きつれての指導である。時に三人の子供の世話を生



大津明子

もグラウンドに立っていない日がない程の精進振り、乳飲み子を抱えた時から三人の母となつても、子供を引きつれての指導である。時に三人の子供の世話を生

徒がするという姿もみられた。このような熱心な指導は、生徒の成績が総合第一位であるというところに現われている。就職以来県下大会連続総合優勝二十回という断然たる成績で北関東大会でも連続三回優勝をしている。好選手必ずしも好指導者でない例も多いが、名選手で名指導者である。

関山由雄 昭和九年八月一日日立市に生まれる。水戸商業高等学校を卒業後、日本体育大学を卒業している。現在水戸工業高等学校に勤務している。勤務校の水戸工業高校の陸上競技部成績は、女子の常磐女高と同じく毎年断然他を引離しての優勝を続けている。卒業生も体育に興味を持ち体育指導者を志望する者が続出している。この指導力を買われ推されて県陸上競技協会の強化対策委員長となっているが、毎年好成績を収めている。茨城国体の優勝、昭和五十二年度の青森国体の三位は氏の手腕にまつところが多いと高く評価されている。

選手として活躍した人々

米山弘 水戸市に生れ、水戸中学校から早稲田大学にすすみ、水泳選手として活躍した。水戸の水泳は正昭和の初期には水府流の盛んな頃で那珂川を利用しての水泳であった。米山も水府流の水泳をしていたが、時世は型の水泳から競泳へ移行していた。若き米山の胸に強く燃えたものは競泳であった。異常なほどの執念でクロールにとり組んだ。米山の姿が那珂川に見られないのは一年のうち僅かに三か月に過ぎないといわれる。那珂川の練習であつたので、練習上不便もあつたにもかかわらず、中学時代には、関東中学水泳大

会、全国中学水泳大会とすべての大会に優勝を遂げ抜群の成績をあげた。中学校を卒業して早稲田大学にすすみ、その後の精進によって著しい進歩を示し、昭和二年には極東選手権大会、昭和五年にはアマステルダムのオリンピック大会に日本代表選手となつて活躍した。

服部勝之介 明治四十五年五月五日竜ヶ崎市に生まれる。昭和の初め頃であつたが、その当時市郡対抗体育大会が開催されていた際、走、投、跳に抜群の成績を示した。後に走り高跳び専門に研究を積んだ。恵まれた素質と努力によって記録をあげ中央の大会にも出場するようになった。当時の日本の陸上競技界は、殆んどが学生によって占められていた際であつたので、茨城の一青年が、日本の一流に伍して遜色のない成績をあらわしたことは、衆人の注目するところとなつた。昭和二年上海で開催された極東オリンピック大会の日本代表選手として出場し第二位の成績を収めた。

川島義明 昭和九年五月十日東茨城郡茨城町木部に生まれる。水戸農業高等学校入学後長距離に抜群の強さを發揮し、鎌倉一周縦走大会、青森東京間駅伝競走の選手として活躍をした。学校への通学は片道十数キロの距離を毎日走って脚力を鍛えたという凡人には出来ない修練をした。水戸農業高等学校を卒業後日本大学に入学した。メルボルンオリンピックの予選会には二位を六分引離して優勝してオリンピックの日本代表選手になったが、期待に反せずオリンピックでは第五位入賞の栄誉に輝いた。特にメルボルンオリンピックの陸上陣は、川島入賞が唯一のものだけに注目を浴びた。

岡野功 昭和十九年竜ヶ崎市に生まれる。中学一年生のときから柔道の練習をはじめた。三年生のときには初段となり、県下中学校柔道大会では個人団体ともに優勝した。また中学三年生のときに土浦市と竜ヶ崎市の対抗柔道大会があり、初段五人、二段二人を倒すという抜群の成績をあげて衆人を驚かせた。これに自信を深め練習に精進をした。高校時代は秋田国民体育大会に参加して高校の部の団体優勝を遂げ県民の賞讃を浴びた。竜ヶ崎一高から中央大学にすすみ、大学三年生のときに東京オリンピックの中量級の優勝者となつた。翌年ブラジルで開催された第四回世界柔道選手権大会にも中量級で優勝した。中央大学卒業後、日本選手権に優勝すること二回に及び斯界の第一人者となつた。現在は柔道普及を志し財団法人正気塾の設立にとりくんでいる。

関根忍 昭和九年東茨城郡大洗町に生まれる。地元中学校を卒業後那珂湊第一高等学校に入学する。小学校の五年生から柔道をはじめたが、身体はさほど大きくはないが、強大なる力と左の変型柔道は抜群の強さを示した。竜ヶ崎一高の岡野がよく相手で、県の大大会はこの二人によって常に雌雄が決せられていた。岡野、関根を擁する茨城チームは、秋田国体において断然優勢を示し高校の部の優勝を握った。高校卒業後中央大学にすすんだ。関根の強さは、精神面の強さ、抜群のスタミナと豊富な練習量にある。昭和四十年には全日本学生柔道中量級で優勝した。中央大学卒業後は警視庁に入り一層の研究を積み、昭和四十七年に開催された第二〇回ミュンヘンオリンピックの中量級の優勝となつて郷土に錦を飾った。

佐々木節子 昭和十九年新治郡千代田村に生まれる。中学校時代は陸上競技を主にやっていた。特に走幅跳に長じ好記録を出していた。然し一面バレーボールにも興味をもち、毎日曜日には大成高校のバレーボールの練習に参加をして練習をした。特に春季、夏季の合宿練習のときなど一緒に練習に加わった。中学を終えて大成女子高校に入学してからは、専門にバレーボール部に入部した。陸上競技の習慣から、しばらくはネットに身体を引っかけて困っていたが、その欠点が直ってからは、一七五センチから繰り出されるスパイク攻撃は十分な破壊力をもち二年生のときには、学校代表の一員に加わり県大会の優勝をもたらした。全日本高校大会に出場した。三年生のときには北関東地域大会で優勝して岡山の国体に参加した。二年生のとき素質を認められて、東京オリンピックの候補選手の一員に加えられた。大成女子高校を卒業後日紡貝塚に入社、大松監督のもとで精進努力の結果、東京オリンピックの優勝の一人となった。

加藤きよみ 昭和二十八年東茨城郡大洗町に生まれる。地元中学校から那珂湊第一高等学校に入学してバレーボール部に入部した。何しろ一メートル八〇センチの強大な素質は衆の注目の的であった。中途日立製作所武蔵工場に入社してバレーボールに精進することになった。天稟の才能と熱心な練習の成果によって昭和四十七年度の全日本チームの一員となり、日本リーグベストシックス賞を受けた。翌四十八年には全日本の正選手として各種の国際試合に活躍した。昭和四十九年には第七回アジア大会、世界選手権大会に参加し

て優勝する。第一回世界ベストシックス賞を授賞する。昭和五十年にはアジア選手権大会優勝、昭和五十一年にはモントリオール優勝と輝かしい成績を残した。世界の女子バレーボール界のトップレベル選手として過去七か年間にわたり県民の期待にこたえる活躍をなし、茨城県スポーツ振興に多大な貢献をした功によって茨城賞を授与された。

飯島秀雄 昭和十九年水戸市に生まれる。地元赤塚中学校から水戸農業高等学校にすすみ目黒高校に入学。卒業後早稲田大学にすすみ卒業した。水戸農高の一年生のとき東京国体の百メートル決勝で四位に入賞した。その時から未来の大功の片鱗を示していた。次の年三十五年の熊本国体以後出場するすべての大会で優勝を続けた。三十六年の秋田国体と連続優勝、三十七年のアジア大会最終予選会には百メートルに十秒五の全国高校新記録を樹立した。また、ジャカルタのアジア大会では、百メートル四位、二百メートル二位の成績を占め、特に二百メートルでは、二秒五の全国高校の新記録をつくった。早稲田大学に進んでからは、百メートルでは国内では負けを知らず、昭和三十九年の東京オリンピックに期待されて出場したが、準決勝で破れて決勝進出が出来なかった。東京オリンピックの年、三部対抗陸上に優勝、日本タイ記録十秒三を出す。そのあとヨーロッパ遠征で十秒一の日本記録をつくり吉岡隆徳の記録を二十四年振りに破って話題をまいた。メキシコオリンピックの入賞候補の一人にあげられ、海外遠征では常に十秒一の記録を出して優勝の好成績を示しながらメキシコオリンピックに望んだが、東京オリ

ピック同様オリンピックの準決勝の壁は破れないで終わった。オリンピックで入賞は出来なかったが、日本の陸上界に明るい希望を持たせた選手としての功績は大きい。

常陸山谷右衛門 (一八七四—一九二二) 第十九代横綱。水戸の城下に生まれた。姓は市毛、名は谷といった。のち谷右衛門と改めた。明治二十四年十七歳で出羽海の門に入り御西山と名乗る。明治二十七年常陸山と改称する、三十二年入幕三十四年大関に昇進し三十六年六月三十歳で横綱を免許された。明治三十六年夏場所で梅ヶ谷を破り全勝の常陸山に横綱推挙の話がもち上がった。入幕以来五カ年間十場所のうち黒星がわずかに五つ、当時の力士の中随一の強さ。番付け編成会議で常陸山の横綱昇進が満場一致で決まり、常陸山にその旨を伝えると、「梅ヶ谷も同時に推挙してほしい」との返事、自分の好敵手を愛するといふのか、このことによって梅ヶ谷も同時に横綱に推挙されたという美しい話が残っている。横綱在位十

年四か月、優勝六回の戦績を残して引退する。明治大正の相撲界で剛勇無双の名をほしいままにした名横綱である。

杉岡邦由 北相馬郡利根町布川の出身、昭和十七年二月十日に生まれる。中学時代身長が高いため、バスケットボールのセンターとして活躍をしていたが、たまたま全国中学校通信陸上競技大会の走り高跳びに出場、一メートル七七の記録で全国第一位になったのを機会に走り高跳びを専門にやるようになり、遂にオリンピックに日本を代表して出場すること三回に及ぶ大選手になった。

岡田とみ (旧姓大川) 水海道市の出身。水海道第二高等学校時代から卓球選手として活躍し、水海道二高卒業後会計検査院に就職。昭和三十一年東京で開催された第二十三回世界卓球選手権大会のシングルスに優勝、世界卓球界の女王となった。

(茨城県体育協会副会長)

